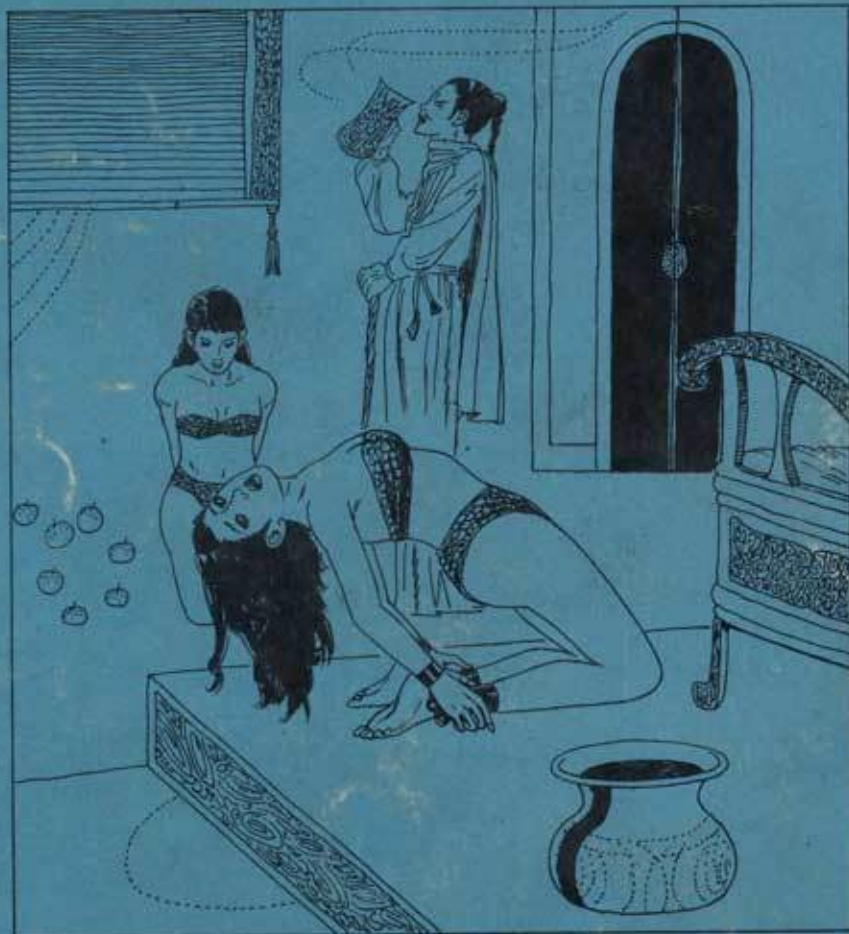


奇譚クラス

新しい風俗文献誌

1965・8

8
月
号



奇譚クラス

8
月
号

昭和四十年七月二十日印刷 昭和四十年八月一日発行 八月号（第十九卷第八号）毎月一回一日発行 昭和三十一年四月二十日第三種郵便物認可 昭和三十五年六月十七日国鉄大島特別郵便承認証第一二二二号

THE KITAN CLUB

Published Monthly By Tenseisya

Osaka Japan



8月号

¥ 300

定価 三〇〇円

玉取姫のモデル山原清子嬢の仕置図

第一回作品発表

キヤビネ版印刷紙焼付

入墨女賊拷問刑罰集

各組三枚一組 五〇〇円
八組全部にて 三五〇〇円

逆さ吊りの仕置

三枚一組 略号(よき)

荒縄できりきりと縛りあげられた女賊は、両足首に取縄を何重にも巻かれて高々と逆さに吊り上げられる。首がかるうじて床についているが血が逆行する苦しさを耐え忍んでいるところへ、非情な竹の折檻棒が豊富な乳房や咽喉元に烈しい苛責のムチを加える。流石の女賊も氣息えんえんとして、ぐったりと吊られたままである。

答打ち白洲糾問

三枚一組 略号(よゆ)

白洲へ荒むしるを敷いた上へ引き据えられた女賊は、先ず手荒なことをしないうちに有体に白状せよといわれたが、せせら笑って答えないので、打役の手でその入墨も見事な背中を、したたかに竹棒にて打ちまくられる。次第に変化する女賊の苦悶の形相も物凄く、全身を波うたせ、ムチの痛さに悶えるサジスチックな場面。

仰向け木馬責

三枚一組 略号(よひ)

木馬の四つの脚に両手両足をがっちり四方に縛りつけられて、仰向けに固定された女賊。いかに痛めつけても参らない女囚に對して、女の最も無防備な姿をさらけだした刑罰を強要した。女囚は只顔をのけぞらして、この羞恥責めに對して必死になって耐えているばかりである。裂けるような痛さに失神しそうになりながら。

全裸入墨女折檻

三枚一組 略号(よせ)

背の中から二の腕太股にまで刺青を施した稀代の女賊が捕縛されて白洲で徹しい糾問を受けた上、白状しないので全裸に剥かれた上、木馬責、更に逆さに吊られ、海老責が重ねられるという想定である。

海老責の拷問

三枚一組 略号(よす)

いかにしぶとい女賊にしても、この海老責めだけは骨身にしみてこたえたことだらう。高手小手に両手首を高々と釣られた上、両足首と連結されて全身が二つ重ねにされた苦しさ。更に盛り上った肩先を竹がささらになるまで打ちのめされる痛さ。喘ぎつつ転った女賊の顔には竹棒の先が、白状せよと容赦なく突きあげてくる。

大の字磔処刑

三枚一組 略号(よき)

遂に稀代の女賊を白状した女賊は、磔合に四肢をおもひ切りひろげた大の字に固定されて、いよいよこれより胸斬り、足斬り、両腕斬り、首斬りの一寸刻み五分試しの断り殺しにされるのである。自分の身に、こんな恐ろしい運命が待っているとかわかっていても、荒縄で大の字にハリツケられている女賊はどうすることも出来ない。

全裸四這木馬責

三枚一組 略号(よも)

木馬の四つ足に手足をひろげて四つ這いに縛られた女賊。見事な刺青をさらけ、その臀部も、背中も、肩口も、無防備のまま露出して、力まかせの竹のささが、はっしとはかり豊富な臀部に背中を炸裂する。髪より乱れ絶叫しつつ耐え忍ぶ女賊の凄惨きわまりない光景。尚竹ムチは雨となつて裸身のあちこちに降り注ぐ。

ハリツケの拷問

三枚一組 略号(よめ)

かずかずの拷問仕置折檻に對しても、尚まずその若さと美しさを發揮して衰えを見せぬ女賊に對して、その美しさの残っている中にハリツケにしてしまおうと儼かに白布を前に当てた裸の女賊を磔架にかけてしまった。架上の美しい女賊の真白い肌も、やがて錆蝕の穂先に貫かれて血汐にまみれることだらう。

新人モデル美木乃々子嬢の熱演

大好評注文殺到

日本女性拷問刑罰集

キヤビネ版印刷紙焼付

各組三枚一組 五〇〇円
八組全部にて 三五〇〇円

木馬責め

三枚一組 略号(もと)

後手高手小手にきびしく縛しめられた腰巻一枚の女囚が、三角木馬の痛さに髪より泣き叫びもだえる姿の全身を、刻明に鮮鋭なレンズによって捉えたスチール。若くて美しいモデルの足の爪先から髪末端に至るまで、女の哀れさと悲しさが、いきいきと描かれています。

海老責め

三枚一組 略号(もに)

若い女囚に對する海老責めは、まことにエロチシズムとサジズムの極致といつていいであらう。交叉した足首を揃えて縛り、うつ伏せに二つ折りになるまで締めつければ、美しい両足の指はくの字にそり反り、その激しい苦痛と羞恥に悶えに悶えぬのである。二の腕に胸の膨らみに埋まるように喰い込んだ細目の痛々しさ。

答打ち折檻

三枚一組 略号(もほ)

白洲の冷たい粗砂の上に引きすえられた高手小縛りの女囚は、首縄を引きしぼられて白状を強いられるが、返答をしないために竹をささらに割った答で、後手に縛られているため盛り上るようにつき出した肩先をたたかに打たれるのだ。血がにじめば白洲の砂を肌にしり込んで白状するまで、打ち続ける無惨なありさま。

土壇で胴斬り

三枚一組 略号(もり)

新刀の試し斬りに胴を真二つに斬られようとする哀れな死罪相当の若い女囚。今やもがき泣き喚いても逃れるすべもなく、膝を中心とした胴の部分をさらけだされて土壇の上に仰向けに寝かされ顔には白紙で目かくしをされて斬られようとする女囚。観念して静かに身を横たえる女の全身には、サジスチックな静寂がある。

石抱き算盤責め

三枚一組 略号(もへ)

下着のすそをはねのけて、女の素肌をじかに算盤板のギザギザが喰い込むのできえ耐えられない痛さなのに、正座した膝の上へ更に伊豆石をのせるというのであるから、その苦痛たるや想像を絶するものがあるであらう。それでも白状しないので更に非人が、その膝の上の石を搦って悶絶するまで責め抜くのである。

竹棒責め

三枚一組 略号(もち)

腰巻一枚にひんめくられた若い女囚の両手は背後で首筋にとどくまで高々と括り上げられ、二の腕と胸には、どす黒い捕縄が情容赦もなく力まかせに、うす汚ない非人の手によって縛られている。そして白洲の砂の上で引きすえられた女囚には更に竹の棒を縄目の間にねじ込められて、白状するまで締めあげられるのである。

開股羞恥責め

三枚一組 略号(もぬ)

女性というものは、若痛に對して案外しぶとい耐久力を持つていゝものである。身動きもできない高手小縛りの女囚を白洲に引きすえ、腰巻の乱れを必死に防ごうとはかない努力を続ける真白い足を八の字に開かせ、その柔かい足首に非情の細引きを喰い込ませようというのである。女囚の哀願と悲鳴の尾をひくなかで。

白洲に悶える

三枚一組 略号(もは)

均整のとれた奇麗な肢体と肌、殊にすらりと伸びた脛と素足の可愛い美木モデル嬢が、白洲の上で徹しく縛られ、悲しさと恥しさに悶える美しい哀婉ポーズを展開しています。これこそ女囚の悲愴美の至極をきわめた好演技といえるでしょう。こうしてS派の皆さまの目に、いつまでもこのポーズを晒していただいましょう。

安原さゆり第二回妊娠妊婦フォト

第二回の妊娠について

「奇クサロン」にてすでに知らせられています通り、妊娠第二回の目録の安原さゆり夫人が、第一回の目録の妊娠を比較して、更に大きく膨らした妊娠腹の写真を、ここに各月に分けて分譲いたします。第一回の目録の妊娠のときの写真と併せて文献的資料として保有下さい。

九カ月の妊娠腹

大手札印画紙焼付

三枚一組 四〇〇円
略号(にん)

安原さゆり
まんまるく膨れあがったお腹を側面から眺めてみると、膨らみがへソのあたりから、次第に下の方向に移って、満ちてきたことが、方にはっきりと、よくわかる妊娠九カ月の見事な腹部。

九カ月の妊娠腹

大手札印画紙焼付

三枚一組 四〇〇円
略号(にの)

安原さゆり
どたりと脚を投げだして横坐りとなつた九カ月の妊婦は、べんべんたるお腹をもて余すように、べんべんたるお腹を誰が見ても一見して、えい、誰かのことか、と下ふく月が迫っていることがわかる。下ふく月の立派な妊娠腹である。

妊娠九カ月の腹

大手札印画紙焼付

三枚一組 四〇〇円
略号(にみ)

安原さゆり
大きな腹部をもてあましたように横たわった女は、まるで牝獣と叫ぶにふさわしいグロテスクなものである。これも人間女性の異常の一端として一見の要あり。

八カ月の妊婦腹

大手札印画紙焼付

三枚一組 四〇〇円
略号(にへ)

安原さゆり
全裸と輝と側面の三枚を八カ月の目として撮影したフィルムの中から選んだ。八カ月の終りに近くなつてからのものだけに、流石二回の妊娠腹は、八カ月のマリのように張りきっているのだ。

六カ月の妊娠腹

大手札印画紙焼付

三枚一組 三〇〇円
略号(にそ)

安原さゆり
妊娠五カ月から一カ月の毎日と予定して安原氏が撮影した妊婦フォトの六カ月の大きなもので、八カ月の九カ月の大きなものと、フアンの方にお分けいたします。

刺青姐御脇差短刀六尺禪腰卷勇姿

禪一本艶姿脇差

大手札印画紙焼付

八枚一組 一五〇〇円
略号(てね)

山原清子
白の晒ふんどしを胸高かに締め、白の御座、腰の一本刀をすりと抜いて、坐、胡坐、中腰、立姿とみえを切った勇ましい艶姿を、同好の方々の御希望にもとづいて、特写いたしました。

禪一本艶姿短刀

大手札印画紙焼付

十二枚一組 二〇〇〇円
略号(てし)

山原清子
ふんどし一本の大胆ないでたちで背中の刺青を、これみよがしに誇らしげに晒して、白鞘の短刀を抜き放った姐御の艶姿が、十二枚の連続した御覧によつて全身余すところなく御覧になれます。

腰卷一丁艶姿脇差

大手札印画紙焼付

十二枚一組 二〇〇〇円
略号(てふ)

山原清子
真紅の腰巻をむさうさに身にまとつた白の足腰の姐御が、腰巻の裾から、白の腰の脇差を抜き放ち、踏みだして、刀を構えてフアン垂涎の御覧にふんだんに撒きちらす。

腰卷一丁艶姿短刀

大手札印画紙焼付

八枚一組 一五〇〇円
略号(てな)

山原清子
大の男を顎で使つて貫く充分の姐御が、乾分たちを前に短刀を口に、威嚇を、或は、突き立てて、真赤な腰巻のお色気が、あらわな真白い脛にあふれている。

鼻いじめ三態

大手札印画紙焼付

三枚一組 四〇〇円
略号(はね)

山原清子
鼻マニヤの方々に對するサービスマンとして、鼻いじめに関する三態の美しいフアンには、興味は、貴重な資料となるでしょう。

寝棺の中の裸婦

大手札印画紙焼付

二枚一組 三〇〇円
略号(ねか)

山原清子
人間の一人が、こっそりと入る厚板作りの寝棺の中に、生前と何ら変わらない美しい死顔を見せて、若ら女の死体が横たわっている。娘の葬られる姿に、関心をお持ちの方、は、ごさいませんか。

裸女二人の尻の下

十二枚一組 略号(まふ)

Mモデルに志願してきた幸福な男は、豊満な全裸の美女二人から徹底的にいじめられる。遅ましの素肌の臀部が男の頭の上に無遠慮にのっかってくる。華麗なマゾ絵巻が美しいカメラ・アイによってあますところなく捉えられていきます。どうぞ貴方を、この幸福なM男に入れ替えて、Mの醍醐味を十分に御賞味して下さい。

美女から縛られる

十二枚一組 略号(まね)

暴君と化した二人の遅ましい美女の前に跪いたM男は、必死の抵抗も空しく、縄で厳しく縛られてゆく甘美な過程を連続で狙いをつけてゆきます。後手高小手に縛りあげられて身動きもできなくなつた男に、これから二人のベテラン女性に、さてどのような暴虐のムチを揮うでしょうか、詳細は写真によってお楽しみ下さい。

痛烈ムチのご馳走

十二枚一組 略号(まれ)

後手に縛りあげられた男は、二人の裸女にとっては、恰好の弄び者である。二人の美女の手にあるムチや麻縄は、激しいいきおいで男の肌の上で炸裂する。忽ち赤いミミズ腹れがふくれ上り、血がにじむ。それでも女達のむごたらしいムチの手に止みそうにもない。やがて男の口からも痛苦とも快味ともいえる呻めきが洩れる。

汚臭と足舐の強制

十二枚一組 略号(まり)

女の肌にはじかにつけていたパンティを頭にかぶせられ、口に押し込まれても、縛られている身の男にとつては、どうすることも出来ない。やがて女の足指が無理矢理口へ押し込められる。拒否しようにも他の一人の女が頭を押さえて逃がさない。二人の女による強制が、いつの間にか男を恍惚たる被虐の花園へさそい込んでしまう。

ベテラン山原清子、大塚啓子二嬢出演

Mフオト

最新作 M場面決定版

Mファン待望の

超傑作集

大手札印画紙焼付
各組十二枚一組 二〇〇〇〇円
八組全部にて 一三〇〇〇〇円

二女の戯むれと男

十二枚一組 略号(まも)

跪いた男の背中の上には、二足の美しい蝶々のように戯むれる二人の裸女があった。はじめ男の存在など無視していた二人だったが抱擁に飽きると共に、尻の下にうごめく男をなぶってみようという気持になった。何ごとも易々として従うM男に対して、二人はどのような辱しめを与えるか、写真によってとくとお確かめ下さい。

馬を乗り潰す女

十二枚一組 略号(まめ)

二人の肥った女を背中に乗せてハイハイドウドウ、いくばくもなく男の馬は潰れてしまう。乗り潰された男は、さて、これから勝気な二人の美女から、どのような恥しい仕置を強いられるだろうか。それは面白くてたまらない女達のなぐさみの遊戯であったが、M男にとつては、身も凍るような戦慄的な暴虐であった。

首締めで刺す止め

十二枚一組 略号(まむ)

いくばくなく痛めつけても辱しめても喜んでM男に対しては、最後の止めとして、遅ましい太股による首締めによって昇天させてやるのが御慈悲である。苦悶にあえぐ口の中には、汚物が、足の指が押し込まれ、男の顔が鼻が、むちゃくちゃにいたぶられつくす。さんざん弄れた男は、遂に精根つき果てて女達の軍門に降るのである。

二女の腎臭に泣く

十二枚一組 略号(まみ)

遅ましくも肉づきのよい二女の腎の下に押し潰された男の顔は、醜くひしやげて、その腎臭をいやというほど嗅がされている。なおそれでも足りないかと思ふ一人は勇ましく放屁を男の顔面にふきかける。今やグロッキーになった男に對して、二女の責めは巧妙なテクニクで男が泣き叫ぶまで更に続行されるのであった。

力作のMフオトが待望されて久しくなりましたが、ここに山原清子と大塚啓子のコンビの協力を得て血湧き肉躍る素晴らしい傑作を完成することができました。これこそMフオトの方々が心から求めたいと願っている写真集です。

五月九日の夜、偶然テレビのス
イッチを入れたところ、丁度「ノ
ンフィクション劇場、ベトナム海
兵大隊戦記」が放映されていた。
途中からでもあり何の気なしに
眺めていたのだが、その中ベトコ
ンと目される少年兵が銃の床尾鉞
で撲り倒され割れる頭から血しぶ
きが上がる。やがてその少年が連
行されるとみるや、画面一転、銃
声と共に少年は倒れ、破れたズボ
ンから白い臀部があらわに見えて
いる。次の場面では、血のしたた
る少年の生首をぶら下げた政府軍
の兵士がこちらへ向って歩いてく
る。カメラの前を通ったその兵士
は、生首を路上に投げすてる。土
の上に転った生首をカメラは執拗



生首と残酷シーン

編集子

に追ってゆく。
流石の私も、余りの残酷といお
うか陰惨な場面にイヤな気持ちにな
った。牛山プロジューサーのみな
な反吐をはいてくれ、という言葉葉
の通り反吐が出そうになった。特
にイヤに思ったことは、二十何年
か前、二十才代だった自分が大東
亜戦争という聖戦で、南方最前線
でやってきたことが、そのまま再
現されているので、地獄へ行つて
エンマの鏡の前で自分の過去の行
跡を映しだされたようで、思わず
ゾッとしたものだ。全くやり切れ
ない気持ちだった。
撮影したカメラマンもよく写し
た、テレビでもよく放映したもの
だ、これが本当なのかと一瞬自分

の眼を疑ったものだが、傍で見て
いた妻の方が俄然興味を持ちだし
た。次の日曜日のノンフィクショ
ン劇場は何にをいいても是非見る
と言いだした位だ。

それからネタ切れに悩んでい
た各週刊紙の絶好の餌食になった
恰好で賛否両論、いろいろ話題を
賑わしたわけだが、テレビの方は
結局第二回目、第三回目ともに放
映中止になってしまった。

あの撮影は二カ月に亘る従軍に
よってなされたものらしいが、そ
の中からショッキングな場面ばか
りを列挙して、三十分か一時間に
切りつめたため、ああいう印象を
受ける結果になったものだろう。

自分の経験からいえば、やって
いる本人は、あの際、残酷とか陰
惨とかいう気持は、恐らく持って
いなかったと思う。私も防空壕に
退避している日本兵を襲撃してい
るゲリラを五十米ぐらいの至近距
離から射殺したことがあったが、
腹部貫通銃創で仰向けに倒れ、創
口から流れ出た青白い大腸が土の
上にうねうねと長くなっていた。

その太い腸に砂がついていると
ころや、ほかほかと湯気のような
ものが立ちのぼっていたことを今
でも覚えているが、その傍に銃を

構えて立っている日本人というこ
とになると、若し映画にしたら、
さしあたり鬼畜の日本兵という題
材になるかもしれない。前後の繋
りもなしに、その場面を見たら確
かにそうに違いない。しかし、そ
の時の私は、残酷とか陰惨とかい
う気持は、いささかもなかった。
第一に逃げ去ったゲリラが再び
襲撃して来ないか、負傷した日本
兵の手当、安全な位置への退避と
いうことで頭が一杯であった。射
殺したゲリラに対する憐憫よりも
何故一名だけでなく、皆殺しに出
来なかったかを悔んだものだ。

当時、武器に於て劣るゲリラは
防空壕へ入った日本人を入口で待
ち構えて出てくるところを一人一
人槍で突き殺す、出て来なければ
イブシにかけるという戦法が彼等
の間でよく用いられ、そのため多
数の日本人が殺されたものだ。

その日は、偶然通りかかった私
が、その場面を目撃、膝射ちで一
発お見舞いしたのだが、持ってい
たのが三八式歩兵銃のため、第二
発目を装弾している間に、他の数
名を取り逃したものだ。

戦争とは、残酷で陰惨なもので
ある。二度とあのようなことに駆
りだされたくないものだ。

拝啓、箕田編集長殿

木戸川 健



六月号の世相診断室で提案し、橋行司子より△新奇▽なる、お言葉頂戴いたしました、いわゆる「現情勢下におけるグラビアのあり方」につきまして、若干つけ加えさせていただきます、幸いにも掲載の榮に浴しますれば、再度花橋の行司子の御判定をお願いいたします。筆をとった次第です。

私は△芸術▽などという言葉を無責任に使用いたしました、これは例えていえば、社会党がきれいな口で政府自民党を攻撃するようなものであって、責任ある立場の編集子といたしましたは、いさ

さか御困惑の態かとお察しいたします。そこで、今回、私は民社党として、私見の一端を述べさせていただきます。現実に来得ることだと確信いたしての、再度の提案でございます。何卒、来る参議院選挙では民社党に——は、全く余計な事である。西尾末広。

例えば、責められている最中のモデル嬢の顔をアップで出すのです。そして、足を出すのです。但し、K誌が足を出しては困ります。K誌が出すのは、勇気です。つまり、胴体のないフォトです。

胴の部分は、よろしく読者の御想像におまかせする訳です。いかがでしょう、この反骨、このユーモア、そして、諧謔。タイトルに、例えば「水不足の顔」など出せば（適当なフォトを選んで）世相批判にもなり、痛烈です。

私が、不図筆を染めました△前向きの自粛▽の意味がおわかりいただけましたら、幸せに存じます。もとより、編集子はその節言及されました「退却ラッパより進軍ラッパの方が勇ましいにきまっている。しかし、進軍ラッパを吹かない時の方が、どんなに困難で努力を要するかということ」私はよく現解しております。その上の発言とおくみ取り下さい。

猶六月号の黒淵賀集子さんの手記を、私は、深い感動を持って読ませていただきました。世相診断室では触れられませんでしたので、ここであえて申し上げますが、ああいう感動的な手記が出る以上、そして、それに対する読者の真情あふるる激励の声が湧き上がる以上、最早やK誌は編集子の企図するのと否にかかわらず、全く新しい分野に突入しつつあるのだ、と私は△涙▽で感じました。

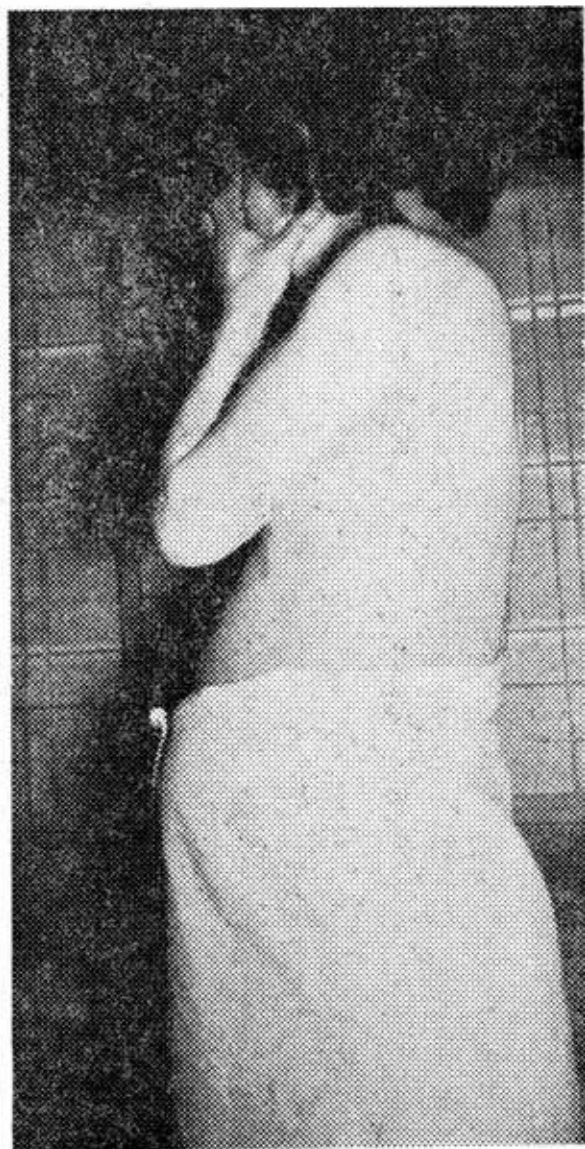
あの手記は泣かせました。読者の声にも誠実がありました。だから、いわゆる良識家も、「おやっ？」と、思ったのです。

これは大切な事です。世論を「おやっ？」と思わせるようなものを、たった一つでもいいのですから、毎月掲載するようになさうたら、世間は「おや、おや？」と思うでしょう。但し、申し上げておきますが、世相診断室では駄目です。全くダメです。私が申し上げているのは、黒淵賀集子さんのような手記のことです。これは、普通の雑誌に載ってもおかしくない内容で、こういうものは探せば他にもあると思います。

最後に、七月号の△読者通信▽で通信文の扱いについて、その連絡場所を記載したものを今後没にするとうございますが、これでは連絡のしようがない、という不満の声が当然あがると思われます。通信文の大部分は連絡したがつているので、それから——どれだけ連絡がとれたか甚だ疑問だ、としても、——この処置はやや一方的かと存じます。△気のよい読者▽になり代わって、あえて、編集子の御再考をお願いする次第です。
。。。。。

〔妊婦通信〕

.....〔安原さゆり〕



分娩予定日六月二十八日

皆さま既に御存じの安原さゆり夫人の第二回目の妊娠——。

五カ月の妊婦の模様を本誌上に紹介しました。それから毎月一回妊婦腹の状況を写真にとって送りますという安原氏からの通信で六カ月、七カ月、そして去る五月の末にべんべんと膨れ上った九カ月の妊婦腹を送って来られた。

来る六月二十八日が出産予定日です。それまでは十日目毎に撮ります、という通信がきましたが、是非、安原さゆり夫人の見事な臨

月腹を写真部の手で撮影したいものです。

先日、安原氏から、出産までさゆりを一日お貸しします。本人に誓約書を書かせて、どんな責めでもやって貰います。という誘いの手紙が参っておりますので、出産日までに都合がつかしましたら、誌上掲載は無理でしょうが、分譲品として妊婦マニヤの方々に提供できるかもしれません。

(掲載した写真は、妊娠七カ月目の安原さゆり夫人の腹部です)

女装の麗人

杉江美津子嬢？

「男性モデル募集」に応じてきた杉江美津子嬢？ といえば、女装マニヤの方々だったら、先刻御承知の女装の麗人である。本誌でも、すでに何年か前に高島田のかつらで小町娘に扮した同嬢？のフォトを多数撮影、その当時、誌上グラビア頁にも発表したことは御存じの通り。



今回、自分の髪で洋髪にセツトした女装スタイルを十数枚、それに緊縛ポーズを若干撮影した。土曜日の午後、高源早苗さんの宅では、女装の紳士が脂粉の香をまき散らして絢を競い、まるで場末のバーにでも、いるのではないかと、錯覚を起すくらいである。杉江美津子さんを撮影をしている間、彼女達？も神妙に見学をしていた。素人ばかりの女装紳士達は至ってお淑やかで美しかった。



七月号

「SMカメラ・ハント」
を見て

辻村隆さんの

ファンたる

夜乃探郎

「鼻責版『夫婦善哉』」／増田喜代司、みゆき夫妻の巻／辻村隆さんの一文を読んで、私はこれこそ本当の人間の実体であると感動した。百千のどんな小説よりも、事実が示すカメラ・ハントの迫力はまさに「SMプレイ」と「性」の深淵と「人間性」の真実を誌面上にあますところなくさらけ出して見せてくれた（私は小説を書くことの好きな人間であり、それも「幻の現実」というような作品を本誌に連載させてもらっているが残念ながら、カメラ・ハントの辻村さんの文章にあつては、自分のペンの空虚さにイヤになるくらいである）。

特に病いになってからのペンさ

ばきは、凄まじいほどの体当りのなものが感じられ、このようなカメラ・ハントをされて心身共に、ダ・イ・ジ・ヨ・ウ・ブ——かなと、案じられる程だ。

「私の貧弱なりポートをサンドイッチして」と述べられているが、他は知らず、私は七月号のSMカメラ・ハントが、いま迄にない最高のものだと思う。「夫の執拗なカメラは、飽くことなくそれを追いつ、トイレの扉を開放して、貪らんに用を足す妻の姿を克明にとつていた」の一節など、アブの極致でもあり、赤裸々な人間の事実を「真実」までに高めたギリギリの線でもある。

今回のカメラ・ハントには、い

孕み女をうたった二句

瀬沼四郎

江戸時代後半に出た珍書に「俳風末摘花」というのがある。辞書をひいてみると、

末摘花（すえつむはな）——川柳柳樽中の末番の句（ばれ句即ち好色のな句）を集めた句集。（広辞苑）

とあるが、この中に、

(1) 後ろからしなとはよほど月迫し

(2) 腹の子が切なからうと尻もどき

の二句がある。一つずつ註釈を加えてみよう。まず(1)から、再び辞書を引くと、

「月迫」は「げっぱく」と読み「月の末に迫ったこと。月末。特に十二月の末にさし迫ったこと」の意であるが、ここでは、妊娠第十ヵ月（臨月）の末に迫って出産が近づいたこと、であろう。「後ろから」はもちろん「うしろから」と読むのだから、妊娠末期で禁欲中の亭主が我慢し切れなくて、女房にせがむのを、女房、亭主が

かわいそうでもあり、そうかと言ってマルマルと膨れ上った臨月腹ではどうしようもないものだから仕方なく「そんなにしたらければ後ろからでもするがいい」といい加減な返事をするというユーモラスな情景をよんだものだろう。多分当時は、ヴァン・デ・ヴェルデの書物など出ていないので「後ろから」女にかかって行くなどということは、犬畜生のようなおかしいふるまいだという感じがあつたのではなからうか。

次の(2)も同工異曲であるが、これは女房、あるいは亭主も、自分のことではなく腹の子すなわち女房の腹の中にいる胎児（孕み子）をわざわざ引き合いに出している点で、よいユーモラスに感じられる。「切なし」はもちろん「せつなし」と読み、「圧迫されて苦しい。つらい。苦しい」という意味だから、一層もってそのものズバリである。「尻もどき」は「けつもどき」と読む。「腹の中の子

私の責絵

辻 梟 太 郎



つもの辻村節?ともいうべきセンチな詩(うた)は少ない。だが、それに代るSMプレイをおしての「性」の事実が、読むものをシヨックさせる。身体で書いた強みが、よりロマンをはなっていた。

「夫は優しく妻の赤くなった足首を真剣に揉んでやっていた」プレイというものが、どのような限界をもって行われるべきかを物語っている一節や「増田氏は幸せな男だな——。中年の私にとって、こ

れは軽いゼラシーである」など人間、辻村隆の正体をさりげなくチラツカせるくだり——。

その他「疲れていたが、私は、ヨイショと彼の両足をとって」(筆者註——みゆきさんを情婦マノンの様に逆さ吊りに下げ歩く)というSMプレイに取りつかれた辻村さんの執念とも、いうべきものが——。

辻村さんよ、御健筆を——。

短歌

吉村英子

仰臥幻想

熱たかき日の淋しさやほそぼそと
洩瓶の中を尿走る音
医師の手にひかるガラスの器具あ
りてわれはアヌスをゆるめつつ待
つ
風雨のりくる部屋に伏し浣腸の
ためのアヌスを灯にさらしおり

が圧迫されて苦しいだろうから」と理窟をつけて、前からは出来ないのでもやはり「けつもどき」後ろからで間に合わせよう、それで我慢しよう、というのである。今日ではヴァン・デ・ヴェルデも推奨しているところで、何でもないが当時では、まるで犬や畜生みたいで特にこっけいであり、女房の腹が膨れたために、そんな犬畜生と同じような恰好をしなければならぬ夫婦の情景が、いかにも気の毒であり、おかしかったのである。作者の同情とケイベツの入り混った笑いが目に見えるようである。

「後ろから」とか「尻もどき」にこだわるようだが、最近出た城市

郎氏の「発禁本」という本を見ても

「かつてフランスでは革命以前は後から一儀に及ぶのは犬畜生にも劣ると唾棄され……」

とあるから、今では思いもつかないことだが、こういう点を考慮に入れないと、この二句の面白味が分からないのではなからうか。

この外、これは一部のマニア向きではあるが、この「後から」あるいは「尻もどき」を、アヌスの意であるとする解釈がある。考えられないことではないが、小生はそこまで考えるのは、うがち過ぎのように思うので、これは取らないことにする。

かの馬太伝かの章に蛇の記述あり
直腸にさしこまれゆく管
襠褌して便待たれおりしらじらと
浣腸すみし腿を合せつ
台風8号すでに近ずきつつありて
わが体内にたかぶる便意
はずかしきカバーのなかにはずかしきもの洩らすなり固く眼をとじ
浣腸のすみたる後の安らぎや熱き
タオルに尻拭かれつつ

映画通信

東山映史

「忍法もの」と「縛り」と「拷問」



会うために、二人の腰元時雨とお蝶の手引きで、大根荷車の中にかくれ忍び行く。城内にいた時、三人とも後手に縛りあげられ、ころがり落ちる。

彼等を導いた百姓娘に扮した腰元は、実は風摩組の忍者。そして「あれを見よ」と指さされた小屋の中には、腰巻一枚の半裸にむかれた美女二名が、天井から荒縄で吊り下げられている。そして最後には刀で腹をさされ、殺される。短いショットだったがカラーだけに迫力があつた。

最近の映画の「忍法もの」いわゆる「くの一忍法」などにドギツイSMファンを喜ばす緊縛シーンや拷問シーンがある。

最新のものでは、東宝の「風来忍法帖」もちろん山田風太郎作。喜劇の渥美清、佐々十郎、それに佐藤充らが三人の香具師に扮し、にわか忍法者の修業をし、大いに笑わす。映画では三人が忍城（おんじょう）へ中川ユキのお姫様に

原作を見よう。『忍城の奥女中時雨とお蝶は、向うの石垣の下に一糸まとわぬ全裸にされて、二本並べて突き立てられた太い青竹に縛りつけられているのであつた』そして、へその下に吹き針で、△淫△という字をほりつけられ、『青竹に縛られていた、ふたりの裸の女が突如として胴斬りになったのだ。乳房の下で鋭利な刃物で斬ったように、その肉体は二つに

なり、青竹すらも上下二つに切断されて、地上に散乱した』

映画では一寸撮れないシーン。

風太郎忍法の真骨頂だろう。また「くの一忍法」のお家芸の東映には色々面白いシーンがある。「忍法忠臣蔵」では、「はだかのくの一」でスターダムに上った三島ゆり子が女忍者で捕えられて後手に緊縛され拷問されるリアルなシーンを見せた。小柄だが豊満な乳房をもち、半裸にはがれた緊縛シーンは観客の目を楽します。

以前の近衛十四郎の「根来忍法もの」でも、女忍者に扮し城中へ入って捕えられ太い柱を抱くようにして緊縛され黒衣をはがれ、むき出しの背中をムチ打たれ、ヒイヒイ悲鳴をあげながらも拷問にたえるすさまじいシーンを見せた。まさに責められる女忍者のスターである。

また、大映の忍者もの、雷蔵の「霧隠れ才蔵」で、磯村みどりが才蔵を慕う遊女になり、ついに補えられ、「霧隠れ」の場所を白状せよ」と太い縄で縛りあげられ、天井から吊り下げられ、ムチ打たれ「吊し責め」にあうという姿を見せた。かつての宮城野由美子の吊し責めのシーンを彷彿させた。大映

編集部だより

○今月号の鬼六談義で書かれている通り、連載小説「花と蛇」が映画化された。題名及び作中の人物は同じである。静子、遠山、川田、桂子、鬼源といった馴染の顔が出る。但しシナリオを見せてもらったが、ストーリーは十分違う。

○青木順子ショーの公演が京都市千本中立売の『千中ミュージック』に於て六月一日から五日まで行われた。

○バンド、ゴム衣、カバー等の特注品につきメーカーと交渉したが前金にて数量が相当数とまればOKとのこと。然しそんなに申込があるかどうか、第一小包の荷造りを誰がやるかとなると、ちょっと疑問。

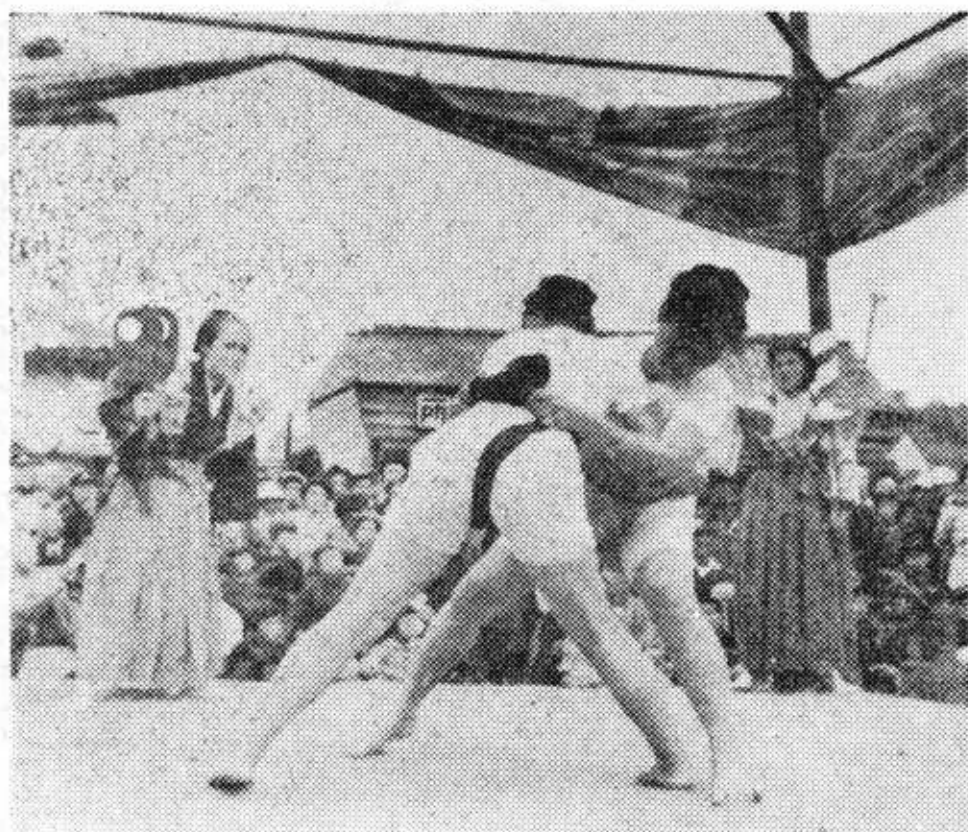
○七月号は予定より一日早く出来上り、予約購読者並に雑誌贈呈者には五月十九日に第三種便で発送。しかし、トラック便は国道一号線が静岡県で崖くずれのため一部不通になり、逆に例月より二日遅れる。

○編集部員は別に募集していないのだが、時折り自薦の志願者が現われる。縛り映画をはじめ

〈写真〉

伊満里の娘相撲

増田トシロー



では、本格的な忍者ものではないが、雷蔵の「眠狂四郎もの」では、大いにエログロで観客をつろうというのか、手を代え品を代えて女優を可愛がっている。

この間の「魔性剣」では、新星の明星雅子を全裸にし、台の上に縛りつけ「黒ミサの秘法」という邪法を行った。スチールには、半

裸で乳房を見せ、後手に緊縛され太ももを出し、雷蔵にだかれていたところがあったが映画には出なかった。一寸良心的でなかった。長谷川待子の蛇つかいの女が、簀巻きにされ谷川に投げ落され、雷蔵に助けられ、彼を刺そうとするが、もう少し簀巻きにされる所など親切にとってほしかった。嵯峨

三智子のお色気シーンも不足だった。

その前の「眠狂四郎」では、中村玉緒が緋の長襦袢一枚にむかれ荒縄で縛りあげられ、カゴで運ばれる所を狂四郎に助けられるシーンがあった。これも彼を誘惑する手段、玉緒の一寸珍しいシーンだった。

九州の伊満里や佐賀県の或る地方には、今も秋祭りには神社の境内で農漁村の婦女子による奉納相撲が行われている。

昔から其の地方では、出漁中の父や夫や兄弟達の無事と大漁を祈り、又農事にも女達の健康を守り、強い子供を産むという願いから、此のような行事を行われてきたというのである。

写真は伊万里市に於ける「奉納娘相撲」の土俵で、四つに組んだところだが、取組中の二人の娘はいずれも、白の下着をつけた上から褌をしめている。

最近の若い女性は、中々裸になつて相撲をとりたがらないということだが、なんとかして、この遺風だけは後世に伝えてもらいたいものである。

ピンク映画を片っ端から見つて週刊誌は全部目を通す。気が向けば女の子を裸にして縛った写真をとる。それで高給が貰えるのなら、私もそんなのになりたいヨ。

○高野原美氏の「女王の好みのままに——」八啓子散華Vの続によりに当て込んで、大塚啓子嬢の丰满な姿態を撮ったが、余りにも丰满すぎて、とうとう誌上の掲載を見あわすことにした。いっそのこと、読者に無料贈呈してはどうか、との意見あり。

○七月号での呼び掛けで、東浦ひかる嬢から、早速の通信が二通くる。一通はまだアパートがきまらないので、一週間ほどしたら住所と電話番号を知らすとのこと。それから三日ほどして第二信。意を決して、もう一度モデルになっちゃおうかしら。

今月号では、とても写真が間にあわないが、いずれ彼女の被虐姿態と手記を発表できるかもしれない。乞御期待。

○山原清子嬢、手記を書く書くといつて中々書いて来ない。仕方がないので彼女のオシャベリをテープにとって、さてそれから、それを文章にアレンジしたらどうだろう。

僕のイメージ画集『手打ち』二題……………室井亜砂路



〔映画通信〕

××××××××××××××××××××
佐 東 忍 夫

映画「赤ひげ」

山本周五郎原作 黒沢明監督

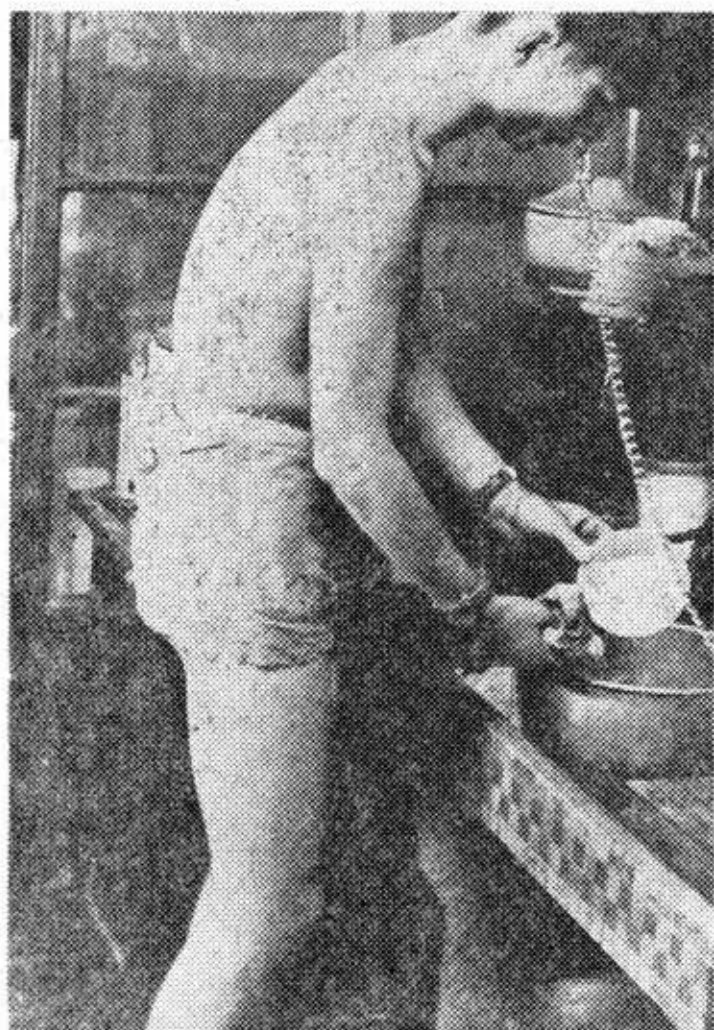
原作新潮文庫「赤ひげ診療譚」
によれば、
二十四、五才と思えるその女の
軀は、肉附きがよく、陽にやけた

遅しい手足のはかは、おどろくほ
ど白くなめらかで、美しくさえあ
った。豊かに張った双の乳房の、
乳首が黒く色づいているのと、晒

木綿で一部を掩われてる広い腹部
の、やや目だったふくらみとで、
妊娠の初期だということが認めら
れた。登はすぐ眼をそらし
た。長崎で修業ちゅう、女の患者
を診察し治療した例は少なくない
が、そのようにあからさまな、し
かも若さと力の充実した裸体を見
たことはなかった。
「足を押えろ」と去定が云った。

「薬を与えてあるが暴れるかもし
れない、はねとばされないように
気をつけろ」

そのとき気がついたのだが、女
の両手は左右にひろげられ、手首
のところを縛った紐が、それぞれ
柱に結びつけられてあった。登は
去定の指図にしたがって、女の両
足を伸してそのあいだに腰を据え
両手で双の膝頭を押えた。彼は眼



台所仕事をさせられるドレイ

連作Mフオト

美 枷 輪 生

鼻輪くさり、手錠くさり、腰くさりで逃亡を防いだ奴隷が茶

碗を洗わせられている。M族にとっては刺戟的な場面である。

のやりばに困り、顔が赤くなるのを感じた。その位置は譬えようもなく刺戟的で、滑稽なほど恥かしいものであった。

「眼をそそらすな」と去定が云った。「縫合のしかたをよく見るんだ」

そして、臍の一部を掩っていた晒木綿の布を取りのけた。右手に持った針は尖端が少し鉤なりに曲

っており、めどには二本よりの糸がとおしてある。布をとりのけると、傷口が見えた。それは左の脇腹から臍の下まで、五寸以上もあるほど大きく、創面は不規則に歪んでいた。むろん消毒したあとだろう、厚い皮下脂肪のために傷口は上下にはぜたように口をあいて、去定が布をとりのけたとき、少量の血が流れだし、腹部ぜんた

夫婦プレイのフオト

<出刃庖丁と白い縄>



水 野 弘

いに痙攣が起って、女が呻き声をあげた、すると、傷口から腸がはみ出て来た。太くて、青みがかつた灰色の大腸は、まるで生き物のようにうごめきながら、ずるっとはみだして来、そして傷口の外で蛇のようにくねった。登はそこで失神した。急に眼の前がぼうとなり、頭が浮きあがるように感じてあゝ、おれははねとばされるぞと

思ったが、そのまま意識を失ってしまった。

とあるが、映画では木製のえんだい様の手術台の上に、女は裸体で両手両足を紐でひっぱられ、うめき、手足をばたつかせて、あばれる姿は、まったくすばらしい。映画そのものも結構たのしませる力作で成功している。

「佐東忍夫（東京板橋）」

私の浣腸日記

高砂浣好生



○月○日

東京看護学院生の読者通信に依る教え通り注文していた医学書院器械の発売品の浣腸用肛門圧迫器が届いた。早速嚴重な包装をとき拝見におよぶ。濃青色のゴム製で中心に穴の貫通して竹輪状の品であった。上下面とも平面丸型で、肛門圧迫部は数ミリのヒダが出ており、密着しやすい様になっている。中心の穴には十五号カテーテルを通して圧迫器に固定して使用

する様に指示図が入っている。

カテーテルも従来の型と少し違って尖端の直腸挿入部の処に、中心尖端と左右とに三つの排出口があり、肉厚の博い弾力性ある肉色のカテーテルであった。

○月○日

昨日届いた浣腸用肛門圧迫器の実験を行う。一〇〇CCの大型硝子浣腸器にグリセリンを五〇CC入れ、温湯を残り五〇CC満たすと圧迫器付カテーテルを嘴管に取

付けて風呂へ入る。何時も嘴管に塗るヒマシ油が無いので、男性用クリームを使用し、肛門部へカテーテルの尖端を挿入する。

ここで第一に気付いた事は、この十五号カテーテルが非常に腰が弱く、くねくねとして何時もの様にスムーズに入りにくい。やがて一〇〇CCの浣腸液を全部注入すると、指示書の通り浣腸器の嘴管からカテーテルを外し、圧迫器の付根口でカテーテルを折り曲げて流出を防ぎ同時に右手に力をいれて圧迫器を肛門に強く押しつけて排便の洩れを防ぐ。

数分後、ガスと便が一杯になって、今にもパンクする様な気分になる。そこで指示書通りに、折り曲げたカテーテルを少しゆるめてゴム管口から直腸内容の液を出してみると、まだ無色で排出尚早である。やむなく又数分、嵐の様な腹圧の苦痛に耐えて、遂に限界点を超え、思わず排便行為を繰り返す。右手の圧迫器を力一杯に押さえて圧迫させ洩れを防ぐ一方、ゴム管をゆるめると、管の口から着色した液が排出される。

頃はよしと一気に右手を放すとカテーテル諸共、排便の勢で肛門の圧迫器は飛び散っていった。あ

あ爽快だ。気持が落着いたところで今実行した実験を思い返えす。結論として、この浣腸用肛門圧迫器は、其の構造が悪いため肛門の密着面が平滑で丸型であり、余程右手に力を入れて押さえていないと排便までに腹圧によって液などが洩れるようだ。とにかく一人では無理であり、使用は指示書通りに他人に施行される際の器具だと痛感した次第である。

○月○日

注文中の看護雑誌排便特集号が届く。高鳴る胸を押さえつつ頁をめくる。浣腸関係の技術面で、何か得る処があるだろうと期待していたのに何んたる事だ。唯簡単に浣腸施行の順序を列記しているに過ぎない。写真一つあるでなし、全く失望の限りであった。やはり私の経験では、看護婦用の眼で見る看護技術書たる医学書院発行の「看護技術の実際」が最高のようだ。写真のみの指導書であり、モデルになっっている看護婦さんの表情が実によく実感的に出ている。

○月○日

なんとといっても、私の人生から浣腸は切り放すことはできない。今日も愛用の浣腸器をとりだして磨きをかける。

サロンの楽我記

第十四回
辻村 隆

嬉しがらせて、泣かせて消えた……。

三橋美智也の昔の歌の文句ではないが、辻村隆はケシカラン。「カメラ・ハント」で次々佳人、麗人、美人を紹介しておき乍ら、一ぺんこっきりで勿体ないじやないか——と云う、えらいボロクソの手紙を編集部で見せられ恐縮しています。吾人を羨望させ、いつも独りいい子になって、偶にはこっちへお据分けせいとも書かれてあって、成程と、私も反省しています。

箕田氏と話したのですが、カメラ・ハント式に美人、佳人を撮っているのは、何も私一人ではない。自分一人で撮ってたのしんでいる人が多いということ。何も私に遠慮せずドシドシ新形式の方法で書いて戴き、俱に我々の奇クをよりよきものにしていただければいいわけです。宝塚二三夫氏だって、次々とおられるけど簡単な「ボクの縛り方」程度のも

のです。彼氏もルポ式に書いていただければいいし、奇クサロンへのフォトの投稿の人々も、単にフォトの説明程度ではなく、もっと面白く長く、愉しく書いて下さればいいのです。

いつもいうことですが、私も読者であり投稿者の一人です。唯、箕田氏との交際が過去二十年来で古狸なものですから、つい彼も安心して私に托すのでしよう。どうぞ、その点御諒承下さい。

× × ×

過去の人となったモデル嬢も、矢張りあの頃がなつかしいのか、時々ヒョッコリと手紙がくるそうです。先月では梨花悠起子が久し振りに簡単な素顔の手記をよせていたし、最近、忘れた頃になって東浦ひかるが手紙を出して来た。東浦さんの悪いくせは、約束をすっぽかすことです。悪気じやないと思うんだけど、私が三回、塚本氏二回、箕田氏三回と、夫々被害者である、行くつもりで連絡して

おき乍ら、いざとなると尻込みしてしまふのかもしれないが、待たされる方こそいい面の皮である。又ぞろ手紙来ても、もう狼と少年で、誰方かすっぽかされるのを覚悟で行く方ありませんか——。

× × ×

青木順子が静養中で、独りポツチとなった向井一也氏が、この欄を通じてでも相手になる女性を呼び掛けしたが、二人許り連絡ありましたが、向井氏の意に叶わず、先日美木乃々子嬢を紹介したら、連絡がついて大喜びの御返事があつた。美木嬢は家庭の事情もあつて地方巡業は困難らしいが、東京なら東京、関西なら関西と安定すれば、向井氏と組んでもいい様な口

吻りでした。果してこのコンビ実現出来るか否かは、お二人の気持ち次第だけど、若し可能だと面白いお芝居が見られそうです。静養中の青木順子が更に一枚加われば、これはイイですよ。これはイイですよ。

× × ×

「カメラ・ハント」もなんとなくの懶くて、遂に今月は欠けてしまった。どうも昔程のスタミナがなくて、頃は正によし新緑で、絶好のハントシーズンなのに、皆様の御期待にそえず、申訳ありません。来月は何とか、又新しい分野から発掘してみようと思っています。





△新しい雑誌から▽

保藤久人

余り雑誌は読まなかったが、新聞の広告の『不毛の愛・倒錯の性・人間深奥の歪みを衝く』を買った。異色小説と銘打ったのは、五篇。殊更取立てて言う程のこともない。『森茉莉』『金色の蛇』『野坂昭如』『浣腸とマリア』何れもソドミーをテーマにしたものであり、私の好みから逸脱しているので簡単に目を通す。併し、前者

は、抜け出すことの出来ぬその妖しい魔力をモチーフにしたもので斯道の人には魅力的な短篇とも思える。後者は題名から、SMに於ける浣腸かと、物珍らしく思ったのだが、『浣腸』『男色』『マリア』『女色（歪んではいないが慈母）』という文飾に過ぎなかった。

残りの三つは何れもレスボス。『吉行淳之介』『見え隠れ』は何時もの様に奇妙な話。『戸川昌子』『左手のための協奏曲』は同性の愛人を持つ女を妻とした不具者の焦慮と嫉妬。燃えぬ妻に不能状態になるが、一瞬間垣間見た情事の後の妻の姿に思わず力をこめた。動かぬ筈の手指が動き新しい自信を湧かせる話。

『田中阿里子』『さて何処へ』『複数でしか燃えない女』どうも気になる傍題なので期待したが駄目。ただただの部分はないものかと、熟読したらあった。男『夫』が嫌いになった千沙の話に『——天井から吊ったハンモックに乗せられて全身の肌に愛撫を受けようとする——』以上は彼女の甘い生活の頃。併し極端に嫉妬深い夫は映画を親で遅くなった彼女の身に情事の跡はないかと狂熱的に洗う。

夫の浅ましさに嘔吐しそうになり乍ら辛抱して足を開き、夫の髪に涙を垂らす。更に、夫の機嫌を損うと夜が大変。「絨毯の上に押えられ息が絶えそうになるまでベッドに寝ることを許されず、やがてハンモックが責めの道具に使われ出し、何時間も降して貰えない——」

文章は割合サラッとしているが仲々含みがある。ハンモックは長々と伸びた女体の重みで緩い弓状曲線となり荒い綱目なので柔らかな肉体のその個所がはみ出し。コモ包みの荒巻の様に引締めたならきつと美しい絵になる。他に『梶山季之』『白い炎の女』谷崎文学の、『お琴と佐助』と『痴人の愛』を混合した現代版。この人の書くものは好きだが、『四』と同様何処か不自然なところがある。だが、読みごたえは充分。それにしても、全誌に見られる表現と文字の強烈さに響く。

『——多磨子は花びらを一枚づつ開きその蜜を吸い始めた——千沙の震えを唇に感じた——甘く酸っぱい蜜が多磨子の口に——』又、小説『ショット』に『——デュランに両肢を押上げられ舌先を裂目に滑りこまされた時、香子は激しく鼻

山原清子

後援会の件

編集部

○六月号、七月号の本欄にて山原清子の後援会の件につき言及しましたところ二十九名の入会を頂きました。

○入会下さいました方々には、刺青、S、Mの三種に分けて各大中判二枚の山原清子のポर्टレイトを贈呈し、併せて第一回座談会の案内をいたしました。

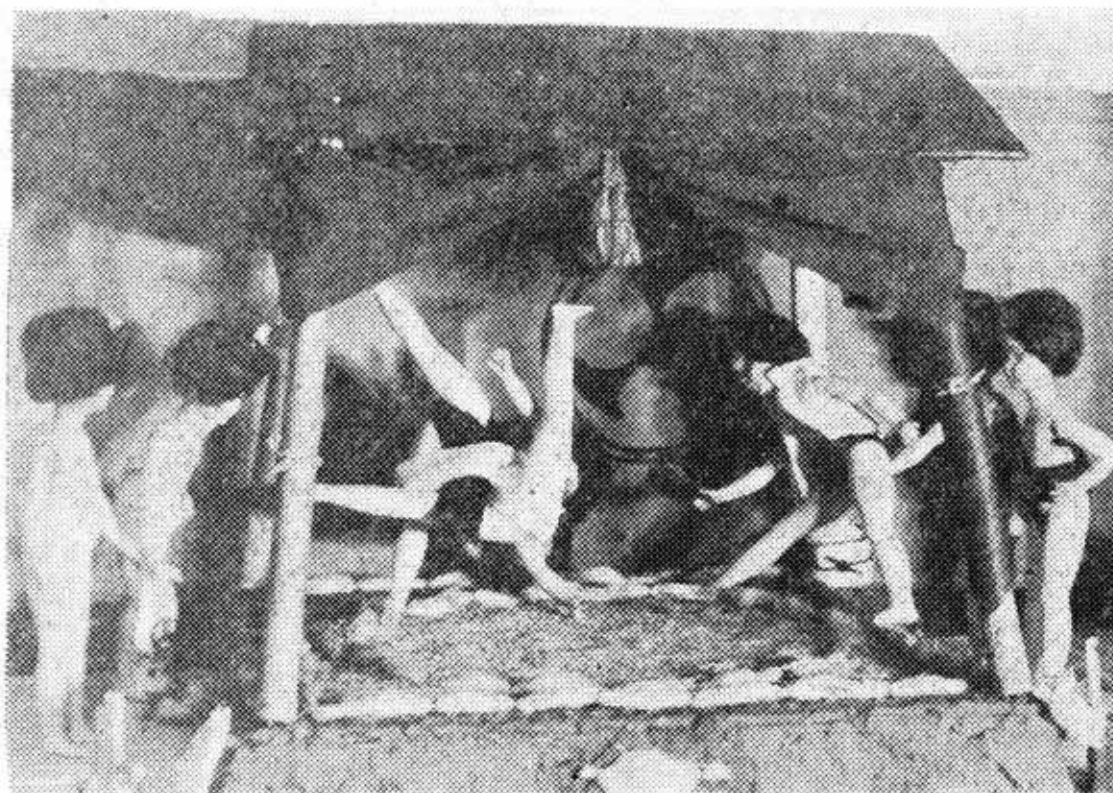
○第一回の座談会は六月二十七日（日）の午後二時より開催する予定ですが締切の六日までに申込み下さった方は十五名に達しました。第二回は八月に開く予定ですが詳細は追って会員の方にお知らせいたします。

○第一回の座談会は山原清子嬢を囲んでの雑談会といったもので、誌上に記事として発表いたしません。オブザーバーとして箕田京二、辻村隆の両名が出席いたします。

○尚、山原清子後援会の趣旨に御賛同の方は入会金千円同封の上お申込み下さい。写真二葉贈呈いたしますから、刺青、S、

人形の娘相撲

葉山夕起子



息をつき喘いだ。デュランの舌は執拗に裂け目を——同時に鼻先きでも香子の急所を刺戟した——「これでもいいらしい。お偉い方々は不感症なのか。劣情を催す方が悪い様な気がして来る。苦し前記

の部分を《花と蛇》の静子夫人と京子に当てはめたなら情感豊かな素晴らしい場面になる。講談社発行の雑誌には許されるが、奇巧には不可という。この不公平には本当に大声で叫び度くなるが、今の処

は「長い物に巻かれて」いなければならぬらしい。兎に角『今時の雑誌はエゲツナイじゃないか——』というのが正直な読後感でした。

(四〇・五・二五)

愛読者の皆様、今日は。数年前の本誌にビニール人形の娘相撲のことが出ていましたので、私も作ってみました。人形はタミーがよいのですが、大きすぎるのでペパー七人を用い、すこし頭デッカチなのと乳房があまりふくらんでないのは我慢しました。

ブロンドと青目を日本娘らしく漆黒にそめ、乳首をつけ、正規の禪(二・五センチ巾のリボン八五センチ)をしめさせてあります。実はこの娘たち、腋毛もプベースもあって、しかるべく魂は入れているのですが、まさか禪のとけ落ちた写真も如何かと思ひ、おとなしくこの位にしておきます。

どうも首と腕以外が硬質ビニールなのでギコチないのですが、いささか少女趣味とはいへ、すてがたいところもあります。写真では判りませんが、紙、塩入、水桶、杓も作っており、土俵は少し小さ

Mフオトの中、いずれを御希望かお知らせ願います。

○入会下さいました方々には、種々の催しについての御案内はその都度差し上げることいたします故、お含みおき下さい。

すぎるのですが、正規の俵数で徳俵も作っております。

四本柱には青竜、白虎、朱雀、玄武の四色の紙をまき、紫の水引幕をつけています。名前は戦斗中の勝娘が美津、負娘が紀代、控えの東方(白禪)タオルを持ってい

るのが綾、そのこちら側が真理、西方(黒禪)のむこう側が美恵、こちら側が由紀。行司はガーネット色の禪にブラウスをつけていて明美。全体がやわらかいポリエチレン製の、もっとグラマーな大人の玩具が売出されると、面白い取引が出来ると。写真の仕上げが素人のため大へん汚なくて申し訳ありません。

只今の私の夢は、可愛いお人形を沢山作って、土俵の上で、それぞれ、いろんな型でお相撲をとらすことです。

それでは皆さん、さようなら。

世相診断室



木戸川 健

現在、南ベトナムには世界各国から多数の報道陣が派遣されているが、その中で最も人数が多いのはアメリカ、これは当然であるが、次が日本だそうである。と、いうことは、△南ベトナム問題▽で、大騒ぎをしているのは、当事国のアメリカを除いては、日本が世界一であるという事である。

成る程、われわれは毎日のように、新聞、テレビ、ラジオで△ベトナム▽攻めである。ベトナムって何処にあるんだらう、と朝鮮が何処にあるか知らない、いたいけな子供までが気にして地図を調べなくらいである。これは、もちろん悪い事ではない。しかし日本はわれわれ日本人は、彼の国に対して何もしてやれないのである。た

だ、騒ぐだけなのである。これをもって、ヤジ馬根性という。△大松式根性▽に及ばない事、三振とホームランである。

朝日が今日K氏を南にさし向ければ、毎日は明日O氏を北に派遣して、熾烈なる報道合戦を展開する。読売だって負けてはいない、さればとベトナム村にON砲を送りたいところだが、Y氏を派遣する。共同はどうした？ いや、いたいた、ローカル紙のため、頑張っただけだよ。サンケイは何処に？、水野はいずこ水野はいずこや。いや、やっぱりいましたな。一体こういうマスコミの取材合戦が何になるというのだらう。大事な外貨をたっぷり使って、われわれに不安の種を提供する。これ

でもか、これでもか、といった調子で——火事は今隣りに燃えひろがりました、やがて、こちらにも——。だったら、消せばいいのである。が、われわれには消せはない。消せはしないのだ。何故だ？、

その点こそ、マスコミは深く静かに追求すべきなのである。そして、それは何もベトナムくんだりまでお出かけにならなくても、国内で、いや国内でこそ、出来る事なのである。私のいわんとしてい

る事は、消火器も持たずに火事現場に出かけるな、ということである。マスコミは、今の世相を△無責任時代▽などと嘲笑するが、無責任を極めていゝのは、そういわれるマスコミさんである。騒ぐだけ騒いで、後はこちらの知った事ではない、といった態度は、私も四月号でふれたが、例の千円札投げ込み事件にも通じている。

私は△南ベトナム問題▽には、無論関心は持っている。しかし無関心の態度を示している。それはいくら騒いでも、残念ながら、私の所属する国が何も出来ないからである。私の所属する国は日本である。ベトナムでなかった事を感じ

謝している。願わくば、その感謝の気持ちを、ベトナムに対して、何かがしてやれる国に——、出来なければ、真底同情の気持ちを持って静かに見守りたいのである。何も出来ないくせに、ただ、アメリカ帝国主義がどうのこうの、と、おちよこちよいに騒ぐのは、火事の現場でこれは放火が失火かと論じ合い、且つ内心もつと燃えれば面白いと思っている野次馬と同じである。

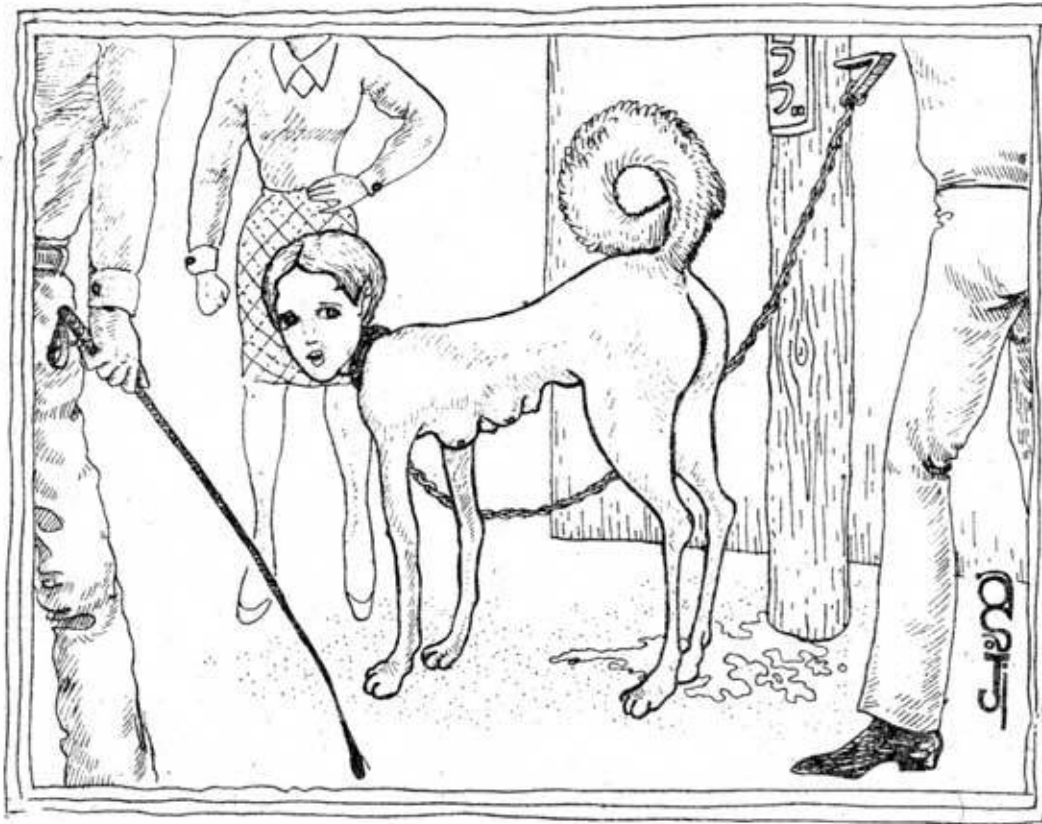
やがて、時が熱狂から解放された時、われに残るものは一体何だろう。アメリカはとに角やった。南ベトナムも、ベトナムも、そして、北ベトナムも、とに角やった。しかしわれわれ日本人は、何をやったろう。騒いだけであ

こういふ事を私が書いて、みなさんがたまたまお読みになって、面白からう筈はない。しかし、実は、私がいいたかった事は最後の件である。△とに角、やった！△という事である。それが例え、間違った事だと判断されても、やった、という事は素晴らしい事なのである。何もやらずに、正論をぶつよりも——。アメリカ帝国主義、

『僕のイメージ画集』

室井亜砂路

こわれたガラスの詩集



万才ノ
歴史というものは人やったVと
いう事においてのみ創られる。い
くら正論でも、ただ人言ったVと
いう事だけでは、歴史は創られな
いと知るべきである。
男女の歴史もその通りで、人愛

しているVという言葉だけでは創
られはしない。私がまだ純情だっ
た頃人愛しているVといえ、そ
の相手の女の子に子供が出来てし
まうのではあるまいか、と真剣に
思い患った事がある。小学校五年
生の春である。

今私は人愛しているVなどとい
う事は、例え嘘にしても、とても
いえない感じである。言えない代
わりに、私は浣腸を施してやっ
り、鞭をサービスしてやったりな
どしている。そして、私は、着着
歴史を創りつつあるのである。私

の帝国主義万才ノ。
乞い願わくば、私の帝国主義の
歴史に、進んで南ベトナム、ドミ
ニカとなつて一頁を加えて下さる
梨花悠起子の如き関谷富佐子の如
き美人の現われます事を——。啓
蟄の候にて候。

「或る一つの詩を構成する態度に
合致さえしていたら、その理由な
ぞは、どうだって、かまわないの
ではないでしょうか？」
ジャン・ジュネ

『薔薇の奇蹟』より

(堀口大学訳)

「寄ってらっしゃい、観てらっし
やい。可哀そうなは、この娘でござ
い。当年とって十と八才。親の
因果が子にたたり……」

と続く因果物の口上には平家物語
から大菩薩峠へとつらなる日本
人の心の郷愁というような語りの
美学の伝統が流れているように思
えます。

華やかにも悲しいジントの調子
はずれも、なつかしく想い出され
ます。どのような芸術にも、その
美が完全であるためには、一種の
倒錯が必要でないでしょうか。
俗悪と言われようが、頹廢とき

めつけられようが、『K・C』に
は独自の美の体型が在ります。犬
の雑誌や釣の雑誌があるように、
成人向のS・Mの専門誌が在って
なぜイケナイのでしょうか。

☆

A図——「アラベスクのある化粧
室」B図——「手打ち二題」はほ
にあてた刀身の冷やかさ。C図——

D図——「玉乗り」ジントが遠く
で聞える奈落、ムチの音。青白い
裸身の少女。五月号の『サーカス
団エレジー』雪という名の女は
うつくしい小品でした。

E図——「蠟涙」バラバラ事件の
犯人はみな病的なほど、臆病な人
達なんだと思います。

F図——「牝犬」この上にのせた
絵です。こんな犬がいたら可愛い
いですね。

G図——「ポリュウム」



〔フエチ通信〕

タイツふたたび

班多朗

実におかしな話である。一般の女性がバレエの目的でタイツをはくのが流行ってきたと思ったら、男性用タ

イツなるものが出てきた。男性用タイツには二種類あって、仮りにA、Bと名づけると、Aの方は前の開閉をたてにつけたファスナーで行う、ウーリーナイロン製のフットレス（靴下のないもの）で、Bの方は、前が在来メリヤスのズボン下のように重っていて、やはりフットレスだが、足のそこへベルトが共布でできている所がAと異なる。Bの方はどうも、メリヤスのズボン下を細くした感じで面白くない。タイツの生命であるよくフィットする点からいえば、Aの方が優れている。

しかし、タイツはもともと男性専用のものであったのだから、女性のマネをして出て来たとおってはマニアのひとりとして、いささか心外であると言わねばならない。思えば中世のヨーロッパはタイツの花ざかりであった。そのころはホーゼとかショーゼとか呼ばれていたが、とにかくすべての男性が下半身に密着したタイツをつけ鉄や骨のホルセットでがんじがらめにされていたレディの前で男性は「曲線美」をほこりながら、水中の魚の如く楽々と歩き廻っていたのである。色や柄も今の紳士諸君のズボンなどとは、比べるべくもなく、原色や大胆な柄が好まれていた。しかも今のタイツと大いに異にする所は、ホーゼの前に共布や目立つ色で男性の象徴を包む前袋（ラッツ、ブラゲッツ）がつけられていたのである。何というおおらかな美しさであろうか。何という、自然な生活風俗であろうか。今の男性用タイツのまじめさに我慢のできない私は、ショーゼやラッツへの夢とあこがれをいだくのである。

その後ショーゼは、パンタロン・パンツ（アメリカでは今でも長ズボンのことをパンツというそうだが）に地位をゆずって消えてしまった。そして次に現われた時にはなんと、女性専用のストッキングの一種として出現したのである。名前もタイツ（ピタリしたもの）の意）となり、もちろん女性専用だからラッツやブラゲッツはなく、一寸すじのぬい目がついているだけである。これを生んだのはバレエであった。バレエの衣装には下半身につけるタイツの他に、全身をおおう全身タイツ、これは足のつま先から手首、首までおおうようになっている。パンティとシャツのコンビネーションであるレオタード、これには袖の有無、長短がある。レオタードは女性専用だがバレエタイツでは男性と女性用がはっきりと分れている。先にも述べたが前にぬい目がついているのが女性用で、通っていないのが男性用である。おそらく、男性がぬい目のあるタイツをつけるのと、はげしい動きでぬい目がつれて象徴の所在がはっきりして、はなはだ「芸術的」でなくなることを、恐れたのだと思うのだがいかが。

たとえ男性用であっても、バレエのタイツは色数が少いから、中世のような「喜び」を味うことはできない。かといって市販の男性用のものは「我慢のできない」代物であるから、しよせん女性用のごやっかいにならざるを得ない。でも、真紅のタイツに金色のフレンチストラップをつけてみると、これはこれでなかなかムードがあふれてくるものです。

日中のいそがしさと、ズボンを忘れたタイツ姿で家であつろぐ時何種類もの色とりどりのタイツ・パンティ、ブリーフ・スキャンテリ、フレンチストラップなどにとりかこまれている時、それが私にとって生きていることを最も強く感ずる時です。

奇譚クラブ

昭和40年 8 月号

(1965年・8月号 <第19巻第8号・通刊205号>)



愛読者のみなさまへ

おねがい

本誌は創刊以来、本年で十九年を迎えました。人の世で言うならば青春期の美しさと元気に満ち満ちている頃です。しかし、今まで辿ってきた十九年の歳月は決して平坦なものばかりではありませんでした。題号を変えようと思ったことも度々ありました。けれども、とにかくにも風雪二十年に耐えて同じ題号のもとに存続し得たということは、ひとえに熱心な読者の方々のご支援の賜と厚く感謝しております。

本誌では題字下のサブタイトルに、以前は新時代の風俗文献研究誌、最近新しい風俗文献誌と謳っております通り、決して煽情的な興味本位の単なる性雑誌ではありません。極めて地味で控え目な編集による特殊な風俗文献専門誌を自負してきております。又、読者の方々におかれても、そういう目的にてご愛読下さっているものと信じます。

その意味にて、本誌は本年になってから口絵並にグラビア写真を全廃し、見る雑誌から読む雑誌へと百八十度の転回を実施し、成功してまいりました。これも一に読者の皆さま方のご理解とご支援の結果であります。今後は更に一層内容の充実を計り、皆さまのご期待にこたえたいと思います。いろいろな不満もおありと存じますが、諸般の事情で観察の上で愛読のほどお願い致します。



SM入門講座

若き友

に与う

栗瀬 長

私如き者が、かくも烏滸がましき題名をもって、貴重なる奇クの一頁を穢すのは、身の程を弁えぬ者とお叱りを受けるのが当然と思う。

勿論、私は奇ク十数年の愛読者であり、少なくとも白表紙以来はバックナンバーを誇るただそれだけの一市井の凡人にすぎない。何等の定見も経験をも持たない者ではある

が、既に結婚以来十五年、四人の子女を儲けた者として、ささやかな家庭、しかも、それは健全且つ円満な家庭であることを誇りにすることが出来ると、いささか自負を持っている。

健全なる社会は、健全なる家庭を基礎とした中産階級が、大きな分野を占めることによつて成り立つというのは、社会学の明示する所、私は少なくとも、その一員であると自認して憚らない。

最近、若い人——いや私もまだ本当に若いと思つてゐるのだが——私よりも若い人、具体的に言えば二十才代の人々から、家庭、教育その他について質問を受ける機会が多くなつてきた。我ながら中年だと思ふ。

「円満且つ健全なる家庭を築く根本は」と聞かれた時、私は躊躇なく奇クをあげたいのであるが、遺憾ながら只今の社会は奇クを素直に受け入れる素地に欠けていると言わねばならない。

自分の卑怯は棚に上げておこう。私自身、奇クについて語る勇氣を持ち合わせぬ場合が少なくないのである。しかし、私は若い世代に語りかけたい。奇クがどんなに円満な家庭を築く礎となり得るかを——。

今般、何回かに分けて、私が奇クをいかに家庭生活に生かしてきたかを、体験により、告白的にお話してみたいと思ふ。

大方の先達には、兎戯に等しいものでしかあり得ない筈である。空想の世界に耽溺しようとする方には、甚だもって頼りない落書でしかないと思ふ。こんな刺戟のない読み物もないであろう。

私の言わんとする所は、この程度ならば、家庭生活に取り入れて害はない。取り入れられる筈であり、いや、奇クを取り入れることによって、より充実した、より内容豊富な家庭生活を営み得るという見本を示したいに過

ぎないのである。

従って、対象としては、敢えて二十代の、これから家庭生活を築こうとする真面目な方々に語りかけたい。それも奇クの世界をあま

りご存知ない方達に——。前書が長くなり過ぎた。内容の浅薄はもって諒とされたい。

〈第一回〉

「縛り」について

『縛る』という言葉聞いただけで、ジーンとくるものを感じる方、或いは、紐、縄を見ただけで特別の感慨を抱く方は、もう立派な奇クファンであって、今更私が縛りについてお話する方ではない。

「女を縛るなんて、そんな事出来るかしら、縛って何が面白いんだろう」。

そうした疑問を抱く方々に、縛りに入る道程、入門の第一頁の鍵をお話したい。あとは、奇クが、先達が、縛りの醍醐味を語ってくれるであろう。

最近号でこそ、世論の何とやらで、奇クも自粛とかで、華やかなグラビアも姿を消したが、過去の奇クを彩どったグラビアの数々、そうでなくとも奇ク本文の所々に散見される縛りの写真こそは、まさに縛りの極致であって、とても私達の如きが容易に達し得べき所

ではない。

しかし、その真似事位出来ないものであるうか。やって出来ない筈はない。私もはじめ奇クを知るまでは縛りに何等の感興も抱いていなかったと言っては言い過ぎだろうか。

勿論、幼少時、所謂泥棒ごっこ、泥棒になったり、悪漢になったり、明智探偵——その時代は少年倶楽部の明智探偵が今の鉄腕アトムの如き少年の憧れであった——となったりポリスとなったり、林の立木に縛ったり縛られたりであった。少年時代のよき日の想い出。しかし、それも縛りへの強烈な思慕とはならなかった。

でもそれが、人間の心理に何等の影響を与えなかったと言い切れるであろうか。或いは近所の女の児と遊んでいて、そっと縛ったり縛られたりした経験のない人であるだろうか。その時の、今はもう遠く忘れてしまっているに違いないが、今静かに、その昔の思い出を辿ってみて戴きたい。

自由を束縛されて、今縛られている自分は戦国時代の捕われの大将かも知れない、古代ヨーロッパの捕われの王子かも知れない。或いは、今、自分が軽く縛ったお隣の女の児は王女様、お姫様、そんな童語の世界にいたのである。ぞくぞくする喜びを感じなかったであろうか。

今、私達が大人になって、そんな喜びを味

わって何が悪からう。大人は大人として、もっと洗練された喜びに浸ってもよいと思う。それを極く手近に求めることが出来ないであろうか。

バーでも、キャバレーでも、いや焼鳥やでもよい。会社にも若い女性はわんさと居る。でも、やたらに、

「君、一寸縛ってやろうか、縛られてみてくれないか」

なんて言ってみて見給え、

「あんた、少しおかしくない」
で片づけられてしまうのは必定、場合によってはあたら君の一生を台なしにしてしまうかもしれない。

第三者を口説くのはむづかしい。単に一夜を共にすることは、割合簡単であることは申すまでもない。しかし奇クの世界はむづかしい。まだ日本人はそこまで洗練された楽しみを知らないからだ。従って、第三者を口説くのは、余程のベテランになってからだと諦めるのに若くはない。いや、出来ない相談だと決めてしまってもいい位である。社会人として、我が身を誤らないためにも、ゆめゆめ性急な愚行に出ないことである。

そこで求め得べき対象として、妻がここに登場する。敢えて、S M プレイなどという高尚なことは言わないこととする。

自分の妻と、人知れず、縛りごっここの真似

をするのだ。これがどんなに楽しいことであるかを、その導入の一方を、お話ししたいのである。

新妻、実にいい言葉である。畳に比較しなくとも、新しいものは何でもいい。むっちりふくらんだ乳、堅くしまったお尻、もう君は夜を共にし、一緒に風呂に入り、君の奥様の体には完全に惚れ込んでいてに違いない。素晴らしい果実は、もうすっかり熟して君の手の中にあるではないか。

その張り切った乳房に、細くくびれた腰部に、真白に輝く太股に、一寸紐を当ててみたらどんなだろう。二つのふくらんだ胸は、いやが上にも張り切って、細くくびれた腰の線は、縄目を受けて更に細くしまるだろうし、輝く太股は、と想像してみ給え。

更に、縄を受け、完全に自由を奪われた時の妻の精神的感情、顔の表情等を想像してみ給え。そうした結論は奇クがあます所なく示して呉れているではないか。あとは我と我が手で実行してみるだけなのだ。

○

或る日、君は、奇クを一冊、わざとしまい忘れたかのように、君の書斎の机の上に、半開きにしたまま、伏せたまま出勤する。朝の掃除に來た君の奥さんは、

「まあ、あの人ったら、読みかけの本をほったらかしにして。あら、見なれない表紙の本

だわ、何かしら」

独りごととして手にとってみれば――。グラビアのないのは残念であったが、頁をくる毎に次々にあらわれる縛りの数々、女心に胸のときめかぬ筈はない。しかしそれは、恐らくいや必ずといってよい、君への軽蔑となつて現われると思つて差し支えない。夕方帰宅して見給え。おっと、その前に一寸小細工しておこう。大事な日だから、一寸早目に会社を出るがよい。近所の一杯のみ屋で、急いで、一、二杯あほるがよい。ホロツときた所で、この時決して遅くならないよう何時もの時間に必ず帰宅すること。遅くなったらそれこそ大変、これは言わずもがなであろう。

「貴方、何よ、これ。私、すっかり貴方について、方を軽蔑したわ。こんな本、法律だ、経済だ、世界に眼を向けなくちやなんていうのお題目？　こんな下劣な本なんかよんでいて私をだまそうたって駄目よ。ホラ、貴方忘れていったでしょう。チャンと見てしまったわ。下劣、下品、何とかおっしやいよ。いいえ、いいですわ、こんな方だとは思いませんでした。里へ行つて相談して参ります。ああ、くやしい、こんなくやしいってことないわ。男って本当に動物なのね、よく分ったわ」
こんな言葉が一瀉千里と君の頭上に降ってくるのだらう。だが驚いてはいけない。あわててはいけない。そんなことは当たり前だ。

今更何をというような態度で

「ああ、この雑誌か。この所しばらく買つてなかったから、君に見せる機会がなかったんだが、性心理学界では貴重なものとされているんだ。知ってるかい、アメリカのキンゼイ性科学研究所でも、日本のものでは奇ク他一誌しか取り上げてないんだ。その辺にちかつかつてエロ本と一緒に考えちゃこまるね。一寸よくみてごらん、セックスの話なんかありやしないだろ。大体日本人はね。こうしたパラエティに富んだ人間の心理について理解がなさすぎるんだね。何か一寸変った面がある」と、すぐ変態だとくる。アブノーマルってやつね。しかし何がノーマルで何がアブノーマルか、そのけじめって分るかい」

といった具合に静かに丁寧に、しかも信念をもって性心理を解き明かすことだ。そしてその根本理念として、アブノーマルの心理は必ず人間の心理の奥底に潜んでいること、たまにそれが社会規範の命ずる所によつて、一応抑圧されているにすぎないこと、従つて社会生活の場に持ちこんではいけないが、夫婦間にあつては、秘かな楽しみとして、より豊富な性生活を営む源泉として、よい意味にて活用してよいと考えられる――といった意味のことを、やさしい愛情をこめて説明することだ。

その場合、恐らくはじめは君達夫婦は向い

合ったままだろう。折をみて、君はそっと君の奥さんの手を取るがよい、そして静かに手の甲を両手ではさんで愛撫することだ。その中君は奥さんの横に跨り寄って、やさしく肩に手を置く、肩から首、背中をなぜながら、やさしさと同時に熱意をこめて奇巧の世界の説明をし、場合によっては、奥さんを膝の上に抱き寄せながら、奇巧の一頁を、特に、サロンに寄せられた短篇の評論を読んで聞かせるのがよい。

責のあまり強烈なのはまだ避けるべきであろう。まして、フェチ、浣腸、女斗美、切腹等は、まだむづかしくて理解出来ないと考えた方が無難である。勿論やがて、その眼が開かれることを期待しつつ。

君の愛撫と情熱に、もう君の奥さんは抵抗しないであろう、うなじに、唇に、或は耳にそっとする君の口づけが快感的なものとなった時を見はからって、

「ね、一寸いたずらしてみてもいいかい」

「え、なに、何するの？」

「軽く、縛らしてくれないかなあ」

「いやよ、縛るなんて、こわいわ」

「僕が縛るんだよ、ほんの一寸、いたずらね、いいだろう」

そして、今一度口づけ、もうこれでよい。かねて用意しておいた細ひも、あまりいたくないように奥さんの腰ひもがよい。本縛り、

股間縛りなんて、とんでもないことは最初から絶対にしてはいけない。奥さんは驚いてとび上ってしまうだろう。

残念だが、果実は自然に熟するのを待たねばならない。最初は、着物の上から我慢する。それも二の腕から胸にかけて、軽く二重にまわす程度にすることだ。それでも、

「どう、痛くない？大丈夫？」

と、特にやさしくいたわってあげ給え、
「ううん、痛くないわ、でも、何だか変な気持、こわいわ。もういや」

ここですぐ解いてしまつては、まず明日が駄目である。縛りの感情を今少し高めておく必要がある。ここで静かに、やさしくお話しするのだ。

「ね、変な気持がする？ 大丈夫だよ、誰もみていない、僕と君だけの秘密だよ。縛られた君って、ほんとにきれい、何か憂いを含んで、そう、そっとお目を閉じてごらん」

こんなことを言いながら、君は奥さんを離してはいけない。縛ったまま必ず抱きかかえていること、これで奥さんはすっかり安心するのだ。そして、若し適当に気分が盛り上がるようだったら——それは君ではない、君は冷静に、奥さんの気分だ——そのまま、いつもの夫婦の行為に移行出来たら、それは大成功だ。

こうして、はじめての縛りは完成する。勿

論、縛りとは言えない程の幼稚なもの。だが導入部はそれでよいのだ、あわててはいけない、又明日がある、明後日がある。

冗漫な導入過程をいちいち語ってはいは、徒らに貴重な誌面を穢すだけ。あとは君の思考と努力にまとう。

ただ一言。必ず性急に事を運ばないこと。今夜、第一回が成功しても、明夜第二回とは必ずしもゆかない。気分の盛り上りを待って第二回は三日後か、一週間後か、或は十日後かもしれない。しかし、それでよい、花も蕾から花開くまで、随分長い期間がかかるではないか。

君の未来には、美しき、ポリウム豊かな若き美の極致である女体が、毎夜君の縄を待っているのだ。亀甲縛りもよい、股間縛りもよい、やがては、君の二世が宿ったときには、妊婦逆づりの大わざすら出来ないとは言えないのだ。長い時間をかけて奥さんに縛られることの醍醐味を味あわせることは、一にかかって、君の根気よい努力にかかっている。

そしてその根底には、君の奥さんへの限りなき深い愛情であると申しておこう。

今月は縛りへの導入のほんの第一歩を申しのべた。呉々も性急にならぬように、君の自重自愛を切に望むと共に、君の奥様が、君の縄目によって、より美しく、より女性らしく昇華されんことを祈ってやまない。

芳野眉美氏への公開状

「濡れなくても濡れる?ということについて」

——『奇ク』六月号「ガン作・マニヤのノート」を見て——

夜 乃 探 郎

この公開状を書くまでに、私は幾日、考えつづけたことだろう。そのことから、まず書くことが、芳野眉美氏に対するエチケットでもあるうか。

本誌、六月号「ガン作・マニヤのノート」、『濡れにぞ濡れし』の『A遊び』——が、出ている同号には、どのような関係? か、偶然にも私の「SM図書紹介」が採用掲載されている。そして、洪沢竜彦氏の「快楽主義の哲学」について——を借りて、私なりの「空想」「耽美」「幻想」についての効用? を述べている。△私は皮肉なことよ▽と、苦

笑した。少したってから△編集子の編集の妙味に感服した▽成程、本誌のバラエティとは、この事であるかと、ナットクしたからである。でも、感心ばかりもしていられないと思った。

私は、まるで夢をくらうバクのように、妖しき夜を背景に、アキモせず、自称耽美主義者たる、夜乃探郎という『私』をふらつかさせて、原稿用紙の上で、さかんに「空想ばかりで、女を責めたり、女に責められたりして、それでサジストだ、マゾヒストだなんて云っている」まことはタイアイのないSMナ

ンセンス・ドラマを展開し、これからも、ペンとナンセンスのつづく限り、文学? しゅうと考えているユ・メ・ノ・ユ・メ・タ・ロ・ウでもあるからだ。

「公開状」だなんていっても、だれかさんのように、トテモ駄目です。威勢がよくても、それはそれ、私のこと。まるで煙草の煙りのように、いつのまにか、幻の世界とやらに、ドロンしてしまうかも知れません。では、なぜ? こんな一文を書く気持になったのか。それぞれの世界で勝手? なことをいっておれば、それでよいではないか。花園



をあらすのは、自分なりの作品、紙の世界だけだよ。けでよかるう」ということになるわけだが……。

——芳野眉美氏のファンを自称する葉山啓氏だって言っている。好きなイメージ、好きな、たわごとを、書くことの出来る。そんな本誌に「祝盃をあげ、拍手を送り、ホクソ笑んでいる」——と。△私も、ウィットにとんだエッセイを発表しつつづけている、芳野眉美氏のファンでもある。このことは、ハッキリ宣言して置く。だから、空想的でも、私なりのペースで「神酒」についての、いとも珍なる？ ストリイを、手記にたくして発表（筆者註・夜は妖しく更けたれば「参考」）している。

——ところで、芳野氏よ「A遊び」の章は、ちよっと、語るに落ちた所があったのではないでしようか？ △私も、文の道をたずねる者、レトリック、逆説手法や、諷刺・肉を斬らして胸をうつ——のような書き方は、少しは知るものです。だから、この一章を、上面だけを見、判断することのおろかさをよくわきまえているつもりです。特にこのところは、芳野氏、オトクイ？ のまことにひねった書き振りでもある意味で——▽読者だっ

て十人十色、毒をもって毒を制すとか、しやれ気が判らないお人？ だっているわけだ？ ……あれや、これやの私の取りとめもない考えが、あえて私のもっともニガテの、このよな「公開状」が生れることになった次第である。△批判するがための「批判」でないことだけは御理解乞うものである▽

「空想なんて、誰だって出来るんです。どんなことだって考えることが出来る」この一節は、遊びが下手な客を冒頭に紹介して、いつのまにか、芳野氏、日頃の自論でもある日常生活に密着した生きているSMプレイの問題を持出す心にくいまでのレトリックでもあるが——。

どうも、バーの客の心理と、まことにどうも、SM的な、文章による各種ジャンルを結び批判することは、ちよっと不自然な、手前みよ的な感がうかがわれるように思う。特に「贗作・悩ましのサディズム」として、森山美歌夫人に関するイメージを、芳野氏なりの妖しきSM的な世界にたくして、アキもせず？ エンエンと書きつづっていられた。△私はこれをフィクション的な小説？ のジャンルと思つて、興味深く拝見していたのだが——ある程度は事実を混入しているとしても、

それは、針小棒大的？ なるもので、また、それはそれとして、面白い新しい文学？ とも評価している▽

私は、かねてより△私の所持している奇クを知る範囲で▽芳野氏のうまい文章に魅せられて読者の一人だが、そのエッセイ及び小品のETCは、なにげなくサラリと書き流した、そこに、にじみ出ている芳野氏なりのSM的な体験的？ な真実があたたくただよっているところにアジがあるもので、才人、才におぼれる？ ような「A遊び」のペンの跡は、独善的な？、芸術家？ △どうも、芳野氏のクライな言葉のようですまないが：▽的な、エゴ？ △親切気がない？ という意味で、ツメタイ？▽がよみ取られるようなのである。

「空想」などと、一言にして、片付けてもらいたくないのです。△その裏にあるホントのところを判ってもらいたいとは、芳野氏の願いであつたとしても▽

りくつを付けるようになりますが、芳野氏流の筆法にオカエシをするならば、極論？ すれば「ものを書くより、本をよむより、ただ、神酒をノンデイレバよい、SMプレイをしてればよい」という言葉も生れることとな

りそうである。

「奇クの読者は八割まではSMに関係なく空想を楽しんでいる」という、奇クの読者に、
 「そう思われているような芳野氏がセッセと
 幾年も濡れにぞ、濡れてVペンを走らせ発表
 していられたとは、マコトに、ゴ・ク・ロ・
 ウ・サ・マなことでしたと考えさせられる。

私は、実際にSMプレイをしようとしても
 その機会なく、せめて「SM文献をひっくり
 かえして知識を豊富にし」「現実的にご自分
 がサジストであるか、マゾヒストであるか」
 判らないけれど、書いたり読んだり奇ク誌上
 に、妖しきスリルと、生きるよろこびを味あ
 う、読者の八割の一人として、——このよ
 うな自称SMマニア？も、本誌は受入れ、玉
 石混淆？ある編集ぶり、トモカク通刊二
 百号を突破してきたことに我田引水ながらウ
 レシガッター、とんだりはねたりしているも
 のである。

「夫婦生活にSMプレイを取り入れたりご自
 分のSEXにSMプレイの相手を見つけて、
 その人なりに楽しんでいられる方」も、高級
 なるSMマニア族ならば——そうではなく、せ
 めても、空想なりの、耽美世界の中にスリル
 を、よろこびを感じている読者層も、高級な

るSMマニア族ではないかと思うのである。
 どうして芳野氏は、眼の仇？のように「空
 想」とか、文芸的なことに、ツメタイ？の
 だろう……。現実で、あまりにも御満足？
 すぎるからなのだろうか？

「この頃の奇クは面白くないとかつまらない
 とか」言ってるのはSM空想家の中よりとい
 うよりは「アッタのが、無クナッター——」と
 いうことに対するアタリ前なグラビヤ及び口
 絵が姿を消したことへの淋しさで——これだ
 って、五、六月号あたりからは、本文充実と
 か「奇クバンザイ！」のいつわらない読者の
 声も、盛上ってきたことで、別段、御心配さ
 れようなことでもない問題？ではないかと
 考えられる。

私は、才人、芳野眉美氏のエッセイなどを
 高く評価して居り、ファンの一人でもあるの
 で、とかく乱れた？生（ナマ）になりがち
 な近頃のご文章を惜しむものである。いや、
 私の方で早のみ込みや一人がてん、理解でき
 ない、無能さをバクロした、しうたいをさら
 け出した結果になってしまったようかも知れ
 ない——のでもある。だが、このような一文
 をろうすることにもなったモトは——？「だ
 から、私は、私の経済力の範囲でせつせと女

の子をクドイテいます。できないことは始め
 からしないほうがいいのです」という一節
 ——耽美主義者を自称する私にはこれだけで
 はどうもつまらんことのように考えられる。
 むしろ、デキナイコト、例エ、ソレガ失敗ヲ
 予想サレタトシテモ、情熱ヲ、空想ヲ、野心
 ヲ——持つ方がよりSMマニアとしての、妖
 しきスリルと未知への発見にもつながるので
 はありませんでしょうか？

「快楽主義」とは、芳野氏も「D断章」に引
 用されてたように「自分の限界を破り、自分
 の能力をどんどん広げていくのが、快楽主義
 的な人間というものでしょう」と、私は信じ
 ている。私も、耽美イコール快楽主義者で
 あり、芳野氏もそうだ？とお見受けしてい
 るので、「A遊び」の一章は、どうも理解判
 断に苦しむのである。「現実の世界で快楽を
 求めることが不可能になったサドは、やむを
 えず、空想の世界で快楽を追求するようにな
 りました」（傍点は筆者「SM図書紹介」参
 考）現実の快楽も、私は肯定するのだが、空
 想の快楽も是非、芳野氏に理解していただき
 たいものである。カメラ・ハントの辻村氏の
 文章は記録だけでなく、フィクション的な、
 （詩、物語）ものが多少でも加味されている

であろう？ ところに、芸術家でもある詩人としてのカメラとペンによる余情あるSM的な「美」の世界が展開、ただよってくると思われるのであるが――。

「空想」とは、遊びのようなもので、特に、アブノーマルな世界での、SM的な対象物にあつては、だれにも出来ない、秘められたSMマニヤなりの願望と、刺激がふくまれていると、私は信じているものでもある。SMプレイをすることも、遊びなら「空想」というジャンルも、同じく高級なる人間のみに許

された（動物が空想するか、どうか判らない？）特権であり、場合によっては、高度な技術も必要視される（その頂点は文学・音楽・芸術ETC）と思う。

以上まことに、取りとめもないことを書きちらしましたが、ケンメイなる芳野氏には、私が、何を云わんとしているのか、お判り、御推察されうると考える。このたあいのない幻の夢男のために、明快なる、お答えを、御教示を心から願うものである。

〔附記〕

この公開状の性質は、単に、個人的なものでなく、あくまで、奇クの一般読者の一人として発言しましたので、論議の水カケ論になるのを恐れ、この問題については、私の発言はこの一編のみにて、とめたい。芳野氏の文章掲載？ 後は、第三者のこれについての投稿で広く、奇ク論壇として発展していくことを希望するものである。

（終）

〔最新版〕 ニューモデル悦虐写真五十集

K組五十集 大手札判印画紙（9×13寸）焼付

一組一枚	一五〇円
五組五枚	五〇〇円
十組十枚	九〇〇円
二十組二十枚	一七〇〇円
三十組三十枚	二五〇〇円
四十組四十枚	三二〇〇円
五十組五十枚	四〇〇〇円

K 1	全裸刺青自慢緊縛（山原）
K 2	恍惚たる責の境地（山原）
K 3	苦悶の表情海老責（大塚）
K 4	海老責にあえぐ女（大塚）
K 5	全裸のぐるぐる巻（玉田）

K 6	豊満な臀部を晒す（刑部）
K 7	厳しき縛りに酔う（山原）
K 8	荒縄で仕置される（美術）
K 9	土壇に観念した女（美術）
K 10	ムチ打たれる女囚（美術）
K 11	縛り人形を眺める（山原）
K 12	開孔器で鼻を弄ぶ（山原）
K 13	足首と首を連繫す（大塚）
K 14	後手の複雑な縛り（玉田）
K 15	裸縛りに恥らう女（山原）
K 16	夫にされる鼻責め（増田）
K 17	緊縛にあう若妻姿（増田）
K 18	猿轡で鼻を虐める（増田）

K 19	開股縛にあう女囚（美術）
K 20	罪状を訊かれる女（美術）
K 21	股間縛りの全裸像（山原）
K 22	荷造り縛りで晒す（玉田）
K 23	革拘束衣で括らる（大塚）
K 24	庭木に立縛りなる（木村）
K 25	柱に晒される裸身（玉田）
K 26	セーラー服しぼり（大塚）
K 27	高手小手首縄緊縛（山原）
K 28	黒輝豊満刺青縛り（山原）
K 29	踏みにじられた女（山原）
K 30	古墳にて吊り準備（木村）
K 31	拷問にあう裸女賊（山原）
K 32	ロープブラジャー（山原）
K 33	嚴重な後手縛猿轡（刑部）
K 34	エビ縛りにあう女（木村）

K 35	イルリのある風景（大塚）
K 36	麗しき裸身を晒す（大塚）
K 37	亀甲縛り正面裸像（刑部）
K 38	豊満乳房縛り上げ（山原）
K 39	全裸を投げだして（山原）
K 40	縛しめに哭く乙女（木村）
K 41	エビ責め放置十分（木村）
K 42	豊かな全裸を緊縛（玉田）
K 43	観念アグラ縛り囚（玉田）
K 44	笑顔を縛る強烈さ（刑部）
K 45	猿轡の下にあえぐ（刑部）
K 46	縛りに典子の素顔（刑部）
K 47	伸びやかな裸縛り（刑部）
K 48	エビ縛り刺青姐御（山原）
K 49	立木より逆さ吊り（木村）
K 50	裸身の緊縛と羞恥（玉田）

浪江大五郎

〈悦虐絵灯笼（その十三）〉

万田不仁

★ 金襴の括り枕に肱をつき、半身を起こした
 穆翁（ぼくおう）は、黄ばんだ、むくみ加減
 の顔にうすら笑いを浮かべながら、女中の相
 撲をながめている。

襖を取り払った次の間の中央に敷いた土俵
 ほどの大きさの緋もうせん、その上で女中た
 ちの若い体が、激しくぶつかり合っている。
 黒、赤、紫、緑、紺の繻子の細いまわしを締
 め込んだ女中たちは勝抜きで争うのだが、一

番でも勝った者には与えられる鼈甲や平打、
 円い珠のついた上等の簪や櫛、さらに二番、
 三番と、勝ちすすんだ者に給わる羽二重、縮
 緬、綸子、緞子などの衣装や貴金属の頭のも
 のが欲しい一心で、相撲はいつも白熱せずには
 いない。

松平定信による奢侈禁止令の行なわれてい
 る今日、それらの贅沢品は、公儀の趣意に反
 するものだけに、いっそう若い女の血を騒が
 せる品々だった。

穆翁は長い病床の倦怠を慰めるために、た
 びたび女中の相撲会を催すうちに、いつかひ
 いきの女中ができていた。

萩路という、年は二十になるかならぬ、小
 麦色の肌をした中肉のやや背の高い女中が三
 番続けて派手な投げわざで勝つと

「うふふふ、ふうむ……」

穆翁の頬がたるんだ。大酒と房事過多でい
 たんだ頭に女中たちのあられもない取組みの
 肢態がようやく刺戟的に働いて、まだ時々朦
 朧となる心気を鈍く掻き乱す。

四人目の相手の大柄な女中と萩路は緋もう
 せんの真ん中で揉み合っている。大柄なほう
 は浪江といい、穆翁がよく足腰をさすらせる
 女である、赤い緞子のまわしを締めている。

浪江は下にくぐろうとする萩路を突き放し、
 右手で咽喉を攻める。萩路の白い、しなやか
 な体が反りかえり、もうせんの隅にせまる。

——萩路、萩路、穆翁は心の中で声をかけ
 る。彼は女中の相撲を思いついた時はこれま
 での大方の遊びごとがそうだったように初め
 の間、熱中したが、ちか頃ではもうだいたい飽
 きかけていた。にもかかわらず、美しいとい
 うより凛々しい顔立の萩路が出ると妙に濁っ
 た頭の中から重たい霧がはれてゆくような気

がするのだった。

「よいしょ」と、浪江が掛け声して、双差しになり、一気に目方の軽い萩路を押し切ろうとする。若い女のぴったり合って、せめぎ合う乳房、腹と腹、せわしい息づかい、乱れた髪、女相撲の妙味はこのあたりにあるのだろうが、それがもうせんの際にいつて、萩路が得意の上手投をうった瞬間、大きく割れたふたつの肉塊の一方がどっと崩折れ、一方ももうせんの外へたたらを踏んでよろけた。倒れた浪江の綴子のまわしがゆるみ、要心深く下にまいていた羽二重のまわしが白くなまめいて見えた。

「ふふむ、うふ、うふうふ」

穆翁がまたことばにならぬ声を洩らす。

ふんどしも女相撲はむつかしい

古川柳にあるが、淫蕩な穆翁は、女中たちの相撲で、ただ一方的な押し相撲で簡単にかたがついてしまうのは興冷めもの、やはり押し合い、投げを打ち合い、双方の体が汗ばみ、桜色に紅潮し、はてはまわしがゆるむほどの大相撲を好んだことはいうまでもない。

「まわしを締め直させてはならぬ」

行司役の老女に彼は厳命してある。尤もそこは女中たちも心得ていて、繻子のまわしの

下に羽二重の下帯をしめて、見苦しいことにならぬよう気を配っている。

「どうじゃ、おもしろかろう」

穆翁は氣に入りの小姓に笑みかけ、それから側に固くなったふうにかしこまっている色白、細おもてのやさ男に声をかけた。

「は、はい……」と、蚊の鳴くような声音で応えた男は、市村座の若手女形の大島大五郎。舞台では毒婦などにも扮して仲々きわどい演技もやる彼だが、もうすっかり気を吞まれた形で俯いてばかりいる。

「ふふふ、大五郎は存外うぶじゃの、女には物おじせぬその方たちではないか、ふふふ、それとも、そう内氣ぶるところが、何かなそちの手かな、うふふふふ」

次第に上機嫌になった穆翁は手を打って、

近侍を呼び寄せた。

「これ、あのめくらと浪路を呼べ」

「はっ」

穆翁は翳のある笑いを浮かべて

「大五郎、今日はめつたに見られぬものを見せてつかわす、うむ、めくらと女中の組討ちじゃ、両方気絶するまでやらせるのじゃ、これは眠氣が覚める、ハハハハハ」

大五郎は心で顔をしかめた。いやな茶番だ

と思った。が、大事なひいき客の穆翁の前だから務めて興あり気な表情を作るのにぬけ目はなかった。

やがて、近侍に伴われて、盲人が現われた。大五郎が見るとめくらは三十才くらい、頭を青々と剃りあげているのが、そのしっかりした体に尚精悍な感じを添えている。毛深いたちらしく白い禪一本の体の胸、臍には濃い毛が密生している。

一方、浪江は、さき程、若い萩路との相撲で、今ひと息で寄り倒せたところを上手投に仕止められた口惜しさに、勝気な女だけに腹が立っている。今咲き開いた花のように美しくとも萩路はたかが小間物問屋の娘、自分は禄高は少なくとも武士の娘という誇りが胸を痛くさせた。

——盲人風情と私を、いやらしい殿様、しかし、萩路に投げられたのは残念でならぬ、いっその腹立たしさをこのめくらの上に……

彼女も美貌で、若く見えるがもう二十七、切れ長の目がどこか冷たい性格を想わせる。

「ひ、彦六めにございます」

盲人が平伏した。

「うむ、そちの相手は浪路じゃ、武芸自慢の女ゆえ、男のそちもうかうかすると息を止め

られようぞ」

と穆翁が愉しげに声をかける。

「はい、はい、は、はい、ハハハ、どうつかまつりまして、手前も、これで力自慢で、まさか、お女中に取りひしがれるとも思えませぬ、へい、へい」

俗にめくら声という、かん高い声で応える彦六を浪路は不潔な動物をながめる目付でにらんだ。

「殿、私も女の非力とはいえ、やわか盲人風情におくれを取ることはございませぬ」

浪路もきっぱりといった。

「ま、まアよいわ、すぐにいずれが強いかわかることじゃ、こんどは相撲とは違う、押されても倒れても、いや抑えつけられても負けではない。息の詰まるまで争うのじゃ、よいな、さアはじめるがよい」

穆翁のことばには、優しげな大五郎を震えあがらせるような酷薄な調子があった。

一体女相撲は、ものの本によると、女同士で角技を闘わしたのは嘉永元年の春、大阪で名古屋からきた一行が興行したのが初めてという。が、それ以前から女と盲人、いわば弱者同士の相撲がかなり数多く行なわれたそうである。延享二年江戸両国での女力士と座頭

力士の興業を皮切りに明和安永から文化文政年間にかけて関東関西で盛行したという。だから遊び好きで、淫らなこと、変態的なことにも相当に興味をもっている穆翁が先ず女中たちに相撲やらせ、次に女中と盲人の取組みを思いついたのも、あながち奇抜な案ではなかった。ただそれが、盲人对女中の相撲でなく、まるで戦国時代の組討ちのような凄じいものを要求した点に穆翁の独自の趣向があった。

彦六と浪路はもう緋もうせんの上で組合って、互いに相手をねじ倒そうと力んでいる。浪路の白い体に、見る見る血の色がさしてくる。

「大五郎よ、めずらしい見せ物であろう」

穆翁は横目に大五郎を見やって、思いがけぬ猟奇的な場面に心臆している若い役者の胸のうちを窺う意地悪い微笑をたたえている。はたして大五郎は口ごもって応えもできずに伏目がちだ。

緋もうせんの上では既に二人はどちらからともなく掛けた足業で同体に倒れ、すぐにそこはめくらでも男の力、彦六が上になって、両手で浪路の頭を抑え、もうせんに、その後頭をこしこすりつける。

「う、うううッ」

浪路の唇から切なそうな声が出る。彼女は両足を思い切りあげて跳ね返そうともがく。赤い緞子のまわしと白い太腿が対照的で、牡丹が踏みにじられるようなひどく悩ましくも無ざんな有様。

「ええい、ううううむ」

彦六は一気に勝負をつけてしまおうと我武者羅に今度は浪路の咽喉を締めにかかる。青々と刺った頭が燭台のあかりに光り、浅黒い体に筋肉が盛り上がって、両足をひらいて、浪路を組敷いた姿は、源平の昔、巴御前を膝下に抑えた和田義盛の姿もかくやと思われればかり、彼ははや勝誇って得意げに

「いかがでございます、殿様、座頭でもこのくらいの力はございます、はい」と、うそぶいた。が、浪路も武芸の嗜みある女、もちろんこう一方的に勝負のつく筈もない。

「ええいッ」

気合もろとも彦六を跳ね飛ばし、再び立ち業にはいる。穆翁はいよいよ興が湧いてきたらしく目をむき、小姓も近侍もじっと固唾をのんで見守っている。ただ女形の大五郎ひとりが甚だ迷惑そうに居心地悪く端座しているのが、この場にそぐわぬよそ者の様子。

緋もうせんの上では格闘が休みなく続いている。彦六はしきりに攻勢に出て、また浪路を捻じ伏せて、女の両手を逆にして悲鳴をあげさせようと力をしぼる。彼は実に力自慢らしく容易に浪路の技に陥らぬ。

「わハハハ、殿様、もう間もなくお女中を締めあげて御らんに入れますわい、勝ったらこのお女中を自由にしていななどとはおおせられませぬナ、ハハハハ、残念なことでございます、へへへへ」と、図に乗って、傍若無人なことをいい出す。

丹波の出だという、まさか酒天童子の子孫でもあるまいが、彦六はひどい力らしく浪路はただひいひいと時々苦悶の声を洩らすばかり。そんな女の背に逆馬乗りになって彦六は力瘤のある両手で女の股を裂きにかかった。「あっあっあっ」とついに浪路の悲鳴。大五郎は目を伏せ、耳を蔽いたそう。小姓も痛ましそうに目をそむけた。

それでも流石に浪路も巧者、うまく体を反転させて彦六の責めから逃れた。そして立ちざまに腰投げて彦六をしたたかに投げた。

「や、や、や、や」

見事に投げられた彦六はむきになった。彼はしゃにむに浪路に飛びかかり押し倒そうと

しては、その都度鮮かな投げ業を食った。彼はいつかあせってきた。浪路の赤い緞子のまわしに両手をかけたが、緞子のまわしは、浪路の計略か、ゆるめに締めてあったので引いても技が利かない。

「えい」と、浪路の下手投がきまる。もうせんにたたきつけられて、彦六は思わずうめいた。彼は浪路の膝に取付いて押倒した。しめたと乗りかかって咽喉輪攻めにしようとした時、浪路の両脚ががちりと彼の胸をはさみ込んだ。胸締めである。

「ああ、やられる」近侍の一人が低く呟いた。近侍は既に何人か浪路の胸締め屈伏したためくらを知っていた。

彦六は始めの優勢から忽ち苦境に落ちていた。上になった形ではあるが、浪路の強く交又した脚の間に胸を挟まれ締めあげられて、次第にせいぜい息がせわしくなってきた。脂汗が彦六の顔に吹き出して、顔の色がだんだんなくなってくるのが目に見えてきた。

「ふふふふ、浪路の得意な手じゃナ、彦六とやらもしてやられたの」

穆翁の声には失望したようなひびきもある。彼の心に疼く願望——若い女のあられない責められようを、いつかは堪能しようとした計らいが、またつぶれたせいである。

「げえッ」と彦六の情ない声が大五郎を驚か

せた。やっと胸締めを解かれて、立上がった彦六が浪路にまた投げつけられたのだ。こうなると武芸の心得のない悲しさ、彼は立ち上ると同時に足技でおもしろいように投げられるばかり。彼の精気は胸締め合ってからすっかりすり減らされてしまったらしい。

浪路は頃はよしと倒れた彦六の胸板の上に荒っぽく馬乗りに跨って、彼の両手を膝で制し、おもむろに男の首を締めにかかった。

「う、う、う、う、う、う」

浪路の顔に冷やかな笑いが浮かんだ。彦六の脚が弱々しくばたつく。

「ううむ、浪路には勝てぬか」

穆翁が舌打ちした。

緋もうせんの上では、彦六が最初の勢いはどこへやら、大柄な美人の浪路にどっかりと組敷かれ、首を締められ絶息しかけている。彼の黒い禪がゆるんでいて見苦しい。

「ううむ、もういいわ、浪路には褒美をとらす。めくらの体を片付けよ」

穆翁が叫んだ。立ち上った浪路は長々とどびた彦六の下腹部を右足で憎らしげに蹴り、それから上段の間の穆翁に深く一礼して下がっていった。女形の大五郎はほんと熱い吐息をついた。彼の血はあやしく揺すぶられて、浪路の顔が灼きつくように心に残っていた。



腹に脂肪が豊かに沈着している女の特に性的な美しさということを考えて、時に、妊娠している女を肉体的にいちばん美しい型と感ぜざるを得なくなることもある。これは、オイレンブルグが発表しているケースも証明しているところで、これは二十四歳になる、家族の負担の多い神経衰弱症の妊娠した女がかれに特別の刺激を与えたことを認めているのである。これなどは、ヨーロッパの文化発展にも美理想がかなり月

子を孕んでいるナルシス

羽 鳥 水 江

第一章 プロローグ

第二章 ストリップ劇場

第三章 ヌード・スタジオ

第四章 エピローグ

の進んだ妊娠の標識をも含んでいた或る時代のあったことを考えれば、おそらく、それほど不思議には思われない事実である。十五世紀および十六世紀には、プロッホもいっているように、モードはすべて女たちや娘たちに妊娠の風を装わせている。それは、当時の絵から今日なお見ることのできるところである。否、妊娠した女を裸で人の眼に曝すことさえ躊躇しなかったのである。その際、性的モチーフが主になっていた

たことは、疑いないところであろう。

——ウィーン性問題研究所編

『肉体の讃美』より——

第一章 プロローグ

松本清張の推理小説に『霧の旗』というのがある。無実の罪で死刑になるかも知れない兄のために、二十歳の少女が、正義のためなら報酬を問題にしないで引き受けると聞いていた有名な弁護士をたずねて、九州からわざ

わざと上京するが、ことわられる。意外にも金がないためにことわられたと思ひこんだ少女は、兄の獄死後、弁護士に痛烈な復讐をくだてる。結局、少女は、自分の貞操までも犠牲にして、弁護士の愛人を無実の罪で牢獄に送りこみ、弁護士としての社会的生命をもすっかり失なわせることに成功する、という物語である。

正義派とはいっても、経験によって裏打ちされた中年の男のふとした現実主義が、こわいもの知らずに一途に突進する二十歳の少女の奇矯な、むしろ歪んだ正義感の前に、もうくも崩れるのである。未熟な若い少女の、思いつめた意志力と行動力の強さが、見事に描かれている。男でもそうかも知れないが、この年齢のこわさを、まざまざ見せつけられる思いがする。それにこの年ごろでは、肉親への愛情と異性への愛情とが、奇妙な形で交錯し合うのであろう。

美津子の場合でも同じことが言えるかも知れない。彼女は高校生るとき、自分の出生の秘密を知った。今まで育ててくれたのが自分の本当の両親でなく、母と思っていた人の妹が、下宿していた大学生との間に生んだ美津子を、子のない姉夫婦がひきとったものであ

ること、在学中に出陣して行った大学生は、美津子が生まれたのを知らず、本当の母も数年前に亡くなったこと、を知って彼女はひそかに思いつめるところがあった。高校を卒業して両親にも告げずに大阪に來た美津子が訪ねたのは、すでにつきとめてあった彼女の本当の父の経営する商事会社であった。いきなり紹介状ももたずにやって來た美津子が、採用されたのも、昨今の求人難のおかげと言える。近くに下宿をさがしてもらって通うことになった。

はじめて見る父が、尊敬できる人物だったのに、美津子はまず安心したが、最近妻を亡くし、中学生と小学生の三人の子どもがあった。美津子の弟と妹にあたるわけである。子どもが大きくなるまで、しばらく再婚しないつもりだった。まだ四十前で独身を通せるものではないが、母親がまだ元気で、身のまわりの世話をしていた。性欲の方は、目だたないような形で、適当に処理しているのかも知れない。そういうことは美津子には分からなかった。

「キミはボクの初恋の人にそっくりだよ」と言われたときは、ドンとした。美津子が積極的に父に近づこうとしたのは、このときからである。

きからである。

近親相姦というものは、案外多いと言われる。教養のない下層の人たちの間で、適当な配偶の相手が得られないままに、父娘や兄妹がずるずると関係をもってしまうこともあるらしい。よく畜生のすることだと言うが、こんな場合は、人間としての自覚がなく、まったく野獣のようになってしまふのだらう。逆に、血のつながりを重んずる、他人の血をまじえたくないという排他的な気持から近親結婚が行なわれることがある。田舎に多くある従兄妹結婚、王室などに多い同族結婚がそれである。古代では、日本だけでなく、多くは異母であるにしても、兄と妹との結婚は普通だった。この場合はナルチズムから近親結婚が生ずるのである。

美津子にとって、おどろくべきことという外はないが、気持の上で近親相姦のタブーはまったく存在しなかったと言ってよい。養母は美津子の伯母であったが、養父は美津子と血のつながりはなく、本当の父を求める気持がそのまま異性を求める気持になってしまったのかも知れない。男の方が知っていたら当然避けたであろうが、美津子は相手が父親だということを知らずに、よけいに彼

が好きになってしまったのである。自分の暗い出生をはじめて知ったときのショックが、彼女に世間的な倫理感をもつことを拒否させてしまったのだろうか。それとも美津子の胸の中のナルシスが、あまりにも大きな位置を占めていたためであろうか。

とにかく、二十歳になる前、彼女はもう会社をやめて、少し離れた小ぎれいなアパートに住んでいた。夫と呼ぶべきか、父と呼ぶべきかは知らないが、男と事実上の夫婦になっていた。子どもたちが大きくなるまで日陰の身でいてほしいという男の希望は、本当の身元を知られては困る美津子にとってかえって都合だった。その代り、彼は、美津子のために相当額の銀行預金と、美津子を受取人とする生命保険をかけてくれた。彼は美津子を溺愛し、将来はかならず夫婦になることを約束した。美津子は、この父でもあり夫でもある男に、ひそかに復讐心を抱いていたのかも知れなかった。そうでなければ、彼女がこの生活にまったく満足していたことを説明できないであろう。

間もなく、彼女が満二十歳になるころ、彼女は体に変調を覚えた。妊娠したのかも知れない。医者に行って診てもらおうと、間違いない

く妊娠三カ月だった。ところが彼女は、夫にむかってこう言ってしまったのである。

「あれはまちがいだったわ。何でもないんですって。人によっては、ときどきこういうこともあるそうよ」

どういうつもりで嘘を言ってしまったのかは、おそらく美津子にも分からなかっただろう。とにかく言っただけはいけないことのような気がしたのだ。といって、美津子にはおろすつもりははじめからなかった。どうせそのうち分かってしまう、そのときはどうしようかというあてがあるわけでもなかった。

ところが、美津子の妊娠は、夫に永久に知られずにしまうことになったのである。突然の交通事故で、彼は死んでしまったからである。美津子が妊娠四カ月に入っただけのころ、十二月もおしつまった年末のことであった。日ごとにふくれて来る腹をどうやって隠そうかと思ひやうに、偶然そうなってしまったのである。もう隠す必要はなくなった、と思っても、やはり無性に悲しかった。葬式も済み、保険金を受けとると、彼女は早速アパートをかわった。夫の家族にも行く先を告げずに、そして、彼の子を宿していることをだれにも知られずに。

ここから新しい美津子の生活が始まる。

.....

さしあたり、これからどう身のふり方をきめるかが問題だった。彼女は、おそろしい罪の子を孕んで、産むつもりだったが、育てるつもりはなかった。そこで新聞広告で見たある宗教団体の「事情があつて子どもを手離される方、子どものほしい方、ご相談にのります」というのを、ためしに探して話しに行つたところ、うまい具合に願つてもない貰い手があらわれて、それにきまつたのだ。産まれたらすぐ引きとってもらふことに約束がきまつたので、ホッとした。間に立った宗教団体では、双方を直接に紹介することはおろか、名前も知らさない方針だったのも、美津子にとって都合だった。子どもを産んでしまつたら、もう一度やり直そう、わたしはまだ若いんだから、と美津子は思った。しばらくは相当のお金もあるし、子どもを貰いたいという夫婦の方からも費用が出る。この夫婦は、のちに美津子がふた子を孕んでいると分かつたときも、二人ならなおいいとよろこんでくれたほど善良な人たちだった。

さて、そう心がきまってみると、子どもが産まれるまでの間は、一種の宙ぶらりんな、

ブランクの期間だった。ただ時間の経つのを待っている感じ。その心の空白が彼女にアヴァンチュールを思いつかせたのである。どの女でも多少そうであるように、彼女はナルシストであった。というより、相当強烈な露出欲をもっている、と言ってよかった。色白で小柄で愛くるしい顔だちをした彼女は、事実にだれにでも好かれたし、彼女自身そのことをよく知っていた。まだ処女のころ、父でも恋人でもある彼が、処女を失なう前の彼女のヌードを天然色写真で撮っておきたいと、照れながら申し出たときにも、彼女はむしろよろこんで、その思いつきに賛成し、誇らしげにさえ自分の一糸まとわぬ裸体をカメラの前に晒したのだった。それからときどき、ときには自分からすすんで、自分のヌードをとらせただが、ただ妊娠してからは、寒くなっただという理由でしばらくことわっていた。しかし、こっそりと、セルフ・タイマーをつかって、自分の腹のふくれて行く様子を、記録に残していた。そのことは夫が死んでからもつづいていたが、彼がいつも写真を処理するのを見ていたから、残っている道具を、そのままつかって、現像したり引き伸ばしたりしたのである。

妊娠ヌードなどというもののあることを、美津子はある種の雑誌などで見て、いくらかは知っていたけれども、そのときはまさか自分が、とは思わなかった。「妊娠モデルを募集します」などという字も目についたが、さてとなると、ためらわれる気もした。それに実際に妊娠ヌードとか、ときには臨月腹ヌードなどというものも分譲されているらしく、誌面にその感想などがのせられていたが、姿の見えない相手どうしが文章で話し合うことのもどかしさが、熱っぽいことばの裏に感じられるようなものだった。もっと直接の方法で、不特定多数の男たちの前へ、自分の妊娠ヌードを曝け出して見たいという大胆な考えが、彼女の頭の中にきざしはじめた。直接反応を見たいという、大胆不敵な考えが彼女をとりこにしたのである。

いつの間にか、妊娠五カ月もすぎて、彼女は岩田帯を巻くようになっていた。妊娠六カ月のひと月で彼女のお腹はグングン大きくなった。三月の後半にはもう七カ月目に入ると。まだ少し寒かったが、彼女はアヴァンチュールを実行してみようと思った。正確にいうと出産予定日は七月七日のたなばたなので、三月十八日から第七カ月になる。しかし、ふつ

うのお腹よりよほど大きいと言われた彼女も双胎、つまりふた子かも知れないと思っていたが、実際レントゲン撮影によって双胎であることが確定した。

第二章 ストリップ劇場

三月中旬のある日、彼女はふらりと町に出た。独り切りの生活だから行動はきままである。彼女は国電の駅で立ち売りの新聞のなかから、二三種をえらんで買おうと、演劇の広告に目を通した。ストリップの広告が狭いスペースに大げさな文句を並べてのっている。意味の通らないのがほとんどだ。そのうち、なるべく場末の小さい小屋らしいのをさがす。広告をのせないのもあるから、そんなのはポスターや電話帳をつかってしらべる。二つ三つ見当をつけてから、一軒一軒、恥ずかしい思いをして、極彩色の看板の下をくぐった。座長とか支配人とかに面会を求めろのだ。「なに、ヌード・ダンサーになりたい人があるって？ まあ話を聞きましょう」

美津子は、思ったほど、この種の興行物の関係者の中には崩れた感じの人が多くないように思った。いわば日陰の生活を慎重に守って行かなければならない人たちの、当然の知

恵なのかも知れない。あるいは、美津子の方で、恐ろしそうなところは敬遠したせいもあるろう。場末といっても、かえって大都会の中に、ちよっと盛り場から外れたところに、いかにも場末らしい感じのところがあった。ヌード・ダンサーはどこでも払底らしく、一応話は聞いてくれた。しかし美津子が、実は自分がその候補だと名乗ると、とたんに一笑に付されてしまうのがおちだった。

「あんたは一体本気で言ってるんかね。今にも産まれそうなお腹をして、妊娠してるんだろ。何カ月か知らないが、うちはそんなのは知らないよ。じょうだんじゃない」

と追い出されて、塩をまかれたところもあった。また、べつのところでは、経営者の細君らしい中年の女が

「何だって。あんた、ちよっとおいでよ」

とわざわざ亭主を呼んで、

「この人ったら、もうすぐ妊娠七カ月でございます、ヌードに使ってもらえませんかだって、あきれるじゃないの。ごらんよ、こんなに大きなお腹しちゃってさ。うちは特出ばかりですからね。そんなタヌキみたいなのは一人だって出しちゃいませんよ」

と嘲笑するのだった。最後に行ったところ

でも、はじめは同じだった。

「あんた、そのからだで出たんじゃあ、まるでタヌキじゃないの。タヌキの化けたような体をした踊り子を、だれがお金を払ってまで見にくるものか。わたしゃこんな人、はじめでだよ、ハハハ……」

タヌキだって、どうして女の方が男より口がわるいのか、美津子はずくづく同性がいやになるくらいだった。でも、支配人がだまっ腕組みしているのを見て、勇を鼓して言うてみた。

「わたし、お金はいりません。タダでいいんです。好きで出るんですから。ためしに出してみて下さい。いけなければ、いつでもやめますわ。おねがいです」

美津子の意外なことばに、亭主の顔が動くよりも先に、細君の方が顔色をやわらげた。

現金なものである。

「へえ、あんたもかわってるわね。タダでもいいからハダカを見せたいって言うの？」

「そうですわ」

「……………」

「わたし、露出狂かも知れませんか」

「踊った経験はあるの？」

用心深そうに聞く。あきらかに乗り気にな

って来ているのだった。

「いいえ、こういうところでは、はじめてですわ。でも日本舞踊なら……」

どこでも踊り子は足りないの、時間をたっぷりに苦労している。他に踊り子もいることだし、一人ぐらいおかしなのがいても、そのために客が減ることもあるまい。見るのもいやだというほどの極端な客も少なからう。ある劇場では、以前男のストリッパー(?)を出していたことさえある。それも、案外一部の客には受けていたようだ。美津子の作戦は図にあたった。

「そんな体だから踊りも、あまり出来ないけれど、じゃあ、二十一日から来てもらおうかしら？うちは五日で演し物がかわるのよ。いいでしょ、あんた」

女は亭主にとりなし顔をして言った。

そう決まると、まずからだを見て、打ちあわせをしようということになり、美津子は楽屋に通された。他の踊り子たちがげんそうな顔をして見る。全部で六七人、中にはいい体格もあるが、かなり年をとっているものもある。女が不揃いで、一見少女風の發育不全みたいなものや、真っ黒になって垂れさがった乳房の、おそらく四十歳近いようなのまでい

る。美津子には異様な雰囲気だった。

支配人が簡単に美津子を皆に紹介した。ハダカの女ばかりの中だから、美津子もあまり抵抗を感じないで、身につけていたもの一切を手早く脱いで見せた。

「なるほど、これじゃあ、まるっきりタヌキだよ」

と男が、ニヤニヤ笑いながら、さっきの細君の口まねをするように言った。それでも、美津子の妊娠して大きくふくらんで突き出た腹を、さかんに感心して眺めている。

名前も「原ハラミ」とつけてもらって、その日はライトのそばから見学し、いろいろ要領を教わった。といっても、この体では早いテンポの動きのあるものは無理なので、時間つぶしのコントの間じゅう向うを向いて座っている役、男たちのやりとりがおわった後、動作の少ない踊り、といってもあちこち歩いたり、手を上げ下げする程度だが、二三曲踊ってから脱ぐのである。十五分ぐらいのソロである。一日に四回あるので、最後のフィナーレはかんべんしてもらって、しかも最初の一回も出なくて、二時ごろから八時ごろまでである。幕あけにすぐつづいてコントがはじまる。

「さすがに踊りは本物だな、あんな」

と言われたが、手さばきだけでごまかすのである。脱ぐときに美津子は、タヌキのようだと言われた大きな腹を、なるべく観客によく見せるようにした。上背こそないが、美津子は美人だし、肌の色も白くて、何よりも若い体なので、グロテスクに膨んでいるにもかかわらず、観客の声援は意外にあった。三日目ぐらいからは、美津子のポテレン腹が目当てで来るらしい客もあって、大仰に熱狂してみせた。全部脱ぎおわって、前をかくしながら、ふくれた腹を完全に見せて、正面からライトを浴びて立つと、場内の異様な雰囲気が高まって、美津子自身まで上気してしまう。何しろ双胎で、当然羊水過多症も併発しているの、妊娠七カ月とはいっても、ふつうの妊婦の臨月くらい大きいのである。かぶりつきから声をかけて、

「ようよう、ネエちゃん、何カ月だい」

と、聞く客もある。もちろん中には、

「ケツ、妊み女か。スゲエ腹してやがら」

と、てんで興味を示さない客もいるが、

「ハラミちゃん、待ってましたあ」

威勢よく景気をつけてくれる客もある。

美津子がエプロン・ステージへ出て、観客

に近くから腹を見せてやると、まるで氣をのまれたように、感心して見ている。孕んだ女のハダカなんて、そういつでも拝めるものではないから、すっかり好奇心をむき出しにして見ているのだ。はじめのうちは客とのやりとりは顔の赤らむ思いだった美津子も、途中からは、客の手をとって自分の大きな腹にさわらせながら、

「ほら、赤ちゃんが動いているでしょ。でもあんまり乱暴にさわらないでね」

くらいは言えるようになった。さわらせてほしいと手を出してくる客には、いちいちそばに行つて、しゃがんでさわらせてやる。

しかし、毎日二時から八時までの六時間はかなり長かった。その間からだをしばらくしてしまうので、三月一杯で彼女はやめた。

ストリップ劇場に出て見て、美津子は、ひいきの踊り子に贈り物をとどける客があることをはじめて知った。そんな客には、特別に十分によく見せてやるのである。妊娠して大きくなった腹を見たいという客が、思ったより多くいることを美津子は面白く思った。なかには楽屋で会いたいとか、どこか外で一対一で会って欲しくないかという客もあったけれども、美津子はそれらをすべて固くことわっ

た。舞台の上だけで見てほしいということをも、美津子はいくまで固執した。しかしそのことが、やがて美津子をヌード・スタジオに出てみようかという気にさせるのであるが。

第三章 ヌード・スタジオ

四月になった。美津子はいずれ又ストリップ劇場に出演したいとは思っていたが、やはりしばらくは時間が長すぎるのでなかなか決心がつかなかった。そこで思いついたのは、これも新聞に広告が出ているヌード・スタジオのモデルを志願することであった。これだと、時間は比較的任意でよく、無理をして踊ったりする必要もないからである。例によってあちこちたずねまわってことわられるのも気が重いので、前にファン・レターをくれた客の一人に、劇場を通じて連絡してもらい、あるスタジオに夕方六時から八時まで居らせてくれるように、交渉してもらった。そういうところには顔の利く人らしく、あまりいい顔はされなかったらしいが、何とか頼みこんで引き受けてもらった。この方は、他のモデルに混じって、事務室で雑談しながら待っていたらよいのだった。客が勝手にモデルをえらぶ。お腹の大きい女が座っていれば、興味の

ない人は彼女をモデルではないと思うだろうし、妊婦に関心をもっている客なら、かならず美津子がモデルかどうか聞くにちがいない。こんな簡単なことにどうして気づかなかったのか、と自分で思ったくらい、簡単なことであった。

出張撮影を希望して来る客も多いので、十人とはいらないモデルのうち半数以上が居ないことも多い。出張撮影というのは、自由恋愛というのだろうか、売春ではないかとの当局の目がうるさいので、マスターと呼ばれていた男は、はじめ美津子を警戒するようなそぶりを見せたけれども、だんだん慣れてくるにしたがって、美津子もその雰囲気になじんて来た。外でのことはよく分からないけれど、あがって実際に写真をとって行く客もあることはあるし、スタジオにはちゃんと設備も一応ついているのだから、一見看板にいつわりはないのである。もちろん美津子が出張撮影はしない。ただそのスタジオが、堂々たる繁華街のちよつと入りくんだところにある目立たないビルの三階にあるために、毎日階段をエッチラオッチラのぼらなければならぬのが欠点だった。妊娠して大きくなったお腹をかかえて一段一段のぼりおろすことが、もう八カ月になった美津子には、ちよつとつら

かったのである。

他のモデルたちは美津子を、よほど物好きな素人の奥さんかと思っているらしかった。マスターにだけは簡単にうちあけて話しておいたが、女たちには言っていなかった。美津子は、女たちの中には女子学生がアルバイトとしてやっているものもあり、しかも彼女たちのうちに平気で出張撮影に行くものがあることに、かえっておどろかされた。もちろん、出張は絶対にしないものもいた。考えてみると、スタジオに来て写して行く客の数からして、収入はしれたものであるし、それに、三階にあがったところのスタジオの扉をあけると、二坪ばかりの細長い事務室があって、そこに電話があり、モデルが何人かソファにすわっている。一つしかないスタジオは照明など一応はあるが、広さは四坪か五坪ぐらい。そのスタジオが六時から八時のゴールデン・アワーでさえウィーク・デーには空いていることが多いのである。しかも電話はかなりひんぱんにかかって来る。モデルの中には、なじみの客から電話で呼び出しがかかると、いつも出て行くのがあった。オコズカイをもらったわ、なんて言っているものもいたが、どこまでが本当に写真をとっているのか知れたものではない。しかし、それは美津子には関係

のないことだった。

二日目の日に、美津子をこのスタジオに紹介してくれたという男が、あがって写真をとって行った。劇場でドーラン化粧をしているのちがって、ここではずっとハダカを見られていたという感じがする。素顔だし、ライトも、写真をとるのだからあたりまえだが、はるかに明かるいのである。それに一對一の雰囲気は何か危険な要素を孕んでいるような気がした。

「お腹が前より大きくなったような気がするな。それにこうして見ると、ずっとすばらしいよ」

と男が言ったが、美津子はすでに妊娠八カ月に入っていたのだ。

四日目の七時ごろのことだった。カメラも持たないでいきなり入って来た中年のサラリーマン風の男が、美津子を見て、その大きくふくれた腹に目をとめると、オヤッというような表情をした。

「キミもモデルなの？」

彼は信じられないような顔をしている。

「ええ、そうですわ」

「キミ、……妊娠してるんじゃない？」

「八カ月ですわ。こんなんでもおよろしかっ

たら、どうぞ！」

隠そうとしているが、男はあきらかに興奮して、見る見る喜びを全面にあらわした。

「お撮りになる？　こんなからだでも？」

彼が夢中でうなづくのを見て、美津子立ち上がった。マスターが旧式の二眼レフにフィルムを詰めるのを横目で見ながら、彼女は先にスタジオに入ると、全裸になって男を待った。まばゆいばかりのライトの中で。

「ウーン、見事だっ！……」

と、遅れて入って来た男は、はち切れそうに張りつめた美津子の妊娠している腹を見て絶句した。カメラをのぞくことも忘れて、

「さがしていたんだ。妊娠……した……お腹の大きい……モデルをね」

とひどく感激して、喘ぎ喘ぎ言う。美津子にはおかしいくらいだった。一對一であることが、これほど興奮させるのだろうか、と美津子は思った。反面何かしらこわいような気もした。ちよっと悔むような、しりごみしたような気持……

「あまりからだにおさわりにならないでね。それから、あまり露骨なポーズは禁止されていますのよ」

美津子は、どのモデルでも言うことを、事

務的にならないようにやんわりと言ったが、

あきらかにこの結果に満足していた。汗ばむばかりのライトに照らされて、自分の妊娠した裸体を男の前に曝すことにも。彼女は本当に自分が露出狂かも知れないと思った。

「実はわたし、ふた子を孕んでいますのよ。だから妊娠八カ月といってもずいぶん大きいでしょう？　ふた子だと羊水がどうしても多くなるので、子宮がうんとまん丸くなるんです。でも、まだまだこれからが大きくなるんだそうです。産まれる間際まで撮りにいらっしゃってね」

こうしてぼつぼつ客がつくようになると、美津子はスタジオの混んでいる時間を避けて三時から五時まで、それも毎日ではなく、月水金の三日間、スタジオに待機するようにした。二人切りになると、外に誘い出そうとする客もあったが、どんなにしつこくせがまれても、美津子はていねいに、しかしきっぱりとことわった。そのためあって、マスターも美津子にいい顔をするようになった。スタジオの中で変なことをしようとしたり、特別なことを美津子に要求する客もあったが、彼女が応じないので、カーテン一枚で仕切られた向うに人がいることでもあり、さすがに

あまりなことできないのである。

三時に出るのであれば、二時ごろから出てゆっくり昼食をたべてお腹をふくらましてからスタジオに行き、夕方くらくなるころまでに帰れるので都合だった。美津子は、自分がスタジオに入っているときには、お茶をひいて事務室で待っているモデルの中から、気やすい客にはたのんどきとき一緒に呼んでもらうようにした。あるときは、美津子を入れて五人のモデルを全部ハダカにして、お腹の大きい美津子をまん中に一列にならべて写真をとったこともある。そのとき居あわせたモデルを全部買い切ったのである。モデルたちはいつも、美津子の大きな腹に感嘆した。

美津子が妊娠して腹が大きくなった体でヌード・スタジオに出ていることは、好事家の口から口へと伝えられていとみえて、

「おたくには妊娠したモデルがいるんだってね。今いるかい？」

などと問い合わせてくる客も、ちょいちょいあるようになった。美津子はここでも「ハラミ」と名乗っていたから、

「ハラミちゃんいるかい？ これからすぐ行って待たずに写せるかしら？」

などと電話をかけてくる常連もふえた。

五月六日から十日まで、六月一日から五日まで、七月一日から五日までの五日間ずつ三回、それぞれ、妊娠八カ月と九カ月と臨月の終りごろ、ストリップ劇場に出演した日をのぞいて、美津子は規則正しくヌード・スタジオにかよった。臨月ともなれば、双胎のことでもあり、腹はほとんど完全な球状にまるとふくらんで、おどろくべき大きさになってしまっていた。「腹ポテモデル」を写しに来る、というより見に来る男たちは、ただ驚嘆するばかりだった。美津子の方は、そんな自分のからだを、真昼のように明かるくて、しかもかげのない光線の中に、全裸であまるところなく曝け出しているときに、それを見つめる男たちの目の中に、ふとサディスティックなものを感ずることがあった。

客のなかには、巻尺をもって来て、せせと美津子の腹囲をはかる熱心なものもあった。

いわゆる「妊婦責め」というのがやりたいと言って、縛り、浣腸、切腹擬態などの写真を要求したり、伊藤晴雨ばりに、安達力原の鬼婆よろしく、はらみの逆さ吊るしの実演を希望する男もあった。美津子は六月中旬、臨月に入って間もないころ、四人の常客に同時に来てもらって、一度だけ縛りの写真をとらせ

たことがあった。きつく縛らないように頼んだが、それでも結構いつもより熱中した空気になった。双胎で臨月のからだでは、体を曲げたアクロバティックなポーズは、とても無理だったけれども。

出産予定日はぐんぐん近づいて来た。残されたわずかな時間を惜しむように、男たちは入れかわり立ちかわり写真を撮りに来た。美津子の全身にいくらかむくみがあらわれて、腹や乳房のまわりに無数の妊娠線があり、乳頭と腹部正中線が濃い褐色になっている。身重で臨月の美津子のからだは、孕んでいる女獣のようだった。立ったり、座ったり、仰むけに寝たり、四つん這いになったり、あらゆるポーズを美津子は写真にとらせた。臨月で双胎の美津子の妊娠ヌードをカラー・フィルムで撮影して行く客もあった。

「うまくとれたら、わたしにも一枚ちょうだいね。アルバムをつくりたいの」

とたのんで、何人かの客からもらったいろいろな写真が、もうすでに百枚以上にもなっていた。いずれも、かなり大判に引き伸ばしたものばかりで、優に数冊のすばらしいアルバムができるはずだった。美津子が重い腹を突き出して動きまわるところを、八ミリカメラ

「本日より五日間、ふた子を孕んだ臨月腹ヌード、原ハラミが、妊娠中の中からだを押して特別出演いたします。皆さまのご要望にこたえた最後の出演、めったに見られない臨月の妊婦のヌードの姿を、どうぞごゆっくりご覧下さい」

とアナウンスすると、はげしい拍手が一部におこった。美津子はもうあまり踊らず、妊娠したハダカの姿をゆっくりと時間をかけて観客に見せるために出るのだった。

これより前、六月の中ごろに、美津子が縛りの写真をとらせたとき、四人の客たちが、美津子の腹の中の胎児の性別を予想して賭けをしたことがある。そのさい、

「しかし、この賭けの結果が分かるのは二三週間先になるな」

といったことから、じょうだんとも本気ともつかない調子で、

「ハラミちゃんさえよかったら、これから、ハラミちゃんの腹を裂いて、胎児を腹からとり出してみたらどうだろう。何ならボクの懇意な医者があるから公開の帝王切開手術をしてもらうんさ。ハラミちゃんには気の毒だけど、局所麻酔だけで、安全な手術じゃないかと思うがな。ハラミちゃん、どうだろう？」

という話まで出た。他の三人も乗り気で、「なるほど、腹を裂かれる妊婦というのも、ちょっとした残酷物語だな。おもしろいじゃないか。ハラミちゃん、やってくれなよ」

と言われたが、美津子は答えた。

「そうね。わたしだって、意識のあるままでこの大きなお腹をザックリ裂かれるときはどうだろうかなんて、考えるだけでもゾクゾクするわ。カエルみたいに解剖台のつて、生胎解剖されるわけね。でもね、わたしまだ若いでしょ。だからお腹に傷あとがつくの、イヤだわ。それにわるいけど、わたしお金にこまってもないし。やっぱり普通に産むわ」

「そうかい、残念だな。じゃあきらめよう。腹の中の胎児は女性の内臓の一部だ、という説があるけれど、それによればボクたちは、ハラミちゃんの腑分けを見そこなったということになるわけだな」

と一人が、わけのわからない結論のつけ方をした。自然分娩でもいいから公開してほしいと言う人もあったが、ちゃんとした病院でそんなことするわけにも行くまいし、まして分娩場面を写真にとらすこともしまいから、「わるいけど、かんべんして」

と、美津子はごとわってしまった。

双胎児はふつうは、予定日より早く産まれるものだそうだが、美津子の場合は初産のためもあったか、なかなか産まれなかった。七月五日までのストリップ劇場への出場をしまいまでつとめて、六日は休養し、七日にはヌード・スタジオに出た。そこで撮影中に産気づいて、その日のうちに、無事にふた子を産み落したのである。文字通り、出産寸前の写真をとった男がいるわけである。めずらしいことだが、ちょうど予定日通り、七月七日に産まれたのであった。

スタジオから、客やモデルたちに助けおろされてタクシーに乗り、病院の門前でわかれた美津子は、急いで病室に移され、ホッとした気持とともに、過去何カ月かのアヴァンチュールに終止符が打たれたことをはっきり感じた。この三四カ月の生活はハダカでライトの前に立つ生活だった。目ぐるましく変わるライト、ライト、歓声。あるいはジーンと焼けつくようなかげのないライトの中で喰い入るようにハダカを見つめるカメラの眼、人の眼。ぶっくりと膨んだ腹を曝しものにして来たこの三四カ月の生活。そんな生活ともこれでおさらばだ。美津子の胸に一種の深い感慨が生じていた。

産まれた子は、男児と女兒のふた子であった。今でも田舎などには迷信があって、男と女のふた子が産まれるのは前世の因縁によるものだから、将来は夫婦にしなければならぬなどという。俗に畜生腹とも言って、いやしめるのである。美津子の子どものもらい手はそういうこともなく、子どもたちは約束通りもらわれて行ったが、こういうふた子が産まれたことにも、美津子はその出生にまつわる不倫な関係のかけを感じるような気がした。

自分の出生の秘密に反抗することによって、わたしはもっと大きな不幸をつくり出してしまったのかも知れない、と美津子は思った。しかしまた美津子は、自分の身中にある一切のどろどろしたものを、胎児とともに、すっかり体の外に出してしまったような気もしていた。高校時代に暗い出生の秘密を知って以来つきまとっていた心の濁りを、きれいさっぱり洗い落としてしまったのかも知れない。さいわい、子どもたちの出生の秘密は、

本当のことはだれも知らない。自分はこれまでのことはなかったものとして、新しい人生をやり直そう、美津子はそう考えて、忌まわしい考えを無理にはらいのけた。そのころ、ヌード・スタジオで美津子の常客だった例の四人は、ある料亭の一室で酒をくみかわしていた。

「男と女だったとは意外だな。それにしてもハラミちゃんの腹を裂いて見なかったことはかえすがえすも残念だな」

と一人が言う、もう一人がガクのあるところを例によって示した。

「むかしには、日本でも外国でも、天文のほかに、動物の内臓をしらべて吉凶をうらなうことがあった。HARUSPEXというんだが、腸卜僧と訳す。HARUは内臓、SPEXは観るとか検べるという意味だ。英語ではハラスペックスと読むから日本語の腹と音が通じる。まあ観胎術者とでもいうんかな」

「とにかくハラミちゃんはNYMPHだったよ。これも日本語の妊婦と通じないかね」

「まあいづれにしても、ニンフでニンプだったハラミちゃんのために乾杯！」

男たちはコップを上げた。

新発足 懸賞／告白、手記、体験／原稿募集

☆賞金☆

優作	一篇につき	参万円
秀作	一篇につき	五千元
佳作	一篇につき	二千元

☆規定☆

一、本誌の内容刷新、充実を期して、ここに新しく、「告白、手記、体験」の原稿を広く懸賞募集いたします。

一、従来、「告白」の分野で文献味豊かな告白特集を度々刊行して、輝やかしい金字塔をうち樹てた本誌が、あらゆる傾向の告白をもって誌面を飾る考えであります。

一、真実味溢れる告白、万人の共感を得る

手記、数奇な体験、どうしても誌上に発表したいという熱意のこもった原稿を求めます。どうか奮って御応募下さい。

一、文章の巧みさとか、表現や描写のうまさとは求めませんから、実際に体験されたもの、事実の裏付のあるものが大切だと思います。従って必ず自作の未発表のものに限ります。

一、枚数に制限はありませんが、一回の掲載分としては、三十枚乃至五十枚が適当です。用紙はなるべく原稿用紙をご使用下さい。締切日は毎月十日。翌月号に発表。

一、入選作には掲載誌発売と同時に、賞金をお送りいたします。応募原稿は読者原稿と区別するため「懸賞」とお書き下さい。

ここで美津子の話は終わるわけである。彼女はもう大阪にはいない。彼女はいま、新しいつとめ先に毎日元気やかよっている。美しく誰にでも好かれる彼女のことだから、そのうちにいい結婚の相手でもあらわれて、結婚するかも知れない。彼女の秘密のアルバムは、そのときは焼きすてられるだろう。

作者のあとがき

多分同じ号に掲載されると思いますが、前作「バー『ぼて』の妊婦たち」とこの作品とで、わたしは、妊婦バーとか、妊婦ストリップだとか、妊婦ヌード・スタジオだとかいった、やや奇想天外だとも思われるようなものを書いてみました。もちろんバーだとかストリップ劇場だとかヌード・スタジオなんて男の人だけが入り出すようなところへ、女であるわたしが行って見たわけではありません。なので、もっぱら活字による知識と、自分の空想で書いたものです。ずいぶん見当ちがいな点があることだろうと思います。でも、空想は空想として、読んでいただければ、と思います。もちろん、こんなのが実際にあったらおもしろいだろうと思いますけれど。

ところで今日、こうして蛇足みたいなことを書く気になったのは、次の記事を紹介したいと思ったからです。出所は朝日新聞、五月十九日の夕刊で、囲み記事、「お茶の間新事典」第六十三回です。全文を引用します。で、よけいな説明はいらないと思います。ただ、二年ほど前、辻村隆さんの『奇譚三十九夜』の中の一つに、この題材があつかわれていたことがありました。

「腹は借物

『こどもがほしい。だけど、十カ月も大きなおなかをかかえ、お産で苦しむのはいや。だから代りに産んでくれないかしら……』
こんなチャッカリ夫人の夢を地でゆくような話。

千葉市・農林省畜産試験場——若草のもえる場内の片すみで、ホルスタイン種の子牛が一頭、元気ではねかえっている。生後九カ月、体重は三百キロ近い。力もちで、おとな一人では手に負えないほどだ。

『見た目には、わかりませんがね。日本で初めて、他人のハラを借りて、生れた変りものなんです』と、家畜第一部繁殖第四研究室長の大槻清彦さんはいう。

実は、この子牛の「生みの母」と「本当の

母」とが違うのである。生みの親は、受精したばかりの他の牛の卵を、自分の腹に引きとって、胎児としてはぐぐみ産み落したのだ。

良い牛をつくるための人工授精も、いまだはもう当り前のこと。優秀な精子は、飛行機で世界各国に運ばれるご時勢だ。しかし、優秀な精子を、優秀なメス牛に注射してやっても、メス牛が産むのは、一生にせいぜい七、八頭。

『これでは、もったいない。もっとたくさんつくる方法はないものか』——人間は、ずいぶん身勝手なものだ。

『人工授精したあと、受精卵をとり出して、別のメス牛に産ませたら……』というので、世界の畜産学者が血道をあげた。

メス牛に性腺刺激ホルモンを注射すると、卵巣は大きくふくれあがる。そこへ排卵促進ホルモンを注射してやると、一度に二、三十個も卵が出てくる。それに人工授精すれば、二、三十個の受精卵は、うまいことに子宮の中を一カ月もさまよっているから、その間にとり出せばいい。もちろん、とり出すといっても、一筋ナワではゆかない。なにぶん受精卵は〇・一ミリほどの小さな存在だから。やむなく外国では、腹を開いてしまった。これ

では、せっかく優秀なメス牛も、一回で犠牲になってしまう。

そこで『殺さない方法を』と、考えたのが大槻研究室の杉江信博士だ。子宮を生理食塩水で、ジャアジャア洗い流し、その水を顕微鏡で入念にさがす。二、三十個全部は無理だが、四―五個はかたい。

次の難関は移植だ。杉江さんはこれに対して、新型注射器を考案した。炭酸ガスで子宮をプツとふくらませるといふ妙案。そのすき間に受精卵を一個、うやうやしく注入するの

である。

こうして、本当の母牛の体内で六日間、移植された母牛で二百六十八日間を過ごした第一号は、去年の八月六日に見事、誕生した。

『血液型で調べてみると、子牛は腹を借りた母牛とは何の関係もない。元のオス、メスの子であることが、はっきり証明できます』と

杉江さん自信はたっぷりだ。

牛で成功したことだ。チャッカリ夫人の夢は、かなえられるだろうか。

『実は、イタリアの学者が、やろうとしたん

ですね。ところが、ローマ王のきついおしかりで、その研究は、サタやみになったらしい。やれば、できるでしょうが……』

杉江さんは、最後に声をひそめてこう答えた。

以上です。もしこういうことが人間でもできるようになったとき、道德の問題がどうなるかは別として、このユーモラスな筆致に見られるように、科学が可能にすることをいろいろ想像してみるのには、まことにたのしいことではありませんか。

〔最新版〕 女体責写真五十粒選

A組五十集 大手札判印画紙(9×13) 焼付

一組一枚	一五〇円
五組五枚	五〇〇円
十組十枚	九〇〇円
二十組二十枚	七〇〇円
三十組三十枚	五〇〇円
四十組四十枚	三〇〇円
五十組五十枚	四〇〇円

A1	フミツケ汚辱縛り	(新井)
A2	手吊り乳房責め	(五月)
A3	ハリツケ猿ぐつわ	(新井)
A4	全裸正面柱しばり	(遠藤)

A5	亀甲強烈乳房縛り	(遠藤)
A6	全裸手吊りムチ打	(遠藤)
A7	豊満乳房いじめ	(遠藤)
A8	乳房責め股間縛り	(遠藤)
A9	鼻責鼻梁いたぶり	(遠藤)
A10	全裸後手高小手	(遠藤)
A11	膨隆臀部さらし	(長野)
A12	全裸正面強烈縛り	(長野)
A13	うねる緊縛裸身	(長野)
A14	色禪の開股しばり	(長野)
A15	正面縛蛙股ひらき	(長野)
A16	裸自慢縛りヌード	(長野)

A17	正面アグラしばり	(長野)
A18	正面大の字開股縛	(長野)
A19	遅ましき裸しばり	(長野)
A20	荒縄縛豆絞り猿轡	(大塚)
A21	両手前縛り髪首絞	(大塚)
A22	両手吊り股間吊り	(桜井)
A23	両手膝下しばり	(関谷)
A24	疼れんする裸身像	(関谷)
A25	両股縄掛け開股縛	(大塚)
A26	正面裸身強烈本縄	(梨花)
A27	乳房晒し肉体自慢	(長野)
A28	責衣にはみ出る肌	(東浦)
A29	投げ出した全裸縛	(長野)
A30	捕われの全裸緊縛	(梨花)
A31	羞らいの両股縛り	(大塚)
A32	猿轡乳房いたぶり	(遠藤)
A33	荒縄全身縛り豆絞	(大塚)

A34	盛り上げる乳房縄目	(長野)
A35	亀甲本縄鼻いじめ	(大塚)
A36	ムチ打悶えポーズ	(関谷)
A37	椅子またぎ汚辱責	(東浦)
A38	縦縄股間縛り正面	(関谷)
A39	ゴム猿ぐつわ全身	(大塚)
A40	くさり乳房責め	(長野)
A41	強制片足挙げ責め	(大塚)
A42	正面乳房くびり縛	(関谷)
A43	鴨居正面ハリツケ	(梨花)
A44	手吊りパンティ落	(絹川)
A45	白バンド後手吊り	(東浦)
A46	豆絞り高小手呻	(絹川)
A47	裸縛り鼻いじめ	(梨花)
A48	ガンジガラメ立縛	(愛川)
A49	亀甲本縄股間縛り	(絹川)
A50	立木縛竹棒責め	(桜井)

懸賞／手記、告白、体験／入選作品

ある夏の間奏曲

木 原 栄 二

一、おてんばに見そめられること

もう三年も前のことになる。肺浸潤の影もほとんど消えた私は、医者勧めに従って、一夏を三浦半島の長浜——で過したことがある。長浜——には父の別荘があり、毎年夏ともなると家族のもの（といっても両親と私だけだが）の誰かが一週間、あるいは十日と、そこで寝起したものだ。病気が直ったことでもあり、そうでなくとも、まだ二十前の私は喜び勇んで長浜——にやって来た。年老いた看護婦が付き添ってはいたが、なにぶんにも

一年近く寝たっきりの生活をしてきた私にとって、新鮮な空気と美しい景色、そして何よりもうるさい両親や医者の許を離れて暮すことはたまらない魅力であった。看護婦は私とは気心が知れ合っており、そううるさく私の日課に嘴をつっこむことはなかった。

長浜——の別荘は洋風のこじんまりとした家で、相模湾を望む高台の上にあった。見下すと、長く続いた岩浜のあちこちに海水着姿の男女が点々と見えた。毎日三十分の海水浴が認められていて、岩浜に降りて行くのが私の楽しい日課の一つであった。それ以外のと

きはたいてい、本を読んだり、看護婦と将棋を指したりして一日を過した。看護婦は長浜の町までよく買物に出かけた。長浜——から買物籠を下げて帰ると、私は彼女を散歩に誘うのが常であった。しかし彼女は「ああ、栄二さん、私、疲れてしまいましたよ、勘弁して下さいな」などと言って、結局私は一人であたりの松並木の間をぬって歩き、あの将棋、あそこで桂馬を打っておけば勝ったのにな、などと、あらぬことを考えるのであった。読みもしない詩集を持って人気（ひとけ）のない草むらに寝ころがることもあつ

た。

病氣上りとはいえ、血の気の多い年頃のことでもあり、そうした何の変哲もない生活にやがて飽きが来るのも当然のことであった。しかし、そのあたりには若い私の心を満たすようなものはなく、長浜——の町へ行っても喫茶店一軒あるでもなかった。八月の初めになると私は無聊をかこつようになり、老看護婦を困らせた。夕食毎にビールが出たがコップに一、二盃飲むと、それ以上は許されなかった。一度、久しぶりに酔ってみたかったが、彼女は首を縦に振らなかった。そうしたある日、昼寝の時間に寝られないままに罪のない看護婦に向って御託をならべていると、急に彼女は編物をしている手を止め、私を見上げると大発見をしたかのように言った。

「お隣りさんを訪問したらどうです？ 栄二さん……」

お隣りさん？ 私はいぶかしげに彼女を見返したものだ、そう、この高台には十軒近く別荘がある筈だ、と気が附いた。みんな東京の人達で、中には毎年長浜——へやって来る父とは顔見知りの人も少くない筈であった。私が訪ねて行っても、避暑をする者同志のよしみということもあろう、別に不自然な

ことでもない。

密生した灌木の茂みの間をゆくと急に視界が拡がり、一軒の別荘が居を構えている。住む人もないと思える程ひっそり閑としてはいても、住人はちゃんというのだ。私は一軒一軒訪ねていった。中には私の期待にたがわず歓迎してくれるところもあって、「ああ、あの方の息子さんですか」という訳で、私の体を仲々離してくれず、「今度は私の方でもあなたの処へうかがいますよ」などと言ってくれたりした。しかし、うさんくさそうに私を迎える家もあって、そういう家からは早々に退散した。一番私をもてなし親身になって談話に打ち興じてくれたのは、高台のはずれにある別荘で、附近に居を構えて暑さを避けている、これが最後の家だった。四十がらみの婦人と、その娘の二人住まいであった。二人はやはり私と同じように暇を持て余していたようで、それだけに私の訪問を喜ぶ気持が彼女たちの言葉の端々にうかがえた。

母親の方は年よりは若く見える美人で後で娘の口から彼女の年を聞いて驚いたものだ。いかにも中年の婦人らしい豊満な肉づきとクリム色のあざやかな肌の色が私の印象に残った。あけすけな私の質問から分ったことだ

が、つれあいには数年前死に別れたらしく、

それ以後は、夫の遺産でバーを経営しており、ある筋の事業にも投資がかなりあるということだった。娘の方は母親とは違った型のきりっとした顔立ちの美人だった。私はこの私より二つか三つ年上の娘の方に興味をもった。いかにも健康な感じがその小麦色の肌に表われていた。娘は私の病氣に同情の言葉をもらした。大きな眼がきらきら輝いて、こちらを見つめているのが、私には何か太陽のようになまぶしいものと思われたものだ。そうした感じは眼だけではなく、体中にあふれていて、夏の軽装からはみ出るように、カモシカのようなすらりとした。しかし丸々と太った四肢が私の眼に焼きついて離れなかった。

何よりも私が彼女達に魅力を感じ、心ののきを感じたのは他でもない、彼女達、特に娘が大柄なことであった。いつの頃からか私は自分より大きく重く、強い女性にあこがれを感じるようになっていた。心理学者ならそうした私の傾向に対して一定の解釈を与えようと、私から私の経歴を聞き出そうとするだろう。しかし私はその要求に応えるには、一つの経験しか提出することができない（少くとも三年前までは）。

私は高校一年の時、登山部で春休みを利用して山の谷間でキャンプを張ったことがある。その時のことであるが……米がもっとあった方がいいというので、私と上級生の女の子が近くの寺まで分けてもらいに行った。その子はやはり私より大柄で力も強そうだった。どんな理由だか今はもうはっきりと覚えていないが、ともかくひよんなことから言い争いが始まり掴み合いの喧嘩になった。山道の脇の草むらで上になり下になり争ったが、彼女は私をがっしりと押えつけてしまった。一たんそうなると、私がいくらもがいても彼女はびくともせず、馬乗りに跨がったまま私の顔めがけて殴りつけてきた。私はその強い殴打に気が遠くなりながら、私の胸の上の重圧を感じていた……。ともあれ男女の間のひめごとと言われるものでも、強くも美しい女性がか弱い男を支配し、膝下にとり押えて思うままにとり扱うということ程、私を興奮させるものはなかった。女が男を打ち倒し、その上に君臨する、その仕方、方法は何であつてもいい、と私は思っていた。

はなかったが、それでも私と同じ位一六三糎五四位だと私は推し測った。私達は日がたつにつれて家族のように仲がよくなっていた。ひなびた老看護婦の小言もそこそこに聞き流し、毎日彼女達の処へ足を運んだ。トランプゲームをやったり、一緒に母親の料理に舌づつみを打っている間にお互いあけっぴろげに言葉を交し、思ったことをずけずけと言う間柄になっていた。私はもう無聊をなげくどころではなかった。私は恋人（私は一寸でも好感のもてる女性なら誰でも恋人と呼ぶのが大好きだ）とその母親を見出したのだ。彼女の名前は宏子といい、母親は木原利恵子といった。

あれは八月も半ば過ぎた頃だったろうか、私は宏子さんに思いがけない、喜ばしい（？）性質を発見したのだ。——さん附けで呼ぶことにしよう。なぜって強者にはやはり敬意を表してしかるべきだから。——私は例によって昼食を終えると、これが欠かせない日課とでもいうように宏子さんの処へと急いだ。彼女は海水着姿で私を迎えた。

「どう栄二さん、ちょっと泳いでこない？」
「うん、じゃ、先に行つてよ。ぼく、も一度帰って着替えて行くから」

「そう？　じゃ早く行つてらっしゃいよ。私先に行つて待つてゐるわよ」

彼女がこう言うのと奥の部屋から母親が、
「宏子さん！　あまり栄二さんを海水浴に誘うんじゃありませんよ、御病気が直ったばかりなんだから……」

と宏子さんを諫める言葉が聞こえた。

「大丈夫よ、私がちゃんと付いてるんだからね、栄二君」

と語尾を上げていたずらっぽい眼つきで宏子さんは私を見やった。その口調と眼つきには何か私をあざ笑うところがあつたので、私は冷水を浴びせられたように、ぞくぞくとしたものを感じたものだ。私はとって返すと急いで海水パンツに着替え、「お昼寝の時間ですよ、ねえ栄二さん……」という例の言葉を後に聞き、高台を降って行った。石ころの多い浜辺で宏子さんは私を待っていた。さんさんとふりそそぐ八月の陽光の中で立っている彼女の姿は、私をひきつけるに充分だった。
「さ、行きましょう、栄二君」と、急に栄二君と君呼ばわりするのをいぶかしがる私の手首をとり、引っぱるように彼女は私を水の中へ連れて行った。二人は沖へ沖へと泳いで行った。しかしやがて私は息切れを感じ、無理

をしては駄目だと思ったので、浮身をしながら仰向けになり、ぶかぶかと浮かんでいた。

遠くで「栄二くん」と叫ぶ宏子さんの声を聞きながら。宏子さんって何てすばらしい人なんだろう。あんな女の人に愛される男性は幸福だろうな、美人で健康で荒っぽい処があるが教養だってある。水しぶきと陽光を浴びながら水面に浮び、私はそんなことを考えていた。漁船だろうか、遠くでポンポン……と焼玉エンジンの音が潮風に乘って糸を引くように聞こえてきた。あたりは正式の海水浴場でないためか、泳いでいる者としてなく、ただあふれるばかりの白日和真青なすき透るような海があるばかりであった。

私は少しばかり泳いで足をはたつかせながら仰向けになり、宏子さんのことを思った。腕を組んだときのポーズはいいな、あんなのを本当のグラマーってんだろうな、それにあの肌のすばらしい健康色、あのよく成長した手足……宏子さんが女郎グモになって、このぼくが彼女の巣に引っかかったハエになって……。

突然、太い腕に私の胸は抱きかかえられ、ぐいっと水中深く引っばりこまれた。宏子さんだ、と私が気づく間もあらばこそ、首と胸

をうしろから強く抱きかかえられてしまい、私は手足をばたばたさせてどうにかして水面に出ようと努力した。急に引っばり込まれた時、私は水を飲んでしまったのであろう、頭がふらつとして何が何だか分らず私はただあがくばかりであった。ただ私をかかえて水中をあたり狭しと動いているのが宏子さんである、ということだけ分っていた。時間が実に長く感じられた。だんだんと苦しくなってきた、私はそんないたずらをする宏子さんを腹立たしく思った。やがて宏子さんの腕がゆるみ、二人の体の動きが止まり、私達は体を寄せ合ったまま、すうっと水面にまで浮んでいった。私は大きく、大きく息をした。日光がカーッと私の顔を照りつけた。それから気管支に入った水が私を苦しめ、長く強く私は咳をした。苦しみはやっと納まった。しかし宏子さんは……彼女は私の苦しむ様を見て大きく明るく笑った。

「はっはっは、おもしろいわ、栄二くんの顔ったら、はっはは、鏡で見せてあげたい位よ、はは……」

私は、そんな宏子さんをうらめしく思ったが、同時に奇妙な喜悦の感情がふつふつと沸いてきた。それで私は宏子さんのすぐ傍まで

泳いで行き、体をびったりと、くっつけて彼女の耳にささやいた。

「ずいぶんのいたずらだな。」

「ふふふ……」

彼女は食い入るように、私をのぞき込んで忍び笑いをもらした。

私はもう一度苦しまねばならなかった。体を斜めにし、首だけを水面から出した彼女はぐっと私をひきつけ、私がはっとして逃れようとするときにはもう、私の体に乗しかかるように、右腕を私の両の腋の下に差し込み、水中深くもぐっていた。左手で水を掻き掻き水中を進んでいるらしかった。今度は私の体を捕えているのは、右腕だけなので私も比較的自由に体を動かすことができた。しかし彼女の方が一枚も二枚も上手だった。やっと彼女の束縛を逃れて浮び上ろうとすると足首をつかまれ引き戻された。呼吸できない苦しみにさいなまれつつ、私の方からも彼女に攻撃を加えた。

彼女の両の太股に胸をきつく挟まれながらも、私は彼女の首をしめつけようとした。しかし私が差し出した手は結局受けとめられてしまった。息をしてはいけない。そう思いながらも私は呼吸できない苦しさに耐えきれず

多量の水を飲み、私の体の動きは急速に弱まっていた。宏子さんは海女でもあるかのようによく動いた。そうして私の胸を太股で挟んだまま、私の体を胸に引き寄せて抵抗のできぬようにするのだ。その姿勢のまま私達は水の中をくるくると廻りながら動いていた。ああもうだめだ、私はそう思い、抱きかえられたまま、宏子さんに手で合図をした。一瞬、彼女ははっとしたようで、急いで私の体に自由を与え、力いっぱい私を明るい水面めがけて突き上げてくれた。

私の虚弱な体は失心の一步手前まで来ていた。私は大きく息をすった。すると頭がじいんとぼやけてゆき、再び沈んでいくのを支える宏子さんの体を感じた。それから溺れたものを助ける者のしぐさで宏子さんは私の体を右手でうまく抱え、海面に突き出て入江を囲む一方の岩根に運んでいった。そうされるのを半ば意識を失いながら感じていた。

どの位、時間が過ぎたのか、私は一度眠ったようであった。気がつくとき心配そうな宏子さんの顔がのぞきこんでいた。私のぐったりした姿に見入る彼女の顔付きは真剣そのものだった。私は大きく嘆息をついた。私は波打際のごつごつした岩の上に寝かされていた。

「ああ、やれやれ……でも宏子さん、あんたはひどい人だ……本当に」

わざと責める口調で私は言った。

「すみません。でも、私、そんなつもりじゃなかったんです」

宏子さんはいかにも飛んだことをしてしまったという風であった。

「じゃあ、どんなつもりだったんです？」

「……」

「少しひどいですね、ぼくは病氣上りの身なんですよ」

私は母親の利恵子さんの言葉を思い出していた。

「だから……だから、私、本当にすみませんって言ってるのよ。でも、栄二く……栄二さん、私、こんなことをしても、これからお友達でいて下さいね」

眼をきらりと輝かせて、彼女は言った。

「これから、ずっとこんな事をされるのですか、いやだな……」

私は心にもないことを言ってしまった。それであわてて、こう附け加えた。

「ぼくは宏子さん、あなたより弱いんだからな」

「そりゃ嫌でしょうね、こんなこと……」

と宏子さんは私にたたみかけるように言った。私達の視線が合い、お互い、考えきれない程たくさんのことを頭に浮べていた。沈黙が続き、気まづくなった。何か言わねばならなかった。

「だって、殺されるのは嫌ですよ、誰だって……現にぼくはずいぶん水を飲んだのです」すると彼女は声をひそめて、私にこうささやいた。

「あなたが思ってるより、ひどかったのよ。」

「本当に、ずいぶんと水を飲んでたわ。肺の中に……」

「……」

「そうよ、私、人工呼吸したの、私、なんてお詫びしたらいいか……」

彼女は私の視線を避けて言った。

「ぼくはぼくはちっとも、気がつかなかった」

「そりゃ、そうよ」

「すると、宏子さんは……宏子さんはぼくの命の恩人だ」

「妙な言い方もあるものね。そんなことはないわ。悪いのは私」

「いや、宏子さんは、ぼくの命の恩人だ」

私はある想いをこめてそう言った。彼女は

私をじろりと見やった。

「すると、私を許してくれるのね」

「ええ、でも殺されるのは嫌ですよ」

「私だって殺すのは嫌よ、ふふふふ」

「宏子さん、あなたは素晴らしい人ですね」

私はそっと彼女の手を取った。

「今ごろ気がついたの？　ところが、私の方では、ずっと前から、あなたを素晴らしい男性だと思ってたのよ。ずっと前から、あなたを愛してたわ」

そんな風に彼女は言った。

「本当？」

「本当よ、だから、この際、言いよるのは私の方よ、栄二君」

そう言って宏子さんは、私をぐいっと胸元に引きよせた。

「私はこの通りいたずら好きで、おてんばなの、それでもすばらしいって言ってくれる」
彼女はおいおいかぶさるように、私を抱きかかえて言った。熱い吐息が私の顔を撫でた。

「おてんば……だから、好きなんです」

「ふふふ、そんなこと言って大丈夫、私のやり方、きついわよ」

「ああ……宏子さん、だ、……だから、すばらしいのです」

私は自分でも、何を言ってるのか分らぬ程熱くなり、興奮していた。

「え、い、じ、く、ん。だから、栄二はかわいいのさ」

こんなことを言って宏子さんは私の身体をたおし、その上にのしかかってきた。背中のごつごつした岩が痛かった。

二、草むらで太陽を仰ぎ見ること

そんなことがあって、生来が蒲柳の質に加えて病氣上りのためもあり、私は寝ついてしまった。断続的に微熱が続き、そうかと思うと三十九度の高熱が突発的に襲って来ては、病果の再発の不安を残して消えていった。私はいまましい気分に取り附かれ、宏子さんとの事が恨めしく思えた。しかしまた一方で、昼寝の折など、焼きつくす真夏の日々の一陣の潮風のように、私のほてった頭に宏子さんの容姿がちらついて離れなかった。

二、三日後、宏子さんと母親の利恵子さんが「お見舞いに」と果物籠をさげてやってきた。宏子さんとのことを知らない老看護婦は二人を前にして、これが又とない機会だとも思ったのか、しきりに私の不節制を嘆息まじりに語るのだった。それを聞き流しながら

宏子さんはじっと私の方を注目していた。強いものに対する恐れは感情をひそめ、私は彼女のまなざしに引きつけられた。

一週間が過ぎた。微熱と高熱は忘れ去ったようになくなり、私の体は以前の状態に返った。私の体が平熱にもどったところ、東京から父の依頼で、私のかかりつけの医者がやってきて一晩泊っていった。私は、この長浜へ来た当初の頃より更に嚴重な日課を課せられた。翌日帰るとき、医者は私の顔を覗き込んで言った。

「ま、あまり出歩かないことです。日光が何よりいけませんからね。必要なことはすべて看護の方に言ってありますから、あなたもよくならうとお思いなら自制して下さいよ、自制をね。はっはっは、でもおおむね経過は順調です。食って寝て、無理をしなれば、どうってこともありませんや……。」

さて、宏子さんはいえ、母親と共に私を見舞ってくれて以来顔を合わせていなかった。会わないとなると、私の心の宏子さんを慕う感情が、次第に確かな歩調で高まってきた。何故もう一度来てくれないのか、そう思うといったたまれなくなり、宏子さんへの憧れの念が強まった。

そのころ、よく夢をみた。あのごつごつした岩浜で、ことが忘れられず、「もう一度」と願う私の脳裡には、二つの像が定着して離れなかった。うなされ、目覚めると一つの像すなわち小麦色の豊満な物体が他の像すなわち私を散々に弄んだ。その圧迫感が尾を引くように残っていた。真夜中、私は暗闇の一点を凝視しながら、今みたばかりの夢を想い出そうとした。しかし具体的にどのようになされたのか、私のほてった頭、興奮した頭は思いつくことができないのだ。一度、丸顔の宏子さんとおぼしき女性がかなり鮮明に立ち現われたことがある。しかし差し出す私の手をはらいのけ、それでもその美しい顔に笑みを浮かべてすうっと遠のいて行った。その顔は私をどこかへ誘う態(てい)のものであった。それだけのことだった。はかない夢は続々に表われては消えていった。宏子さんと私の二人しか存在しない世界で、この都塵を離れた長浜で私はいらだたしい気分になり、日は日をついで八月も下旬になっていた。私は宏子さんから一通の手紙をもらった。実はそれは、もう私の方から出向かないので宏子さんの方から私の処へ来てもらいたい、何分老看護婦の監視の眼を逃れられない、と書いて

て送った私の手紙に対する返事なのであった。事実、私はそういう状態にあり、肉体的にも浜に降りてゆき、一泳ぎするなど考えられず、宏子さんの処へ歩を運ぶにも当時の私としては不可能であった。片道二十分も歩かねばならなかったのだ……。

その手紙は、宏子さんの吐息とある種の想いを伝えるかのように、ふくよかな香りが漂い、読み終った私はもはや確実となった一つの感情の重みを感じた。手紙は今も私の日記帳の間に挟んである。紙面が赤茶けてその内容がだんだんと過去のものになろうとも、私はこれを捨てることはないだろう。これを捨てることがあるとすれば、それは……それはおそらく宏子さんに代る女性が私の前に立ち現われる時だろう。

「私の栄二君」と、この手紙は呼び掛けていた。「この間はあるなことをしてしまつて、わたし、もしやあなたが、わたしを変な女だと思ひ、現在はどうであれ、やがていつかわたしから逃げ出してしまふのではないかと、それを恐れています。あなたは栄二君、つまりマゾヒストなのね。もう前からうすうす感じていました。わたしも打ち明けて言いますが、あなたがマゾヒストであるよりも、もっ

と、わたしがサディスティンである度が強いんです。ですから、やがていつかはあなたが逃げてしまふのではないかと心配なんです。でもわたしはそんな心配ばかりに促わられているではありませんよ。わたしたちは刹那主義者にならねばなりません。夏の間に自分の唄を楽しめば、冬には凍え死んでもいいとは思いませんか。それにこの夏は主人公はちゃんと揃い、舞台だってわたしたちの出を待っているじゃありませんか。観客なんか要りませんわ。あなたとわたしと、それにこの避暑地があれば充分です。

それからもう、あなたはマゾヒストぶりを発揮すればいいのです。でも一寸言っておきますが、世のマゾヒストのようにわたしを『女王様』に持ち上げたり、御自分のことを『奴隷』だなどと卑下しないで下さい。あなたに限ってそんなことはないでしょうが、わたしの『おみ足』とやらをべろべろ嘗められるとわたし、ぞっと身震いすることでしょう。考えただけでもぞうとするわ。わたしのような型のサディスティンって、この前のようにあなたと対等の立場で斗って、わたしの体全体であなたの全身を支配したいのよ。ね、わたしあなたに命令するわ。あなたは言

わばアテネの青年騎士、わたしはそれを受けて立つアマゾンの女戦士、わたしたちはそうではなくちゃならないわ。強いはずの『女王様』が弱いはずの『奴隷』にハンディを付けてもらって斗うなんて興味半減ね。

わたし、あなたにお願いし命令しますが、あなたはわたしに君臨し支配しようとなさってもいいのです。わたしが勝つと分ってればわたしは喜びを感じません。あのときのようにあなたが抵抗すれば、わたしの加虐欲は倍加されるのです。勝手な注文でしょうか。どうかそうおっしゃらないで下さい。アマゾンの兵士にとらえられたアテネの青年はきっと押えつけられながらも必死の抵抗を試みたとでしようね。駄目だと分っていても最後まで希望を捨てないのが騎士というものです。そうそう。わたしは、凜凜しい、プライドのある騎士にあなたを仕立てています。弱くともプライドがあれば、それで男子の資格は十分です。栄二君、わたしは以前、クライストの『ペンテジレーア』という戯曲を辞引と首っぴきで読んだことがあります。恋の錯誤からアマゾンの女王ペンテジレーアは、あのアキレスを恐ろしいやり方で殺してしまうのです。わたしの考えている恋、憧れている恋は

これだなと思いました。

あなたの家でなくどこか屋外でお会いしたいのです。三本松のところがいいですね。あさっての二時ごろ、あそこに行っています。実はわたしたち、わたしと母は八月いっぱい東京に帰ることになります。わたしとしては東京であなたとお会することは、ちょっと不可能だと思っています。ある事情があるのですが、全然この夏でお終まいというわけでもないでしょう。

栄二君はもう外出してもいいのでしょうか？
午後二時ですよ。お待ちしています。

あなたのアマツオネンより

栄二君」

三本松というのは別荘のある高台を海岸線とは反対の方向に降って行くと山道が二手に別れており、その地点からほど遠からぬ所にあった。文字通り三本の松が茂みの中にひときわ高く聳えていた。人が踏み分けた道ならぬ道ももうその附近には見られず、ただ背の高い雑草と力強い闊葉樹の枝々が奔放に生い繁っていた。赤松のすぐ側に、枝葉に日光を遮ぎられて猫の額ほどの窪みがあった。

宏子さんはまだ来ていなかった。窪みの斜

面に身を横えるとひんやりとした冷気が地面から伝わってきた。微風にゆらぐ葉の間から時おり陽光が私の顔に直射した。聞えるものといつては蟬の声ばかりで人畜の気配は絶えてなかった。宏子さんは仲々姿を表わさなかった。しかし私が三十分も早くここに来ていることを心に刻みこんでおくだけの余裕も、そのときの私にはなかった。白昼の静寂の中で私は奇妙な言いようもない不安を感じた。一寸でも身動きすると沈黙が破れ、すべてが壊われてしまいそうな静けさだった。私は目を閉じ全身を耳にして宏子さんの足音を聞こうとした。しかし聞こえるものといっては木の葉のざわめきと、いつまでも終わらない蟬の鳴き声ばかりだった。私にとってあたりの空気が予感に満ちたもので、身を横えていると今にも宏子さんの体がのしかかってくるようにも思えた。しかしその予感は一方向では不安を伴っていて、二人の間で一体、何が起るんだらうという一種の恐怖感が私につきまとって離れなかった。

もう三十分も経ったと思われる頃になっても、宏子さんは現われず、私はあらぬ妄想を逞しゅうするばかりだった。起き上ろうとして頭をのけぞったとき、どきっとした。すぐ



後の木の枝に宏子さんが腰を下し、私を見下していた。

「宏子さん！」

思わず私は叫んだが、彼女はまるで能面のように表情を変えず、じっと腰を下したまま動こうともしないのだ。その顔は不気味で、それまで見た宏子さんのどの顔よりも美しかった。ブラウスとショート・パンツがはち切れそうな宏子さんの容姿だった。

「宏子さん！ ずっとそこに居たんですか」

宏子さんはそれには答えず、すると木を降りて来て、最後の枝にぶら下って、

「手紙、読んだ？」

と低く透きとおる声でたずねた。

「ええ、でも……」

ずっとここに居たのか、と聞こうとする私の体に宏子さんは飛び降りてきた。彼女の重い体が思いつき私を平伏させた。彼女の臀部にまともな体当りを食った私の胸がひきつるような苦痛を感じた。仰向けに倒れた私の胸に馬乗りに跨がって彼女は私に微笑みかけた。私も緊張がほぐれて笑

った。

「いい？ わたしはこれからペンテジレアーになるのよ。栄二くん、あなたはわたしを捕えようとするアテネの騎士」

「でも、そんなの、何だか芝居みたいで照れくさいや」

「何言ってるのよ、わたしに、こんなに簡単に組み敷かれて、それでも男なの？」

この言葉が不思議と私の彼女に対する敵愾心を起させた。私はいささか語気を強めて言い返した。

「でも、宏子さんが、いきなりとびかかってきたんじゃないか」

「ふふ……ハンディがついてるってのね。じやあいいわ」

宏子さんは私を組み敷くのを止めて、すっと立ち上った。私も立って宏子さんと相対した。

私は明らかに興奮し、戦意欲にもえていた。マゾヒストと呼ばれる者がそうした場合にのぞんで、何故、逆に相手の女性を支配しようとするのか、分っていただけの読者も多いことだろう。私は真のマゾヒストというのはそんなものなんだろうと思っている。というのも、全力をふりしぼった戦いに敗れる、

ということの中にこそ、より深い被虐の感情が生れるものなのだから。

いったい、最初から無抵抗の状態におかれた大の男が、いかにもわざとらしく、しかも貧弱な体躯の女性に組み伏され鞭打たれるということに果して喜ばしい感情が生れるものなのか。私にはそうは思えないのだ。だから私は婚礼の夜のあのグンター王とブルンヒルトの間の出来事などに、いいようもない憧れを感じる。グンターは何といってもブルグント国の王者である。しかし何故にグンターは烈婦ブルンヒルトに捕えられ、しばらくあげられて、壁に吊されたのか。正真正銘の男と女の斗いがあったのであり、女が勝ったからなのだ。私が宏子さんと相対したときにも、進んで負けようなどと思わなかったのだとはっきり言える。もし私がその争いで彼女に勝ったとしたら、そのときには、私は彼女から離れてしまったことだろう。私のようなタイプのマゾヒストにとって、何よりも貧弱な、男勝りのしない女性というのは興味がないのだ。どうやら私は話をそらしてしまったようだ。

面と向って私たちが身がまえたとき（大げ

さな表現はご容赦願いたい）私たちは互いに相手の顔をじっと見つめて、沈黙の時間が長く感じられた。人けのない草むらを吹いてくる微風が宏子さんの短い髪の毛をなで、私はいえ、ふっと漂う彼女の芳香を身に受けながら、今か今かと待ちうけていた。

最初に飛びかかっていったのは私の方だった。右手で彼女の喉を攻め、左手を彼女の体にあてがってぐいぐい押していった。私は必死だったし、彼女も私の意外な攻撃に驚いたのだろうか、一言も口にせず、どうにかして私の攻撃をはずそうと試みていた。あの海中での出来事のように簡単にはいかなかった。喉輪攻めがかなり苦しかったとみえ、それをはずすこともできないうちに、宏子さんは足をもつれさせて、どうと仰向けに倒れた。倒れるとき、ちらっと私たちの視線が合ったが、そのときの宏子さんの顔の真剣さは今も忘れることができないほど美しかった。しかし私は一たんそこで攻撃の手をゆるめて、宏子さんが立ち上るのを待った。彼女に組みついていて寝わざにもちこんでは、体格の相違がそのまま、私の不利になると思ったからだ。

しかし彼女はすぐには起き上らなかった。

立って見がまえる私を見上げて、こんなことを言った。

「すばらしいわ、栄二くん！」

そのときの私はこんな言葉を予期しなかった。ので、ちょっとばかりとまどった。いきなり宏子さんは私の足めがけてタックルしてきたのだ。あきらかに私は不意をつかれた。二人はもつれあつたまま地肌のみえる地面をころがって、両手両足をからませながら争った。私の喘ぐ呼吸と彼女の激しい息づかいが交錯して、長い争いが続いた。しかし、そうして互いに相手の上になろうと争っていると結局、主導権が彼女に行くことを知っていたので私は渾身の力をふりしぼって彼女から逃れた。

そうして再び立ったまま、レスリングのような恰好で二人は組み合った。しかし今度は彼女の方で私の手のうちを知ってしまったので、私が押そうとしても、両足をぐいっと踏んばって一步も退かなかった。私は足を掛けて彼女を倒そうとしたが、あの六〇匹もある彼女の体はそんなことではびくともしないのだ。上背だって私の方が低いのだ。もう私には手が残されていなかった。お互い、両手を相手の両の肩に掛け、機を伺がっていた。宏

子さんの方は、そうしたまま私の実力を推し測っているらしかった。しかも彼女の特意技なるものは、私には全然分らないのだ。

どうにか再度右手を彼女の首にあてがうことができた。これ以外にない、そう思って全体力をかけて彼女を押した。そのとき、思いもかけず、彼女の体はすうっと私を引っ張り込み、次の瞬間には、私の体はきれいな巴技げを食って一回転し、どうと地面にたたきつけられた。体中にじーんと激しい痛みが通った。その苦しみといったらなかつた。私が四つん這いになったところを、背後から宏子さんが飛びかかってきた。その重圧に私の体はふがいなくも地面にべったりと押しつけられてしまった。もう完全に宏子さんのペースだった。たった一回の巴投げが宏子さんの有利を保証してしまったのだ。

「さあ、苦しかったら、はね返してごらんなさい。」

言いながら彼女は私の背にどっかと跨がり右手で私の首筋をとり押え、左手で私の左手首をとってぎゅうと捻じ上げるのだ。その苦しさに耐えかねて、彼女に許しを請うにも、顔は地面に埋まるまでに押えられ口を開くこともできないのだ。何しろあの強大な体に乗

っかられては、私としてもどうすることもできなかつた。ところが、そのまま攻められても私はグロッキーになっていたのに、彼女は、今度はがばっと身を倒して、あの固肥りした腕を背後から私の首に巻きつけ、右手で私の右手首をとり、横体になって両の太股で私の胸を締め付け初めたのだ。

私はこの完全な攻めの状態から逃れるため、自由な左手をのび上げて彼女の髪をつかみ、両足をばたつかせて必死に暴れまわった。そのため、私達の体は、そうやって背後から彼女から組みつかれたまま、上になり下になり、草むらを所狭しと転がっていった。私達がそうやって松の根っここの処まで転がってはいじめて、やっと彼女の左の腕から私の首が解き放たれたが、今度は、もう一度、俯伏せの私の首筋にどっかと跨がってきた。彼女の全体重が私の首にかかり、その苦しみといったらなかつた。

「さあどうなの、私の強さを少しは思い知った？」

しかし私はそれどころではなかつた。実を言うと、そのとき私は、こんなにも私を気ままだにいじめる宏子さんを憎らしく思ったのだ。そう、私は腹立たしい気分におそわれて

いたのだ。しかし、そんな私の気持ちに関わりなく、彼女は次の攻めを用意していた。

彼女はいきなりすくと立ち上ると、その足で俯伏せになっている私をぐっと仰向けにさせた。白い運動靴とソックス、ブラウスにショートパンツの宏子さんの体が、どうしても抜き難い厚い壁のようにも思われ、その体軀に私はあの底のない憧れといま芽生えた、敵愾心を伴った憎しみを感じた。そう、あきらかに彼女は私の『敵』であった。

「もうのびちまったの？ そんなことじゃ、アマゾンの女王の相手の資格がないわよ」と微笑みさえ交えながら、宏子さんは言うのだ。

「そんなこと、最初から宏子さんは知ってたんだろう」

私はいささか毒気のある口調で応えた。

「ふっふっふ、最初から知ってたって？ そんなこと問題じゃないわよ。栄二くん、あなたが、そんなに弱いのなら、私、あなたを鍛えてあげてよ」

「鍛える？」

「そうよ、アマゾンの女王は強い青年を望むのよ」

彼女は倒れた私の胸ぐらを掴んでぐいと引

き寄せたので、私の体は軽々と立たされた。そして、もうどうにでもなれと思っっている私の顔をのぞきこんで、こんなことを言うのだ。

「いい？ 私がこんなことするのは、あなたが初めてじゃないの。でも今はあなただけ。だから、私がどうやって男性を支配するか教えてあげるわ。そうすればあなたも私の手の内が分って抵抗のしがいがあるってものね。全部教えてあげるわ。でもそれは今日じゃないの、あさって、あさって私の家来てちょうだい。私がこんな女でも、ほんとうにあなたが私の所へ来てくれるか、よくお考えになつて——」

彼女は私の体をぐいっと押しながら足をかけて、そのまま私をゆっくりと押し倒し胸板に馬のりに跨がり両膝で私の両腕を組み敷いてしまった。

「あなたが私から離れて行った方がいいとも思うわ。でも、やはり来てほしいの」

私は何か不思議な魔力にとりつかれたかのように、どうすることも出来ず、ただわずかばかり体をくねらしたり、組み敷かれた両腕に力を入れて抵抗の意をあらわすばかりであった。

「私って、何んて変な女なのかしら。こうしていつまでもいたいよ。そうやってあなたが苦しそうな顔をしてると、あなたを締め殺したいとさえ思うわ」

「ぼくは苦しい。でも、ぼくだって、ぼくだって、いつまでもこうされたい……」

腰に手をあてがい、私を見下す宏子さんを私は、太陽のように仰ぎ見た。

それから、長い気の遠くなるような時間がやってきた。胸板に跨がっていた重圧は少しずつ前へにじり出て、すっぽりに私の首を挟みつける恰好になり、やがて純白のショートパンツは私の顔面を覆った。それは、胸乗りよりも、首乗りよりも苦しかった。私の鼻と口はあの盤石のような、やわらかい臀部に圧迫されて、息づくこともできず、ましてや声を発して、許しを乞うなど不可能であった。言いようもない芳香が私の鼻を刺激した。そして、私の顔面に乗った彼女の全体重は何と甘美な重さだったことだろう。それは長い時間だった。彼女は私の顔に腰かけるようにして両足を前へだらりと投げ出していたので、私の両腕は自由だった。しかし私はもう抵抗できなかったのだ。抵抗するだけの気力も体力ももうなかった。私と宏子さんはそう

したまま動かなかった。蟬の声が残り少ない夏を鳴き続けるばかりで、あたりはもの音一つしない静寂につつまれていた。

三、何とも起らないエピローグ

その夜、私は寝つかれなかった。昼間の草むらでの興奮の余韻が消えず、体中がほてり、熱病のような状態で、次の日一日をベッドですごした。うだるような日長一日、私は宏子さんのことばかりを思いつづけていた。父が別荘にやってきたのは、その次の日、すなわち私が宏子さんの処へ行くことになっていたその日だった。

「お前はすぐここをひきはらって帰るんだ。

お母さんが大分悪いんだよ」

父は私の体の調子を聞いたあとでこう言った。前々から病気がちだった母が寝こんでしまったのだ。

「そんなに悪いんですか？」

「うん、やはり例の心臓が……」

父の命令とあれば、私としても、もう一日ここに居たいとも言えなかった。それに私は母をととても愛していた。白いほっそりした手と、うるんだ大きな眼の母を、私は今でも夢に見ることがある。

老看護婦と父は荷造りを始めた。その間、私はベッドで横になって、宏子さんと母のこ

とを交互に思い浮かべていた。荷物を簡単にボストン・バッグにたたみ込んだ父はせき立てるように私をうながした。それでも、あまり急なことでもあり、まだ未

練がましく長浜での生活を棄てきれない私は父を散歩にさそい、東京に帰るのは夕方でもいいだろうと頼んでみた。しかし父はそんな私の願をふり切って、母の容体が悪いことを暗にはのめかすのであった。

父がやってきた一時間の後には、もう私達は別荘をあとにしなければならなかった。私

はうしろ髪を引かれる思いだった。松並木の小徑をぬって長浜の町へ下っていく途中で、私はちらっと宏子さんの住居を見かけた。私のこの物語は、これでお終いである。私の母はその後、二カ月ばかり病床に臥つたのち、死んだ。

あれから三年になる。

毎年私は一人で、あるいはやもめとなった父と連れだって長浜へ避暑に行く。しかしあの宏子さんの別荘は、もう今では別の人が住んでいる。あの年の夏を最後に彼女の母親は別荘を売り払ったのであろう。

宏子さんは、私のような傾向の青年を今でも探し求めているかもしれない。しかし、私の方では宏子さんのような女性を探したってあんな女性はそう居るものではない。出来れば、私は宏子さんのような女性と結婚したいと思っている。

こんな私の願いにも拘らず、今の私は全くの孤独である。なまじっか、宏子さんとの長浜での思い出があるばかりに、私の心の中は秋風が通り抜けるように佻びしい。この佻びしさをまぎらわす一つの手段として拙い手記を書いた次第である。

— 完 —

四人の美女の縛られポーズの代表的作品集

女体緊縛写真のアルバム
限定版グラビヤ印刷写真集

豊満と清楚

一般書店には一切市販しません。是非直接発行所へお申込を！

限定版頒価一部一〇〇〇円（送共） 略号「限二」

〔モデル〕 長野 良子——大塚 啓子——五月亜紀子——新井マリ子

限定版第一号として、グラビヤ写真集の「美しき縛しめ」第三集、略号（美3）を本年二月に刊行しましたところ、多数のマニヤの方々のお求めを頂き有難うございま

した。嘗て十数年前コロタイプ印刷の女体緊縛写真アルバムとして刊行いたしました「美しき縛しめ」第一集、第二集は忽ちのうちに売切れとなり、今では見ることもさえ

かなわぬ稀少な文献となっています。

皆様のご熱心な要望によりまして、ここに限定版グラビヤ写真集刊行に踏み切りました。本誌グラビヤ口絵では種々な制約のため、思いきった企画編集を遂行できませんので、直接販売の限定版写真集によってファンの方々のご期待に応えたいと思ひます。

今度、限定版第二号として、前集とは、いささか趣を変えた緊縛女体アルバムを作製いたしました。若々しい豊満な肉体を誇る長野良子、大塚啓子の二人の女性の美しさを最高度に発揮した縛られポーズの大胆

奔放のかずかずを、画面いっぱい、所狭ましと活躍させました。特に迫力を増すためとグラビヤ印刷の効果をフルに運用するためにも、写真面を大きくしました。

加うるに清楚にして純情なフェイスと初々しい肢体の持主である五月亜紀子と新井マリ子両嬢の痛々しいばかりの可憐な緊縛裸身を以て誌面を飾りました。

緊縛フォト・アルバム

限定版第二号 豊満と清楚 内容

△美しき縛しめ (第四集) △

(一)、豊満をくびる……………大塚 啓子
胸と胴をくびった縄にもだえる女体。
(二)、グラマーの縄目……………長野 良子
むくむくと肥った肌に縄目も埋もれて。
(三)、豊満裸身の陶醉……………長野 良子
うっとりとした表情は、縄にか紐にか？
(四)、鼻をいたためつける……………長野 良子
指にて鼻を弄ばれて恍惚とした表情。
(五)、荒縄の緊縛感……………大塚 啓子
とげとげとした荒縄が柔肌を痛める。
(六)、黒と白の対照……………大塚 啓子
白い晒と荒縄のケバとのコントラスト。
(七)、責めに疲れて……………大塚 啓子
責め抜かれてぐったりとなった女体。
(八)、戯れの縄プレイ……………新井マリ子
アパートの一室での緊縛プレイのこま。
(九)、襲いくる魔手……………新井マリ子
恐怖のまざなし、黒い触手が迫ってくる。

(一)、首締め縛り……………新井マリ子
のびやかな肢体が疼れんする首絞め姿態。
(二)、猿ぐつわ非情……………新井マリ子
開股しばりの上に非情の猿ぐつわが……
(三)、開股棒しばり……………新井マリ子
革の口枷が頬もくびれよと締めつける。
(四)、絶叫のワンカット……………大塚 啓子
縄目が埋もれるような凄惨な緊縛感の味。
(五)、痛さに喘ぐ……………大塚 啓子
責められて急所の痛さに思わず呻めく。
(六)、首縄と足縄……………大塚 啓子
首に掛った縄と足の縄が女体を変えろ。
(七)、縄に狂う……………大塚 啓子
悶えても拘束された麗身は逸脱しない。
(八)、足首の縄目……………大塚 啓子
反りかえった足の指が縄目に可愛い。
(九)、縄による姿態の変転……………大塚 啓子
二筋の縄がかくも美しい姿態を現すか。
(一〇)、緊縛美の誇示……………長野 良子
誇らかな成熟の匂を十分に撒きちらす。
(一一)、美しき肢足……………長野 良子
投げ出された肉づきのよい肢、足、脚。
(一二)、全裸緊縛の羞ら……………長野 良子
はにかんで見せた美しい全身のポーズ。
(一三)、両手吊りと足首……………五月亜紀子
両手両足を縛られて一本棒に晒される。
(一四)、けがされぬもの……………五月亜紀子
清純な美しさが、この全身に漂っている。
(一五)、猿ぐつわを噛ます……………大塚 啓子
晒の白布が鼻も口も一緒に掩って締める。
(一六)、荒縄への誘致……………大塚 啓子
荒縄をさばいて次第に捉らわれる蝶々。
(一七)、噛まされた猿轡……………大塚 啓子
珍しく完全に噛まされた息苦しい猿轡。
(一八)、猿ぐつわと縄……………大塚 啓子
厳しい縄目と息づまる猿ぐつわの烈しさ。

(一)、緊縛女体操縦法……………大塚 啓子
縛りに変化をつけられた女体はどこへ。
(二)、くねらす豊満女体……………大塚 啓子
瑞々しくて柔らかな女体が縄にくねった。
(三)、棒責めの序曲……………新井マリ子
両足首の両端に縛られて、さて、……
(四)、答打ちのポーズ……………新井マリ子
さあ、打って、とながし目の艶なこと。
(五)、素晴らしき美身……………長野 良子
輝くような美しい裸身もあらわに……
(六)、ポリウムを縛る……………長野 良子
縄をはねかえす素晴らしい女体の重量感。
(七)、むくれた双丘……………長野 良子
情容赦のない縄は巨大な乳房をへしゃぐ。
(八)、開股しばりの表情……………大塚 啓子
開股しばりになった女の顔のアップ。
(九)、開股しばりの全貌……………大塚 啓子
両肢を開けて縛り上げられたポーズ。
(一〇)、伸ばされた足の表情……………大塚 啓子
ぴんと一直線に伸ばして縛られた脚。
(一一)、開股ざらしの表情……………大塚 啓子
放置されて全身の痛さに耐えるシーン。
(一二)、強盗侵入の構想……………新井マリ子
押し入った強盗は女を縛って転した。
(一三)、緊縛女体の鑑賞……………新井マリ子
自宅侵入した賊の目的は美体の鑑賞？
(一四)、炊事場の嗜虐場面……………新井マリ子
台所で縛られていたぶられるシーン。
(一五)、美しきスト……………大塚 啓子
胸、臍、ウエストが縄によって捕捉。
(一六)、遅ましき臀部……………大塚 啓子
くねらせた見事な臀部を捉えたレンズ。
(一七)、全裸の背面緊縛美……………大塚 啓子
後手高小手の美しさは素晴らしい。
(一八)、ビニール・コード……………大塚 啓子
柔肌を喰いちぎるようにくびるコード。

懐古趣味

牧高志



先日、ぶらりと入った映画館に思いがけなく『日本拷問刑罰史』を上映していたので、図らずも再度観賞した訳であるが、全国を回ったと見えて封切当時に較らべるとフィルムもかなり傷んでいた。

しかし一度脳裡に焼付いた記憶は場面場面でああ、あれかと想い出されても物事二度目

のに徹頭徹尾おあずけの形だ。

まだある。折角帯まで解かせて赤い湯文字一枚にしたまではよかったが、キシシタンの女であろうと不貞の妻であろうと、そのほとんどがおろし立ての実に折目正しい腰巻をしているというのはどういう訳か。

まさか折檻に際しては、必らず下着を新らたむべしとお布れが出た訳でもあるまい。しかし案外こういう処に一般大衆と映倫への逃げ道がかくされている。早い話が吊るされた女の白いパンティ（黒いパンティだったら甚だあぶない）で、あのシーンはフリーパスしたとも思える。つまり作為された撮影上のミスと、いささかたりとも場面効果をそこなうと判断されることによって当初予定された場面のカットを上手に免かれるようにすることである。

原作者である名和弓雄氏は、某誌に撮影当時、拷問される女優？さんの真紅の腰巻が夕日に映えて非常に鮮かで、ひどく印象的だったと書いておられる。本来ならば女盗賊にしろ、火つけの女中にせよ、これらの極悪人に対しては、新品の湯文字を差入れるなどということは到底考えられないから、当然十日も二十日も汚れ放しの腰巻で処刑されるのが本



当だろう。

湯文字の新旧は別として、この映画が全巻を通してカラーだったら、さぞ見たえがあったらうと惜しまれてならない。それは扱って置き、悪口は言ってもこの種の映画に対する

懷古趣味は何も筆者ばかりではないと見え、ひそかにカバンの中に8ミリをしのばせスクリーンを仰ぎ見るような恰好で熱心に女賊の磔シーンを撮っていた人がいた。動く文献として敢行されたのだろうが、奇特な御仁である。

今は亡き浮世絵師伊藤晴雨氏はなりふりかまわぬ庶民臭い処に氏の存在価値があった。しかし日常生活はたとい下帯が異臭ぶんぶんでも氏の描く絵画には一糸乱れぬ高島田の御殿女中が端正にくくられており、いささかも湯文字は汚れておらぬかの如くであった。画の公表が先きに立つとこういうところに共通的な人間の弱さというものが、うかがわれるものである。

話はまた映画に戻るが、今仮りに『日本拷問刑罰史』の中で火あぶりのシーンを今一度回顧してみると

へ下女某のしわざと判明しました。依って某月某日、火罪を申附くるものなりという訳で例の涙橋を渡ってから火を放つまで、当の女性をめぐる数名の男役がいろいろなことを演ずる、その持ち時間が余りにも長過ぎるのは甚だ迷惑至極だ。

何処かで、のんびりと火災演習をやるのと

は違う。

火をつけろと目くばせをする。それを待っていた仲継ぎの役人が、そのまた下役におもむろに手を挙げて会図をする。そこでやっと火をつけられるのだが、その間、焦点である女の方は少しもスクリーンに映写されてこない。実に長々としかも念入りに男役のしぐさを繰り返すのだから、覽ている方でいらいらしてくる。

この場合、演出上非常識な方法かも知れないが、スクリーンには火あぶりにされる女だけを克明に映し、声だけで男役を済まして了うというようなことは出来ぬものだろうか。

ただし、『日本拷問刑罰史』の最後のシーンに演ぜられた勤王芸者の打首には、どうしても介添役として男の非人が神妙に芸者と一緒に出てこない、あの場面は引立たないし、また成立たない。画面に出てくる、あの薄汚い四人の非人が、実は非常な効果を与えているのである。

つまり、ボロボロ衣の非人の醜とうら若い芸妓の美、ひからびてコチンコチンにかたい非人の身体つきと、ふっくらとして柔かい女の肉体と言ったことが、あのような残酷場面を一方的に強調するものと思う。

処で、打首のことだが、あの場合、幕府に仇する勤王芸者？ なのだから捕まれば当然

ただでは済まされないのは判るとして、前結びの細帯を結び、多分灰色だろうと思われるゴワゴワした囚衣をまとった姿は、およそ色気のないこと夥しい。思い切り京の芸妓らしく目の覚えるような粋な長襦袢姿で処刑されるのも一興？ ではなかっただろうか。

斬首と言え、明治の初め頃に行われた高橋お伝の処刑は、著述者によって当時の模様が多少違っているが、いざ首が斬られようとする時、今回の映画の場面と同じように一声高く恋人の名を叫んだという。その乱れた膝に真紅の腰巻がチラツキ、白いふくら脛もあ

らわに狂乱の態たらくは、気の小さい男なら立ち処に卒倒したかも知れない。

ただ、いつも思うことだが、写真集「写された幕末」などに集録されてある当時の処刑場の模様や晒らし首の実写は、どう見てもチャチな感じである。それを裏書きするかのよう、筆者は縁あって徳川時代に奥方や老舗の内儀、町家の娘達が着た着物を身近かに観たことがあるが、それらは決して今日劇場の舞台などで観られるような柄と色彩の派手なものでは決してなかった。

言うなれば一般に当時の女は、身長は短く

六頭身のずんぐりしたその身体に、染料の冴えない着物を重ねた以上、見ばえはお世辞にもよいとは言えないが、その当時の相場がそのうなのだから男衆は別の立場から丹念に女の色気を探し熱狂したものに見える。

洋装ならぬ和装の拷問もその一つだし、そのきものの合せ目から肉体を瞥見する反射的なチナリズムも存外高く評価された。

江戸時代の拷問とチナリズム、処刑とチナリズム……詮じつめてみると、どうやらこう言ったところに、多分に懷古趣味のパラダイスがありそうである。

—完—

緊縛写真と悦虐絵画満載の超弩級版

臨時増刊 写真と絵画 文献 特集号

直接お申込を、定価五〇〇円（〒共）略号「文献」

◎サド、マゾ、フェチ、女斗美、女体切腹、女相撲、浣腸、とあらゆる趣向を網羅した本誌臨時増刊号の決定版。今後二度と再び集録出来ない特殊文献を掲載いたしました。売切れまですと補充がつかまへん故、今すぐ直接発行所まで御注文下さい。着金次第折返し急送いたします。

【第一グラビヤ】（十六頁）
自己愛の女神を写す……………塚本鉄三、構成
「私の乳房を見て」……………長野 良子
露出癖の充足……………長野 良子
後手縛りのワンカット……………大塚 啓子
軋ったエビ縛りの女体……………大塚 啓子
新井マリさんと共に……………由岐敏夫・構成

棒責め愉悅……………新井マリ子
ムチ打たれる肌……………新井マリ子
サテンの責衣緊縛……………東浦ひかる
顔なぶり、踏みつけ……………大塚 啓子
押しつぶし、足逆取り……………大塚 啓子
餅肌はくびれて……………東浦ひかる
柱縛り首縄……………梨花悠紀子
海老責二態……………梨花悠紀子
黒いアンネパンティ……………遠藤百合子

【巻頭口絵】（オフセット八頁）
△絵物語△白ターバンの子……………四馬孝・画
第一図章△捕獲△……………第五図章△美 容△
第二図章△飼育命令△……………第六図章△洗 腸△
第三図章△調教△……………第七図章△矯 正△
第四図章△訓練△……………第八図章△仕上げ△

〔第二オフセット〕

(八頁)

女体切腹、城主の姫君切腹……………四馬孝・画
女相撲、御前相撲……………雪崎京人提供
マゾ画、犬になった男の告白より……………
マゾ画、谷崎潤一郎「富美子の足」の幻想、
女相撲「海辺にて」グラマーの対戦……………雪崎
女体切腹「侍女の奮戦」……………四馬孝・画

〔第二グラビヤ〕

(十六頁)

五月亜紀子さんの場合……………由岐敏夫・構成
軽い拒否と羞い……………五月亜紀子
美しい諦観のポーズ……………五月亜紀子
恐怖と怨嗟のまなざし……………五月亜紀子
鼻責「鼻孔測定」……………大塚 啓子
緊縛俯瞰姿態……………大塚 啓子
憶れの優美ポーズ……………長野 良子
両手吊りの構成……………新井マリ子
ズベ公天使(トカゲグループ)……………由岐 敏夫
1、「みんな剥いじまいな」……………
2、「その顔をめちやくちやにしてやる」……………
3、「それだけは止めておきなさい」……………
4、「トカゲ団の掟をよく覚えておきな」……………
投げ出した脚線美……………絹川 文代
悶悦ポーズ二題……………絹川 文代
嚴重な本縄掛け……………梨花悠紀子

〔写真版アルバム〕

(十六頁)

裸女斗争場面……………絹川・大塚
浣腸器を握って……………大塚 啓子
縄にくびれた柔肌鑑賞……………大塚 啓子
女やくざ一本刀姿……………大塚 啓子
女ネズミ小僧次郎吉……………大塚 啓子

高手小手二ツ折り……………松本アサ子
エビ縛り二種類……………松本アサ子
血紅使用女体切腹連続フォト……………大塚 啓子
サジスチン宮井美佐子の近影……………宮井美佐子
縛り過程の構成……………大塚 啓子
鼻責めシーンの点綴……………絹川 文代

〔本文・解説〕

(三十二頁)

新人撮影行、五月亜紀子さんの場合……………由岐
絵物語「白ターバン」の女……………辻村 隆
新しいモデルを写す……………由岐 敏夫
(告白) 宮井美佐子の略歴……………宮井美佐子
(告白) モデルとしての私……………大塚 啓子
自己愛の女神、長野良子撮影記……………塚本 鉄三

〔第三グラビヤ〕

(十六頁)

台所のめしうど……………新井マリ子
飼育のヴァリエーション……………新井マリ子
椅子に呻めく……………新井マリ子
長襦袢と腰巻……………遠藤百合子
豊満への擦過……………遠藤百合子
美しき小鳩の緊縛……………長野 良子
ポリウム自慢絵模様……………長野 良子
床柱縛りに耐える表情……………大塚 啓子
煙草一服の鑑賞……………大塚 啓子
組上の鯉と料理の仕方……………五月亜紀子
二ツ折り縛り……………大塚 啓子
鼻料理と鼻掃除……………大塚 啓子
上からと横からと……………梨花悠紀子

〔第一オフセット写真〕

(十六頁)

神さまへの人身御供……………絹川 文代
腕と脚の双曲線……………梨花悠紀子
足首の縄を解く……………大塚 啓子
緊縛女体モザイク模様……………愛川 悦子

光と影の表と裏……………梨花悠紀子
縄に狙われたポーズ……………梨花悠紀子
女相撲「四ツに組む」……………A氏提供
女相撲「吊り合い」……………A氏提供
爪切りと白足袋……………浜 千代子
高手小手腰縄……………梨花悠紀子
底園の塑像……………絹川 文代

〔第四グラビヤ〕

(十六頁)

女奴隷の飼育効果……………新井マリ子
ゴム衣着用中……………梨花悠紀子
バンド着用後後手縛り……………東浦ひかる
荒縄さらしと折檻場……………梨花悠紀子
下着の散乱する中にて……………新井マリ子
用意周到なる馴致……………新井マリ子
白刃に狙われた柔肌……………大塚 啓子
浣腸器の恐怖と幻想……………梨花悠紀子
くさり、くさり、くさり……………長野 良子
団子鼻をいためる……………長野 良子

〔第二オフセット写真〕

(十六頁)

美しき乳房……………長野 良子
愛らしき羞らい……………長野 良子
仰角のいたずら……………長野 良子
顛倒した瞬間の表情……………大塚 啓子
森の中のニフ……………絹川 文代
緊迫の演技(斬られる女)……………愛川・田中
ヘッドロックと首絞め……………春日・愛川
SMの魅力プレイ……………三木・浜本
前手縛りと後手縛り……………梨花悠紀子
黒フンドシと白フンドシ……………大塚 啓子
Mフット陳列——長靴にもだゆ。鉄鎖と手枷……………
の下で。凌辱される男ドレイ。煙草とローソ……………
クで……………絹川 文代
愉悦ポーズ二景……………絹川 文代

女忍者異聞

「妙姫抄」

山口 広

「妙 姫 抄」

天正七年の秋（一五八一年）羽柴秀吉は織田信長の命をうけ、一万二千の大軍を率いて鳥取城をひしひしと取囲んだ。

領主、吉川経家は手勢三千と共に籠城し、遠く毛利の援けを求めた。しかし毛利は尼子に牽制されて兵を動かさなかった。経家は援けの得られぬまま、遂に十月二十四日の夜、腹を切って自殺し、一族郎党の助命を願って三十五才の生涯を閉じた。奥方、綾の方も夫に従って胸を刺して死んだ。翌二十五日に城兵は門を開いて秀吉に降った。秀吉は信長のように残酷ではなかったが、当時の習慣によつて、主だった一族と重臣たちは帰順の心が

なければ、容赦なく首を刎ねた。

昼まゑに城に入った秀吉の前にまず経家の子供が引出された。経家と綾の方の首級を並べた横に、縄もかけられずに元服を去年すませた長男の経元はじめ五人の子供が長い籠城にもやつれを見せずに引出された。

「経元とやら、どうじゃ、余に従わぬか。厚く取立ててつかわすぞ」

しかし、経元は氣おくれせずに秀吉をにらみ上げながら叫んだ。

「黙れ、尾張の百姓ごときに従う氣は、さらにないわ。父上の仇は、きつとはらして見せるぞ」

膝の上の固くにぎりしめた手が怒りにふるえた。

秀吉はややためらったが、平然とした声で「男は斬れ、女は京へ連れて行け」と命じた。

主だった家臣の或る者は助命され、或る者は縛首にされた。武士の恥辱と云われた縄をかけられたままの打首である。

経家の子供のうち、長男の経元と幼い男の子二人は短い生涯を終えた。十三になる菊と九才の梅だけは助命されて京へ連れられた。後に菊は秀次の妾となり、文禄四年、三条河原で処刑された。しかし五才になる末子の妙



(たえ)だけは捕えられた一族の中に見当らなかった。女に生れながら父経家の豪勇の血と、母綾の方の美貌を最も多く受けたらしく男にしたいと噂されるほどであった。同時に吉川家にその人ありと云われた柴山左衛門頼経も、捕えられた重臣の中には居なかった。

降伏の直前、夜明け前に城を囲んだ秀吉の軍列のあいだを抜け、間道ぞいに南の山に入ろうとする七八人の男女があった。経家の自害の前に命をうけて、選りすぐった部下五人と、妙姫つきの女中、米(よね)と久(ひさ)であった。左衛門の背には妙姫が美しい寝顔を

見せていた。

柴山左衛門の豪勇に悩まされながら、却って自分の配下として使いたいとすら思っていた秀吉は、左衛門の行方を尋ねた。秘かに城を逃れたらしいことを知って、草の根をわけでも探し出す様に命じた。

当時、伊賀に居た忍者の頭領、百地三太夫は歴史の表面にはどこにも顔を出してはいない。しかし彼の動きで世の中に大きく変動していた。忍者を重用したので有名なのは信玄と家康である。秀吉も忍者を手先に使う情報網を持っていた。しかし彼は自分の能力と運

に絶大な自信を持っていたので、戦いには彼等を余り用いず、敵の暗殺さえも頼むことは少なかった。もっぱら民心の去就や産業、交通や潜在戦力などを綿密に調べさせていた。

秀吉のもとにも三太夫からやとった渡四五六(わたりしごろく)という忍者がいた。四五六は決して世にいわれる忍者なみの特別の能力は持たないように見えた。けだるそうに細く開いた眼、半分ばかりとあけた口からのぞく並びの悪い黄色い歯、まるくちんまりと上向きに坐った小さい鼻から見える愚鈍と云ってよい小柄に体に似ず、地獄の目と耳を持っていた。その観察力と記憶力は三

太夫の配下でも並ぶ者がなかった。秀吉が兵を起す前には必ず四五六が敵国を商人(あきんど)として、或は芸人や行脚の僧に、時には乞食にまで身をやつして驚くべき正確な情報をもたらした。

秀吉の命をうけた四五六は、しばらく考えたのち、奥女中たちを集めた。眠そうな目つきで一わたり眺めた後、一人の女中を呼び出した。綾の方に最も可

愛がられていた小笹(おささ)という十九になる娘であり、柴山左衛門の姪であった。

小笹が連れ込まれたのは、天守閣の地下にある塩蔵であった。塩のかますも数俵が残るだけで、それだけでも落城の近かった事がわかった。他の者を遠ざけたのち、四五六は三つの燭台の明りの中で、小笹を冷いしつきの床に坐らせ、自分は塩かますの一つに腰を下した。小柄で風采の上らない四五六と、伸々と暮ち、天性の美しさをにじみ出している小笹は奇妙な対照であった。

「女、綾の方のおつきであったの。名は何と云う？」

「はい、小笹と申します」

「それにお前は左衛門の血筋(ちすじ)の者であらう。わしの眼に狂いはないわ」

四五六はどこで調べたのだろう。ずばり自分の身の上に関して、これほどまでぴったりと云いあてられて、小笹は急にこの愚鈍そうな男に恐ろしさをおぼえた。

「どうじゃ、小笹。柴山左衛門はいつ、どこへ逃れた。素直に白状するがよい」

伯父左衛門の事のほか、妙姫の行方も知っているだけにうかつに口を聞けない。足弱の女中二人を連れているから、追手から少くと

も二日の余裕を見たいと左衛門から申しつけられている。あと一日は何も白状してはならないと心に決めた。四五六はその心を見通すように、

「小笹、お前はもっと大事を知っておるな。痛い目を見ないうちに白状するのが身の為だと思え。そうか、話せぬと云うか」

体を固くして齒を噛みしめる小笹の体に向って、四五六のどこに、そんな敏捷さがかくれていたのであらうか、ひらりと小笹の横間で一間の空間を飛んだ四五六の右拳が脾腹に伸びた。「む」小さな呻きと共に小笹の体は横にくずれた。

活を入られた小笹は意識がもどると、体中に塩蔵のじっとりとした冷氣を感じた。手は後手に細い麻縄で縛り上げられ、首縄が手を背に高く吊り上げている。しかも胸にまわった縄が柔くふくらんだ乳房の上下を肌に喰い込むほど強く締めつけて呼吸を苦しくしている。長い籠城にもたしなみを忘れず美しさを失っていない小笹の体から衣類はすでに剥ぎ取られ、蔵の隅に投げられている。口の中に二寸ばかりの木の玉が押し込まれ、玉に通された紐が唇を割り、頬をくびって後頭部で結ばれている。四五六は声を封じたのではな

く、舌を噛まれるのを防いだのである。

「どうじゃ、小笹。一切を素直に申し立てるか。白を切るなら、お前の体に聞くがよいか。ふーむ、白状する気はないらしいの。生娘(きむすめ)のこの美しい体が傷だらけになるのは惜しいの。ふっ、ふっ、……」

恥しい姿にされながらも、さすがに左衛門の姪、強い意志を示す眼で自分をにらみ返す小笹にむしろ喜びを感じる四五六であった。地味な忍者の中でも最も地味な仕事につかされて、内攻させている自分の性向に、いつか女を責める事で発散させているだけに、喜びは大きかった。

「まず手始めは、これじゃ」

横坐りになっている小笹の胸にまわる麻縄の下に短い竹の棒が差し込まれ、二度三度ぎりぎりとなじられた。只でさえ肉に喰い込んだ縄が一層胸を締めつける。声を封じられた小笹の口から呻きがあがる。

「どうじゃ、小笹。もっと締めると肋(あばら)が折れるぞ、血反吐(ちへど)を吐いて死にたいかの」

胸に差し込まれた竹を持たれて、体を倒すことさえ出来ず、苦しさに足を動かすだけの小笹の眼が、「殺せ」と叫んでいるのを見て

「そうか。強い女子(おなご)じやの。これではどうかの。変った責めだがの」

四五六は小笹の体を締めつける竹の棒を離した。背に高く吊られた両手をしっかりと握りしめて苦しみに堪える小笹の顔を膝でしっかりととはさみつけ、切れ長のすんだ眼を見下しながら、右のまぶたをめくり上げると、こぼれている砂まじりの塩を一つまみ眼の中に落とし、ごしごしとすり込んだ。小笹は目に火花が散る想いである。「むーっ」悲鳴は口の中で殺されたが、呻きは一際高く上った。どつと涙が溢れる。左の眼も砂まじりの塩が、胸を締め上げられ呼吸も苦しい体でありながら、眼から涙を流しながら、——小笹にとつては涙は吹き出る思いであった——涙をたれながら、てんとと転げまわった。白く輝く脚をばたつかせながら、あられもない姿を恥ずる気も消えうせて、転げまわる小笹の体を見ながら四五六はにやりと笑った。いつか、四五六のけだるげな顔つきは引締って来た。どれだけ苦しんだであろうか、小笹の体は汗にまみれ、砂と塩にまみれていた。そして次第に体から血の気が引いていった。

胸を締める棒をとられ、縄を弛められると大きく乳房が動き、今迄のせかれていた呼吸

を取戻すかのように深い息を続け、涙にうるむ真赤な目で四五六を見返す小笹の意志は少し衰えていた。四五六はそれに気づかぬふりをして、残っている塩(しお)かますを二つ二段に並べて積んだ。無抵抗の小笹の体を仰向けに、その吠の上に縛りつけて、蔵から出て雑兵たちに、いろいろの道具を運び込ませた。雑兵たちは好奇の眼を小笹の体に注ぎ、卑猥な言葉を投げかけた。小笹は身分のちがう雑兵たちに、辱しい姿で括りつけられた裸身を見られる羞恥に真赤にただれた眼を閉じたが耳をふさぐべき手は相変らず背に高く縛られているので、砂にまみれた体を紅に染めた。

四五六は石で作らせたかまどに小鍋をかけて塩を煎りはじめた。充分に熱せられた塩をすくう杓子(しゃもじ)が、じじと黒くこげてくる。

「小笹。お前のその美しい肌がただれて皮が剥けるぞ。よいかの」

一すくいの熱い塩がぴちぴちとはり切った太腿の上に落された。色は冷い白色であるが熱せられた塩は小笹の肌を焼き、肉をこがした。呻きが高く上る。塩を払い除けられても熱さは残った。勿ち赤くなった肌に火ぶくれ

が出来る。その火ぶくれを破ってもう一度塩がすり込まれる。火をつけられた様な痛さが全身をおそい、強く引き締められた縄をひきちぎらんばかりの勢いで小笹は全身を波うたせた。呻きながら悶える小笹の乳房が焼き塩でさいなまれた。あまりの苦しさに、さすがに気丈夫な小笹も遂に気を失った。しかし苦しみから免れる失神の間も長くはなかった。四五六は鋭い臭いのする臭い袋を小笹にかがせた。意識のもどった小笹に、

「次はどこを焼いてももらいたいかの。腹か、鼻か、ふっふっ……。大分弱ったの。今一押しで口を割るわの」

四五六の暗示がかけられた。忠義の心の固い小笹も所詮は、か弱い若い女であった。次第に暗示のきいてきた小笹の左足の親指に先を焼いた竹串が、爪の間にずぶりと突っ立てられた。呻きが又上り、失神する。そして臭い袋が意識を引き戻す。今度は更にもう一本が右足に。「ううう……。縛りつけられた体が硬直し、悲鳴にならぬ呻きが高く続く。

「もう話す気になったじやろう。まだ串は十本も残っておるでの。うん左様か。詳しく話せ」

声を封じられ、力なく首を縦に振って屈伏

した小笹の口から木の玉が外された。先がくすぶる竹串を見せつけられながら、小笹はすべてをあきらめた。今日の明け方に柴山左衛門は妙姫をつれて、落ちのびて行ったことを話した。しかし小笹は左衛門の行方は知らなかった。ただ五人の部下と二人の女中を伴って行ったことしか話せなかった。

小笹の体は塩込に縛りつけられたまま、雑兵たちに与えられた。何時かたった塩蔵の中に、吠に縛りつけられたまま、舌を噛み切つて息絶えた小笹の体が残っていた。四五六に責められ、雑兵に辱しめられ、更に大事を白状させられた自責の念から、真赤にただれた眼を見開いたまま、こと切れていた。

四五六の洞察があたった。西に逃れるには城攻めの軍列と尼子の軍の二つの警戒を通らねばならない。東には彼等を迎える味方はない。北の海岸は完全に押えられている。南の中国山脈しか救いはない。四五六の命で南へ下る雨滝街道と若桜(わかさ)街道が押えられた。

左衛門たちはそれを予期していた様に、両街道の中間の山道を南東に進んだ。しかし四五六は屈強の兵を十人ばかり連れて殆んど左衛門と同じ道を追跡にかかっていた。四五六

の鋭い観察力が、道の足跡、草の倒れかたなどから七八人の足取りを確実に追っていた。

左衛門は麻生の部落を通ったのち道を南にとった。そこで二人の部下を残した。若桜の町を南に見る山の中で夜を迎えて野宿した。姫は米と久が世話をしたが、わずか五才ではあったが左衛門の話す鳥取落城の様子をよく聞きわけて泣く様な事はなかった。

「姫、どんな事があっても必ず姫の手で秀吉を打たねばなりません。御主君のおうらみをはらせるのは姫だけでございます」

涙しながら話す左衛門に大きくうなずいて「じいや、姫が秀吉を討つのじやな」

秋の早い夕闇が近づいた頃、四五六の隊が麻生部落から出てくるのを見て、残された二人の部下が顔を見合つてうなずいた。二股の道で足跡の行方を見きわめる四五六を待つ隊は両側の山から物も云わずに切り込んで来た二人の男におそわれた。虚をつかれながらもさすがに屈強の者、すぐに立直つて二人を取囲んで斬り殺した。しかしこの戦いで四五六の隊は六人に減った。四五六はつぶやいた。「あとは明朝じや、もう左衛門の手の者は、三人に減ったぞ。このわしから逃れられるものか」

麻生の部落で夜を明かした四五六のもとに若桜の町から四五人の手だれの者と二挺の鉄砲が補充された。左衛門の足どりは因幡と但馬の国境の氷の山(ひょうのせん)に向っている。一五〇〇米を越す深い山である。

「氷の山か。貴船白氷斎とか云う忍者が居るとか聞いたが、どの様な術者であろうか」

ふと地獄耳の四五六の記憶が知らせた。年の頃はもう七十を越すらしい。生死もわからぬが、師の百地三太夫も敢えて戦いを挑まなかったとか。乱世のはかなさに、あらゆる争いを避けて、ぶなの原始林の奥深く世を捨てたと聞くだけであった。

四五六の隊は、渾身の沢で昨日と同じく、二人の男におそわれた。昨日よりも手強く、二人でなんと七人を倒した。四五六たち残された四人は同僚の死体もそのままに道を進んだ。春米の里で追いついた四五六は、ぶなの林に入ろうとする妙姫を背負った米と、後から従う久に鉄砲をあげせた。一弾は久の背をうち抜いたが、一弾は米の頬をかすめた。追跡しようとする四五六の隊の背後から左衛門と部下が斬り込んで来た。二人を斬った後に鉄砲で撃ち殺された部下の体を踏み越えて、次発の用意にあせる鉄砲足軽を斬って捨てた

左衛門の背に四五六の刀が走った。左衛門の返す刃の方がほんの一瞬だけ早かった。相打ちではあったが、四五六は脇腹深く背骨近くまで切り込まれて即死したが、左衛門は右肩に刀を受けながら死ななかった。すべての敵を倒した安心感に、はっと力が抜けて一度は倒れた左衛門は刀を杖に立上ってよろよろと妙姫の後を追った。

白氷斎の住む山小屋に辿りついた時は、もう並の人間ならとくに息絶えていたであろう。忠誠の心が命を長らえさせた。苦しい息の下から、妙姫に大望を果させてくれと白氷斎に頼むと、妙姫の

「じいや、死ぬではないぞ」

あどけない声を聞きながら、がっくりとこりと切れた。とりすがる姫に向って唇だけが動いた。「姫、秀吉めを」と読めた。

天正十九年春、秀吉は天下を平定した余力を駆って、朝鮮征伐の兵を起した。秀吉は本陣を遠く九州の名護屋に進めた。関白の位を甥の秀次に譲って、大閤と称していたがやはり実権は自分でがちり握り、生れたばかりの嫡子、秀頼こそは自分の後継者であると思っていた。その年の暮に改元されて文禄になり、文禄も三年になった時（一五九四年）十

三年間も白氷斎のもとで苦しい忍法修業を重ねた妙姫は山を降って京へ潜入した。白氷斎は妙姫を勿論お姫様扱いにはしなかった。それどころか、男の忍者を鍛える以上に姫をきびしく仕立てあげた。同時に、姫に従った女中の米も年令的には無理があったが、一応の忍者になった。しかし米の腕はとうてい十七才の姫には及ばなかった。例えば妙姫は一丈の切り立った塀の上に、何の道具も使わずに飛び上れたが、米には六尺の高さが限度であった。

姫は米（よね）を従えて秀吉を狙った。しかし伏見の城の警戒は厳重であり、九州との往復は一層厳重であるので、姫にもうかつに秀吉を狙えなかった。そこで二、三度、九州との往復の途中を狙った妙姫らは、むしろ京都で気を許している秀吉を、狙おうと方針を変えた。

庶民の出であった秀吉は、庶民と共に楽しむことを忘れなかった。四月の桜を賞で、遠く醍醐寺の夜桜見物に出向いた秀吉は特別な警戒を要求するどころか、却って寺に出入りする庶民を妨げる事を禁じた。しかし、そこは天下の独裁者のこと、周囲が放置しなかった。ひそかに手だれの者が秀吉の周囲を厳

しく固めていた。

夜桜を賞でる秀吉の姿を、秘かに狙う黒衣の忍者が松の茂みにひそんでいた。上を見上げる秀吉の周囲を固める者はむしろ下の灌木の茂みや、町人たちの宴のまん幕を注意する逆をついた巧妙な忍びであった。高くそびえる木は盲点となっていた。十二、三間の距離ではの白い夜桜を眺める秀吉に向って、毒を刃先に塗った手裏剣が、はっしと投げられた。たとえ外れても皮膚をかすっても忽ち致命傷になる。忍者は手裏剣を投げた時、手応えあったと思った。後から秀吉の首筋深く突っ立った手裏剣をまぶたに画いた。何とした事だ。投げたと同時に彼の体はすさまじい殺気に包まれ、と同時に半分ばかりの距離を飛んだ手裏剣がもう一本の松の木から飛んだ手裏剣に叩き落され、彼方の草むらに力なく落ちた。すべてが無言であり、秀吉らも「カチッ」と手裏剣のふれ合う音を何か知らず、自分の命をめぐる争いが行なわれたことも知らなかった。あわてた忍者は三間の空間を飛び境内を区切る塀の外へ降り立って五感をすませた。自分の気配を消す「石化の術」に入った。

「五右衛門ともあろう者が、何たる醜態だ」

彼こそは百地三太夫の弟子の中で最も優れた忍者と云われ、秀吉暗殺を狙う或る大名に抱えられ、秀吉を狙っていた石川五右衛門であつた。彼を抱えた大名が誰かは、彼が口を割らずに処刑されたので解らなかつた。

堀の外で気配をひそめる五右衛門は続いて飛降りた一人の忍者を狙つた。この術は伊賀でも甲賀でもない。体つきは女らしい。しかしあの体のこなしはそれ程出来るとは思えない。しかし俺の必殺の手裏剣をしかも横から手裏剣で打ち落すほどの術はどこに秘めているのであろうか。彼は牽制されて「気封じ」で彼の背後に降り立っている、もう一人の忍者に気づかなかつた。

殺気が消えてとほとと物乞いしながら歩く女乞食をつける町人があつた。四条河原の乞食小屋に入った三十五才ばかりの女乞食を五右衛門がおそつた。小屋の垂れむしろを音もなくくぐつた黒衣の五右衛門に、ふり返つた米の短刀が走つた。刃を抜かず、鞘のまま腰を落した五右衛門の刀が二段に動き、米の手首を打ち、短刀を打ち落とし、脾腹を鑑（こじり）が突き上げる。がっくりと当て落された米の体が倒れざま、五右衛門の肩にかつがれる。一切が無言で、気合も洩れない。誰も

気づかない。

ここは南禅寺の山門の上の楼門である。五右衛門のねぐらになつて三年もたっている。米は活を入れられて、「ふーっ」息を吹き返した。黒衣はそのままであるが両手は背で後手に縛られている。普通の縛り方ではない。

五右衛門は米を一応以上の忍者と見ている。両手首は背で縛られ、手の甲が合わせられている。右手と左手の親指から小指まで根元で細い絹紐で固く縛られている。手首を縛る麻縄はむしろ手を高く吊る首縄になっている。足も前に投げ出され、広く開いた形で足の裏を合わされ、この方は親指と小指だけが絹紐で縛られている。口には声封じの木の玉がねじ込まれて後頭部で結ばれていたが、たとえそれがなくても米は呻きすら上げなかつたであらう。

米は白氷斎のもとで修業した時に、勿論、縄抜けもみっちり仕込まれた。縛られる時に手首に力を入れて太くする。そして放置される隙に手首の関節を外し、掌を丸めると片手首が抜ける。肩の関節も外せば胸を締める縄はたとえ縄目が解けなくても容易に抜け出せる。しかし五右衛門の縄は巧みにそれを封じている。高手小手に縛る時は五尋（ひろ）ばかり

りの縄が必要であるが、僅かに五尺に足りない麻縄と少しばかりの絹紐が忍者の縄抜けを完全に防いでいる。

縛られた体を少しもがいただけで、米は並々ならぬ相手に捕えられたと覺り、悪あがきをやめて体力の温存をはかった。五右衛門は米の腰に下げた忍び袋を注意深く開いた。流儀によっては破裂玉などが忍ばせてあるからである。四方手裏剣の刃の一本に細い溝が刻まれ、刃先に容易に抜けないようにもどりがつけられているのを見て、師の三太夫が自分ですら勝てない相手は貴船白氷斎だけだと語り、その独特の武器を教えられたのを想い出した。

「女、お前は白氷斎の手の者か、名は何と云うか。白氷斎は世を捨てたと聞くが、何で俺の邪魔をしたのだ。云え」

勿論、呻きすら上げずに眼を閉じた米に向つて、いきなり小刀を抜いて体をまとう黒衣をずたずたに引き裂いた。

「ふふ……。女の体は痛め甲斐があるわ。どれ、痛い目を見せてやるか」

三十五になるが、男を知らず勿論子を生んだ事のない米の肌が寒夜の風にさらされた。五右衛門は一本の縄を取出した。これは一尺

ごとに大きな結び目を作って縄梯子にする絹紐である。突き出た大きな乳房がくびれるほど強く上下に二筋かけて縛ると、米の体を肩にかつぎ、縄の端の鉤を梁に投げかけた。そして米の体を抛り出した。足の裏を合わせた爪先が、床の上三寸の高さで止り米の体が振り子になって振れはじめる。縄の途中の結び玉が体に喰い込み、白い体が輝きながらくるとまわる。後手の指が紫色に変色しはじめる。しかし米は呻きを上げなかった。刀の鏑で目の前の米の体をつつきながら、ぐりぐりとえぐりながらも五右衛門は「ふーむ」と唸った。たとえ忍者と云っても、息が出来なくなる胸吊りに耐えて、小鼻をひくつかせながら、汗にまみれて憎悪の瞳を返す米の忍耐強さに感心した。

「女、苦しいであろう。まだまだ苦しめ。もう一刻もすれば指が腐って落ちるぞ」

その時はじめて呻きが洩れた。声を封じられていなければこう聞えたであろう。「殺せ」唯一つの呻きを洩して米は自ら失神した。下に降された米の体から縄梯子だけが取りのけられた。

「この女は痛めても何も云わぬわ。だが痛に強めくとも女の体、体に云わせてやろう」

意識を取戻させられた米の体を抱いて、大きな乳房をつかんだ五右衛門の手が傍の竹筒に延びた。そして黒いどろっとした液体を乳首に塗りつけた。

「女、どうじや。これが伊賀に伝わる『牝泣きの秘薬』じや。体が燃えるわ。のたうて」
声も終らぬうちに足裏を合わされ、手を後に縛られたまま、米の体が横倒しになった。

呻きが高く低く続き、体を床にすりつけながら五右衛門の方へ不自然な形で転ってくる。

涎を流しながら見上げる瞳からは、憎しみが消え牡に媚びる牝犬のまなざしになった。足に体をすりつける米の体を押えて、

「どうじや、女。痛めても白状せぬ強い女子（おなご）もこれには泣くものじや。もう一塗り、今度はここへたっぷり塗りつけてやるわ。声も聞かせて貰おう」

涙まで流しながらほてった体をすりつけてくる米の声を封じていた木の玉が外された。

「ふあー、あ、あーん、ふひー」

床に倒れたまま、体を折り曲げ、反らせ、動いて行く五右衛門の体を追ってころげまわる米は、それだけで何日分にも相当する体力を消耗してしまった。

短いのか長いのか、その時間は米にはわか

らなかった。薬を拭きとられて、虚脱状態になった米に、五右衛門の訊問が始まった。彼は自分の手裏剣を打落した術者が米であると信じ込んでいた。

「どうじや、女。もだえ死ぬ心地であろうかの。俺の問う事に答えなければまた一塗りしてやるからの。お前の名は何と云うのじや」
「よ、米でございます」

「白米斎の手の者じやな」

「はい」

その時米の咽喉が奇妙にくびれて細くなり口だけがぱくぱくと何事かを話した。

「米とやら。何をしておる。話せ、何ゆえ俺の邪魔をした。答えろ。答えぬとあれば、もう一塗りじや。それ、ことと、ここへじや」
「ふいー、あ、あー……」

又しても悶え、転げまわる米の体は次第に動きが鈍ってくる。

元来、人間の耳には二万サイクル以上の高い音は聞えない。しかし妙姫と米は白米斎のもとで彼の得技であった「蝙蝠鳴き」を修行した。それで常人の倍も高い声を声帯をしぼって出し、それを聞く事でお互いの秘密の通話をしていた。

さきほどの米の救けを呼ぶ声を、乞食小屋

で聞いた妙姫は、闇の中を気配を殺して走った。南禅寺の山門に近づいた時、今度は米の悶え呻く声を耳にした。そして、咽喉をしぼって叫んだ。

——米、死ぬではないぞ。今、妙が行きま
すぞ。——

妙姫は「気封じ」を行いながら、山門の今
で云えば二階にあたる楼門の破風によじ上
り、身をひそめた。

「さあ米、今度だけは、もう一度薬を拭いて
やるわ。どうじや。もうすべてを話せ。さも
なくば、もだえ死ぬまで塗ったままにしてお
くぞ。よいな」

ぐったりとなった米に向って訊問が再開さ
れた。

「これ米。何ゆえに俺の邪魔をしたのじや」

「私が秀吉めを討つため」

「何、お前も秀吉を狙うのか。して、誰に頼
れた」

「御主君、吉川経家様の、お恨みをはらすた
め」

五右衛門は優れた忍者を屈服させた喜びに
隙を見せた。米の返事が、しばらく遅れる事
に怪しさを感じなかった。

「ふふふ。小癪な奴め。お前ごときに秀吉が

打てるか。あのきびしい伏見の城の忍び封じ
をすべて無駄に終らせたら、秀吉めの首を取
ってくれるわ。その首をお前に見せつけてく
れるわ。そうじや、あさってな。そのまま
お前は、ここで待て。その前に俺のものにし
てくれるわ」

米の体を存分に弄んだ五右衛門は、一刻の
後に、再びきびしく縛り上げた米を残して出
かけた。明け方に帰った五右衛門は、山門の
前で体の前面を火に焼いた年増女の死体を見
た。手足の指に残る絹紐の跡を見て、あのき
びしい縄を抜けた米の術に驚くと共に、羞し
められた事を恥じた米の死体であると信じ
た。

翌朝、伏見城では比較的警備のゆるい三の
丸で、秀吉の妾、冬（ふゆ）が起きてこないの
で大さわぎであった。奥女中が起こしに行く
と、布団が敷かれたままになっており、ほの
かに残る暖かみからまだ一刻ばかり前に抜け
出したと思われた。どれだけ探しても城中に
居なかった。宿直（とのい）の者も怪しい気配
を感じなかった。

その頃、伏見を西に見降す醍醐山の中腹に
今は見捨てられた山小屋の中に横たわる冬の
姿があった。当て落されているのであろう、

こんこんと眠っている姿を見下す二つの黒衣
の人影があった。ここは妙姫たちの第二のか
くれ家である。五右衛門に見つけられた以上
は、便利ではあったが四条河原の乞食小屋も
捨てねばならなかった。

妙姫は南禅寺の山門から五右衛門が出かけ
た後、米を助けて小屋に逃れさせてから、四
条河原で米に体つきの似た女乞食をさらい、
わざと手足の指に絹紐の跡をつけ、顔を焼い
て人相をかくした死体を残したのであった。
しかもその後で五右衛門と入れちがいに城に
忍んで、冬をさらってこの小屋まで運びこん
だのであった。これだけの働きをしても、妙
姫の鍛え抜かれた体は疲れを感じなかった。

「米、もう充分に休んだであろう。どうあつ
ても城の忍び封じを聞かねばならぬ」

「はい。では私が」

活を入れたられた冬は寝衣の長襦袢のまま、
胸を両手で覆って横坐りにすわったまま、じ
りじりと後に退った。

「冬であったな。冬とやら、お前は秀吉の妾
であったの。まずお前の素状を話すがい」
問われた声はその姿に似ぬ若々しい女の声
であった。黒衣の肩も腰も心なしか丸みが感
じられ、その声の巧まぬ威厳に思わず自分の

生れや年などを答えた。しかし話が城の忍び封じの種類と場所を問われると、きつと目をすえて、

「大殿の御命にかかわる事は申せません」

一言云うと口を引き締めて立上り、戸口の方へ走り出た。しかし妙姫の手が動いたとも見ぬのに、冬の足首に黒い縄が巻きつき、足をとられて転がった冬の体に米がとびかかった。米の手にも麻縄があった。背を膝で押え

☆男性モデル募集☆

○左記要項にて「男性モデル」を募集いたします。○年令、職業、身長、体重、好む傾向、連絡場所（局留は不可）など記載の上お申込み下さい。○当方の求めているものは、禪美、男性ヌード、同性対象Mモデル、異性対象Mモデル、女装扮装などです。○口絵には掲載しませんが分譲写真として可能の方。○日曜祭日を除く昼間（10時から20時）出演可能の方。○時間の都合上、京阪神奈良和歌山在住の方を望みます。○お申込次第、撮影の日時場所など、お知らせします。

（編集部）

られると両手首に縄が巻きつき首縄までかけられていた。冬には一呼吸する間よりも短く感じられた。

「ほほほ。米、相変らず、そなたの早縄は目ざましいもの」

「姫こそ、その懐縄（ふところなわ）はいつ見てもお見事でございます」

「冬、云えなくば、体にきいても云わせますぞ。米、痛めるのはそなたに命じましょう」

そう云いながらも、妙姫は手の縄をたぐり寄せた。華紗（きゃしゃ）に見えるその体のどこにそれだけの力がひそんでいるのであろうか。冬の体は左足だけでずるずると足許まで引き寄せられ、自由になる右足だけをもがきながらも、裾のまくれ上った長襦袢も腰まきも直すべきすべは冬にはなかった。米は黙って見てはいなかった。手にした刀が一閃すると腰紐が、肌に傷もつかないで断たれた。前がはだけて体を折ってせめてもかくそうとする冬の体から衣類がすべて断ち落された。女の喜びに生きる肌が剥き出しになり、女の忍者の前であっても肌をさらす羞恥に紅潮してくる。

「さあ、冬、忍び封じをあかすのは今じや。責めが始まれば呻くだけじや」

きつと見上げる冬の瞳に、米の体がさっと動いた。米の体が冬におおいかぶさった。

「むー、いいいい。あ、あ——」

うつ伏した冬の足が後に折られ、足の指の逆がとられてぎりぎりと締められる。

「ポキリ」

足の指が鳴り、冬の悲鳴が一際高く上る。

「どうかの。冬、まだあかす気にはなりません。ぬか。それでは今度はわらわが」

姫は右手で冬の後手を押え、脇を、腹を、胸を、……勘所を巧みにくすぐられる息も出来ぬ苦しさに、冬は身をよじって逃れようと悶えた。しかし姫に術で押えられては、自由になる足をばたつかせるだけであった。

「ふいー、ふあー、ひー……」

笑いともつかない呻きが、冬の口から洩れる。やがて暖い液体を脚の間に洩らすと、「ひいー」目をむいたまま、涎を垂らして失神した。

鋭い痛みを右耳に感じて気を取戻させられた冬は、自分が小屋の隅に近く、丸太の柱に十文字にはりつけの様に縛りつけられるのに気がついた。右に続いて左の耳にも鋭い痛みを感じると同時に、姫の声に、その原因を知った。

「冬、吹針の的になる気持を存分に味あうがよい。忍び封じを明かすまでに何本の針が立つであろう」

「あ、あー」

首を振る冬の右小鼻に、そして殆んど同時に左側に針が立つ。右半身は姫の、そして左は米の的にされている。三間の遠さでなお骨に立つ吹針の強さも白氷齊の仕込みである。額に、肩に、腕に、次第に目標が下に降ってくる。十本余りも白銀色に輝く針を立てた冬の体は、低く続く呻きの中で針を立てられる度に高い悲鳴と共に、手足を縛る縄をきしませて悶えた。

右の乳首の真中に姫の口から伸びた銀線が突っ立った。思わず体を硬直させる冬の左胸に米の針が立った。しかし冬の体の動きを予測できなかったので、乳首を外れて下に突っ立った。針を突き立てられた冬の体の対称性が始めて崩れた。しかしその時、姫の口から伸びた銀線が二条、米の外した左乳首と、更に右乳首の下に針を立て、冬の体を飾る針は再び対称となった。

「姫、参りました。とても私の及ぶ所ではございません」

手をつく米に目もくれず、含んだ針を懐に

返して姫は冬を脅した。

「冬、まだ三十本は残っておるわ。最後の針で黒目の真中が射抜かれるまで口を割れぬとあれば、続けましようぞ。それでも答えぬ時は、そなたの美しい肌を、顔を、切り刻んでくれるわ」

細い血の筋を二十条もしたたせながら、遂に冬は屈した。そのままの姿で、知る限りの警戒と、忍び封じを白状させられた冬に姫の冷い声が宣告を与えた。針を抜かれ血のしたたりを拭かれると、痛みは残りながらも傷はなかった。

「冬、大事を明かした以上は、城へは戻れぬの、だが、わらわは戻ってもらいたい。こうしてな」

十文字にはりつけられたままの額が押えられると、濡れた半紙が二枚三枚と口と鼻を覆ってはりつけられた。首をどんなに激しく振っても紙ははがれなかった。悶えに悶えた冬の体が力を失い、だらりと垂れ下るまで長くはかからなかった。

翌朝、冬の死体が城中の井戸の中に浮いているのが見つけられた。平常は使っていない方の井戸の蓋がとり除けられていた不審にも気づかずに処理されてしまった。勿論忍び封

じを改める気のきいた者も居なかった。天守の破風に潜む五右衛門には好都合であった。

宿直(とのい)の者が、いつになく眠けに誘われた時、秀吉の寝所に近づいた五右衛門は控えの部屋の入口にあるどんでん返しの上を音もなく踏んで、境の襖を開こうとした。その時、秀吉の枕もとの香爐が、ころころと鳴った。五右衛門ははっと驚いた。あの香爐は忍び封じの仕掛けはなかった筈である。その通りであった。香爐の把手にかかった細い黒糸が天井に伸びている。

「誰かある。曲者じや、出会え」

年をとっても流石に秀吉は、幾度も戦陣を勝ち取った武将であった。その気魄に押された五右衛門は、三間の空間をぱっと後に飛んだ。足の下に、たった今迄微動すらしなかったあのどんでん返し黒い口を開いていた。落着いた時の五右衛門であつたら、空中でひらりと身をよじって、それを越えたであろうが、予期しなかった異変に体をよじるどころか、二間の深さの石牢の床に横ざまに、どうと落ちていった。

「曲者、捕(と)ったぞ」

薄田隼人正の太い声が響いた。これが妙姫の働きであった事は誰にも知られていない。

そのどさくさにまぎれて秀吉を討とうと狙う妙姫にも、隙を見つける事は出来なかった。

三条河原で釜うでの刑に処せられた石川五右衛門が、あの有名な「浜の真砂は尽きずとも」という辞世の歌を詠んだとは、後世の作り事である。刑場に引出された彼の目は竹矢来の一番前にしやがんで見ている女乞食の母娘の姿に注がれていた。警護の武士にも聞えなかったが、五右衛門のももぞと動く口から妙姫と米は、彼の恨みを読みとった。

「女、生きておったか。俺はお前に負けたらしいの。だがお前らには秀吉は討てぬぞ。この俺の魂が邪魔をしてくれるわ。それでもお前が討ったら、その時には俺はいさぎよく地獄に落ちてやるわ。わっはっは……」

妙姫は五右衛門の処刑を見る高貴な人々を見ていううちに、秀次とその側にはべる妾たちを見つけた。その中に幼くて死別れた母、綾の方のおもかげを持った女を見つけてはと驚いた。秀次を追って大阪に出た妙姫たちは、姉の菊姫が秀次の妾となって最も寵愛されている事を知った。或る夜、菊姫（いや菊の方と呼ばれていたが）は宴の後に秀次を迎えるべく、お付の女中千津に髪を解かせ、化粧に余念なかった。天井から音もなく降り立

った黒衣の妙姫の拳が千津の脾腹に伸びた。声もなく倒れかかる体を支えて横たえようと、菊の方の口を後から押えた。はっと驚き、もがこうとする両手を胸で押えられて耳もとで低い、親しみを込めた声を聞いた。

「姉上様、妙にございます。おなつかしうございます」

ふり返る菊の目に黒衣の姿が入った。

「大きなお声を、お出し下しますな」

そう云って手を離し、黒い覆面を外した妙姫の顔に思わず、

「おお、そなたは妙であるか。母上様に生きうつしじゃ。して……」

「しー、お声が高うございます」

低い声で長々と話が続いた。やがて妙姫の姿は天井に飛んだ。菊の方に介抱されて気を取り戻した千津は自分の氣を失った原因が全然わからなかった。

秀次の乱行が間もなく始まった。原因は重臣の木村将監にも解らなかったが、妙の大望に一役買おうという菊の方の仕向けたことであった。秀次の乱行は、秀吉が未だに実権を握り、それは自分を通り越して嫡子の秀頼に行くだらうと思える不満と不信にもよるのであったが、巧みに菊の方にけしかけられた

のである。特に母と娘を妾として、一つ床の辱の中で楽しむ秀次に奉られた呼名は「殺生関白」であったが、それを冷やかに見ながらけしかける菊の方は「復讐の鬼」であった。

菊は八年前、十九才で秀次の妾となり、二十七才の女盛りの体と、母綾の方に生きうつしの美貌が、秀次を意のままに操る寵妾となっていた。菊のすすめで秀次は西の丸の一隅に他人を入れない「責め蔵」を作らせた。蔵の中には、一步も外に出ずに秀次と菊の命令で責めを行う猫背で片目の小者、堤忽七が住んでいた。蔵に連れ込まれた者は男であれ、女であれ、自分に拘わりなく生きては出られなかった。苦しむ男女を見ながら、菊は秀次の理性を麻痺させるべく、みだらな行いで秀次を誘った。

菊の方のお付の女中、千津は菊の方が秀次を乱行に誘うのを諫めた。菊はそれを受入れた風を装ったが、翌日には千津は菊に毆（わ）なにかけられた。茶を運ぶ途中で畳の縁につきまづき熱い茶を菊の裾にかけてしまった。すり足で歩く女中の習性を逆用され一枚の畳が一寸ばかり持ち上げられていた。

「お方様、とんだ粗相を致しました。お許し下さいませ」

◎本誌二〇〇号突破記念◎ ▲原稿募集▼

▽内 容△

一、特異なる風俗文献誌を標榜する本誌にふさわしい内容の力作をお待ちします。

一、見る雑誌より読む雑誌として脱皮するため、後世に残しておきたい文献的価値のある資料は、長短に拘らず歓迎します。

一、SMの他、フェテツシュ、切腹、女斗美、女相撲などは勿論のこと、新しく登場した生首狂崇、妊婦嗜好などの例にみる新分野の開拓を大いに期待します。

一、形式は創作、小説などのフィクションも結構ですし、自らの体験をお持ちの方は告白も大いに結構です。更に論説、意見、感想、手紙、随筆、シナリオなど、最も効果を發揮できるものを、お選び下さい。

一、内容については、今後毎月課題を出したいと思っております。

▽規 定△

一、作品はすべて未発表の自作品に限ります。引用部分の出処は明記願います。

一、枚数は一切御自由です。

一、締切日は別に定めません。優秀なる作品は、最近号に掲載いたします。

一、採用原稿に対しては、作品相当の稿料をお支払い致します。

一、御送稿は開封第五種便（五〇グラム毎に十円）にてお願い致します。

○以上の内容規定にて、奮て御応募下さらんことをお待ち申し上げます。

▲奇ク編集部▼

あやまる千津は、その場から蔵に引立てられた。

「殿をお連れする間に、仕度をしてたもれ」
忽七に冷やかな声をかけた菊は、床に倒れて憐みを乞う千津に目もくれずに裾をひるがえして出て行った。

秀次が蔵に入った時、千津の体は一糸まともな姿で、中央の丸柱を後手と足で背負った形で固定されていた。両手は径二尺もある柱

の後で麻縄で引き締められ、両足も同様に柱を抱えていた。口に四寸ばかりの細い棒が噛まされ、両端に連がれた紐がうなじで結ばれ頬に棒が喰い込んでいた。

「殿、千津めがわらわに粗相を致しましたので折檻致しまする」

忽七に眼くばせする菊の目は輝いた。
棒をくわえさせられたまま、がっくりと首をうなだれている千津の、あざやしみ一つな

ない白磁の体に鞭が加えられた。太腿に、腹に、胸に、形よくもり上った乳房に、横に斜に、縦に、赤い鞭跡が増えた。不自由な体をもがいても、鞭は避けられなかった。噛まされた棒の間から洩れる呻きが高く響いた。

秀次は女中の中にこれほど美しい肌の女が居た事に気づき、自分の物にしたい衝動を感じたが、菊は彼の目の色を見ると、衣を床に敷いて、秀次に体を寄せた。菊は勿論千津を葬るつもりである。

千津に加えられる鞭は止まなかった。口に噛まされた棒に新しい歯形が喰い込み、激しい首の動きに、きれいにすき上げられた髪も乱れて顔にふりかかる。苦痛にゆがむ顔にかかる黒髪が凄みを増す。遂に二重、三重に鞭を受けた肌が破れた。

「忽七、もっと責めてたもれ」

鞭の雨が止んだ。後手に柱を抱えた手の縄が解かれ、ぱったりと前に倒れた千津の体は動かなかった。足首を縛る縄が右足だけ解かれたが、左足から伸びた縄が梁の滑車を通った。滑車のきしる音と共に、片足だけで千津の体が逆吊りされていた。床に支えた両手も離れ、再びそれも背で自由を失った。千津の体は縄の捻れでくるくるとまわりはじめ

た。鞭に破られ血にまみれた前面と、白く美しく輝く背面の対照が美しくさえあった。自由になる右足がばたいたともがく。足首のもぎ取れそうな痛さに呻きが再び上った。

「これ、遠慮致せ」

忽七を退けて、片手で菊を抱いたまま、秀次の鞭は千津の羞恥だけを狙った。

長い時間の逆吊りに、千津の目は真赤に充血し、鼻血が吹き出した。逆に揺れる千津の血に彩られた体を見ながら、秀次は菊との恍惚の境に入っていた。千津には何も与えられず、そのままの恥かしい姿で、吊られたまま翌日ことされた。こうして邪魔者は次々に消された。

大阪の町に美男の聞えが高く、若い娘たちの胸をときめかせていた呉服問屋、丹後屋の一人息子、清助の嫁取りのあったのは三月末であった。幼馴染の回船問屋、越前屋の娘、美和が清助の嫁にきまり、三国一の美男美女の縁組として口さがない浪速っ子の話の種になり、世の羨望を集めた。

晴れがましい婚礼の儀もどこおりなく終り、新しい夫婦（めおと）は離れに退った。床入りも待てずに目を閉じて口づけする清助と美和は屏風の影から音もなく現れた黒衣の人

影に、殆んど同時に当て落された。二つの大きな黒い袋をかついだ四人の黒衣の者は闇の中を、高い忍び返しのついた塀を苦もなく乗り越えて消えた。袋の中には清助と美和が失神したまま、後手に縛られ、猿ぐつわをはめられていた。一刻もたってから、あまりの静けさに、寝間をうかがった女中は、自分が用意した時と全く同じに乱れていない柔い厚い褥（しとね）を見るだけで若夫婦の姿はどこにもなかった。神かくしにあったのだとの風評が忽ち拡がった。

城内の責め蔵の中、床に横たわる清助と美和はまだ気を取戻していなかった。清助は運ばれて来たままに後手にいましめられ、猿ぐつわもひしひしと顔に喰い込んでいたが、美和は桃色の長襦袢だけを残して豪華な花嫁衣裳を剥ぎ取られていた。さきに気がついたのは清助であった。自分がきびしく縛り上げられてゐるのに気付くと、もがきにもがいて、やっと不自由な身で床に坐った。

「清助とやら、余は秀次じや。町人の分際でこの様に美しい娘をめとるとは潜越である。その娘は余が情（なさけ）をかけてくれる」

流石に大問屋の息子、清助は縛られながらも憶さずに、秀次を見上げ首を横に何度も振

った。

「いやと申すか、ふふふ。娘に直々に聞いてくれるわ。忽七、活を入れよ」

意識のもどった美和は事情がわからず、あたりを見まわしたが、長襦袢だけにされた自分の姿に気付くと、縛られたまま坐っている清助の後に体をかくす様にしがみついた。

「これ娘、美和とやら。余が秀次じや、寵愛してくれるぞ」

顔を赤らめながらも、秀次に瞳を返して、「お殿様、そればかりはお許し下さいませ。私の夫は、この清助でございます」

「何、余の云う事がきけぬとあらば、聞かせただけじや。面白い。それ忽七」

膂筋を立てた秀次の声も終らぬうちに忽七の拳が美和の脇腹に飛んだ。

「むっ」

活を入れられた美和は、今度は長襦袢も何も剥ぎ取られ、仰向けに床に大の字に張り伸ばされていることに気づいた。口に棒を噛まされて拒む言葉も出ないで呻くだけであった。天井に向いた美和の形の良い乳房に菊の手が伸びた。

「美和とやら、わらわが女子（おなご）の喜びを教えて進ぜましようぞ」

四方に手足を張り伸され、身をくねらせるだけの自由しかない美和は、次第に息がはずみ、全身が紅潮して来る。きれいに梳き上げられた高島田も崩れはてるほど首を振りながら、ただ呻いた、悶えた。目もあけられない美和の体は、菊の手で勘所をさいなまれるにまかせるはかはなかった。清助が縛られたまま、自分の恥かしい姿態を見せつけられていたのも忘れた。

秀次が菊に代った。美和にとって、清助にとって、一層長い時間に感じられた。

「どうじや、美和。余の情が受けなくなったであろうが」

憎悪と屈辱のまなざしを返し、首を横に振る美和の体に、今度は鞭が鳴った。赤くみみずばれの走る美和の体が力なく横たわる前で清助は縄尻を取られたまま、身もだえた。

「清助、この様になっても、まだ夫婦（めおと）になりたいか」

美和のあわれな体をまじまじと見つめながら清助は首を振ろうとしなかった。

「忽七、男を放してやれ」

愛刀村正を左手に持った秀次が命じた。

猿ぐつわを外され、後手を解かれた清助は美和の体に走り寄った。噛まされた棒を外し

手足を張る縄を解いてやると、涙を浮べ、ぐったりと横たわる美和の体を抱き起した。二人はしっかりと抱き合うと、

「清助さん」

「お美和、許してくれ」

二度目の、そして最後の接吻をした。唇をしっかりと合わせ、互いに抱き合う力が強まった時、秀次の右手が動き、抜打ちの刃が閃いた。真赤な血しぶきが散り、清助と美和の首は唇を合わせたまま床に転がった。抱き合った両腕に一層の力がこもったまま、ゆっくりと二人の首のない体が倒れた。

こうした秀次の人の道を外れた行状は、伏せる事は出来なかった。文禄四年七月、秀吉は秀次を高野山に放逐し、一週間後に、表面は自害であったが、詰腹を切らされた。秀吉の肉親の情も、世間の声に負け、世論を利用した淀君の企てに乗ったのである。

秀次の妻妾子女、三十余人は八月二日三条河原で処刑され、その死体は一緒に埋められ『殺生塚』と呼ばれた。その前後、牢につながれていた菊姫のもとに、ひそかに忍び込んだ人影があった。

「姉上様、妙にございます。牢番を眠らせておきましたから、さ、早く」

「これは妙、わらわはもう逃げませぬ。父上や母上のお恨の万分の一もお晴らしした今となっては、わらわの役も終わりました。仇に連がるとは云え、秀次様の寵を受け、も早おめおめと助けられるわけには行きませぬ。わらわの為に命を失った者共にも済みませぬ」

菊姫の決心は妙姫の言葉を絶切れさせた。涙しながら牢の扉を越えて闇の中に妙姫の姿が消えた。

三条河原で、次々に首を刎ねられながら、三十人に余る妻妾たちは、口々に憐れみを乞い、怖れにおののいた。死顔まで醜くゆがんでいた。その中に微笑を浮べて、首をさしのべたのは菊姫だけであった。獄門に並んだ首の中でも満足げに笑みをみせた姫の死顔だけが、庶民の非難をよそに、光り輝いていた。

その頃から、秀吉は奇妙に怒りっぽくなった。秀次の死がこたえたのである。そして慶長二年五月（一五九七年）再び兵を起し朝鮮に進めた。自らも前回と同じく、本陣を肥前名護屋に進めた。還暦を迎えても壮健そのものであった。

船出をする将兵の見送りに毎日浜に出た。人足が軍船に糧食や武器を積込む傍で、将兵を励ました。その日課は毎日続いた。ある日

福島正則が、秀吉の背後から呼びかけた。

「大殿」

好運であった。女人足の一人が秀吉の近くを通りざまに吹きかけた針が、ふり返った秀吉の襟元をかすめた。その白い光を見逃さなかった正則が、荷を抛り出して飛び退る女人足を指さして命じた。

「曲者じゃ、者共、捕えろ。殺すな」

その女は忽ち近習や警護の武士たちに取り囲まれた。体には武器らしい物を持っていないか

△お願い▽と△お断り▽

○本誌では、寄稿家執筆者投稿者やモデル嬢達の住所氏名の照会には一切応じておりません。手紙の転送や文通の斡旋、或は読者の紹介といったことも原則として行っておりません故御諒解願います。読者間の文通交換は、すべて読者通信欄にて行って頂くようお願いいたします。

○如何なる用件に拘らず、電話にてのお問合せや照会並に直接の御訪問は固く御断り致します。発行所に対するご連絡はすべて書面にて住所氏名明記の上、阿倍野局私書箱第十四号天星社宛お願い致します。面談又は電話連絡の必要のある方には、編集部から電話連絡の方法或は面会の日時場所な

った。真先に飛び出した一人が

「わあーっ」

目を押えて倒れた。

「気をつける。針を吹くぞ」

六人もの若い侍を傷つけたその女は遂に捕えられた。遠巻きに見ている人足の中に若い女が居た。その女の咽喉が細くくびれ、口をばくばくと開いたり閉じたりしているのに気づいた者はなかった。捕えられた米に死んではならぬと命ずる妙姫であった。

どお知らせ致します。勝手に直接訪問されたり電話されることは、固くお断りいたします。

○編集部又は編集者に対して、ご依頼ご相談などがございましたら、事前に通信にてその旨お申出下されば、時間の許すかぎりつとめてお逢いするよう致しておりますが、ご遠慮なくお便りを下さい。

○分譲品に関するお問合せも、必ず通信にてお寄せ下さい。尚未着などのご照会は、ご注文の月日、金額、品名をお書き願います。調査の上折返し御返事いたします。

○原稿のご送付（読者通信を含む）は第五種便（半分を開封にするか、封の中央一カ所をとめる開封便）を利用下さると、五十瓦につき十円にて送れます。但し封筒に第五種郵便と捺印又はペン書き願います。

針を吹き当てられた侍たちは、高熱を出し一晩苦しんで次々に死んだ。針には毒が塗られていたのだ。蝮（まむし）の毒に似たもので口から胃に入れば、軽い下痢を起す程度であるが、傷口につくと、血に混って猛烈な作用を起すのが蛇毒の特徴である。米はそれを含んでいた。

秀吉の大阪との往復や、こちらの名護屋での警戒は、出先であるので却って厳しく、遂に白昼の強襲を試みた妙姫主従であったが、早まった米は失敗して捕えられた。白昼では妙姫も助け出せなかった。

捕えられた米は、秀吉の身边を警戒する甲賀の忍びに引渡された。縄を打たれ牢に引かれた米に形どおりの訊問が始められた。

「お前の名は？ 誰に頼まれて大殿を狙ったのじゃ。誰の手の者か」

打たれても呻きすら洩らさぬ米は却って忍者である事を知られてしまった。縄を抜けても逃げられぬように、首がきっちり締る鉄の輪がはめられ、端は錠を使わずにかしめられてしまった。如何な忍者も首を切らぬ限りこの輪を外すことは出来ない。鎖の先は五十貫もある鉄の塊に鑄込まれてしまった。逃れる道はない様に思われるのに、米はあきらめ

なかった。姫の声が高く響いている。

「米、死ぬではないぞ」

米の口を割ろうとする拷問は、甲賀三郎が受持った。公開されなかったが、三郎の責めがいつか知れて、後世の拷問に取入れられ、特に切支丹の信者が処刑されたのも、この様子が洩れたのであろう。

まず、海老責にされた。しかしあぐらに組まれた足を肩まで引上げられても、米は巧みに股と膝の関節を自ら外した。完全にぶらぶらになった足は、苦しみを極めて軽くした。

並の人間なら半刻などで紫色になり、放置されると死ぬこの責も米には通じなかった。三郎はなるべく米の体を傷つけまいと云う気持を持っていた。次いで仰向けに固定した米の顔の上に水を注いだ。絶えまなく水を注がれると修業を積んだ米も、口と鼻から次第に水を吞まされていった。仮死の術を使って自ら失神しても、術者の三郎はそれを許さなかった。

何度もむせ返って腹の割れるほど水を注入され、逆さに吊されて吐かされた。五度、六度、しかし米は屈しなかった。呻きも上げなかった。苦しみに肩で息をする米の耳に幻聴が響く。

「米、死ぬではないぞ」

後世に云われる駿河責めにもかけられた。

背に両手足をまとめられ、逆海老の形で吊られた体は、関節を外せば、それほど苦しくはなかった。しかし吊した二本の縄の捩れを利用し、自分の重さに加えてぶんぶん回転せられる遠心力は、鍛えた米の体にもこたえた。目は充血し、鼻血が吹き出した。しかしそれでも米は呻きを上げなかった。仮死に陥る米の体は、すぐに止められて蘇生させられ、また続けられた。すっかり貧血状態になった米は次第に気力も衰えるのを感じた。

牢に帰されて夜を迎えると、警戒は一層嚴重であった。これほど痛めつけられても与えられた食事を全部食べて、体力の回復をはかる米は、甲賀でも語り草にされた。

体を傷つけない気持を捨てた三郎の責めは翌日から変った。三角の尖った木の上に坐らされた米の膝に石が積まれた。四十貫の重さになった時、「ごきり」と膝の骨がつぶれた。しかし米はその瞬間に、「むーっ」と呻きを上げたのみで許しを乞わなかった。足を砕かれても米の耳には幻聴が響いている。

「米、死ぬではないぞ」と。三日も四日も続く責めにも、脂をたらし、血にまみれながらも、与えられる食事だけは完全にとる米は、

責める甲賀三郎にも驚異であった。名うての伊賀、甲賀の男の忍者であっても、果してこれだけ耐えられるかは自分でも信じられなかった。逃れられる可能性がなくなったと思った時、死を選ぶのが忍者の心得である。

木馬に乗せられたのが、米への責めの最後であった。砕けた足に錘を下げられ、三角の木をまたがされた米の足に新しい血がしたたった。歩くことも出来ずに牢に投げ込まれた米の耳から幻聴が消えた。余りに厳しい警戒に妙姫が米の救出をあきらめた時であった。

「姫、米はもう屈しまする」

声なき声をふりしぼった米は、血にまみれた下半身を引きずって太い牢格子に這い寄った。一段一段と体を引き上げて、狭い牢格子の間に首輪をつけられた頭を差込んで、全身の力を抜いた。首をねじて自ら三十六年の短い、しかし悔いない命を絶った米を、発見した三郎はただ一言洩らした。

「女ながら、すさまじい忍者であったの」

米が命を絶った時、裏山の高い檜の木の上に潜む妙姫の眼から涙が止めどなく溢れていた。

その夏、戦況のはかばかしくないのに焦だった秀吉は、秀次が生存していれば頼りにも

なったものをと、悔いながら一人で本陣の裏山を散策していた。一人連れて来た近習が後で、「わあー」と叫んで倒れた。首に深々と手裏剣が突っ立ち、血が泉の様に吹き出していた。もだえる近習をふり返って、

「誰かある。く、せ……」

云いも終らぬうちに、草むらから飛来した次の手裏剣が咽喉深く突っ立った。

「うーん、何奴？」

秀吉の最後の言葉であった。「米」と刻まれた毒を塗った手裏剣が、この戦乱の英雄の

六十二才の生涯を消した。

秀吉の死はそれから一年、秘密にされた。

しかし大阪で、影武者も微量の毒を長い間盛られて衰えはかくせなかった。豊臣五奉行が急ぎ集められ、影武者秀吉は苦しい息の下から、秀頼に対する忠誠を誓わせたが、影武者である事を見破ったのは、徳川家康ただ一人であった。時に慶長三年八月十八日（一五九八年）であった。

それから二年後、関ヶ原の一戦で家康は勝利を収め、慶長二十年五月、大阪夏の陣で豊

臣の血統は絶えた。福島正則が東軍についてのも奇しき縁と云えないであろうか。

豊臣滅亡の報せが、人の口から口へと拡がる頃、氷の山の中腹の庵の中で、静かな読経の声が続いていた。五十に近い尼の端正な姿があった。今はもう憎しみも、恨みも、猛々しい術もすっかり忘れた妙姫の姿であった。仏壇の多くの位碑の中に、烈女米の霊と書かれた位碑が並んでいた。

(完)

あとがき

天正七年、秀吉が吉川経家を討ったのは史実にある。しかし、妙姫という娘があった事はどこにも見出せない。また秀吉が妙姫に討たれた事などは、勿論ないであろう。病没したのが事実であろう。

筆者は、当今流行の忍者ブームに便乗して適当にSMを混えて構成して見た。同じ責めを二度使わない様に努めたつもりであるが、乏しい想像力のみによるので、この様な作品になってしまった。記述がもっと、ねっとりしたものであっても良かったかも知れぬが、『没にならぬ表現』を心がけたので、大かたの読者の御不満も多いと思う。倍の紙数を費して刻明に記述すべきであったか。豊かな想像力が欲しい。

(終)

文献資料を求む

本誌上に紹介して価値のあるS・M・F等各種、資料を御所持の方で御提供可能の方は御連絡願います。誌上の発表につきましては、出来るだけの謝礼を差上げたいと存じますので、文献誌としての本誌の価値を高めるためにも何卒新古多少に拘らず御提供願います。

写真、絵画、文章、パンフット、広告、スクラップ・ブック、チラシ等なんでも結構です。御希望により使用後資料は御返却いたします。

「奇クサロン」原稿募集

読者の皆さまの共通の広場として、「読者通信欄」と共に、皆さまに親しまれてい

充実させてゆきたいと思えます。マニヤ通信、モデル通信、短信往来、編集者執筆者モデル投稿者などへの呼び掛け、文通交際写真、絵、告白の便り等々、なんでも構いませんからお気軽に寄せ下さい。

「読者通信」欄へ

読者の皆さまの共通の広場としての読者通信は、毎月多数の投稿文によって賑々しく飾られておりますが、広く読者の方々が読んで楽しい家庭的な雰囲気味わえるものの中から、つとめて選定してゆきたいと思えます。従って三行広告的なものや自己宣伝に類したものは、ご遠慮いただきたくので、本誌上に於ける使命だと考えます。どうか、その意味あい、どしどし御投稿下さるよう、お待ちいたします。

(本誌編集部)

「小説？ 奇ク三匹の侍」

夜 乃 探 郎

△この一編に取り上げた三匹？ の侍については「奇ク」昭和40・3・4・5・6の各月号などを参考にはしたが、あくまでフィクションであることを、前もっておことわりして置く——。▽

○

ネオンサインは輝やけど、アベック、——キッスの道ありて、ダンスを踊る夜あれど。

ビールよし、ウイスキーよし、ブランデーまたよし、酒なくて、なんの、人生あればよと、浮かれたドラマもあるけれど。

アブノーマルな世界にて「美」を求めること無けばこれ、街も砂漠の風が吹く。その砂煙りを背に受けて、肩にカメラをぶらさげて片手にまだらなロープ持ち「サヨナラだけがSMだ」ダンディ気質のこの男、巷の詩人辻

村隆。

いつも五色の虹を見て、濡れにぞ濡れてペン走らせる、今様、退屈男、芳野眉美。他者は言う、美にあらずのその中に、——妖しき美をば探る也。リングの気持はよく判る、美食家、とやま・かずひこ。「奇ク三匹？ の侍」いまぞ行く。

○

その夜、自称、雑文家でもある辻村隆は、思いがけない人間から電話を受けた。公用と私用を分けて、本名とペンネームの使いわけをしている彼にとって、通話口から流れてくる声は、後者の場合はおおむね定っていた。奇ク6月号、掲載予定の「SMカメラ・ハン」を何んとか穴をあけずに脱稿したので、気分は、口笛でも吹きたいようなものだった

ので、気軽に受話器を取り上げた。（箕田さんから、原稿サイソクの電話かな？ それなら、それでいまやっと仕上げた）辻村は、ニヤリとした。

「ふふふ、わたし、判ります？」

それは、まるでいたずら娘のようなふくみ笑いがまざった甘い発音が感じられた。彼は急に、姿勢を正し、一息つき、よそ行きの言葉をついた。

「私は××ですが」と、そして頭の中で、めまぐるしく、だれであろうかと記憶をまさぐった。「あなた、辻村さんでしょう？ わたし知っている。○○さんから聞いたのよ」

○○という名を耳にしてから、辻村の態度はやや落着いた。それでも、紹介者を仲に入らず、直接の電話は失敬な！ と思った。そ



んな所にも、彼のきちょう面さがあった。だから、ややもすると情に流されがちなカメラハントも、ピリツとした責め構図もきまり、サジズムの極致も、読者に紹介、絶讃を浴びることにもなるのだが。

「わたしは、竹の中から生れたかぐや姫、もうお判りでしょう。辻村さん、わたしのファンだって、〇〇さんから耳にしたので、ついうれしくなってる」

辻村も、人生の詩人たるプライドを常に持ち、すべての陰の世界に「美」を追求しようとする男でもあったので、影像からなる映画には、特に引かれるものを有していた。い

や、カメラ・ハントも、映画も、非情なレンズから眺められる鋭い「真実」には、変りはなかった。思わず彼は言った。

「加賀まり子さんですね」

そして、彼女を縛りたい。カメラ・ハントの材料ができると、それだけが、すぐ、頭を横切った。それは、この道、二十年のベテラン選手だけがもつ、自然な発想だったのだ。

……『美しさと哀しみと』その世界で能面のような妖しき影をはなつ上野音子（八千草薫）と、小妖女けい子（加賀まり子）が、竹の中にくり展げられる幻想は、原作・川端康成を得て、アブノーマルな世界と詩との見事な結実を映し出していたが……

○

その頃。芳野眉美は珍しく八の字をまゆによせながら、カウンターによりかかり、考えにふけていた。雨のせいで、客影は少く、ハワイアンのリズムが、どこかものうげに、ボックスより流れていた。古くからの寄稿家でもある辻村隆がいまも現役で活躍している。その後にユーモラスなタッチで、その才筆をうたわれる芳野も、奇ク誌上では、すでに常連の寄稿家ともなっ

ていた。彼は、煙草に火を付けた。へたしか、高見順であったか、描写のうしろに寝ていられない。というエッセイを書いたことがある。おれのガン作・マニヤのノートも、この所、そんな調子になっている。これも本当に奇クを思っているからだ。はたして、読者の幾人が、おれの文章を理解してくれるだろうか。おれは何も、このノートで、批判してみたことをやってるのではない。要はバーで飲むにしても、SMプレイをするにしても、御自分が面白く楽しむことだ——ということを書いたかったのだ。V——芳野は、考えからさめた。

彼はやっといつもの調子で、そばの女の子に言葉をかけた。

「おい、神酒の話を又しようじゃないか、ホント」

○

とやま・かずひこは、いつも行きつけの銀座裏の「マル」という中華そば屋にいた。ラーメンをすすり乍ら、ふと思った。八いまま頃、辻村さんと、芳野さんはどうしているかなア。V

ピンクの中国服を着た、前髪をさげた、可愛らしい顔をした美少女が、お客さんが連れて来

た子供と、何かしゃべっては、笑っていた。その美少女が、ちよっと表情をゆがめると、かずひこのテーブルの前を足早やに通り過ぎた。彼は、ちよっとそれを横眼で眺めたが、――『奇ク』六月号の、夜乃探郎の「夜は妖しく更けたれば」の一節を思い浮べた。「尿が石鹼に化けるとは面白い。それでは、美少女たちの尿ばかりを集めて特製「乙女石鹼」とか」「ラーメンに調味料としてたらしめて、

「神秘的な泉」とか」。ここでかずひこは、いとも楽しげに微笑した。

都会の夜の街は、奇ク三匹の侍、それぞれの世界にも、同じく妖しきSMの小雨を降らせ、静かに更けて行くのである。

◇附記

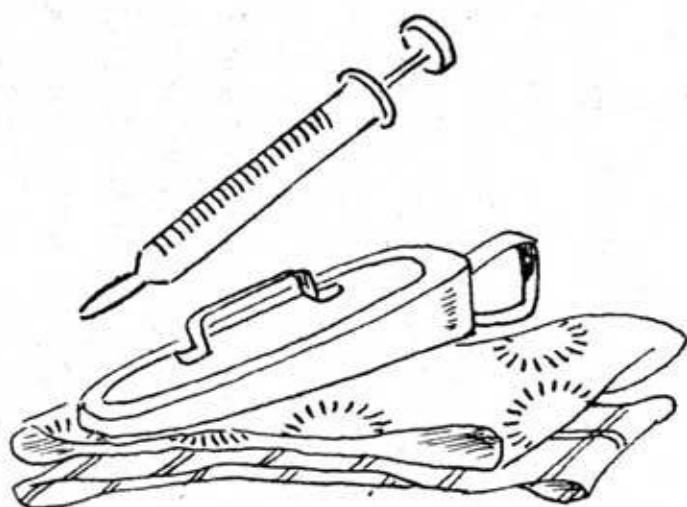
小説？ 的な構想によったので、登場人物者の敬称を略したことを付け加え、御

了承を乞うものです。また、お断りもなくモデルにされたお三人の方々には深く失礼をおわび致します。これは、とつぜん、発表？ されるということに、作者のペンによるおあそびがあったものと、これまた御理解を願うものです。

(終)

マニアの手記

浣腸と薬局めぐり



赤井 茂

孤独な遊戯。

これは多くの同好者は、夜のひととき、い

ろいろな楽しいイメージを描き、或は自分なりのアイデアをこらして楽しんでいるのが、

事実でしょう。空想は奔放で無限大にひろがり、イメージは縦横無尽に翼をのばすでしょう。もし仮りに公然と実行したら、社会秩序ピン乱となり法に触れたりすることでも、空想の上では愉しい夢として許されます。しかし、中には同好の友を得て、心ゆくまで楽しんでる人もあるでしょう。こういう人こそ私達にいわすれば、果報者といえるのではないのでしょうか。

私にとっては、浣腸とオムツという言葉はまことに味わいと余韻のある言葉なのです。人間である以上、誰しも一度は大いなる恩恵に浴してきた衣裳であり、応急手当の初歩ともいえる家庭生活上においては、欠くことのできないものといえるのです。

『浣腸』これは女性にとっては、常識でもあ

るのです。或る育児書に「現代女性において浣腸を知らない者は野蛮人位なものである」と書いてあったのを記憶しています。正に名言といってもよいでしょう。

薬局の奥さんの話。勿論商売柄とて売らん哉の商魂もあつての事です。『下剤はどうしても副作用が伴い、おなか痛くなったり服用後、かえって下痢がつづくという不快感がありますから、一時的には多少の苦痛はあつても、あとがさわやかな浣腸の方がよろしいですネ。最近の若い女性の方も、浣腸の方をよくお使いになりますよ』

と云う事です。このおくさんも、まだ二十五六才位だけに、若い女性の代弁者ともいえるのではないかと思うのです。これに浣腸は余りにも家庭生活に結びついて常識化されてしまつて、かえって育児書や看護書には図解が少なくなつてきた事は、いささか物淋しい思いがするのです。時代が急速に進展しつつあり、すべてがインスタント時代とあつては、浣腸も経済的なイチジク浣腸なんかが、よく出るようです。

「このイチジク浣腸（軽便用すべてを意味する）を良く使われますネ、使った後は捨てるだけですから、それに手軽に使えますから」と薬局のおくさんの話。確かに便利で、旅行中でも旅先でも、何時でも使えるのですか

ら、それに携帯にも便利であるから、利用範囲はきわめて広いといえます。週刊誌にこんな記事がでていました。夏は山のシーズン、最近若い女性のハイカーも増えてきた。然し事故は何処でも不意に起る事でもある。高い山に登ると氣候が変り易く、特に女性には便秘する事が多い。応急手当の一つとして浣腸を持ってゆく事も大切である。と、これによつても、如何に浣腸軽便用の利用度が高いかがわかります。

或る薬局で応待に出た女店員は

「浣腸器ですか、確かまだあつた筈ですが」

と、戸棚をあこれと探していましたが、生憎くそうに、「今、切らしています。最近イチジク浣腸ばかり出るものですから最近ばかり浣腸器を使う方が少ないものですから、長い間寝ている病人のある家とか、子供が弱いといった家の方ぐらいしか使われませんからネ。それに浣腸するとなると、なかなか面倒ですからネ。ご入用でしたら、すぐ取り寄せますが」と如何に利用度が広いかが充分に伺われるのです。

こういった話をするのは、ほとんど若い年代の女性達です。四十代から五十代のおばさん連中になると、「矢張り大抵このイチジク

浣腸で効きますけど、リスリン浣腸ですと何回も出来ますし、浣腸は何回しても害にはありません。リスリンが多ければ多いだけ効きますから、一家一本は浣腸器は備えておくべきですよ。何時浣腸が必要になるか分りませんからネ」ということになります。

こうした事を知りつつも、若い女性には羞恥心から不潔なものときめてかかり、上品ぶつて下剤を服用して副作用に依つて腹痛に苦しみ、かえって二、三日下痢に悩むといったケースが案外多いのは、いささか不合理と思えるのです。

私は純然たる浣腸マニアです。しかし、この秘密は妻にも知られていません。この秘密なところが又楽しいのです。それ故にコッソリと抗しきれない欲望にかられた時、孤独の遊戯に耽るのです。これは、私の隠された裏面の生活でもあるのです。

それともう一つ、薬局を訪ねて、婦人の店番しているところを見つけて入り、女性が身を以て体験したことを、いろいろとリアルに話して貰うことです。これも私の孤独の遊戯を一層楽しくしてくれるのです。私にとって、スリルのある婦人店番の薬局めぐりは、又とないリクリエーションになっています。

贗作芳野眉美氏の優雅な生活

芳 野 眉 美

A

芳野眉美氏は女の子のお尻が大好きだということ、それと、アトブレイキーのモーニンをきいてママが呻めくこと

彼はママのお尻が好きだから、ママもそれを知っていて、彼の部屋に居る時は、ママはいつも裸だった。

裸になるつもりはなくても、彼がママの可愛いパンティをすぐ脱がせてしまうから、この頃では、彼の部屋に遊びに来ると、ママはさっさとパンティを脱いでしまうのだ。

だから、ママの小さい透明なビキニスタイルのパンティが、いつでも、部屋のどこかに

花のように投げ捨てられてあった。

彼は、ママのまっ白なお尻さえ見ていれば満足しているので、別にママがスッパダカにならなくてもいいわけだが、お尻だけ丸出しというのは、カッコが悪いとかなんとかナンクセをつけて、ママはブラウスもスカートもみんな脱いでしまうのだ。それなら、始めから何も着て来なければいいわけだが、裸で外を歩くのは法律で禁止されているから、そんなことは出来ないだろう。

だから、今日もママは、生まれたままの姿で、彼の部屋のベッドの上に寝そべっている。

ママは、本名を中村真弓というのだが、マ

ユミさんがマユミさんと呼んではどっちがどうなんだかコンガラガッテしまうから、真弓は小さな頃からの習慣で自分のことをママと呼んでいる。高校を卒業したばかりのハイティーンで、花嫁修業中のオジヨウサンだ。

ママはベッドの上に寝そべっている、と書いたけれど、彼の部屋はアパートの四畳半で中央——というより部屋全体にダブル・ベットが押し込まれてあり、寝そべるどころか、坐るところはベッドの上しか無いのである。誰が来てもベッドの上に案内しなければならぬから、男の訪問客はイヤだけど、妙麗な女性だと彼はうれしくなって、オッパイを吸わせてくれませんか、などと神もおそれぬ奇

声を吐いてしまうのだ。男の部屋らしく、洋服ダンスと（生意気に）ステレオとテレビの外は何も無い。

マミが遊びに来たので、彼はステレオにレコードをかけようとしたのだが、女性が顔を見せるとレコードをかけたがるのが彼の悪癖で、いつまでたっても、ちっとも直らないのだが、なんせ右手がステレオにとどかないので骨を折った、といっても、ステレオが彼の背より高いわけではない。

生まれたままの姿、この姿のときが全女性が一番美しいと彼は信じているのだが、それはともかく、寝そべっているマミのお尻を撫でているので、右手をいくら伸ばしても、ベッドの横に置いてあるステレオにとどかないのだ。

「困ったな」

と、彼は本当に困ったような顔をしてつぶやいた。

「どうかしたの」

チューイングガムを口からだしたり入れたりしていたマミが、彼を振り返った。

「レコードをかけたいのだけど」

「かければいい」

「それがだめなんだ」

「こわれたの」

「いや」

「停電」

「いや」

「じゃ、どうしたのよ」

「手がとどかない」

「なんだ」

マミはひよいと、お尻をステレオに近づけた。で、やっとレコードがかけられた。

レコードは、高倉健の「網走番外地」で、

「かばってくれた、可愛い娘、かけてやりたや優言葉」などと、これ以上ヒドイ音痴は無いだろうと思えるバンセイを張り上げて彼は歌ったのだけど、レコードがすぐ終わってしまったし、マミがゼンゼン反応を示さないの、彼は今度は大盤を持ち出した。

サンジェルマンのジャズメッセンジャーズ

の現地録音で、といったって彼がロクオンしたわけではないけれど、ピアニストのボビーデモンズが作曲した『モーニンウイズヘイゼル（ヘイゼルと共に呻めく）』である。

アートブレイキーのナイヤガラ瀑布を思わせるドラムのあと、リーモーガンのトランペットソロで、彼の指先は陶醉したように、マミのたべてしまいたいような可愛いお尻をド

ラムのようにたたき始めた。

ベニーゴルソンのテナーサクソソロからボビーデモンズの強烈なピアノソロに突入すると、突然マミが呻めきだした。

眼をつむり、溜息を吐き、息を詰め、肩をふるわせ消えぎえな吐息さえマミの半開きの唇から流れ、ボビーデモンズの死にたくなようなピアノに合わせて呻めき続けるのである。

「馬鹿野郎」

と、彼ははずかしそうに云った。

「おめえが呻めかなくなっていくだろう。いくらヘイゼルが呻めいたってよ」

「キスして」

マミがその時、感激した声で口走った。

ピアニストであり、歌手であるヘイゼルは

「主よ、みめぐみを」

と叫んだそうだが、マミとヘイゼルでは、宗教に関する態度が全く違うから、これだけのだろう。マミは宗教なんて知らない。

B 芳野眉美氏は夜でもサングラスをか

けてイキがっているということ、そして、マミが彼の手をひいてやらなければサングラスで眼が見えないか



らあぶなくて外も歩けないというこ
と、これは、この章となんの関係も
無い。

モーニンが終ると同時に、ドアが静かにノ
ックされて、彼が返事もしないのに、山高帽
子がぬうっと入って、また、あわてて、山高
帽子が引っ込み、ドアが閉められた。

「なんだ、コマネズミ」
と彼は叫んだ。
「入れよ」

「入ってもいいのかい」
ドアの外でカボソイ声がし
た。

「えんりよするガラかよ」

「だって」

「だって、だと」

「だって、マミちゃん、裸だ
から」

「裸だから、どうした」

「どうしたって、困るよ」

「何が困る」

「はずかしい」

「馬鹿野郎」

くすつとマミが笑った。笑っ
ただけで服を着ようとしな。コマネズミな
ら、青い果実のような、新鮮なまっ白な裸身
を見せてもかまわないらしい。もっとも、マ
ミはそんなムツカシイことは考えていないか
もしれない。

彼は、マミにバスタオルを投げた。

「前だけでもかくせよ」

「あら、腹ばいになっていれば、見えないわ
よ」

「それもそうだ」

おそろおそろ、ドアが開けられ、イギリス

風のシツクな紳士、山高帽子のコマネズミが
入って来た。

「ヤア」

「何が、ヤアだ」

「洗濯物を持って来た」

彼のボロボロのGパンと赤が黒になったセ
ーターを、テレビの上に置いた。

彼は、だいたい、掃除なんか大嫌いだから
パンティだけは毎日とりかえるけれど、誰が
彼の城を掃除するかというと、マミも掃除は
大嫌いだし、結局、つまるところ、山高帽子
をかぶりながらコマネズミがせつせとするの
である。

、コマネズミが、何故、いつも山高帽子をか
ぶっているのかというと、浴場でも、おトイ
レでも、布団の中でも、コマネズミの頭は山
高帽と共にあるということは、ちっとも哲学
的ではなく、コマネズミは小さい頃から、交
響楽団のシキシャ(この漢字は彼の持っている
、中学生の国語辞典にはのっていない)が
着ている、あのペンギン鳥のようなベラベラ
した服が大好きで、着たくて着たくてしやう
がなかったからだ。それで、古着屋で買った
黒い長い服の正装をするようになると、山高
帽子をかぶらないとカッコが悪いというの

で、コマネズミはいつでも山高帽子をかぶっているのだ。

そして、感心なことに、服と帽子に合わせ、コマネズミは自分の職業を選んだのである。これは、見習うべき道徳で、常識人にはできないことだろう。

コマネズミの職業は、サンドイッチマンである。

ベッドの横に突っ立ったまま、馬鹿づらして立っていてもいいのだけど、坐るところがないから立ったまま、

「くたびれた」

とコマネズミは小さな声で云った。

「腹が、へった」

「そうだ。腹がへった」

彼は元気よく云った。

「マミも」

と、にっこりしてマミも云った。

しかし、これは笑いごとではない。現実の問題だ。

それからしばらく沈黙を守っていたコマネズミがやっと彼に云った。

「何か、ない」

「ここに、何か、ある、と思うか」

「思わない」

と、あわててコマネズミが云った。

「そうだろう」

「そう思うと、よけいに腹がへった」

「へったら、何か買って来い」

「お金」

「ここに、金があると思うか」

「思わない」

「そうだろう。いつでも、それを忘れては」

「忘れない」

「ウインナソーセージ一袋」

マミがにっこりしてコマネズミに云った。

「俺は、パンとレタスとマヨネーズ……」

「セロリ」

「そうだ、セロリ」

「お金が」

と、コマネズミは、いまにも泣きだしそうな顔で云った。

「わかったよ」

彼はマミの小さな胸を飾っている金のネックレスをとると、

「007によろしく」

と、重々しく云った。

とたんに、

「ビールを買ってこよう」

うれしそうにコマネズミが叫んだ。

「俺はいいから、マミに、何を飲み物を買って来いよ」

「マミは、オレンジジュースとトマトジュース」

「本当にいらないのですか、ビール」

「馬鹿野郎、食事に飲み物がなくて食えるかい。肉には赤ブドウ酒、魚には白ブドウ酒、野菜にはシャンパンときまっているんだ」

「だから、ビールを」

「わからねえ奴だな。マミがジュースを飲むじゃねえか」

「マミが飲んだって……」

と云いかけて、コマネズミは脱帽した——のではなくて、マミが脱いだパンティを丸めて山高帽子につけたのだけど、脱帽して、

「ああそうか」

と、スットンキョウな声をあげた。

「何がああそうか、だ。早く行って来い」

コマネズミは、マミのネックレスをつかむと、勢よく外に飛び出て行った。

彼はマミのすんなりした足を抱くと、マミのホカホカしたお尻に接吻（クチツケ）と読んで下さい）して、やさしくささやいた。

「少し水を飲んでおけよ。食事にマミのジュースが間に合わないぞ」

「いいわ」

C ショパンの夜想曲変ロ短調作品九の

一

溶けるように甘く、心の中に浸み渡ってくる旋律に、マミが産毛も可愛い青白い裸身をくねらせるので、パンやマヨネーズやセロリやレタスやウインナーソーセージやバターやヤキイモ（これはコマネズミの好物だ）がベッドに落ちてしまうから、彼はイライラして叫んだ。

「――」

叫んだけど、パンとマヨネーズとレタスが口一杯に詰め込まれてあるから、何を叫んだのかわからない。

ショパンのノクターン変ロ短調作品九の一をきいて、マミはウインナーソーセージを口にほうばりながら、飽満な甘さでイッパイになっているのだから、彼が何を云っても無駄である。

変ホ長調作品九の二は『ショパンのノクターン』と呼ばれて最高に有名だが、マミは変ロ短調の夜想曲のほうが好きらしい。

『青春の感傷』と呼ばれている曲だから、マ

ミもすっかり感傷的になって、うるんだ瞳で彼を見つめるものだから、彼はシドロモドロになって、セロリをハッパごとボリボリたべたりしてテレていた。

マミの感傷は、肉感的すぎて、ショパンの強烈な、繊細な、情熱的なピアノにびったりするのである。

中間部の変ニ長調のオクターヴがあまりすばらしいので興奮したマミがぐるりと横転したので、パンやマヨネーズやセロリやレタスやウインナーソーセージやバターやヤキイモがベッドに散らかってしまった。

というのは、彼の部屋にお皿などという高級な物は無いから、マミをベッドに仰向けに寝かせて、マミのあまりにも小さくてその存在がよくわからないのだけど、お乳と考えるところや、ちよつとデベソだけど、かえって魅力のあるオヘソのあたりに、コマネズミが買って来た食物を置いて、マミを偉大なるお皿にして、三人仲良くベッドに坐ったり寝たりして、めいめい好きな物を勝手にたべていたのである。

勿論、コマネズミがマミの顔のあたりに坐って、山高帽子を深くかぶって、なるべくマミの美しい裸身を見ないようにして、せつせ

とヤキイモをたべていた。

だから、お皿がひっくりかえってしまって彼とコマネズミはあわてて、マミのふくらと盛り上がった二つの小山や、なだらかな幾何学的曲線を描くすべすべした背中、大きな生きた皿の中に、ベッドに散らばったパンやマヨネーズやセロリやレタスやウインナーソーセージやバターやヤキイモを飾り直した。そして、マミがあまりにも感傷にひたりすぎると、あわてて二人はマミの肩と足をおさえて、お皿が一人で動き出さないように気をくばらなければならなかった。

「さっき、マミちゃんが、呻いていましたね」

と、コマネズミが彼に云った。

「ああ」

「びっくりした」

「なんで」

「とうとうマミちゃんが処女を失ったかと思つて」

「馬鹿野郎。俺がそんな男かよ」

「でも、男だから」

「俺はマミのジュースを飲んでいりや、いいんだ」

「そうかしら」

「何が、そうかしら、だ」

「でも、マミちゃん、なまめかしく呻めいていた。あの微妙な声は……」

「かわいいね」

「本当は何もしなかったのですか」

「アトブレイキーにコーフンしたんだ」

「ほっとした」

「いやになるな。おめえ、ヘソねえじやねえか——じやねえや、マミに惚れてんな」

「ええ、好きですよ」

「マミも、コマネズミさん、好きよ」

と、にっこりしてマミが云った。

「わたしは、断乎としてマミちゃんの処女を守ります」

「やれやれ」

「処女は絶対に大切なものです」

「わかりましたよ、童貞のナイトサマ」

「いやだなあ」

と、マミが突然彼に云った。

「マヨネーズをふいてからにしてよ」

彼は、マヨネーズをたっぷりつけたパンにレタスをはさんでたべていたのだが、たべながら、ちよいちよいマミのジュースを飲んでいたのである。そういえば、彼の口は、マヨネーズが一杯ついている。

マミは心得たもので、オレンジジュースとトマトジュースを、わざわざ体内を通過させて、ほどよくあたためてから、彼に飲ませてくれるのだ。

マミのジュース、この奇巧的飲物を飲まないと、彼の食事ははかどらないのである。

たっぷり飲んでから、

「おかしいな」

と彼はつぶやいた。

「いつもと、味が違うぞ」

「そうかしら」

「違う」

と、彼は断言した。

「俺は、すぐ、わかる」

「おかしいわね」

「何か、ヘンナモノを飲んだか」

「あっ」

と、マミが叫んだ。

「お菓のせいだ」

「菓」

「そうなのよ」

と、マミがうれしそうに云った。

「マミ、きのう、お風邪で、お熱をだしちゃったのよ」

「風邪に、お、をつけることはないだろう」

「それでね、オバアチャマが、お菓を下さったのよ」

「あの、明治生まれがか」

「今のお風邪のお菓はあぶないから、マミが死ぬと困るから、オバマチャマが、とてもよくきくお菓をツクツクおげましたって」

「いったい、何を飲ませられたんだ」

「メメズ」

「みみず」

「そうらしいわ」

「そうらしいわって、みみずをセンジタのを、おめえ、飲んだのか」

「おいしかった」

「死にぞこないのババめ」

彼はショックのあまり、勢よくひっくり返って、ベッドからころげ落ちた。

「俺は、みみずが死ぬほど嫌いなんだ、」

「大丈夫よ」

ベッドの上から、マミがやさしく、ベッドの下、彼をなぐさめた。

「もう少し飲めば、そのうち、オレンジジュースとトマトジュースがでてくるわよ」

コマネズミがさっきからげらげら笑って、笑って、笑って、笑いがとまらなくなった。

「俺のパンティ、洗っておけ」

彼は笑いこぼしているコマネズミに、にくにくしく叫んだ。

「マミのパンティはいいぞ。あとで、俺が洗う」

最後に、パンにバターをこってりぬり、そこに、ヤキイモの輪切りをはさんで、内ポケットからビールをだすと、ビールをラッパ飲みしながら、コマネズミ式サンドイッチをたべたコマネズミは、彼のパンティを三枚半、半というのはオエッチユウで、洗ってから、また仕事に出て行った。

コマネズミがコマネズミのように働かないと、彼はたべられないのだ。もっとも、この頃では、マミがせっせと実家から盗んできたけれど、彼は、コマネズミとマミのヒモである。

さて、オナカがいっぱいになった彼は、そこで、マミのプヨプヨしてよくはすむお尻の上に、おもむろに原稿用紙を五百枚もひろげ「贗作（ウソッパチと読んで下さい）芳野眉美氏の優雅な生活」という大思想小説を書きだしたのである。

D 芳野眉美氏がマミのお尻に原稿用紙をひろげたのは、大思想小説を書く

はずであったということと、サクラが誕生日のお祝に来てやっぱり生まれたままの姿になってしまったので、こんなことって現実にホントにあるのかしらということ。

五百枚の原稿用紙を裸のお尻の上に乘せられて、マミは重くてしょうがないのに、彼のほうがウンウンうなっているのはおかしい話で、いつになったら原稿用紙をお尻から解放してくれるのだろうとマミが思っていると、

「だめだ」

と、叫んだので、何がだめなんだか知らないけれど

「そう、だめなの」

と、マミがやさしく云ったら

「そうなんだ」

と、マミのフサフサしたオカッパに顔を埋めて、

「思想とはなんだ」

とか、

「芸術とはなんだ」

とか、

「苦しんでいるのは、黒淵嬰一氏ばかりでは

ない」

とか、わけのわからないことを云って黒髪にやたらにキスするので、

「くすぐりたい」

と笑ったら、

「おかしいか」

とコワイ顔をして

「俺には書けない」

一声叫んで、マミのちよつと上を向いている小さな鼻に、彼はかみついた。

彼がマミの鼻にかみついたとき、ドアが自然に開いて、まっ赤な長いネグリジエがフワッと風に吹かれて入って来た。まっ赤なネグリジエばかりだと思っていたら、ちゃんと中味があつて、中味は、ビールやウイスキーやブランドーなどがごちやごちやと入っている袋をかかえていた。

隣室のサクラという、若いトルコさんだった。本名は知らない。

「いつまで鼻をシャブツテルのよ」

と、サクラが彼に云った。

「カンデイルのよ」

と、にっこりしてマミがサクラに云った。

「同じことよ」

サクラはかかえてきた品物をベッドに置く

と、彼の鼻をひょいとおつまんで、やっと彼の口をマミの鼻からはなした。そして、はなしたついでに、彼の口にウメボシガムを三枚まとめてくわえさせた。甘いものの嫌いな彼はチューインガムも大嫌いなのだが、ウメボシガムだけは甘くてもスッパク感じるらしいのだ。ヘンナノ。

何故、サクラが彼の口にウメボシガムをくわえさせたかという、それは、これから説明する。

五分ばかり彼に三枚のウメボシガムをかませると、サクラは彼の口に指を突っ込んでウメボシガムをつまみだし、丁寧に丸めて窓から外に捨てた。それから、さみいとおしそうに、彼の頬を両手で抱き、ウッフンと彼の唇に接吻した。

サクラは、彼だけでなく、男性とキスするときは、かならず男にガムをかませるのである。

サクラは十分ばかり、彼の唇を、上の唇や下の唇や、そして彼の舌をゆっくり吸った。

「甘かった」

甘ったるいガムをかんだあとだから、甘いのはあたりまえだけど、そんな論理的なことを云うとサクラにブンナグラレルから、さん

さん唾液を飲ませやがってと思ったけれど、彼もつつしんで、

「甘かったね」

と微笑した。

サクラはマミの美しい眉の間にキスしてから、ブランドーグラスにナポレオンを注いで自分の前に置き、コーリンググラスにジョニウオーカーの黒を注いで彼の手に渡した。

「今夜はなんだい」

と、彼はサクラに聞いた。

「何かオメデタイことでもあるのかい」

「お誕生日」

と、サクラが云った。

「それはオメデトウ」

「わたくし、じやないわ」

「えっ、じや、誰だい」

「マミじやないわ」

と、マミがサクラの持って来た紙袋から、イチゴを取り出しながら云った。

「俺じやなし、コマネズミかな」

「違いわ」

一息にナポレオンを飲み干してサクラが云った。サクラは酒に強い。持って来た酒は、たいてい一人で飲んでしまうから、彼はいつもそっと一本ぐらひはクスネルのだけど、結

局はサクラに見つけられて飲まれてしまうのだ。

「いったい、誰の誕生日なんだ」

とジョニウ黒をちびりちびり舐めながら彼は云った。

「誰かのよ」

と、サクラがまたナポレオンを一息に飲み干してすまして云った。

「そう、誰かのよ」

と、マミがイチゴを、そのままたべながら云った。

「誰でもいい」

「カンパイ」

彼がイチゴをつまんで、マミの可愛い……ようとしたのだけど、マミが気がついて……しまったので、このたくらみは失敗した。彼は、マミのイチゴを自分の口に落させようと考えたらしいのだが、こんなことを考える彼は、真実ウルトラHだ。ネ。

二十分ぐらひでナポレオンを一本すっかり飲んでしまうと、サクラは、

「暑いわね」

と云いながら、まっ赤なネグリジエを脱ぎだした。脱がなくなつて薄い透明なネグリジエだから、サクラは下に何も着てなかったし

ブラジャーもパンティも、丸見えで、彼も困っていたのに、脱いってしまったら、それこそ丸見えもいいところで、これはホントに困ったと彼が思っているうちに、サクラはゴージャズな柔らかいネグリジエをさっぱりと脱いで、生まれたままの姿になってしまった。

そうして、マミと並んで、ベッドに腹ばいになると、ふくよかな大きなお尻をくねくねとくねらせて、彼をユウワクするのである。

E 芳野眉美氏がメイドインケニヤの黒人彫刻を十ドルで買ったその理由と、女の誘惑に負けるのが男だという真理と、マミのジェラシイに就いて。

しなをつくつて、なまめかしく、

「わたくしを抱きたくないの」

とか、

「男でシヨ」

とか、

「ハジをかかせるつもり」

などとサクラに云われると、彼はもうタマラナクなって、あわててGパンと封筒、彼は三枚百円のパンティを三枚しか持っていないかった、そのパンティはさっきコマネズミが

洗ったばかりだし、自家製のイージーメイドのてぬぐいのオエッチュウも、やはりコマネズミが洗ったばかりだし、ジカだとGパンにスラレていたので、仕方が無いから、彼あての手紙の封筒で、彼の誰れも見せたことのない秘められた箇所をおおっていたのだが、ちようどその封筒には筆太く「親展」と書いてあったし、その「親展」と書いてある封筒を脱ぐと、すぐさまサクラを抱こうと思ったのだが、マミがにこにこして見ているのに気がついて「親展」がちっとも「進展」しなくなってしまった。

「困るな」

と彼にマミに云った。

「見るなよ」

「どうして」

「どうしてって、困るよ」

「困ることなんかないじゃない」

「ないじゃない、つて云ったつて、困る」

これじやちっとも話が先に進まない。そんなことにおかまいなく、サクラは、しきりにウツフン、ウツフンと鼻を鳴らしている。

「目かくしをしよう」

と、彼がマミに云うと、マミはイヤだと云った。

「マミ、見ていたいな」

「馬鹿野郎、見世物じやねえや」

「マミちゃん、ジェラシイ、わかないの」

と、サクラが半分彼にからみつきながら云った。

「ジェラシイ、ってなあに」

「なんだ、おめえ、ジェラシイを知らねえのか」

「おしえて」

「ジェラシイってね、ええ、めんどくせえ」
彼は、ベッドのシーツをはぎ取ると、マミの青い果実のような新鮮な若い健康に輝く清純な裸身をそのシーツで包み始めた。頭も顔も胸も、オヘソも、小さな手も足の指の爪もみんなベッドのシーツで丁寧に包むと、さらにその上から、洗濯用のローブをはずしてぐるぐる巻きにしてしまった。

「まるでミイラだ」

「ミイラって、なあに」

のんびりした声がシーツの下でした。

さて、やっと彼は安心して、腕をひろげて彼を待つサクラを抱こうとすると、ドアがノックされて、ガスのメーター調べだという。今、トテモいそがしいから、あと三十分ほどして来てくれないか、と云うと、心得たもの

で、ガスなんて一度も使ったことなんかないでしょうから、と云って基本料金だけを書いて、ドアにはさんで行ってしまった。

さて、再び、彼は安心して、早く早くと選挙じやないけど連呼している。サクラを抱こうとすると、またドアがノックされて、今度は新聞の集金人だった。彼はむづかしい新聞なんてとってないのにと思ったのだけど、スポーツシンブンをとっているのに気がついて今、トモイそがしいから、あと五十分ほどして来てくれないか、と云うと、集金人はどうせ金がないのだろうと心得たもので、明日またうかがいます、と帰って行った。

さて、また、再び、彼は安心——しようと思っただが、どうしたのか、続けてドアがノックされて、この頃有名な宗教団体の声がしたので、ここにはゼッタイ誰もいない、と彼はどなってしまった。どなってから気がついたのだけど、サクラがその宗教団体に入団していたはずで、どうも隣室のサクラのところに來たらしかったのだが、サクラは知らん顔をしていて、この頃の宗教もアテナライと彼は思った。新興宗教より易のほうより宗教的なんだろう。

そこで、彼は今度は誰がドアをたたこうと

親父が死んだという電報が来ようと、俺はルスなんだと心に誓って彼とサクラは、おもむろに宗教的儀式にふけたのだが、サクラがあまりにも泣きすぎるので、彼はケンカと間違えられはしないかと気が気ではなかった。

まったく、アパートは崇高な儀式にはむいていない。だから彼はバストイレつきのホテルが好きなんだ。女の子とナニするときはいつもそうしよう。ウン。

サクラは、まっ白な裸身とはどうころんでも云えないけれど、黒い弾力のある肌が強烈で、こんなことは発表したくないけれど、ナイショにして一人で喜んでいたいんだけど、やはり発表したいから書くけど、それだったら、始めからアッサリと書けばいいじゃねえか。くどいな、そう怒るなよ、ともかく、サクラに抱かれると、吸いつかれるようでスゲエンダ。ホント。

とにかく、彼の口にチョコレートやギンナやトロロやタマゴやなまの馬肉や牛乳をブチコミながら攻撃を続けるので、俺はミキサーじゃねえや、と彼が叫んでも、彼の口にはいつも何かしら入っているの、何を叫んでも無駄だった。

あまり苦しくて彼が抵抗しようものなら、

サクラは、カミソリを彼につきつけて、そのキレイな顔を、スパッと切るぞと彼をオドカシ、ネクタイやバンドや紐や、縛られるものならなんでも集めて、彼の手足を縛ってしまってから、まるきりこれじゃタヌキだと彼がボヤいても、サクラは知らん顔をして、自由を奪った彼に襲いかかるのだ。そのスサマジイことは、これから説明する。

とにかく、オトイレに行く時間もおしむので、彼の口がサクラのおトイレになるのもしばしばだった。手足を縛られているので、サクラが彼の顔の上にのっかり、何をしようと思はどうかすることもできないのだ。そして、サクラのは、酒飲みだから、アルコールばかりで、あまりオイシクないのである。

サクラは左党のくせに、チョコレートだけは大好きだけど、チョコレートばかりたべていれば、でてくるのもチョコレートだなんてあれはウソだよ。

こんなことをして二人がイチャツイテいると、シートで全身を包まれたマミが苦しがるので、彼が顔だけだしてやったが、両手の自由は奪われたままだから、これまた、サクラがいたずらしても、マミはどうすることもできなかつた。

マミの口に、ローソクを差し込み、それに火をつけるなんていう残酷なことはキライだからしないけど、マミの口に、黒いペデキュアをしている足の拇指を突っ込んだり、足の裏を舐めさせたり、マミの顔の上にまたがったり、マミの顔にしゃがんだり、サクラは好きなことをして喜んでるのだ。

マミはソーセージが好きだからたべさせてあげると親切なことを云いだしたのはいいのだけど、サクラはその太いソーセージを手持たないで、この先をくわしく書くとその筋にオコラレルからやめておくけれど、これが純文学だと、もう少しコクメイに書けるのだけど、それが芸術家の特権なんだけれど、とにかくマミは手に持たないで、サクラのマヨネーズがぬってあるソーセージをマミにたべさせた。

サクラの部屋には、かならず男がいるのだが、同じ顔は見たことがなかった。だから、男がいないときは、彼の部屋に浸入してくるのである。彼がいないときはサクラは一人が楽しんでるのに違いない。

サクラはトルコさんだけど、中には、オカシナ客がいるらしく、足を舐めさせてくれとか、顔を踏んでくれとかは、まだいいほうで

サクラのパンティを洗わせてくれ、とか、サクラの……を飲ませてくれ、とかはゴアイキヨウで、サクラにオフンドシをしめさせてくれという男がいたり、裸になるのははずかしいから下着のまま湯舟に入ったりする男がいたり、わざわざ豪華な和服を持参して女装しオネエサマなどと気味の悪い声をあげたり、マネージャーがそんな客ばかりサクラにおしつけるので、サクラもこの頃だんだんオカシクなあって、奇クなんて高級な本は読んだことはないからSとかMとかは知らないけれど、サクラのSEXもS的にますます複雑になってきた。これは見習うべきことである。

夫婦で来て、サクラに夫婦生活を見てくれと云われたとき、サクラは完全にコーフンして、その夜十二時間にわたって彼を責めぬいたのである。そして、今度、その夫婦が来たら、女の前で男と関係してやるのだと、「危険な関係のブルース」をガンガンかけながら、神もおそれぬことを息も絶えだえにして叫んでいた。神よ許し給え。

とにかく、最後にマミの見てる前で………、サクラはやっとおとなしくなった。クタビレタ。

彼が十ドルでメイドインケニヤの女の黒人

立像を買ったのも、サクラとそっくりだったからである。そのまつ黒な彫刻はステレオの上から、サジストのようにいつも彼を見つめている。

サクラの色が黒いのは、わざわざ赤外線で肌を焼いているかららしい。

F コマネズミが夜おそく帰って来ると芳野眉美氏が生まれたままの姿の美少女と美少年を両側にかかえてベッドですやすやと寝ているので、道德的なコマネズミはたくさんアキレテ山高帽子をかぶり直して焼鳥を喰いに行ったということと、この章はこれだけしか書くことがないということ。

オヤスミナサイ。

限定版
写真集

美しき縛しめ

第三集 略号〔美3〕
頒価一〇〇〇円(送共)

美人モデルの縄にあえぐ姿態が、両面特アート紙にギッシリとグラビヤで印刷されて、皆様のお求めを心からお待ち申しております。内容は次に掲げた百二十態の写真で、いずれも今まで一回も発表されたことのない、とっておきの秘蔵品ばかりです。残部が僅少になりましたので、今すぐお申込み下さるよう、お待ちします。

◎緊縛女体百二十態 〔本誌優秀モデル総登場の写真集〕

樹間にさらされる (絹川)	美貌を踏みつける (絹川)	顔枷の装着中 (四方)	被虐のマゾ女性 (東浦)	首吊りのプレイ (大塚)
豆しほりの猿ぐつわ (絹川)	悦虐の園にさまよう (水本)	鼻孔ゼムピン責め (絹川)	大きな猿ぐつわ (竹野)	後手縛り猿ぐつわ (絹川)
縄目と裸身の羞らい (長野)	若肌に襲う白ロープ (若原)	鼻孔から薬液注入 (大塚)	可愛い足首 (絹川)	電光に肌は映えて (梨花)
後手首に喰込む縄目 (梨花)	蚊群の襲うにまかせ (絹川)	豊軀にまつわる黒縄 (若原)	黒髪なぶり (大塚)	囁まされる猿轡 (東浦)
荷造り縛り人形 (大塚)	きびしき縄目に喘ぐ (加茂)	ピンクカバーと豆絞 (絹川)	喰い込む柔肌に縄 (大塚)	柔肌高手小手 (梨花)
バンド着用しほり (遠藤)	麗しき裸身の縄目 (絹川)	斬首処刑フオート (新宮)	裸身に投げたタオル (加茂)	高手背高しほり (水本)
替ゴム猿ぐつわ虐め (東浦)	猿ぐつわ黒フン縛り (愛川)	両手首吊りさらし (大塚)	緊縛の優美ポーズ (絹川)	後手小手股間縛り (絹川)
ゴム布に包まれて (梨花)	あえぐゴム布嵌口 (大塚)	後手足首逆エビ縛り (梨花)	くわえた赤い花 (絹川)	柱後手縛りにて (山路)
椅子利用エビ縛り (東浦)	美しい顔をなぶる (梨花)	丈なす黒髪 (大塚)	エビしほり正面 (梨花)	下げられたズロース (梨花)
厳しき胴絞 (絹川)	飛び出す双丘と後手 (長野)	責衣からのぞく乳房 (大塚)	美貌美身の緊縛 (大塚)	十文字しほり (桜井)
輝く白肌をさらして (関谷)	首縄胴縛り股間縛り (絹川)	美貌放心の表情 (梨花)	首を締めるくさり (絹川)	木洩れ陽に白き肌 (絹川)
荒縄黒皮フンドシ (大塚)	被虐に耐えた表情 (水本)	後手強烈しほり (梨花)	手吊りのけぞり姿態 (桜井)	叫ぶ捕われの乙女 (大塚)
野性的な緊縛模様 (絹川)	生首フオート (新宮)	従順なるマゾの発散 (竹野)	乳首に咬みつく蛇 (大塚)	汗まみれの被虐 (梨花)
全裸のいましめ (愛川)	祭壇のささげもの (大塚)	手錠足錠首くさり (四方)	後手縛りと臀部 (絹川)	洋服タンスに吊る (大塚)
白晒六尺フンドシ (遠藤)	越中フンドシ緊縛 (大塚)	白晒六尺フンドシ (大塚)	ピンクの腰巻さらし (東浦)	全裸にてもだえる (関谷)
百CC浣腸器責め (大塚)	飛びだした双丘 (加茂)	ガンジガラメの縄目 (絹川)	重圧に耐える表情 (大塚)	黒縄地獄 (四方)
荒縄のトゲに喘ぐ (大塚)	塩水を無理に飲ます (大塚)	首縄絞め股間縛 (桜井)	強烈アグラしほり (絹川)	るせつの裸身 (梨花)
両手吊りさらし (桜井)	胸部と臍窩の魅力 (遠藤)	引き回される裸身 (絹川)	ボリウムの誇り (桜井)	セーラー服を縛る (梨花)
M女性の本領発揮 (梨花)	臍窩を狙う蛇の舌 (梨花)	豊胸を彩る茶の縄 (大塚)	鏡にうつす裸しほり (山路)	首縄から膝縄まで (大塚)
足錠をつけられる (四方)		捕われの女学生 (竹花)	惜しみなく晒す裸身 (大塚)	高々と上った後手 (梨花)
			ゴム帽子麗身晒し (梨花)	くびれた胸と腹部 (大塚)
			首絞めに苦しむ (大塚)	カクテルドレスの女 (絹川)
			麗身をもだえさす (絹川)	浣腸責め (大塚)
			猿ぐつわの苦悶 (加茂)	首のくさりに悶える (絹川)
			黒縄にもだえて (大塚)	黒のズロース (絹川)
			全裸の手吊り責め (大塚)	破られたズボン (梨花)
			ゴムの猿ぐつわ (絹川)	正面立姿全身縛り (大塚)
			汚れた縄と輝く白肌 (絹川)	くさりに捕捉される (山路)
			手首足首椅子しほり (梨花)	亀甲型股間しほり (大塚)
			あえぐ夫人の表情 (関谷)	長襦袢と腰巻 (館)

妊婦ヌード・ハント



瀬 沼 四 郎

先日「身重のヴィーナス後日譚」を送稿してから、連休あけに大阪に出張する機会があったので、時間をさいて例のナニワ・ミュージックに入ってみた。その収穫を一、二ここに報告しようと思う。

夕刊紙などの広告を見ると、どこでも五日ないし十日で出し物がかかるようなことを書いている。小生はしょっちゅう見ているわけでもないし、踊り子の名前なども覚えていない方でもない（しかも、どれもこれも似たような名前だ！）から、それに本誌で紹介されていた青木順子さんの場合でも、ずいぶんあち

こち巡業しているようなので、踊り子がいつも入れ替わっているのかと思っていた。ところが、小生が昨年十一月見たときと大体顔ぶれが同じなのである。小生の記憶が完全だったら、最後の一人まで確認できたかも知れない。そこまでは自信がないが、大体ほとんど同じ踊り子が出ているのである。偶然同じチームが来あわせたのかも知れないが、小生の感じではどうもそうでないような気がする。だから同じ踊り子たちがこれからもひきつづいて、同じ劇場に出るものと仮定して話をすすめよう。（もしちがっていたら、ごめんな

さい！）

去年の十一月に妊娠七カ月（？）ほどの蛙腹をしていた踊り子がちゃんと出ていた！おそろく踊り子の中で一番年長で、しなびた乳房（失礼！）の恰好も、ちゃんと見覚えがあった。髪の色を変えていたので、顔が少し短く見え、すぐには気づかなかったのだが、乳房を見た途端に、アッと思い出したのである。そのときに小生の頭の中で顔もピッタリと一致したのである。はじめに気づかなかったのは何故か？ 言うまでもなく、あの蛙のように膨んでいた腹がペシャンコになっていたからである。半年の間に、膨らんでいた腹がペシャンコになる！ 明らかにその間に、彼女が子どもを産んだことを物語るものではないか。昨年のおきも、今度も、小生は十分注意して見たのだから間違いはない。去年見たときのような、動作の大儀そうな様子はまったく見られない。やっぱりそうだったのだ。小生はあらためて確証を得た思いがした。

実は今度は、国電天満駅のプラットホームから見える広告掲示板にのっていた電話番号を見て、行く前に電話を試してみた。「大阪新夕刊」紙の記事についてたしかめると、「い

つごろのことですか？」

と聞いて来た。そこをあいまいに濁して、今も妊娠中の踊り子が出ているかと問うと、「さあ、気がつきませんね。一度見にいらして下されば分かりますが、何という子か、名前は分かりませんか？」

と、いちがいに否定しないのである。名前なんぞ分かるはずもないから、もちろん知らないと答えるのはなかった。

ためしに、他の一、二の劇場へも電話して、同じことを問い合わせてみたのだが、他の劇場では、かならず、はっきりと否定した。とんでもない、という口調である。あまり自慢できる趣味でないことは自分でも知っているから、不まじめだと思われるも仕方なからうが、馬鹿にするな、といわんばかりである。こちらの気持なんぞ、てんで通じやしない。はっきり出ていないと言うところへわざわざ見に行くこともないので、まっすぐナニワミュージックに行ったわけである。そこでかつての妊娠ストリップのその後の姿にお目にかかったことは前述の通り。

ところで、もう一つの発見を、そこで小生はしたのである。それは、若くて美しい、すこし肥った感じの子で、ファンもいるらしく

相当拍手があつたが、その子の腹の形がどうもおかしいのである。和装で一回、洋装で一回出場して脱いで見せる。もちろん幕が上がったときと、フィナーレには、みんなと一緒に出場する。脱いでは、気のせい、か、腹をなるべく見せないように注意している様子である。踊り方にも気をつけて見たが、激しい動作は一つもないようである。腹の形がたしかにおかしい。乳房は非常に大きくて、近くから見ると胸もとから乳房にかけて青い静脈が一面に浮き出している。乳頭はあまり黒くないが、オキシフルでも脱色できないことはあるまい。単に肥っていて、地腹が相当に大きい女もいることだろうから、確言はできないが、いくら肥っていても、若い子であんなに地腹が大きくなるものだろうか。小生は前に出て、いろんな角度から、その踊り子の腹を出来るだけよく観察したのである。確言はできないが、もし妊娠しているとすれば多分初産で、妊娠五カ月ぐらいであろう。もしも肥っていないければもっとよく分ったろうが、たしかに相当大きいのである。そのことに気づいたのは小生だけではなくて、かぶりつきの若い観客が、その踊り子が近くに来るたびに、腹を指さして、何回も何か小声で

聞いていた。バンドの音で何を言っているのか聞きとれなかったのが残念だが、その踊り子は、ことばをかけた男に向かって笑って見せ、何を言われたのか、最後には恥ずかしそうに顔をあからめてるのが、小生にははっきりわかった。普通のことを言われたのだったら、踊り子がそういう羞恥の表情をするであらうか。

いずれにしろ、小生としては、自信をもって、妊娠していたと申し上げる確信はない。しかし、この踊り子がこれからも出場しつづけるものとすれば、奇ク誌上にこの文章が出るころには、すでに妊娠七カ月ぐらいになっているはずである。この踊り子が妊娠しているとして、妊娠何カ月ぐらいまで出場しつづけるものか知らないが、六月末から七月ごろも出場していれば、すでに妊娠していることがだれの目にも隠せない状態になっているにちがいない。妊婦ヌードに興味のある読者の方は、ぜひ行かれることをおすすめする。そうすれば、本当に彼女が妊娠しているかどうか、たしかめられるわけである。それとともに、そのヌード嬢も、もし妊娠しているのなら、その膨らんだ腹を、恥ずかしそうに隠したりしないで、十分に観賞させてくれるであらう。



△ S M 時 評 △

「新しい S M 発見ある本誌に
読む雑誌への脱皮成る！」

——新刊七月号を見て——

橘 行 司 子

東西、東西、天下御免は S M 時評。

——奇クの世界をねじりハチ巻、ペンをかついで、エンヤ・コリヤと走りまわること、これで三回目——。

さて「新しい S M がある本誌に、読む雑誌への脱皮なる！」これが「奇譚クラブ」は七月号のオシャベリのポイント。

まずは、本誌をペラペラめくり、私の直感的にこれは——と、思ったことを述べ、あとに腰を落着け各個の作品に数行を使ってシャベツてみたい。では、最初はカケ走、スタートに号音は鳴る！。

たしか「古きを取って新しきを知る」とかいうコトワザがあったようだが、編集部よりの「挿絵画家」募集！と「八月号掲載予定作品」の広告は、うれしいものの一つだ。

通刊二百号突破ということは、その過程にあって、種々な編集部と読者による S M による新しい発見がなされ、新装躍進をつづけてきたことを物語っているもので、ただ、旧号はよかったでなく、好評あった企画は、どしどし新刊される号に取り入れ、伝統をふまえての、新しい風俗文献誌としての発展こそ望ましいものである。

いま、口絵、グラビヤが制約全廃されてる時。これだけは——という、挿絵部門に、新人の登用こそ重要な課題とはなってきた。

(それに伴って、既成の挿絵画家への刺激ともなる) まことに「挿絵画家」募集は、時期を得たものと拍手を送り期待される。「奇クサロン」の「編集たより」に、「挿絵の方も、只今は過渡期のため」中略「皆様の御目を楽しませることが出来る筈だ」と、言葉が眼にとまるが、すでにエキゾティックなロマチシズムな S M 画を描きつづける室井亜砂路氏が「見世物」に関するメモ「夜乃探郎

と、「処刑される女（斬首刑）」黒田寿の作品に、署名入りで、新挿絵画家としての初登場（奇クサロンでは、ときたまお眼にかかるが）。室井氏よ、ガンバレ！。

「八月号掲載予定作品」予告も、投稿山積、早くも候補作品が選定されるという心強い裏付けを意味してけっこうである。

七月号の「S M時評」で私は、黒淵賀集子さんの「無題」について、特筆大書して「五行程を引用させていただく他に手はない。」と結んでおいたが、これはおそらくは同号に他の読者の賀集子さんへの激励投稿文が多々掲載されることを見越して寸感に止めたもので、ここに「奇クサロン」の「黒淵賀一さんへ」麻生保氏の「あなたを支持する声に、より多く耳をかたむけようとなさらないのですか？」や、「濡れにぞ濡れし」の芳野眉美氏の「御主人の嬰一氏の作品」S Mより見た世界史シリーズ「は力作で」などの文が見られ私の考えの裏付けあったものと、うれしく、一人、ペンをもちながら、ニヤリ。

今度は黒淵賀一氏の「S Mより見た世界史シリーズ創作余談」のようなうちあけ話が見たい。

さてまことに、ツーと言えはカーという生

きた編集に、よりなってきたようで、こんな楽しい雑誌はミタコトナイと、私はコオドリするネ。

六月号で、福田久文氏が（読者通信で）

「私の一月号の告白文を、入念に読んで頂いて“E.T.Cと、芳野氏へよびかければ、早速に、ガン作・マニヤのノートで（七月号）

“ショーペンハウエルの「意志と表象としての世界」はさっそくさがして読んでみます」と、答えが出る。これは一例だが——このような演劇に例えて見れば、演出者も、役者も、観客も、みんな舞台上に上ってドラマを進行させるというようなことは、まさに前代未聞！再度、同人雑誌的という言葉を出させていただければ、「新しい同人雑誌的な風俗文獻誌」だ。

異色のな、体当りのなS M的エッセイ及評論がめだってきた。「奇クサロン」も、独自の色彩がますますにじみ出てきた。（もう、このランは増頁ですね。カ・ナ・ラ・ズ）不死鳥の如き健筆をふるう、羽村京子夫人あらため羽鳥水江夫人のあざやかな復活ぶり。ハコノヘンデ、大分カケ足シタノデ、スピードヲオトシテサテ、私ハ煙草ニ火ヲツケルVタイトルにも「新しいS M発見」うんぬん

——としたが、これは前記の「異色のな——」という意味があり、「肥満狂崇者のたわごと」須渾朔氏の「最近、といってもここ二、三年肥満体好みの記事が僅かながら増したようにも思えて私は一寸喜んだことだった。一つは妊婦ものというめずらしいジャンルにとり組まれた「奇ク」に拍手を送る。（新開地開発の意味で）“のエッセイから「美女とオナラ」——蛙腹と空気浣腸と人工放屁——川崎進一氏の題名をよんだだけでコレハ、コレハと身体のおちこちがくすぐったくなるようなものなど、また「ストリップS M劇の体験」毒婦の地獄責め」富士春波氏E.T.Cなど——。魚なら、いま海から取ってきたばかりのピンピンしてるのを、そのままマナイタの上で、ズブリノサクサクと生料理の如き、また、さらにある雑魚じゃないよ、とびきりの珍種だという発見が見られるようになったことを、私はウレシク、大書したのである。

ザックバランな好エッセイとしては、「S Mよ、今日は！」ハ奇クよ、健やかであれV保藤久人氏のを取り上げたい。裸の文章の強みというか——。大衆に好まれ（好む人は限定されるだろうが）しかも人間味のあるS

Mを書く為には、それ等（俗悪的な、刺激的な）を包含して、なお、かつ、エロチシズムを忘れずにサラリと書き流さなければならぬ。要は文才であると思う」という結論というか、提言をしているが、私はここに、「諷刺」を付け加えたい。そして、「好む人は限定されるだろうが」について、「奇クのSMマニヤとしてのプライドをもとう」と、裏付けしたのである。

まだ、言いたいこともあるが後は他の読者の投稿にゆずって。「Sの女性」読者通信の女性たち（三十九年度の読者通信から）」と「Mの女性」読者通信の女性（三十九年度の読者通信から）」芳野眉美氏のいつものがらの労作に敬意を表したい。なかなか、このような記録文は他のマネが出来ないお仕事である。ゴク로우サマです。

人間一つのことには打込むことは大変なことである。SMマニヤの今回の努力賞は「処刑される女」（斬首刑）黒田寿氏に贈りたい。ズバリ、ズシン、とよくも美女の首を毎回、チョン斬って行くことよ。こうなると、斬首のペンさばきも名人芸で、もう私などは△黒田寿△という名を思い浮べるだけで、ゾクッ、と背筋に戦慄が走る。

『SMカメラ・ハント』△増田喜代司・みゆき夫妻の巻△「鼻責版」夫婦善哉△辻村隆氏には、ただアリガトウゴザイマス——だ。随分御身体心配しましたよ。私の知るところめずらしくも、シナリオが一本、誌上にお目見得。「いちぢくの実を持つ女」葉山啓氏で「仄かな光がたゆとう画面の中を、美也子の身体で調理された御馳走が時には太く、時には、細く」の一節など、そして「20床の間の掛軸「不浄聖」」（黄金の水）に濡れそぼった墓石」ETC——これらは、おそらくは「五色の虹をはなって発散する美しき液体（六月号「夜は妖しく更けたれば」夜乃探郎より引用）」と、映画詩との連がりによる日本映画史上特記すべき初の異色のシナリオ誕生ではなからうか。（——「いちぢくの実」が何を象徴しているか……遠い昔にこんな流行歌がありましたね。知ッテシマエバソレマデヨ——とか）。

『奇クサロン』の冒頭「週刊サンケイ」の発禁・編集子の言葉は、前号（六月号）の「言論出版の自由」につづいて、ますますユーモア？ がにじみ、ペンも快調になってきたものと、いやなかなか編集子よ、ヤリマスネ。水野弘提供「出刃庖丁を凝せられた女」と

「三方にのせられた女の生首」いつもながら——これ又、黒田寿氏と並んで、こちら水野氏はフォトの方で技能賞もの。「サロン楽我記のため」の葉山啓さんよ、ヘソマガリどころか通人であらせられ、芸術家すぎますね。いとも詩的なシナリオ発表かと思うと、今度は「アメリカノ、ハイティーンノ、オンナノコ、イマ、カンチョウゴッコ、ムチュウデス——」など、ウレシイこぼれ話の御ひろう、感服しました。

「セーラ服哀歓」並川新一氏のは、さぞかし、美少女好みの夜乃探郎氏がよろこびそうなコント。カットもイカスね。△短歌△「鞭打抄」後藤図子さんは「噴きいずる汗にじむ肌いとおしむ小さきゴミのつきいるをみて」——が、体臭があふれるようで、うまいですな。

「夫婦プレーフォト」に寄せて新宮明夫氏。「身重のヴィーナス後日譚」瀬沼四郎氏も、興味深く拝見。「山原清子後援会座談会」は是非実現のあかつきは、その記録をフォト付で本誌誌上発表を期待する。（もう原稿用紙で十一枚目も終るところ、ちよつとゆっくりしすぎたネ、さあ、ラストにむかってカケ足だ！）

ともあれ、ゴール・インだ。パチパチと拍手木鳴って、これで幕――。

(終)

豊かで美しい裸身が、ねじれ合
い、からみ合い、互いに押しさえ込
んでフオールしようと思死になる
女体相搏つ女レス。

女王の好みのままに――

△啓子散華（続）より▽

高野原 美



女王は快心の笑みを顔面に浮べると、女たちの方に振り返っていった。

「それでは、これから日本の近代女性の中でもマゾNO. 1のグラマー、大塚啓子さんのマゾ演技を初めることにします。この楽しい余興を最後まで充分に味わって下さい。では用意を……」

女たちは、待ちに待った大塚啓子の白い豊かな肉体に課せられる責めが、いよいよ始まるというので、喜びの歓声を上げ、ざわめきが起った。誰の顔も真中に据えられた啓子の方に向い、眼は妖しい輝きを帯びていた。

侍女メアリーは、啓子にむかって云った。

「それではこれから始めますので、着衣を脱いで下さい」

啓子は、当然予想していたことではあったが、カッと熱い血が顔に逆流して頬がはてるのを感じた。

今日まで、奇クのモデルとして編集子の前では、何のためらいもなく衣服を脱いで来た啓子である。何の感傷も羞恥すらも感じないで、自信ある肉体美を、むしろ誇示して進んで下着を脱ぎすてて来たのである。しかし何

故かしら、今の啓子にとっては、裸になると云うことに強い心の抵抗を覚えるのであった。

モデルとして裸になるということは、ビジネスとして割り切ることもできる。また、マゾモデルとして多くの愛読者に、白い裸身を犠牲として捧げるのだと云う自負心もあり、むしろ裸体露出と云うことに積極的に馳りたてられる気持ちもあった。しかし、多くの女性の注視の前で、裸体になることは、やはり幾らからだに自信があり、裸になることに慣れていても、同性に穴があくほどじろじろと見られるのだと思うと、不思議にも羞恥心が沸々と湧きおこってくるのを抑えきれなかった。

「啓子さん、どうしたのですか。気おくれがしたのですか?……」

メアリーは、かたわらから促すように、また励ますように声をかけた。その声を耳にして啓子は、やっと脱衣の決心がついた。マゾ女性の第一人者と自負していた啓子も、やはり普通の女としての気持ちは、人一倍持ち合せていたのである。どうしても裸にならねばならないのだ。当然覚悟していたのだからと思うと、もう何のためらいもなかった。

上着を脱ぎ、スカートのファスナーをはずすと手早く脱ぎ去り、胸飾りの美しいレースの付いたヴィオレットのスリッパの紐を丸やかな肩からはずすと、足もと滑らせた。ブラジャーとピンクの薄いパンティ一枚になって立った啓子の姿は、官能的な妖しい輝きを放って、あたりを威圧していた。

その時、まわりの女達のうちから

「まあ、何んて素晴らしい身体なんでしょう」「これほど豊かな弾力に富んで張り切ったからだをしているなんて、このからだで責めを受けて悶える姿態は、素晴らしいものでしょうよ」

「ええ、早く見たいわ」

「乳のように滑らかな白い餅肌、若々しいボリュームのある美しい曲線、この曲線の躍動は……」

「そうよ、女王は何んと魅力的な女の余興を計画してくれたことでしょう。責めと苦痛に悶える女体というのは、これほど美しいからだでないかね。ゾクゾクして来たわ」

はやくも啓子のマゾに期待し心を躍らせて、思い思いに、これからの楽しい場面を想像して語り合うのだった。

「すべて取り除いて下さい。」

とメアリーは云いながら、啓子の背後に廻ると、もうブラジャーに手をかけて有無を云わさず除いてしまっていた。

啓子の丸くむっちり半球に盛り上った乳房が、厚い胸の上に突出した姿を見せた。薄く桃色をおびた乳暈の真中に、いちごのような乳首が可愛いくそびえていた。双の乳房の間の深い谷間に白い肌を透して薄い静脈が見える。思わず両手で豊かな乳房を覆ったが、それも一瞬の動作で、あきらめよく屈むとナイロンの薄いパンティを厚く広いくく発達した腰から、むっちり太く足先に流れている豊かな白磁の太腿にそってずらすと、素早く脱ぎ捨てて美しい裸身を女達のまえにあらわした。

「ご免」と云うとメアリーは、赤い丈夫な紐を手にして啓子の両手を取ると後手に廻し腰の上で両手首をしっかりとくくりつけて、啓子を女王の前に引立てた。

「啓子さん、それでは初めます。これからの私達の責めに対して立派にそのからだで応えて下さい。私達は、貴女が立派なマゾ女性として責めに対して、美事な反能を示し耐える魅惑的な肢態の美を、とくと拝見させてもらいます。では、覚悟は出来ていますね」

と女王は再度念を押すように云った。

「ええ、よろしいとも、お望みの責めを充分に加えて下さい。覚悟はできています」

とはっきり云い切った。

メアリーは、大理石の台の傍に引き連れて行くと、その上に仰向けに寝かせた。十七・八才位のギリシャ風の薄い布をまとった女が、早速ローソクを盆にのせてもって来た。

啓子は、二人の若い女性の手で両腕と足首をしっかりと台に固定された。それを見届けると、メアリーはローソクを手にとると点火した。啓子の横たえられた白い肉体の上でローソクの焰は赤く鋭くもえていた。

メアリーの手が伸びて、赤々と燃えたローソクが乳房の上で傾けられた。熱い蠟涙が流れ、ポタリとむっちり丸い型を失わずに胸の上に盛りあがっている白い魅力的な乳房の上に落ちてかたまつた。ジーンと灼けるような熱さが乳房全体に伝わり、啓子の胸はピクッと動く。ポタリ、ポタリ、熱い涙は無情にも流れ落ちて、柔肌の上で小さな盛り上りをつくって行く。その上にローソクが立てられた。人間燭台である。また一本のローソクがメアリーの手に取られ、それも乳房の上に立った。熱い灼け付くようなローソクの熱涙は

次々と啓子の餅肌の上に流れおち、その度びに

「うーむ、あ、あっ……あっ……」

と啓子は身をよじり、妖しくからだをくねらせて熱さに耐えていた。

六本の太いローソクが激しく波うち、豊かな啓子の裸身のうえで赤く輝き生きもののよう燃え続けていた。両乳房のむっちりした膨らみ、鳩尾お臍の両側の五カ所に立てられていた。これらのローソクは、この素晴らしい女体を責める序曲を奏でるオリンピックの聖火のように、光を影を柔肌におとしていた。心が太く長めで、周囲のロウが少いので意外にも早く燃え尽きはじめ、人間燭台の火はジジッとロウの塊りを溶かして流れ、胸から腹部にかけて灼けつくような灼熱感が酷しくおそいかかる。

「うーん、あ、あつい……」

激しく身をよじり悶える啓子の軀幹は動揺し、歯を喰いしばって耐える物凄しい形相を呈していた。

ジジジジジと音をたてて、心は横倒しになり、溶けたロウの中で最後の火を燃し尽そうとしている。殆んど直接柔肌に接して燃える焰は、最後の耐えがたい程の苦痛を啓子に

与えつつ一本一本その火を消して行った。啓子は、肩で大きい息を吐き火の消えて行ったあとも、暫くは激しい余韻に身をゆだねていた。メアリーの手によって、啓子の肌についたロウの白い塊りは取り除かれた。さすがに心が燃え尽るまで苦痛に耐えた乳白色の滑らかな肌には、赤く炎症をおこしてまんだらの紋様を描いていた。

女たちは、ローソク責めの苦悶の表情を楽しみ、夫々悦楽に耽って豊満な啓子の肉体の苦しみ悶えたその姿を思い浮べて楽しみを反芻していた。

(二)

啓子がローソク責めの苦しみより解放され落着きを取り戻すと、水責めが待っていた。

「では、水責めの用意を！」

女王の命令で、若い女が十立は入ろうかと思われる水桶を用意した。次の責めは啓子に大量の水を飲ませて、その豊満な腹部を思い切り膨らませようと云うのである。

金属性の漏斗が啓子の口に挿入され、しっかりと口に固定された。

メアリーは、それを見届けると、ひしゃくを取り水をすくうと漏斗の中に流しこんだ。

覚悟を決めていた啓子は、思い切ってゴクゴクのみはじめたが、咽喉を通らぬ水は口中より溢れて頬から顔面に、冷たい感触をのこして流れた。

四馬孝 倒錯美緊縛画集

(題名) 美女のいけにえ

大中判印画紙焼付五枚一組 一〇〇〇円

略号(えと)

一、女体解剖台

黒くて冷たいレザー張りの台上に逆エビ縛り首縄姿で載せられているのは、齡二十才の美女。身体の前をむきだしにして、台上にころがされたのに対して、これから加えられようとする嗜虐のかずかずを暗示する恐ろしい道具が彼女を冷たく見下している。

二、嫉妬の鬼

絶世の美貌の妻を持った平凡な男は、あらぬ嫉妬に悩まされるものだが、自分は醜い容貌でありしかも、妻はホステスのナンバーワンであってみれば、嫉妬の鬼となるのも又当然であろう。これは若くして美しい妻を持つ夫が、その閨房に於て浮気の相手を白状させるシーンである。

三、鼻料理プレー

顔は女性の生命であるが、鼻は又、その大切な顔の中心に位して女性変貌の中心を

それを見て、メアリーは、口に注ぐ水の量を加減しながら遠慮なく注ぎ込んだ。最初の中は、休みなく流れこんで来る水を飲み込んでいたが、どんよりと重たく感じられ腹が膨

なすもので、男心をそそのかす中心でもある。美しい女性の鼻をいたぶるのは、これ又Sマニヤの醍醐味である。大事な鼻をツンと突き出して、身動きもできないように手足を拘束された美女が、今やその鼻、鼻孔を男の手によって、思うままに料理されようとしているのだ。

四、涙を舐める男

ぱっちりとした瞳。房々とした丈な黒髪は、色白の肌によくマッチしている。乳房や腰部には、むっくりと肉がのっているが、全体にはほっそりとした身体つき。その華奢な裸身をくびるように掛けた麻縄、そして身体を真二つにするばかりに締めつけた革紐の首縄、股間縛。今や皮ムチの鞭打にあつて、苦渋に流した大粒の涙を、男はペロペロと如何にもうまそうに舐め続けるのだ。如何にもうまそうに

五、山小屋の一夜

リユックを担いで楽しい山登りの一日が終って、山小屋で一泊を求めた乙女。山のけがれ知らぬ清純な空気と同じく、彼女も又、山の美しさに憧れた十九になる清純な処女であった。しかし山小屋の一夜は、彼女にとっては怖い悪夢の一夜であった。そこには展開されている。

満してくるに従って、その速度が極度に鈍って来た。二立位も注入されただろうか。お腹が重苦しくなり異様に膨らんでいるのが、啓子自身にも感じられるのだった。水は、腹部全体にどっしりした威圧感を与え、一寸気を抜くと胃の奥から逆流して口から溢れ出ようとする。それでも、なお水は注ぎこまれ、お腹の皮膚は白く緊張して伸びきり、大きく膨れ上って蛙腹を呈して来た。

女王は、苦しうに水を飲み込む啓子の顔と、次第に膨らみを見せて行く啓子の腹部とを、交互に見ていたが、つと傍らに歩み寄ると弾力を失って固く膨満しているお腹をポンポンと掌で叩いて腹壁の張り具合を調べた。そうして、女王は傍らの若い女に何かを命じた。夢中で水を飲みこみ、鉛を飲んだような重苦しい威圧感と嘔吐感に悩まされている啓子には、その声が聞える筈もない。水が注入されるのが中止された。啓子がほっと一息ついた時、ガツンと凄じい圧迫を腹部に取ってガバガバと水が吐出された。女王に命じられた若い女がその白いすんなりとした素足で台上に立ち、その足を啓子の膨隆した腹に置き、力一杯踏み下したのであった。その白い足は腹中にめりこみ、生温い水がゴボゴボと

音をたてて胃液とともに吐き出される。遠慮なく足は啓子の腹部を踏み付け、腹の上で踊る。その度びに腹は窪みをみせて、水は勢いよく吐出された。啓子は夢中で吐出した。

水を完全に吐出して、腹の膨らみが消えると、再び水が飲まされ、大きく膨満すると、啓子の精神は、もうろうとなり、神経は疲れ果て、顔面は蒼白になり頬を引きつらせていた。何回となく繰り返され胃の中は全く清浄に洗い流され、澄み切った水が吐出されるようになると、やっと許された。啓子はもう息も絶え絶えの状態であった。

昔、徳川幕府がキリスト教を禁じたとき、キリスト教徒たちは禁制のおふれに頑強に抗して秘かに隠れて聖母マリアの像や磔刑のキリストを祭り、異教徒の弾圧に対して徹底的な抵抗を示した。そのとき、キリスト教徒を撲滅し根絶するために踏絵を行ない隠れキリシタンの発見を行った。主イエスキリストや聖母マリヤの像をどうして足で踏みつける等という不敬な行為ができようか。キリスト教徒たちは、忽ち小役人の手で捕えられ改宗をせまられ、あらゆる責苦が課せられた。

このキリスト教徒の受難史の中に、やはり啓子が息も絶え絶えになるほどの苦しみを味

わった水責めがあったのを記憶している。水責めは、吾が国だけでなく西洋においても有名な魔女裁判のとき行なわれたと云う記録もある。

この水責めは殊に若い女性を主として行なわれたようで、役人たちは彼女らを井戸端につれて行き、その冷たい土の上に両手を後手に縛って横たえた。この時には、着衣を剥いで女性の羞恥本能を刺戟するということは行なわれなかったようである。着衣のままで行ったので豊満な乳白色の柔肌によっておおわれた腹部の妖しいまでに美しく膨隆した妖美は、当時の役人たちには観賞できなかったようである。

外国では、女性の豊満な皮下脂肪の美が早くから認識され、絵画となって描かれリユーベンスやルノアールのヴィナスが生まれて観賞されて来たのであるが、吾が国においては僅かに浮世絵において、女性の、それも細っそりとした柳腰の女の裸身が観賞されていたに過ぎない。それほどであるから西洋中世期における妊婦の裸体美観賞というような気風もなかったし、まして豊満なリユーベンスの裸婦に見られるような腹や腰、臀部に美事に脂肪がのった女は理解できなかった。腹部膨

満の妖美などは美的観賞の対象とは、決してなるものではなかった。

彼らにとっては、切角公然と、この腹部膨満の蛙腹の美を、観賞する機会に恵まれながら、その機会を逸してしまっているのは残念なことであると思う。また今日の我々にとっても、蛙腹の魅力的な妖美の記述を見ることができないと云うことは残念である。井戸端に寝かされた若い女性が、井戸水を腹一杯のまされてポンポンに膨れ上った腹部が、役人の土足で踏み付けられて、ガバガバと水を吐出し、息も絶え絶えの苦しみに耐え抜き、その後の牢での責苦にもイエス・キリストの名を呼びつけ磔刑に処せられ天国に昇天して行ったのである。

いまの啓子は、丁度リング上でのボクサーに似ていた。一ラウンド激斗をやって、くたくたになっても僅かの休息を与えられるだけで、すぐに闘志をむき出しにしてゴングとともに、次の斗いにかり出されて行くそれに似ていた。

蒼白になった顔に赤味がさし、荒々しい呼吸がもとに戻ると、もう次の責苦がまっているのだった。

(未完)

M資料分譲品一覧

○新人S女性出現○

遅ましき股に挟まる

大手札四枚一組 略号(あとお) 〇〇〇円

素足の脂がべっとり

大手札五枚一組 略号(あて) 二〇〇円

縛った男をムチで料理

大手札十枚一組 略号(あさ) 二〇〇円

女王様の人間便器になる

大手札十枚一組 略号(あす) 二〇〇円

蟻涙の雨を全身に浴びる

大手札四枚一組 略号(あせ) 〇〇〇円

尻の下につぶされた男

大手札二枚一組 略号(あた) 六〇〇円

エビ責めに弄ぶ女

大手札六枚一組 略号(あそ) 四〇〇円

神酒を与える女神

大手札六枚一組 略号(あち) 四〇〇円

咽喉輪を股責極楽

大手札四枚一組 略号(あつ) 〇〇〇円

素足の足舐と嗅香

大手札五枚一組 略号(あこ) 二〇〇円

顔面に女の尻が乗る

大手札七枚一組 略号(あう) 一五〇〇円

人間犬の芸仕込み

大手札十枚一組 略号(あえ) 二〇〇〇円

女の尻に顔がつぶれる

大手札三枚一組 略号(あく) 八〇〇円

足指に挟んだ菓子

大手札二枚一組 略号(あの) 六〇〇円

男を縛って弄ぶ女

大手札十枚一組 略号(あに) 二〇〇〇円

尻責めと股責め

大手札十枚一組 略号(あぬ) 二〇〇〇円

大男の訓練風景

大手札十枚一組 略号(みら) 二〇〇〇円

男を刺し殺す美女

大手札十枚一組 略号(みむ) 二〇〇〇円

男を尻の下に敷く

大手札十枚一組 略号(みう) 二〇〇〇円

女の足下にうごめく顔

大手札六枚一組 略号(みれ) 四〇〇〇円

汚物を戴く男

大手札六枚一組 略号(みわ) 四〇〇〇円

男を馬にする美女

大手札五枚一組 略号(みか) 二〇〇〇円

人間椅子の御褒美

大手札五枚一組 略号(みお) 二〇〇〇円

飼犬に餌を与える

大手札四枚一組 略号(みた) 一〇〇〇円

浣腸器で男を弄ぶ女

大手札三枚一組 略号(みつ) 八〇〇〇円

股で絞められる首

大手札三枚一組 略号(みね) 八〇〇〇円

芳香を嗅がす尻

大手札二枚一組 略号(みな) 六〇〇〇円

人間馬の調教プレイ

大手札三枚一組 略号(まの) 五〇〇〇円

足舐めの奉仕と強制

大手札三枚一組 略号(まわ) 五〇〇〇円

股責めにあう男の顔

大手札三枚一組 略号(また) 五〇〇〇円

女に縛られて弄られる

大手札三枚一組 略号(まひ) 五〇〇〇円

踏みにじられる顔面

大手札三枚一組 略号(まな) 五〇〇〇円

肩車に奉仕する青年

大手札三枚一組 略号(まは) 五〇〇〇円

男を縛って玩具にする

大手札三枚一組 略号(まて) 五〇〇〇円

首を太股で絞めあげる

大手札三枚一組 略号(まや) 五〇〇〇円

灰皿にされた男

大手札四枚一組 略号(そほ) 六〇〇〇円

裸女の長靴に悶ゆ

大手札四枚一組 略号(そに) 六〇〇〇円

美女に飼われる犬の生態

大手札三枚一組 略号(そろ) 五〇〇〇円

美女の手で縛られる過程

大手札四枚一組 略号(そと) 六〇〇〇円

女御主人に使役される男

大手札四枚一組 略号(そち) 六〇〇〇円

美女のおいしい足を戴く

大手札四枚一組 略号(そぬ) 六〇〇〇円

むしゃぶりつく素足の味

大手札三枚一組 略号(そは) 五〇〇〇円

凌辱と美女のなぶり者

大手札五枚一組 略号(そり) 七〇〇〇円

素足を舐める構図

大手札四枚一組 略号(そへ) 六〇〇〇円

通刊二〇〇号突破記念エッセイ

風俗文献出版史上の異端児!!

「人間、梅原北明伝」 試作メモ

久 我 庄 一

「人間、梅原北明伝」

△如何に無害なことでも法で禁止する時、大方の人はそれを悪いことだと思う。▽

—サマセット・モーム—

「前書」

『人間・梅原北明伝試作メモ』——このタイトルを書くまでについて——。

新しい風俗文献誌を標榜する奇譚クラブへ

の、ぼくの投稿者としての第一声は、本年四月号「『奇ク』」に期待するオーソドックス路線」という便りであった。その際も「昔、梅原北明などが『グロテスク』など——と冒頭に、ぼくの最も関心をよせる、風俗文献出版史上の異端児たる北明の名を上げることが忘れなかった。ぼくの半生涯に至る古書蒐集趣味は、とりもなおさず、「風俗文献蒐集マニヤ」であることを裏付けしていたからである。

その間、ぼくはどれ程の熱っぽい思いで、この梅原北明の名を、蒐集せる書物の中で眺めたことであろうか。明治の言論弾圧が筆禍史の雄、宮武外骨を生み、大正震災後の禁圧が叛骨の北明を生んだと、巷間に伝えられる。その「軟派の出版界に君臨した二大異端者を挙げるなら、梅原北明と宮武外骨の二人に匹敵するものは先ずない」、と評讃される、一方の雄たるロマンチストでもある（北明のその狂的とまでよばれる膨大なる風俗

文献出版の中に、ぼくは彼なりのユウトピヤの世界を夢みるのだが」

異端児・梅原北明伝を書き上げることにはあの内外の推理作家が、生涯に一度は、本格的な作品「密室」ものに取組みたい野心と情熱を持つように、ぼくは、ぼくなりの北明伝へのこうふんは、長い間の懸案でもあったのだ。

ただし、風俗文献蒐集家でもあると共に、SMマニヤでもあるぼくは、ぼくの「常に新しい発見を」という日頃の自論が、梅原北明伝を書くことをおさえた。ぼくは、どちらかと言うと、風俗文献を研究する意味では「もっぱら読んで楽しむ」オースドックスな方だが「書く」態度は違う。サルマネではなく、ぼくの物を書きたいのである。ところが、この伝記という性質は、書かれる本人がまだ健在のうちはよいが、いまは亡きということになると、大同小異の（タネの出どころは大体限定される）物になる恐れがある。それに、山積する文献を適当にキリヌキ、ペンではなく、ハサミとのりで構成して、「伝記」が一つ仕上るという方法がおおむね従来のやり方でもあったと思う？そしてこれはこれでけっこう調法がられた手段のようだが？（だが、いまその賛否を長々とやっているとひまはない。）

——それだからといって、北明氏と一面識なく、やはり、伝記に文献的な裏付けが必要となれば、北明に関する従来のエッセイなどもハサミとのりをもってあさることになるのは必定だ。（型破りといっても、デタラメだけはしたくない）あれや、これやの考えがぼくのペン持つ腕をにぶらせたのである。ところが、奇クファンとなつてより、ぼくは、その内容を耽読するようになってから、多くのSMマニヤの方々の真剣な、赤裸々な言葉に触れた。そして、「事実と真実とは違う」いや、ときに到つて「真実は事実を超える」とを発見した。例えば、常識的なモラルの世界から生れた既成事実「アブノーマル」という言葉の解釈だ。または「悪書」という文句の本来に意味する事柄でもある。

——ぼくは、やっとペンを走らせる気持ちになった。「虚構をもって真実に迫る」という小説的な発想形式を、ぼく流に応用させてもらって（本論の処々にフィクション的なものが感じられたら、前記のように受け取り御了承乞う。）あくまで、試作メモ程度にやってみようと思う。

△前書、参考引用

◇「図書新聞」掲載「発禁本周遊記」

城市郎の「梅原北明」の項

◇「あまとりあ」誌「近世性研究家列伝」齊藤昌三／第四回／

◇

かつて東に風俗文献出版界の異端児・梅原北明があった。そして彼は、とかく、「エロ本」という言葉から来る非合法なる手段をろうしがちな出版界をよそ目に、堂々と古今東西の軟派作品の翻訳紹介及び月刊「グロテスク」などを、合法的手段によってこれも発行をつづけ風俗文献的な評価を裏付けした特殊な存在ではあった。

いま、世界にもまれな出版の自由、文化国家？としての日本に、どう言う風の吹きまわしか、「悪書追放」の声、巷に上るとき、彼の北明の合法的出版の本道を受けつぎ、ここに通刊二百号突破を旗印とした、新しい風俗文献誌奇譚クラブが、多くの読者の支持を得て、箕田京二編集により、発展を続けている。もし、梅原北明此処にありせば何をか言うか。「過去を知るは、明日を、そして未来を知る」とか、とまれ、異端児、梅原北明の時代に対する叛骨と諷刺の足跡を訪ねることは、意味さらに倍することではなからうか。

◇

——その日。くわしく記せば昭和二年六月二十八日のことだった。このところ、初夏だというのに、どんよりとした灰色の毎日がつづき、日中はよいが、夜になると、どこかうすら寒いようなおかしい陽気だった。すでに梅原北明は、彼の処女出版、ボッカチオの、「デカメロン」上下二巻が出版（小石川林町の朝香屋書店）され、その出版記念をかねた浅草の陵雲座で五九郎と組んでボッカチオ祭を催し、ドンチャカさわぎをし、酒井潔、佐藤紅霞などと共に「文芸市場」社に陣取り、創刊当時のプロ文芸的な色彩を、風俗文藝的なピンクむードに切替え、耽奇の探美書の珍文献など、いとも妖し？ げなタイトル付の「文芸市場」誌を。——また同発行所在地（東京都牛込区赤城元町三四）から、文芸資料編集部としてふた股かけて、『変態資料』（こちらの方は、上森健一郎が編集発行人だが、北明の息がかかっていることは論をまたない）。も発行し、つとにこの種マニヤの間で名声を上げつつあったが、その決定打とも言えるべき『グロテスク』は、まだ誕生していなかった。

北明は、ふと思った。

へたしか午後四時から、おれの家で樋田の初七日追悼座談会をやることになっている、だが、提唱者のおれが、いくら急用ができたとしても時刻ギリギリにもどるのもわるい……。でも死の二日前まであれば本誌の仕事に夜半まで熱中していた、あいつのことだから、きつと印刷所へ廻ってきたおれをよろこんでくれるだろうさ。▽

彼は、その校正半ばにしてとつじょピリンの中毒で倒れた樋田をいまさらのように生々しく追想しているうち、樋田が手がけた号に掲載されることになっている知友のサトウ・ハチローの『東京不良少年往来』記を思い出した。寄稿を頼んでからなんと二年四月ぶり、手に入れた原稿だ。創刊以来の事務家で、雑誌の営業・会計・印刷・校正・通信回答、庶務一切を背負ってきた樋田は、おれ以上に、この原稿を、鬼の首でも取ったようによろこんでくれた。もしサトウ・ハチローがいまここに現われたら、きつとおれの肩を叩き、例の革命歌の節でこんな哀詩を吟じてくれるだろうか。北明は、またしても落るなみだをぬぐうともせず、つぶやくように唄う。

「吾々の研究が

罰金事件を招く

留置場に責められた

吾等の同志斃る

悲しみの深き日よ

六月の二十二日

祭壇の亡骸は

「文市」の未来を守る……」

◇

『グロテスク』昭和三年十二月号（第二号）と、翌昭和四年一月号（第三号）がつづけて発禁となった際、その制約を逆手に取り、早速、当時発行の中央紙（読売新聞などに）を利用して、太い黒枠付の『グロテスク』「新年号死亡御通知」ともいうべき、おそらくは出版界前代未聞ともいうべき珍広告をデカデカと出し、アッパレ、その叛骨振りを見せ、あまねく天下に、風俗文献出版界に梅原北明ありの英名？ をはせた——が。そんな人を喰った彼にも「友を思つては、友に泣く」というようなセンチメンタル、あまりにも人情家的な一面もあったのだ。北明の内面をより探る前に、ちなみに、彼の自称、禁止（金鶏をしゃれのめした）勲章？ 授与あたりのウルトラC的レコード振りを眺めてみよう。

家宅搜索を受けること数十回、刑法適用を受けた件数二十五。出版法適用のもの十二種。



〔変態資料〕 第四号

大正十五年十二月十五日印刷（第一卷第四号）大正十五年十二月廿五日発行（毎月一回廿五日発行）とある。表紙は毎月号同じもので斜めに貼ったラベルのみが号によって変った。

罰金の合計当時の金で一万一百円以下。（ほくの近所で、大正後期に二百坪位の山をオール五百円程度で購入した地主があり、現在にいたって手離すことになったら、約四百万円位で売れたという話がある。勿論、土地相場は、変動がありすぎるとしても、北明に課せられた罰金が、当時としては如何に破天荒なものであったかということだけはこれから推察されようか。）体刑五年以下という出版人としては、まさに、まれにみる異端児である

ことだけは、うなづけよう。
——ここで、いよいよ、では、なぜ？ 彼がそのようなことになったのか。または、当時の北明が大活躍をした時代背景はどうだったのであろうか？ 彼が、これだけの壮挙？をなした影に同志の動きはどうだったのであろうか？（ぼくはこの、北明一党ともいふべき彼らの精神的なつながりによる支持を重要視してはいるが）北明の出版に対して、読者の受け取り方はどうか？（これもぼくは、関

心をもっている）とにかく、梅原北明は、生きていくうちに、すでに伝説的な人物となつて巷間あれこれとうわさの的にされていたので、その名声と、おびただしい風俗文献出版物は後世に残っていたとしても、彼のつつ込んだ内面的な動機は不詳のようだ。

当時の一党でもあり、中学時代の同期であったと言われる青山倭文二が（昭和二十七年一月末、阿佐ヶ谷の自宅附近で事故死）最後のエッセイとも思われる、『異端者の生涯』で「彼は明治大正期の秘密出版業者と異り、堂々と古今東西の軟派作品を刊行した。彼の奇略縦横の才は、何時しかこんな方面に向わせてしまった。でも彼は初めからこの方面に研究心や興味あった訳ではない。彼の幼少の頃からの人となりを知っている私は、どうして彼がこうなったか、時に奇異の念にかられる事さえある。」と言っていることからしてもだ。でもぼくには、幸いにして、「前書」でも述べたように「事実と真理は違う」という考え方と、小説的な手法を応用、何んとかやって見よう——という気持がペンを走らせる。

いまぼくは、大正十三年十一月発行、アカ

ネ書房刊の梅原北明著『殺人会社』（前編）

『悪魔主義全盛時代』の三一八頁ばかりの書物を手にしている。ぼくかなりの考え方から、

人間・梅原北明のその秘密のすべてを解明するとは、言わないが、その一端なりとも推理できる最も重要なキイを秘めている文献とは思ふのだ。他の作家（一般的な意味の）は知らず、アブノーマルな世界の、なんたるかを知ろう、新しい発見をしつづけようと、その中であって、小説らしきものを（SM文学とも）書き、発表しようと野心を抱くべくにとつて、あまりにも異常な世界をモチーフとしたこの変格探偵小説？（現在は推理小説と称されている）とよぼうか、奇々怪々なるアブ小説とでもよぼうか、『殺人会社』に深い関心をもつ。また、そこに、小説という共通の広場から何かをたしかめられるというスリルも生じる。しかも、ぼくの知るところでは、あれ程に膨大なる風俗文献を世に出した出版者でもあり、またエッセイに翻訳にETC—文筆家としても、大量生産したと思われる北明が本当の意味での（ボッカチオの「デカメロン」出版は、翻訳であり、『殺人会社』は自作である。）処女出版でもある、小説『殺人会社』が唯一？の彼の創作らしい作品と

して残されるようになったことに、ぼくは、非常な興味を抱くのだ。

『作者註』（いまはまだ『殺人会社』本文の内容紹介の章までいってないので、ごく必要な参考文献部分のみでとどめるが）またこの「後編」は発行不詳？識者の博学を待つ。

一三九頁などは「……」が、その一頁を埋めて、文字など一行もないというスリル？だ。目次も、「一六、紐育の大怪事」〇〇〇〇〇〇などをはじめ（原文通り）として「二三、屍姦」「二八、変人と狂人の境」「二六、鍵穴の芝居見物」まだある「二五、露出狂」など目次だけでまさにドキリ。

プロローグ（一頁）として【八百八万の神々を頭から馬鹿にしきって、人間と云う人間を、けだものの如くに尻にひいて、けいべつしようした或る男が、死にのぞんで、此の世の中へ残した最後の言葉は「おれは、これ限り蛆虫の世界とは絶縁してやる」人間達「そんなら何処へ行くんです」その男「きまってるじゃないか？極楽へさア。そしておれはその平和のカクラン者になるんだ。」】

◇作者註 よみやすいように現代文？になおした。

諷刺的、叛骨的な、やがては狂気のようにしやにむに断崖をおそれず出版つづけたエデオロギーを。そのジャンジャン風俗文献出版事業をはじめめる前夜をここにまずよみ取ろうとし（作者註、プロローグに）。「自己批評」（二頁）という「一九二四年八月三十一日、塩原、上会津旅館にて、梅原北明」の一節に眼が触れる。

◇作者註、当局の「殺人会社」出版に対するカンシヨウについての一文

「恐怖も凄惨も、極悪も、その程度を越す所に社会の安寧秩序や道徳標準に触れて、何でも芸術の自由が失われる今の日本にあつては止むを得ないことだ。」（傍点筆者。あとは原文通り）

◇作者註 「翻訳文芸発禁考」齊藤昌三・編（あまとりあ終刊号付録Ⅴによると巻頭「編集部」として「明治以来約七十年にわたる封建的な圧迫から解放された文芸作品を今日から見れば、余りにも馬鹿馬鹿しい小児病的断崖で」ということを見ても、当時の「程度を越す」ということがどのようなものであったか、北明の「批評」に名をかりた芸術的な怒りが判るようだ。

はじめは「小説家希望」であつたであろう

「ボクの責め方」

宝塚二三夫



哀愁を帯びたマスクで男心をそそる京子さん

？（作品全体に流れるアブ的な文学への情熱がぼくの気持をうつ）北明がこの失敗？が（「殺人会社」は、その特異な世界を描いた評価されるべき小説なのだが——当局よりズタズタにされたこともあるが、そう世にもてはやされなかった？）皮肉にも、翻訳した「デカメロン」によって、いちはやく世に名が知られるようになり、それがキッカケとなって、風俗文献雑誌「グロテスク」の前身、

『文芸市場』誌が、文芸市場社より発行されることになった。（このへんが、梅原北明の人間像に迫るカンジシの所のようなので少しくつつ込んで考えて見よう。）

◇

ぼくは、小説家としての「感（かん）」というものを大切にしている。それは長年の経験をもつベテラン刑事が、そして新聞記者が「科学的」な計算を、あるときは嘲笑するか

のようにホシ（犯人）を、特種（ビッグニュース）をあげることに通じるようだ。——いま眼をつぶると、異端児梅原北明が、その波乱にみちた人間ドラマの主役として晴れの舞台に現われる背景は、どうしてもあの「デカメロン」出版による『ボッカチオ祭』であり、「殺人会社」出版は、それにいたる下積み重い風景としてより浮んでこない、その他の彼は、まるでカスミでもなかったように、ピンとぼくにはせまって来ないのだ。

——おそらくは、この明暗ある二つの人間的な事件にふれる、他の北明像は学校出たての外交記者でもあり、雑文家？でもあり、うつぼつたる文学的な野心に燃える当時のインテリが、だれでも抱くようにアカ。

◇作者註 共産主義的な思想にも同調した、耽美的な性傾向をもった一社会人ではなかったろうか。さて、この二流新聞記者時代（東京）に巷間に伝えられるエピソードがある。

「明治三十一年一月に富山県で生れた。後に早大英文科に学び、花の都は東京でブナヤ稼業とはなったが、タキシードか何かを着込んで大臣をおっかけ廻した」——などだが。

これは、この道のサムライ？くもの如くむらがるジャーナリズムの世界の事として、そ

う、ぼくは取らない。むしろ彼が文芸市場社時代に、当時の時事新報の社会部長だった片岡昇は、新しい風俗史を作るつもりで、各方面の時相を「カメラ社会相」として一冊の本に収めたものを、北明の社から美装して出版したことがあった。この中には時の大臣連も無論とり入れてあったので、茶目の北明は議会開会中の大臣室へ押しかけて一本を献ずると共に、自分用の一冊には次ぎ次ぎと署名させた。田中義一大将は勿論、岡田啓介ら（◇作者註、以下氏名のみ略す）の十人が俳句や詩文までかいてくれた、限定第一番本を得意然と抱えて帰ってきた。に茶目気というか、自由精神というか、つまり、ユーモアもあった、北明の真骨頂をぼくは見るのである。

——とまれ、彼がドラマ（人間的な事件）の花道に足をふみだす前に、もっとよく焦点をあててみよう。



梅原北明が「学生時代（早大）から、「明治時代の新聞社会面記事の大系的編纂に心掛けていた」ということにはぼくは興味を抱く（作者註、これは後に「近世社会驚異史」出版として大成する）

新聞記者時代に（現在と違って、まだ、こ

の時代の新聞社は多分に内職？ できる余地があった？）本職の記者と「童話劇、少女歌劇、映画物語、翻訳原稿」などを書きとばす雑文家？ の二股わらじをはいた生活？ の中から、一本立の文芸作家をこころざして精一杯に生来の好みでもあろう？ 耽美的な異常な世界をモチーフとした大野心作？ 『殺人会社』を世に問うたが、——ごく限られた『殺人会社』著作後援者の間と、一部のこれに関心をもつ読者に迎えられる位だった？ その焦そうの中！ たまたま、小使いかせぎ？ と思っていた？ ボッカチオの、『デカメロン』の訳本出版が生来の茶目気とハッタリ？ 精神もあり、いっぺんに伊太利大使を招くという、前にも記したような「ボッカチオ祭」という、たいしたドンチャカさわざ？ とバクハツしたのではないだろうか？ かの詩人バイロンが、その処女作品が世間に発表された時、絶讃の中で「われ一夜明くれば天下の人」とさげんだ。

彼、梅原北明もこの華やかな前奏曲に送られてやがては大禁止？ 勲章を当局より授与？ されるという風俗文献出版への第一歩を「文芸市場社」からふみ出したのではある。「文芸作家ニナレナカタコトがムシロ彼ニ

トッテ幸イシテ？ 出版界ノ異端児梅原北明が此処ニ生レルコトニモナッタ」こんなところがホントに近いのではなからうか。もう一つなどがある？ それは、なぜ？ プロレタリア的な（左翼的な）世界に飛込んだかということである。▲「大正十四年末に文芸市場社より「文芸市場」誌が創刊された。これは出版は同人制で梅原北明、村山知義、今東光（現在も小説「悪名」など発表している花形作家）井東憲、佐々木孝丸、金子洋文など数十名で、特に大正十四年末——、歳末の雑沓する神楽坂上の街頭でバナナうりの口上よろしく、同誌掲載済の原稿を「原稿市場」と称してさばいたことは有名ないまなお伝えられる話だ。」▽

——当時は「プロ」でなければ人ではないと評される程のようやくプロレタリア全盛時代来たる——というところで、それにつれて、当時の文壇の新鋭の多くは、プロレタリア文学畑出身でもあった。文学青年でもあったろう北明にとって、左翼的な実践活動というよりは、むしろ、はじめは何んとか同人（文芸市場）になることによって（「デカメロン」出版で名も売れてきたところだから、文壇に乗り出すチャンスでもあった）文壇進出への

「ボクの責め方」

宝塚二三夫



手錠をはめられたみどりのあて姿

足場にしようと考えたのではなからうか？

(それが出版への道とはなった点に面白い人生ドラマを感じるのではあるが)。それに個人の力よりは――

◇作者註、「殺人会社」出版で失敗？ している。

――すでに文壇に乗出している彼ら(井東憲ら)と手をにぎることによって――という北明なりの計算？ もあったと思う。ところが

創作としては少しもこれだという傑作も生れず(多分?) つづいて「ロシア大革命史」を

紹介したのが当り、

◇作者註、前にも記した通り学生時代からの社会面記事に対する関心。

――編集的な面にも興味があったところからようやく創作作家たんとするよりは、相づいでの文献紹介に気をよくし、そこから出版事業への野心が生じてきたのではなからう

か。

◇

プロ文芸よりエロ? 文芸への転回への動機について――。

ここで、まず「文芸市場」社創設当時のそこから見た文芸ジャーナリズム的な状況をのぞいてみよう。

「すでに、菊池寛の「話の屑籠」? とかで好評をよんだ『文芸春秋』(いまも健在。)が軌道にのり、一方『不同調』が創刊され、それと前後して『文芸公論』などの文芸誌が続々と刊行され、まさに文運隆昌、百花繚乱のとき。プロ文芸と銘打つ「文芸市場」誌のこと、早速プロレタリア作品傑作号など特集ものを出し、発展の一步をたどっていたが、(作者註、「マルクス主義文学運動は、プロレタリア革命という形の中に大正期に起った自由主義・民主主義の運動や、ニヒリズム(虚無主義)や、アナキズム(無政府主義)の運動を吸収して、経済観念との改革運動として大きくなった。――そしてまさしく発足当時の「文芸市場」社は、その渦中にあつたわけだ。)」

ここで、次のようなことを考えてみよう。

アナーキズムと、ニヒリズムと「アブノーマル」な世界との結び付である。再び、北明の小説『殺人会社』を取り上げて見ると。その副題「悪魔主義全盛時代」のヒーローは恐るべき秘密結社員でもある三太郎という男だ。

そしてアナーキスト（無政府主義者）であろうと思われる。これは、あまりにも異常な耽美的な世界にあるボヘミアン（異国放浪）的なものと、左がかったエデオロギーがどこかで、アクシユをしていることを物語っているもので、——特に耽美的なる文学青年であるうアナキスト的な北明が、当時文芸的なジャンルとしては、最も新しい形式をもつ、人間社会の裏面実体を追求する「プロ文芸」の世界に飛込んだであろうことは、以上の点からも推察できうるのではあるまいか。

（「作者曰く」文壇進出への野心とアブ的な性傾向とのかねあいという北明像のこのへんが、デリケートなむづかしいところか）

そこが、アナーキストでありながら実践的な行動家ではあり得なかった、その原因がポツカリとのぞかせているのではなからうか。

たまたま、そのような月日をへたうち、昭和二年に、かの『昭和の軟派本出版で一世を劃した』と伝えられる『ファンシー・ヒル』

（佐々木孝丸訳が『文芸資料研究会編輯所』として「文芸市場」社内から出版され、ここから「赤色から桃色」へと「急転回」したと世評される梅原北明の華々しいクライマックスが展開されることになったわけだ。

△作者註▽

◎プロ文芸としての「文芸市場」誌時代に出された「プロレタリア作品傑作号」には、つとに他誌『文芸戦線』などで評判をとったプロレタリア作家・葉山嘉樹の傑作「淫売婦」など、その他、十数氏の作品を集めた。

◎『殺人会社』のモチーフは、作者でもある梅原北明の分身でもあろう「僕」が「どうも原稿が書けなくて困る」と暑いのでうんざりしている所へ、学校時代の同期生でもある三太郎が五年振りに「アメリカ」から帰朝、訪ねてきた。なんでも「全米一億五百万の人間が悉く恐れ、各州ではそれぞれ大懸賞を附して、警察が捕縛方を激励している」というまことに恐るべき秘密結社の一員に加っていることを打ちあけその彼、三太郎のあまりにもアブノーマルな話がこの小説の世界を構成している。

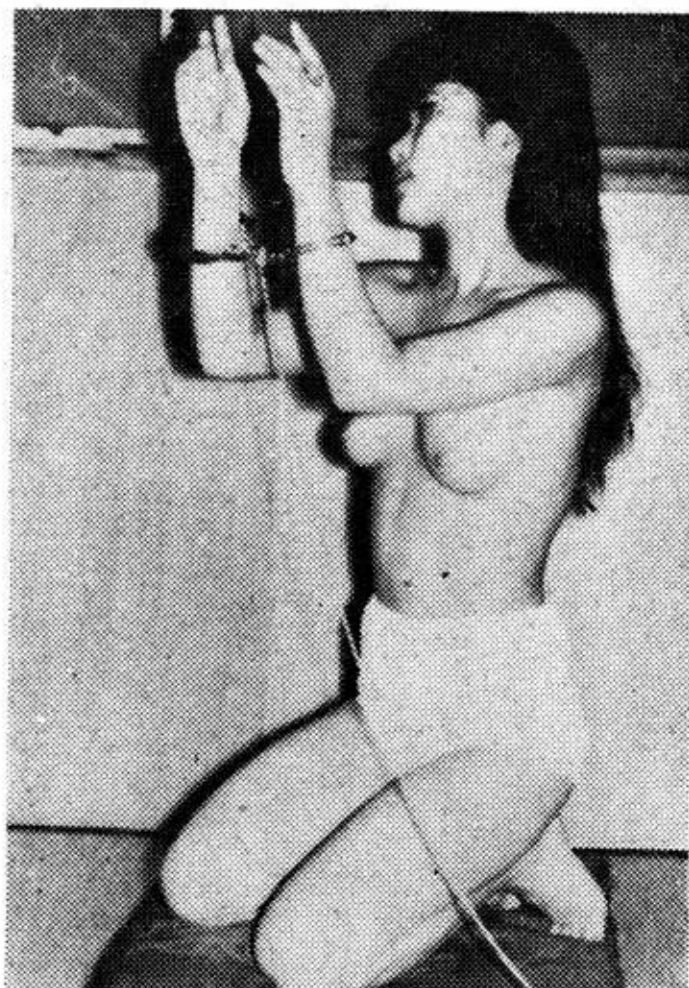


さて小説『殺人会社』を書き上げた当時より、梅原北明の内部に流れる自由精神は、あくまでも芸術的な（またはアナーキスト的であつたろう）人間解放であり、自由人としての真実さを出版活動が終るまで、つらぬきとおしたと考えられる。そうでないとかく「売らんかな」というだけのまことにお粗末きわまるようなY本をコソコソと出版するような当時の軟派出版界にあつて、とにも、かくにも艶笑本を堂々と合法的な方法で出版、（勿論、そのためにより処罰を受ける危険は覚悟の上で）風俗文献出版者として、その異端児振りをほしのままにした彼の人間像がぼくにはどうしてもじかに浮び上つてこないものである。しかも（この点が特に注目すべき所だが）その「出版物が艶本といってもそれは艶笑読物たる従来の読物の複製ではなく多くは、新しい性的研究ものや、文献、風俗書等で」どの出版物を見ても『風俗文献』的な価値あるものばかりであつたことである。

（「作者註」これは終戦后になって、おびただしく放出されたいわゆるゾッキ本のたぐいの殆んどと思われるものが、北明がかつて出版された風俗関係の書物のむし返しであつたという、カストリ雑誌全盛時代の

「ボクの責め方」

宝塚二三夫



パンツ一つの痛ましい手錠姿の純ちゃん

伝説? は前記の事実を物語っているのではあるまいか。これについては、読者の記憶もまだ新しいだろうし、時代も近いので詳細な点については触れないことにする。

◇

ぼくなりの新しい『人間、梅原北明伝試作メモ』もなんとかヤマを越えたようであるが小説的な発想形式によって、風俗文献出版界の異端児、梅原北明像が「人間」として少し

は浮び上ってきたであろうか……。このへんで、ホッと一息という意味でペンを軽い調子に北明のその風俗文献出版に乗り出すキッカケにもなった「フアンニー・ヒル」の出版楽屋話を文芸資料編輯部出版（『文芸市場』社内）編輯発行兼印刷人、上森健一郎の『変態資料』第六号「筆禍記念」と銘打たれた。昭和二年三月二十五日発行に見てみよう。（これは文芸市場社と当時の読者との結び付を側

面から見る意味でも興味がある）北明の同志上森健一郎の文章で本文、一四六頁に「警視庁の仰せ伝へます」とあり、（以下適宜抜スイ）「……十二月号に発表しました珍書・フアンニヒルが禁止になり、それが押収されると同時に十二史の方の崇拜史が禁止になってフアンニヒルの方で、えらい御目玉を喰って―中略―つまり読者諸氏の方で珍本、珍本秘中の秘、と拍手喝采賞讃の声の高いものほどお上の御役人から叱られる熱が高くなるのですな。両方にええことはないもんですな。フアンニヒルなど、いまは市価二十円するんですからね、―中略―つまり、本誌同人のねらいのマトは常に此処なんです。刊行後頒布価格より値が出るということですね」

◇作者註 我が国では「フアンニー・ヒル」の思「出」の方が通用語となって居り、ある娼婦の思「出」が語られるという小説。

―まったく発禁がむしろ風俗出版に本格的に乗り出す導火線とは、北明の面目躍如のところがあるうか。もうこの頃はすでに変態十二史シリーズを刊行やら、『文芸市場』誌発行やら当局からのお眼玉で、北明でんてこまの時でもあった。やがては大冊「世界好色文学史」など発行の下準備はできたわけだ。

◇作者註 当時は、約三十円位で、中流家庭の毎月の生活が十分にまにあっていたようだ。

◇

「作者註」いま、(昭和四十年)河出書房より『文芸』五月号が発売され、しかも、それには「独占企画」『フアニー・ヒル』ジョン・クリーランド、吉田健一訳／東郷青児画・八世界的な禁書として有名なこのすぐれた性交文学の古典は、昨年、英米両国で裏々たる論争・裁判の結果・二百年間の禁をとかれた。——ここに名訳を得て本邦初公開なる／＼の表紙に唄い文句の帯まで付けられて、堂々と一般書店の店頭にかざられる——。梅原北明、いま生きてありせば、如何と言おうか。「ザマアミヤガレノ」と、快心の意味をその表情にうかべるであろうか、はたまた苦笑にまぎらすか。

◇

梅原北明と、その支持せる人たちについて「事件の陰に女あり」とか、華やかなるフットライトを浴びる北明にも、陰の支持があった。

例えば、すでに記した

◎「文芸市場」誌創刊以来の天才的事務家、

樋田悦之助(昭和二年六月二十二日、校正中に斃れる)。

◎「ボッカチオ祭」まで催した、ボッカチオの『デカメロン』出版に協力者として直接伊太利の原書から直訳することに骨を折った敬友たる伊太利語の学徒、飯島信雄。(この人物は「デカメロン」の公刊を見ず斃れる)

◎青山俊文二は中学時代の同期生で、北明の一堂として活躍。「文芸市場」誌の同人でもあり改題『グロテスク』となつてからも旧知として寄稿及編集面にもタッチした。

◇作者註、前記あるのでここでは、これのみにとめる。

◎北明の女房役として活躍したペンネーム花房四郎(本名は中野正人)

◇作者註 『世界好色文学史』の編纂代表者として、中野正人という本名が出ている。

——北明があれば自由に活躍できたのは、花房の陰の力があつたからでブタ箱にも身代りになつて入つたり難問題にも進んで接触したので、北明の片腕とも見られた。北明との結び付は「文芸市場」創設時代からである。(昭和二十六年十一月二十五日北明におくれること五年で病死、享年五十才。)この他に「風俗文献研究家・斎藤昌三。梨甫書房

を創めた西谷操『世界でかめろん号』の大冊(「文芸市場」誌秋季倍大号昭和二年九・十合併号)で「蚤十夜物語」(英吉利)を訳した佐藤紅霞。"昭和二十六年当時は京都で女学校の校長とかにおさまつてゐるようだといへられた風俗文献書でも特に翻訳紹介が多く著名な酒井潔"などその数は多い。

◇

梅原北明が活躍した当時の世相はどうであつたか。「未だ封建的で聖人君子、忠臣愛国貞節死勇の気が盛んでまだまだ昔ながらの儒教的なモラルが巾をきかし、こと「性」に関することなどは「男女七才にして席を同じうせず」的道德でおさえられ、当然、例え遊里文学にしる、軟文学にしる、公刊はむづかしかった。だから、そこに、セックス的な描写が入るものは、無届け秘密出版か、〇〇や××など入りの伏字本をおそろるおそろる当局の顔色をうかがつて、公刊するとか——。

また反面「おれは河原の枯れすすき」と震災后のでかだん的な風潮が重たく無気力な人々の上にのしかかつていた……。ようやく、革新に燃えるプロレタリア運動が、そんな一角より勃興してきた新旧折りまざった複雑な時代でもあつたのである。あまりにもドラマ

「ボクの責め方」

宝塚二三夫



節ちゃんも手錠をかけられたと泣きべそ

テイックな、そして叛骨なる梅原北明が、背景となすには、まことにカッコウな世相でもあったのだ。

◇作者註、このような時代であるから、当局の断圧激しきことは論をまつまでもなく、出版するために場所をかえ、発行所名をかえいろいろの手を考えた。そして内地で身の置きどころがなくなると、友人の誰にも話さず、こっそりと上海辺りへまで渡り、

その地から出版するというハナレワザまでやってのけた。また、台湾（タイワン）満洲までも渡り歩いた。という叛逆振りにはまことに、あまりと言えば、あまりにもドラママテックな波乱万丈ともいふべき生涯ではあったのである。

梅原北明没す。

◇

風俗文献出版界史上のまれにみる異端児・梅原北明——。それは、ようやく「出版の自由」の曙光見いだす前夜、惜しくも巨星落ちるが如く斃る。時、昭和二十一年四月五日なりき——と……。

◇作者註 青山俊文二の「異端者の生涯」によると「敗戦病とも云うべき発疹チフスがもとで、昭和二十一年四月五日に小田原近くの酒匂の自宅であっけなく永眠してしまつた」とある。

▽追記

この時、執筆中に新しい風俗文献誌『奇譚クラブ』六月号到着入手する。その「奇クサロン」冒頭に編集子の手による「言論出版の自由」の文字あり、「戦前あった新聞紙法、出版法、治安維持法でガンジガラメに拘束された時代」という言葉眼につく。——この世界にあって、叛骨と諷刺精神をもって立上った出版史上の雄、梅原北明を遠く思い、またひる返っては、いま又、悪書追放の声あがる無理解なる世相の中に、ともかく通刊二百号突破記念を迎える奇クの前途を思う。

このささやかなる一篇を大先駆者、梅原北

明に捧ぐると共に奇クの二百号突破記念エッセイとして本誌のSMマニヤのみなさまの前に贈るものである。

◇作者註、本来ならば、北明に関する参考文献明記を、その本文使用個処にいちいち付け加えるのが常道であるが、記事のハンザツをさけるため以下に一括主要なるもののみ列記したことを御了承願う。

ただし、参考及引用個処と思われるところは本文にできる限り「〃」にて現わしたことを、また文章の構成上、登場者の敬称を略したことを付け加え御理解願うものである。

△本文、主要参考▽

- 「文芸市場」誌、各号、 文芸市場社
 「変態資料」各号、 文芸資料編集部
 「グロテスク」各号、 文芸市場社
 「あまとりあ」各号、 あまとりあ社
 「発禁本周遊記」 △図書新聞▽
 —梅原北明の項— 城市郎
 「小説『殺人会社』(前編) △アカネ書房▽
 梅原北明
 「全訳、デカメロン」

△南欧芸術刊行会▽

梅原北明 訳

「世界艶本大集成」

緑園書房

「文学入門」

△光文社▽

伊藤 整

河出書房

「文芸」五月号

—ただし、表紙帯文のみ—

× × ×

『梅原北明主要出版物紹介』

◇単行本、文芸市場社刊のみ

- 「世界好色文学史」二冊、中野正人、昭4刊
 「秘戯指南」 梅原北明 昭4刊
 「フロツシー」 酒井潔・北明共訳・昭2刊
 「バルカン戦争」 訳者不詳? 昭3刊
 「バルカンクリーグ」市場社同人訳 昭2刊
 「アラビヤナイト」 酒井潔訳 昭2刊
 「ペルシヤデカメロン」下条雄三訳 昭4刊
 「フックス画集」 昭3刊
 「グロテスク画集」 昭3刊
 「同性愛の種々相」 花房四郎 昭4刊
 「ナポリの秘密博物館」 羽塚隆成 昭4刊

× × ×

△◇作者註、以上の他に同社内「文芸資料

研究会」が設けられ以下のものが発刊▽

◇単行本・文芸資料研究会刊のみ

「ファンニー・ヒル」佐々木孝丸訳 昭2刊

「恋の百面相」 大木黎二訳? 昭3刊

「ウインの裸體俱樂部」 西谷操訳・昭4刊

「オデットとマルテーヌ」

青山倭文二訳 昭3刊

「蚤の自叙伝」 佐藤紅霞訳 昭4刊

◇作者註 文芸資料研究会として「変態十二史」シリーズ出版があることは、見逃せない。また、ヤワラかいもののみを刊行したものでなく、すでに学生時代より興味のあった北明・編著による『近世社会大驚異史』A5版約三千頁余の大冊を数人の事務員を上野図書館通いをさせ一カ年の日数を費して漸やく完成出版したことも注目したいし、『世界珍書解題』グロテスク社版として(外国の珍書目録)鳥山朝太郎の別名で出版したなども俗に言う単なるエロ本出版屋ではない。より風俗文献出版者として評価したのである。

(終)

【新版】女体緊縛コレクト・フォト集

E組百花選

大手札印画紙(9×13) 焼付

各組一枚一組(送料共)

一組一枚	一五〇円
五組五枚	五〇〇円
十組十枚	九〇〇円
二十組二十枚	一七〇〇円
三十組三十枚	二五〇〇円
四十組四十枚	三二〇〇円
五十組五十枚	四〇〇〇円
六十組六十枚	四七〇〇円
七十組七十枚	五四〇〇円
八十組八十枚	六〇〇〇円
九十組九十枚	六五〇〇円
百組百枚	七〇〇〇円

E 1	全裸の悦虐プレイ(愛川)
E 2	仕置を受ける裸身(大塚)
E 3	荒縄に苦悶する肌(愛川)
E 4	ムチに耐える美肌(関谷)
E 5	豊臀と豊胸しぼり(愛川)
E 6	捨身の後手観念像(大塚)
E 7	足から眺めた裸身(水本)
E 8	全裸エビ責尻強調(関谷)
E 9	ハリツケられた娘(大塚)
E 10	強烈後手高手小手(愛川)
E 11	責め抜かれた疲労(梨花)
E 12	逆エビにもだえる(大塚)

E 13	拘禁された美囚女(大塚)
E 14	浴室に覗く股間縛(愛川)
E 15	海老責に泣く足首(大塚)
E 16	乳房強烈締めつけ(愛川)
E 17	牢獄で泣く縛り娘(大塚)
E 18	美しき全裸股間縛(大塚)
E 19	全身に溢れるマゾ(関谷)
E 20	ベッドにもだえる(関谷)
E 21	身体中に強烈な縄(愛川)
E 22	放置された海老責(東浦)
E 23	ゴム衣で縛られる(東浦)
E 24	ローソクで責める(大塚)
E 25	寝台の排便ポーズ(絹川)
E 26	足指先に漂う媚態(関谷)
E 27	後手吊り正面裸像(関谷)
E 28	嚴重な高手小手縛(東浦)
E 29	女体の全部を晒す(愛川)
E 30	激しいムチ打の果(関谷)
E 31	若肌も縄にくびれ(東浦)
E 32	投げ出した脚線美(絹川)
E 33	脐中心の腹部緊縛(梨花)
E 34	セーラー服の哀歓(梨花)
E 35	赤いムチ痕の臀部(関谷)
E 36	仰向けの囚衣の女(梨花)
E 37	制服の女学生縛り(梨花)
E 38	悦虐にむせぶ若妻(関谷)

E 39	痛打にくねる裸身(関谷)
E 40	乳房に加える金具(大塚)
E 41	鼻責めにあえぐ顔(大塚)
E 42	あぐら縛りを拒む(大塚)
E 43	浣腸ポーズの裸身(梨花)
E 44	激烈なエビ責苦悶(大塚)
E 45	敷布の上ののびて(絹川)
E 46	鼻いじめのアップ(梨花)
E 47	柔肌に喰込む麻縄(東浦)
E 48	縄にくびれる裸身(東浦)
E 49	椅子に晒された女(大塚)
E 50	脐そうじをされる(大塚)
E 51	荒縄のトゲに狂う(絹川)
E 52	火のついた煙草責(四方)
E 53	踏みつけた煙草責(梨花)
E 54	裸身をゆだねた娘(大塚)
E 55	手足猪吊りの美態(絹川)
E 56	囚女の美しき緊縛(絹川)
E 57	諦めた観念全裸像(水本)
E 58	縄にもだえぬく姿(絹川)
E 59	黒髪を吊られた女(大塚)
E 60	女奴隷美しく悶ゆ(絹川)
E 61	袋の中の緊縛裸身(竹本)
E 62	ビニール袋に蒸す(竹本)
E 63	亀甲型の雁字搦目(大塚)
E 64	緊縛裸像の舞踏会(絹川)
E 65	野外的後手宙吊り(梨花)
E 66	足首に鎖錠実施中(四方)
E 67	室内の後手宙吊り(梨花)
E 68	雨装束の悦虐姿態(梨花)
E 69	乳房いじめ踏つけ(大塚)

E 70	足の裏ハネ擦り責(梨花)
E 71	乳首プライヤ挟み(竹本)
E 72	野外的逆さ吊り責(梨花)
E 73	梯子責にあう美女(梨花)
E 74	逆さ吊りに揺れる(梨花)
E 75	娘十六しぼり加減(花坂)
E 76	踏みにじられた顔(大塚)
E 77	逆エビニ反る足先(大塚)
E 78	両手吊りのお仕置(絹川)
E 79	責折檻に呻く若妻(梨花)
E 80	豊麗を誇る正面像(大塚)
E 81	食卓上の縛り人形(大塚)
E 82	むしられる下着(大塚)
E 83	月経帯の羞恥縛り(梨花)
E 84	寝台上的若妻狂態(関谷)
E 85	強烈全裸エビ縛り(東浦)
E 86	輝姿後手縛り吊り(東浦)
E 87	後手縛豊満臀部晒(関谷)
E 88	黒髪いじめ凌辱図(大塚)
E 89	令嬢後手高手小手(絹川)
E 90	脐部乳房強調緊縛(東浦)
E 91	責衣にくるまれて(東浦)
E 92	全裸逆エビ責め(水本)
E 93	ローソク乳首ゼメ(梨花)
E 94	全裸後手縛り閨晒(関谷)
E 95	強打全裸のあえぎ(関谷)
E 96	肉体美の責衣ゼメ(東浦)
E 97	バンド二ツ折縛り(梨花)
E 98	全裸正坐縛り猿轡(関谷)
E 99	豆しぼりの猿轡(絹川)
E 100	強烈縛り脐いじめ(東浦)



再び直腸鏡検査について

△羽鳥水江さんへ▽

おもだか・しの

羽鳥水江さんに「直腸検査と蛙腹のこと」の中で私の事を取上げていただき、羽鳥さんの様な此の道の古参の方の御目に止まった事を大変うれしく思っています。

たしかに医学の世界と云うものは非情なところで、無感情な場と云えるでしょう。又それと同時に色気ぬきのSMの世界でも有り、西条操氏が「想うこと」に書かれた「詩とロマン」を感じる事の出来る数少ない世界の一つでも有りました。

私はあの文に書いた通り年少の頃より度々医療を受けて此の非情の世界、水江さんの云われる鋼鉄製のマゾヒズムを体験して参りました。そうして、その一見非情に見える所にとだようロマンの洗礼を受けてしまったのであります。

たしかに、それは鋼鉄製とも云うべきもので、甘美なる恍惚等と云うものとは厳然たる一線を画したもので有ります。

此の一線は真に厳然たるもので、此の一線故に世間の大部分の人々は、その場所をたんなる苦痛の場所としてのみ、ながめて居るのだと思います。

しかし、常には恍惚の極限と考えられて居る色情の世界をはるかに見下す此の非情なるロマンの花園を垣間見てしまった事が、はたして仕合せなのか、不仕合せなのか、私にはわかりません。

さて、此の間の「直腸鏡検査の事など」はかなり詳しく書いたつもりで居りましたが、後で読み直して見ると、書残した事もあり、水江さんが「細い所までは分かりません」と

いわれた様な点も有りましたので、もう少しくわしく書いて見ましょう。

先ず水江さんは「肌着まで取って丸裸に成る事が必要かどうか」と云われましたが、器具を挿入する前に、かなり丁寧に腹部の触診をしますから、少く共胸から下はすっかり出して置かなければなりません。

もっとも医師によっては、一般の診察室で触診しただけで直ちに鏡検に入る方も多いと思いますが、私の時は直前にも触診されたので、その用意のために、裸の方が工合がよかったのでしよう。

次に体位の事についても、今少しのべてみますと、裸のまま平なベッドに仰向にねて両手は頭の上にバンザイのようにのばして結い付けられ、下半身は要するにオシメを取替えられる時と同じ様な形で、ただ両足をさらに横に広げて両膝頭を八十度位に開いた上、さらにその膝頭がおへその左右に並ぶ位の所に固定されたのです。

婦人科では前を診察しますが、腸管は後を診察するわけですから、普通の婦人科の手術や診察の時よりも、さらに大きく開かされたわけです。

私は浣腸や注腸については、どうも羽鳥さん程には興味を持って居りませんので、注入する空気の説明が足りませんでした。送り込まれる空気は体温よりかなり熱く、温度の

感じはお湯の時と同じ様ですが空気の時にはポンプの弁などのシューシューと云う音がお腹にひびいて一寸変わった感じがいたします。量は残念な事に、わり合少く多分数百CC位だったと思います。

水江さんには、あらためて申上げるまでも無い事ですけれども、空気注腸は液体注腸よりも、かえって苦しい様に思いますが、此の時は、空気でふくらまされたための苦しい感じは、ほとんど有りませんでした。

何分相当に太い管を通して無理に伸ばしてある腸内に、さらに空気を入れてふくらませるのですから、医師としては必要最小限度に止めて置いたのだらうと思います。

私もかなり気を付けて見て居りましたが、普通の五百CCの浣腸の時程にも成らず、お腹がふくらんで見える所までには、行きませんでした。

しかし、もしかりに羽鳥水江さんが、ポンプの掛りに成って居らっしゃったとすると、大変な事に成って居たでしょう。

何分胃の横のあたりにまで管が入って居るのですから、普通では這入らない様な小腸にまで空気が這入って行き、臨月腹より大きく成って多分妊娠八カ月位にまでふくれ上った頃、腸の中のものが胃の方に逆流を起して、さらに口へふき上って来るでしょう。

何分、水江さんの事ですから、普通の看護

婦よりも、ずっと嚴重に縛り付けられるでしょうし、私は手足を結い付けられたまま、蛙の様にふくれ上って行く自分のお腹をただながめて居なければ成りません。胃から口へ逆流が始まったら、ずいぶん苦しいだらうと思います。

しかし、此処までなら苦しいと云っても、それだけの事です。それでも空気の注入を止めて下さらないとすると、しまいに大腸か結腸のどこかが破裂して腹腔全体に空気が流れ込み、ポンプは急に軽く成り私は又、あの物凄く苦しみにおそわれます。

苦しさのあまりに身をもがくと、そのために又痛みがきつく成り身の置所無しと云う有様に成って、お腹は文字通り毯の様にまん丸くふくらんでしまいます。こう成ると横隔膜も、その弾力の限界まで胸の中に這入って来ますから、呼吸は非常に困難に成り、わずかに自由な頭だけを左右に動かしながら、あえぎあえぎ、肩で息を続けるばかりという有様で、生死の境をさまよって居ますが、あなたはそれを目を細めてながめて居らっしゃりたいのでしょう。

しかし、こう成っても、直ちに切開して処置をすれば助かる可能性が有ります。

それでも尚空気を送り続けられると、今度は腹膜が破れて、全身の皮下に空気が這入って、身体全体が風船人形の様にふくれ上って

空気のために窒息死が起り、死骸はせつかくの蛙腹も形がくずれて、ただぶくぶくとふくれ上った土左エ門の様なものに成ってしまう事でしょう。

話は変わりますが、以前映画で腹腔内を観察する内視鏡の使用法を見た事が有ります。

腹腔鏡と呼ばれて居たと思いますが、太さは十二耗位の物で長さも直腸鏡よりはずっと短く、お腹の適当な所に局所麻酔をしてからメスで切開してその切口から挿入し、光学的に必要な空間を作るために相当量の空気を入れて腹をふくらませて使用するものでした。

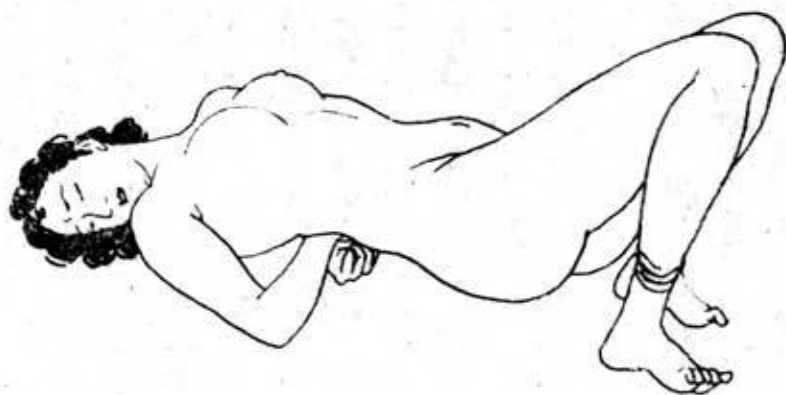
被検者は男性で妊娠五月位までふくらまされて居ましたが、妊み腹とことなり腹全体がふくらむので蛙腹にはちがい無いのですけれども、中途半端な感じで、あまりよい形には見えませんでした。もっとも水江さんが御覧に成れば、又別な感じを受けられたかも知れません。

水江さんは肛門科のお医者さんに行つて、まことしやかに訴えたらと云われましたが、肛門科で使用する肛門鏡は、極く短い筒状のもので、肛門から入れる直腸鏡、S字腸鏡、皮膚から入れる腹腔鏡、関節鏡、口から入れる胃鏡、十二指腸鏡、気管支鏡等を使用する検査や治療は内科へ行つてから必要に応じて外科へ廻された上で、それぞれの部位に挿入観察される事に成ると思います。

お詫びと弁解と

お礼とお願い

黒 淵 賀 集 子



私の早合点の為に大勢の方々に御心配やら御迷惑やらおかけしたことを深くお詫び致します。でも六月号に私が書いた事それ自体は嘘ではなかったのです。奇クの中の或る記事や、挿絵廃止が彼に元気を失わせたのは本当です。ただ一番大きな原因を私自身も知らなかったばかりに書かなかったのです。ほとんど一月の間九州へ行っていた彼が帰って来て「書けなくなった」真相がわかりました。彼

の責任範囲で発生した相当大口の不渡手形が原因だったようです。彼自身の責任ではなく課員がした取引らしいのですが、立場上「三月も末になって一年分の勤務評定を一度に亡くした」と覚悟したとか。幸にして現地の九州で債権の大部分を回収でき、他の取引で得た幾らかの好成績と功罪相償って、どうやら今度の人事移動では左遷も栄転もさせられずに現職に留りそうです。

麻生保様。

激励のお言葉有難うございました。彼は感激していました。彼自身が御礼申しあげなければならぬのですが「恥かしい」と言って私に頼むのです。精神貴族の前ではまだ乞食同然なのです。彼の失礼をお許し下さい。でも、彼に新しい、よりよい作品を書かせたら、それが一番の御礼とは言えないでしょうか。もしそうなら彼は既に次の作品にとりかかっています。今までの歴史ものから創作に脱皮する最初の試みとも言っています。

彼のような性格と立場の者を奇ク投稿者の位置に引きとめておくにはどれ程大きな力が必要、この世界から連れ出すにはいかに小さな力で足りるか御理解いただけると存じます。常に罪悪感みたいなものを感じています。ですから放っておいたら出ていってしまう。敢て申しますが、書いている知識は彼のものでも、意志は全部が彼のものにはなっていないのです。罪なことかもしれません。長い目で見たら、彼を此の世界から連れ出すように努力するのが良い妻なのでしょう。でも私は女ですから目先の考えが先に立ちます。彼を活発にさせる即効薬は書かせる事です。それにしても私は彼の精神力を余りに少く評価していました。彼が一時にもせよ「書けなくなった」のは不渡手形其他で精神的に参ったのではなく、走り廻らなければならなく

なる事を予想した為だったようです。こんな事は彼が黙っていても、私が感附くべきでした。私の恥がもう一つ増えましたが、結婚して日が浅い為の誤として見のがして下さい。

彼は「麻生先輩の為に、近代式乗馬服の女性を主人公にした何かを書きたい」と申しました。日露戦争ものらしいのですが、モデルの馬術が上達しないとなりませんし、彼が中篇を書くには三箇月位。今のところ発送から掲載までに半年かかっているようですから、実現しても一年先になるでしょう。それに私は此の主題だけは好きになれません。負けた先祖の血が少しは残っているでしょう。お察し下さい。

彼は「麻生先輩好みの屋内馬術調練」を時にはさせてくれます。(むしろ強制すると言った方がよいかしら)「生活と意見」に同じく「西欧式乗馬服」の場合に限って実行します。ただし「落馬」の危険は畳の上の方が大きいようです。(それでもSでしょうか)

芳野眉美様。

彼、嬰一は七月号を読み終って

「いたずらに長い高級作品には余り反響がなく、私生活を曝露した記事に対しては忽ち賞讃が集り、俗悪ここにきわまる。」

とヒフンコウガイ(しながらその実、嬉しそうな顔を)していました。反語の好きな男ですからそのように解釈して下さい。ベリサ

リウスにしても、アンナ・コムネナにしても全文が反語みたいなのでしょう。又、

「賀集子の方が人気があって文章も上手だそうだから今後は賀集子が書け」

と、むくれています。それにもう一つ、「奇く読者の誤解を招き、筆者の品位を落した罪を東京方面で懲罰していただく為に、賀集子を、金髪附、荷造り送料当方負担で一週間程マユミ様に貸出すべきだが、当方の意図したのと異なる目的に転用されるおそれがあるから止めておく」

のだそうです。私の名はカチューシャとも読めるでしょう。でも髪の色は黒に近いようなこげ茶色ですから、御趣味には合わないはずです。

橋行司子様。

「真実の叫び」の見本にしていたのに「真実」でなくなつて申し訳ありません。でも「真実」と信じて書いたのです。勘違いの結果が半殺しになるだろうと覚悟していました。それが、それは二十四分の一の過少評価だった事を思い知らされました。私は計十二回「死刑」にされました。斬首五回、絞首四回、銃殺二回、以上何れも縄附。そして切腹一回。あと磔を一回すれば完全だが「十三人」の作者に対する冒瀆になるから免除するのだそうです。気取った言葉に「罪、万死に価す」というのがありますが私が適例でしょう。

もっとも、私も彼が元気になった証拠を見て安心しました。叫んだ効果はありました。

東京の泰生様。

折角ですが六月号以来、検閲なしで私生活を発表する自由を剥奪されてしまいました。彼は私を文章の上だけでは「神秘的な女性」に仕立て、少しずつ発表するつもりでいたらしいのですが「真相が一度に露見した」と苦笑していました。彼は私生活を公表する勇氣も趣味も持っていないません。私に許された発表できる近況は次の作品がギリシア神話に取材したものらしい事と、それに必要だとかで、彼が私に倒立や転回をさせて、すごく真剣に観察している事ぐらいのものです。

四馬先生。

カット絵を有難うございました。いつも、すばらしいと思います。先生の絵のアドケナイ表情が好きです。でもあの絵だけは、ずいぶん苦しうでした。この次からは先生がいとも描かれるような顔にして下さいね。私は余り苦しい顔をしないつもりです。それから彼も私も裸は余り好きではありません。今度機会があったら何でもよいから一枚着せていただけませんか。乗馬服なら一番嬉しいのです。

私の顔は――

三十四年四月号扉のジュノーに似ていると彼が言ってくれました。でも私はそんなオダ

テにのる程自分にうぬぼれてはいません。

山田正夫様。

浣腸の歴史は私などより遙かに詳しい方々が大勢居られて沢山の御意見が寄せられているでしょうが、彼、嬰一が絶対に扱わない類の題目ですから敢て無学な私が知っている限り書かせていただきます。西紀紀元前五世紀から四世紀にかけて在世したらしいコス島出身のギリシア人で、医学の祖と言われるヒポクラテス自身が書いた「古代医術」の中に浣腸らしいものが出ています。幾つかの病例とその治療を記した中に「下痢促進（カタ

ルシス）」という言葉があり、腸の方から薬を入れ、手か又は器具で刺戟を与えて目的を果したようです。庶民の女や行き倒れ病者にも平等な手当をしているように書かれています。ですから医者も薬も豊富だったのでしょう。グリセリンは天然にも産しますし、水酸化ナトリウムは原始的な方法で作れますから硬石鹼に近いものは大昔からあったでしょう。人体に注入するのもガラスでなければいけないものでもなく、一番原始的には（芳野眉美様のお好きな方法を逆にすれば）器具なしでもできます。

ギリシア医術は、細菌学のようなものを別にすれば、顕微鏡発明の前であっても相当な高さにあったようで、殊に解剖などの知識は（ホメロスのイーリアスに出る戦死者の描写などをみると）進んでいたと思われます。エジプトやクレテで生産の余剰が医師のよ

バー「ぼて」の妊婦たち

——芳野眉美さんをまねて——

羽 鳥 水 江

コント風の気の利いたジョークで毎月々々読者を楽しませて下さる芳野眉美さんの、軽快でソフトなタッチは真似が出来そうにありませんけれども、バーでの会話という連想からヒントを得て書いてみることにしました。さぞ芳野さんは苦笑なさることと思います。

マダムの名は葉山みどり。名前のようにかラッとした性格。そのマダムがもう一つの隠れた趣味（商売？）をもっていようとは夢にも知らなかった。午後五時から毎日開店なの

だが、中年の教養ある常連ばかりの中で、特別あつかいを受けているらしい何人かの客がいる。ときどきヒソヒソとこちらに解からないことを話しているらしい。ヤッカミ半分も手つだつて、それとなく接近し、さぐっているうちに、次のようなことが分かった。

「妊娠している女にたいしてだけ能力のある男がいる」というシュテークルのことばを読んで、奇妙な気持がした。女は自然に妊娠するものではないのだから、そして、すでに妊娠してしまっている女を、その上に妊娠させることは出来ない相談だから、何という不毛なセックスなんだろう、世の中に無駄があるといつて、これほど大きな無駄はありそうにない。女なんて、どれもこれも、メス犬みたいにバタバタと孕んでしまうものだといったらそれまでだが、この場合はそもそもその前提条件を欠いているのである。他の男が孕ましてくれた女を抱いてみたいなんて、どだい余りにもストンキョウすぎる。

バーの名は「ぼて」、妊娠して腹がふくれていることを「ぼてれん」（または「ぼてれん」という。ただ知らない人が見たら、フランス語のボテ（美、または美人の意）と解するかも知れないね。マダムは別に注釈を加

えることをするわけではないのだから。

「ぼて」にはもう一つの営業がある。毎週金曜日だけ、それも家庭をもっている主婦が出られる時間の午後一時から四時まで（五時となると夜のバーが始まってしまふから）「準備中」と札のかかっている表口をまわって、裏口から会員だけに与えられているカギであけて入ると、その時間だけ夜の連中とはちがうホステスが四、五人いて、不思議な営業をしている。ホステスは、みな妊娠第六カ月以上の妊婦たちばかり。街を歩いている妊婦たちが、腹が突き出た体の線なるべく露骨に出さないように、フワリとしたゆるい服を着ているのと反対に、ここではキッチリと体に密着したうすもののドレスをまとい、デーンと突き出た腹を、堂々とゆすって歩いている。ときによると、ボックスの中で、ドレスの前をひろげて、ヘソとそのまわりに「おさわり」をさせているホステスもある。

「ドレスを全部脱いで、立ってみせてくれないかな」

と言う客があれば、

「あら、だって下の方は興味ないんでしょ。それにここはヌード・スタジオじゃないわ」などと云う声も聞える。

「キミ、何カ月？ ふた子じゃないんかな」

「いやだわ。そんなんじゃないわよ」

「いつ産まれるんだい」

「帝王切開するの、骨盤がせまいんだって。大きくなりすぎちゃったらしいわ」

「ボクには尻の大きさは、十分だと見えるがね」

「いじわる！」

………

「あんまりきつくさわらないで苦しいから」
「でも、ずい分、固く張りつめているもんだね。おどろいた」

「ほら、赤ちゃんが動くでしょ。おされて苦しがつているのよ」

「なるほどね。わかったわかった、そつとなくてやろう」

などと、いろいろやかましい。

なかには、どうしてもくどいて、一緒にホテルに行こうとせがんでいるものもある。一流の紳士であり、他方は夫のある主婦であつてみれば、マダムに内緒で取り引きすることはできないらしい。自由恋愛には干渉できないといつても、分かったときに、大変だからね。マダムは秘密をまもる。絶対に口外したりはしない。

「わたしもう臨月なのよ。急に産まれたりしたら困るわ。もうとても駄目なのよ」

と断られて、あきらめかねている様子。

「ねえ、わたしでもよかったら、つき合ってもいいわよ。今七カ月だから」

と別のがしなだれかかる。

まっ黒に色づいた大きな乳房を出して見せているのもある。

「ほら、もうおちちが出るのよ」

「どれどれ、しかし水みたいだな」

「赤ちゃんが産まれたら、どっさり出るわ」

「やれやれ、じゃ、ボクにも飲ませてくれるかい」

「いいわ。でも、赤ちゃんの分まで飲まれちゃこまるわ」

「牛みたいに搾って、分量をはかってから、飲むか」

話し声が入り混ってそうぞうしい。

.....

「マダム、ミルク！ ボクにはウィスキーをダブルでたのむ」

「あら、そんなに飲んで大丈夫、まだお昼だってこと、お忘れなくね」

.....

「ひどい便秘よ。それに痔も.....あら、ごめ

んなさいね」

「浣腸が一番いいよ。浣腸が自分でできるかい」

「イーだ。自分でできますわよ。Yさんにしていたただかなくても」

「それは残念だな」

あとは笑い声。

.....

「もう予定日を過ぎて一週間にもなるの。今日は来られたけど、来週はもう来られないかも知れないわ」

「病院に見舞いに行くよ」

「あら、こまるわ」

.....

「オナカがペシャンコになったら、一度撮らしてくれないか」

これは妊娠第六カ月目のはじめから、せつせと妊婦ヌードをとりつづけて来たお客。

「少しずつ毎月オナカがふくらんで来る様子を、写真にとってあるから、くらべて見たいんだ」

なるほど立派です。すばらしいコレクションでしょう。

わたしは女ですから、バーなどに行ったこ

とはありませんが、近ごろでは、女の羞恥心とか屈辱感とかいうものは、サラリとビジネスライクに割り切れて、ギョツと心の底まで締めつけるような深刻なものではなくなってきているでしょう。若いマダムだって、パトロソもいることでしょうか、そのうちポテレン腹であらわれることになるかも知れませんわね。若い奥さんたちばかり集まっている新しい団地で、向う三軒両どなり、バタバタとまるでメス犬のように次々に孕んでしまう奥さん方を集めて、バー「ぼて」はますます繁昌することでしょう。

ゲイ・バーなどという特殊なものもあることですから、妊婦バーが一軒ぐらいどこかに出来ても、ちっともおかしいことはありません。瀬沼さんたちがいつも言っているらしいように、妊婦ストリップとか、妊婦ヌード・スタジオとか、女のわたしには行く機会はないさそうですけれど、空想の上だけででも、甘い羞恥心とか屈辱感をゆっくりとかみしめながら、ひとりよがりを書いている自分自身がおかしくなってきました。

(おしまい)

.....

「最新版」 女体悦虐写真集印画紙版

G組百姿集

大手札型印画紙 (9×13 釐) 焼付

各組一枚一組 (送料共)

一組一枚	一五〇円
五組五枚	五〇〇円
十組十枚	九〇〇円
二十組二十枚	一七〇〇円
三十組三十枚	二五〇〇円
四十組四十枚	三二〇〇円
五十組五十枚	四〇〇〇円
六十組六十枚	四七〇〇円
七十組七十枚	五四〇〇円
八十組八十枚	六〇〇〇円
九十組九十枚	六五〇〇円
百組百枚	七〇〇〇円

G 1	顔面から全身厳重縛	(東浦)
G 2	アグラで縛られる	(玉田)
G 3	豊臀と足首と後手縛	(玉田)
G 4	一糸まとわぬ晒し者	(玉田)
G 5	敷布に悶える白い肌	(玉田)
G 6	縄に羞らう裸しぱり	(長野)
G 7	煙草責と荒縄緊縛	(大塚)
G 8	全身ガンジガラメ	(大塚)
G 9	手吊り全裸さらし	(玉田)
G 10	恐怖のいたぶり	(新井)
G 11	浣腸器に脅びえる女	(玉田)
G 12	全裸しぱりと浣腸器	(玉田)

G 13	踏みつけられる美貌	(大塚)
G 14	美しき全裸強調縛り	(大塚)
G 15	そりかえる鼻の頭	(大塚)
G 16	黒フンで縛られる女	(玉田)
G 17	責写真に埋れた緊縛	(大塚)
G 18	諦観の後手しぱり	(玉田)
G 19	椅子に縛られた全裸	(玉田)
G 20	足首と後手首と	(玉田)
G 21	二つの乳房アップ	(長野)
G 22	縛られて鼻を任す	(大塚)
G 23	後手縛全裸椅子跨ぎ	(東浦)
G 24	豊胸に黒紐の輝やき	(長野)
G 25	肌に刺さる荒縄	(大塚)
G 26	机の脚に縛られる	(新井)
G 27	革の猿轡で責める	(新井)
G 28	白肌は縄にくびれて	(大塚)
G 29	緊縛裸身を誇る足	(長野)
G 30	逆エビと浣腸器	(大塚)
G 31	肥り肉を晒らす女	(東浦)
G 32	踊子の緊縛ポーズ	(絹川)
G 33	足でなぶられる鼻	(大塚)
G 34	典型的な股間しぱり	(大塚)
G 35	美貌と豊胸を誇る女	(長野)
G 36	写真に埋れた全裸姿	(大塚)
G 37	裸を誇りの椅子縛り	(玉田)
G 38	柔肌は縄にくびれて	(玉田)

G 39	全裸の肌は縄まかせ	(玉田)
G 40	女囚哀歎	(宇治)
G 41	女囚縛られ姿	(宇治)
G 42	オシメカパー縛り	(大塚)
G 43	庭の見える部屋にて	(大塚)
G 44	トイレを前にして	(大塚)
G 45	荒縄と豆絞りの猿轡	(大塚)
G 46	裸身の美を誇る縛り	(長野)
G 47	後手逆エビ強烈鼻責	(大塚)
G 48	股間縛り全裸重量感	(大塚)
G 49	厳重荷造縛りの全裸	(玉田)
G 50	全裸正面強烈亀甲縛	(木村)
G 51	全裸胴絞め首縄猿轡	(木村)
G 52	後手首縄膝頭一括縛	(木村)
G 53	全裸後手吊り晒し	(玉田)
G 54	後手吊り全裸の美	(玉田)
G 55	椅子に跨がされた女	(新井)
G 56	後手縛りで寝室へ	(絹川)
G 57	色魔に脱がされる	(新井)
G 58	不安定な台上股間縛	(大塚)
G 59	無抵抗の裸いじめ	(大塚)
G 60	両手吊りの猿ぐつわ	(新井)
G 61	可憐ないじめられ様	(大塚)
G 62	責めぬかれた表情美	(大塚)
G 63	強奪されたパンティ	(大塚)
G 64	後手縛全裸の美しさ	(大塚)
G 65	猿ぐつわの婉な表情	(新井)
G 66	手吊り足縛り仰臥	(新井)
G 67	目かくしのハリッケ	(大塚)
G 68	首枷のさらしもの	(大塚)
G 69	木馬責め斜め後姿	(大塚)

G 70	木馬責め斜め前姿	(大塚)
G 71	革全頭マスクと手錠	(大塚)
G 72	火あぶりにあう女	(大塚)
G 73	長髪垂らし全裸縛り	(長野)
G 74	豊満を誇る露出癖	(長野)
G 75	白肌で縄にうそぶく	(長野)
G 76	縄にもだえる美女	(絹川)
G 77	美貌をいためつける	(絹川)
G 78	首吊りの責め	(新井)
G 79	両手開き吊り顔虐め	(新井)
G 80	全裸後手足首連繫縛	(玉田)
G 81	蒲団上に転がった女	(遠藤)
G 82	首縄開股強烈縛り	(木村)
G 83	巨大な臀部全裸後手	(大塚)
G 84	膨隆見事な乳房責め	(長野)
G 85	ヤンチャ娘開股縛り	(長野)
G 86	全裸でしやがむ後手	(玉田)
G 87	豊満裸身を誇る緊縛	(玉田)
G 88	美麗の全裸に厳重縄	(玉田)
G 89	後手縛り裸立姿晒し	(木村)
G 90	奴隷の裸身を捧げる	(木村)
G 91	白布の猿轡と白肌責	(木村)
G 92	六尺揮巨大臀部虐め	(大塚)
G 93	裸身を晒す両手縛り	(大塚)
G 94	全裸アグラ坐り縛り	(玉田)
G 95	白肌に映える光の縞	(玉田)
G 96	臍乳房強調喰込む縄	(大塚)
G 97	股間縛り全裸の膝立	(大塚)
G 98	台上的緊縛裸身像	(長野)
G 99	反りかえる緊縛裸身	(長野)
G 100	膨大な臀部を眼前に	(大塚)

ガン作・マニヤのノート

濡れにぞ濡れし

芳野眉美

A 主題と必然性

B 四十年代上半期の奇クサロンから

(1) 長谷好志男氏

(2) 新田 英雄氏

(3) 高橋 志朗氏

(4) 小川 明氏

(5) 益原 駿夫氏

(6) その他

C 量感—五月十八日

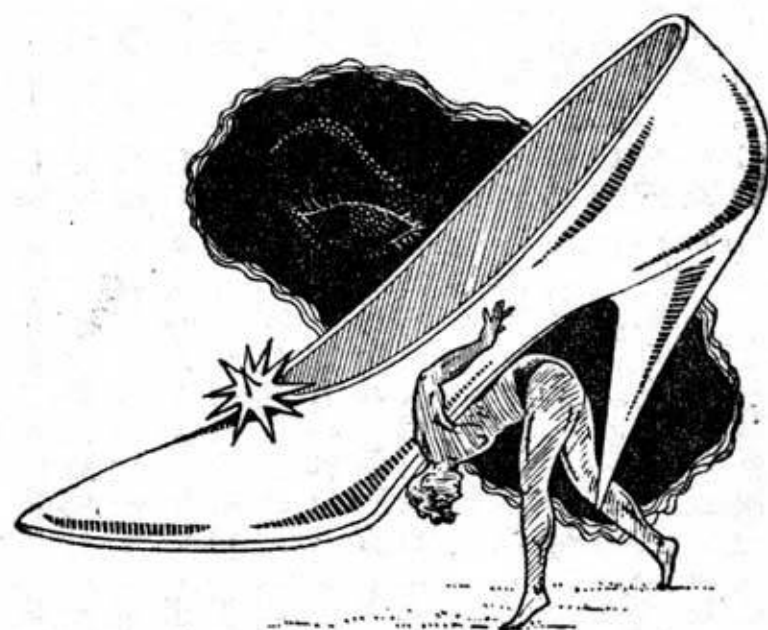
D 市川千鶴子夫人のプレゼント

E 旗美也子夫人の懐石膳

A 主題と必然性

七月号「SMよ、今日は」を拝見して、保藤久人氏の批評に同感の箇所がありましたので、ささやかな感想を書いてみます。

書かれた作者の先生方には失礼なのですが、けれど、「ヤプー」にしる「宇宙の何処かに」にしる、ドエライ長編小説でしたけれど、私はサッパリ面白くなく、途中で読むのをやめてしまった経験があります。



小説の種類として、ああいう作品があってもいいのですが、作者御自身に、あれだけの小説を書く必然性は何処にあったのか、それさえも疑問に思いました。

何故面白くなかったのか、その理由を、七月号で保藤さんがズバリおっしゃっていたので、ついうれしくなっていました。私が考えていたことも、マンザラ捨てたものじゃないなと思ったからです。即ち、

「本人以外は何の人間味もない器物化した加

唐役者のようで、何か寒々とした世界を感じさせる。読んでいてSMとはこんなものだろうかと味気なくなってきた」

と保藤さんは書いておられる。

「全く人間ばなれしているのではないだろうか」

同感です。

人間が書かれていないで、何が小説だ、と云いたいのですよ。これは、小説の絶対必要な本質の問題で、小説を書く主題の考え方の問題であり、いくら説明しても、理解出来ないことは理解出来ないかもしれません。

人間離れのした作品を書いて、何が楽しいのだろう、面白いのだろう、と思います。素朴な質問ですよ。

私は小説が好きです。女性の神酒はもっと好きだ。だから、私は神酒を主題にした小説を書く。

自分のSEXのことですから、熱心にならざるを得ません。こんな簡単なことがどうしてわからないのかしら、とたまに首をひねっています。

神酒の好きな私は、神酒小説を書く、現実の問題としての必然性があるから、メクラメッポウに書き続けているわけです。

非常に、主題の考え方が明快でしょう。

それからもうひとつの感想を、ついでだから書いてみます。

御自分の発言に権威を持ってない人は、むやみやたらに、昔の偉人の名前を書きたがるものです。曰く、ワイルドだとか、サドだとかマゾッホだとか、有名な人達の権威を借りなければ、発言出来ない。

ワイルドやサドやマゾッホと、あなたと、どういう関係があるのでしょうか。全く無関係じゃないの。

くだらねえエリート意識は、赤ちゃんの頃だけで結構です。いやになる。

研究家なら、ワイルドやサドやマゾッホの作品の、現代における価値ぐらいの評論を発表して下さい。喜こんで、勉強させていただきます。それならいい。

ワイルドもサドもマゾも、現在の私と、なら関係ありませんから、あまり興味はありませんけれど。過去の人をほじくりかえすより、現実の自分を正面からトククンダほうがいい。そこに、私の小説の主題がある。

親戚みたいに、気軽に、ワイルドだ、マゾッホだ、サドだって云うのは、偉人に対して失礼じゃない。

御本人以外、誰だって無関係なのに、こんな簡単なことが、わからないとおっしゃるなら何も云うことはありませんね。

知性だとか、学殖だとか、美的センスだとか、精神貴族だとか、鼻もちならないエリート意識を感じるとうんざりする。何が、狷介孤高な生き方だ。馬鹿馬鹿しい。

沢沢竜彦さんじゃないけれど、人間は、動物の一種ですから、食って、寝て、性交して寿命がくれば死ぬだけ、それだけなのに。

過去の死人ばかりとつきあっているから、人間味なんか忘れてしまうのかしら。そうかな。俺は生きている女体のほうがいい。

奇クサロンの夫婦のSMプレイの報告や、辻村さんのSMカメラハントのフォトや、読者通信でのいろいろな交換や、簡単な告白など、人間味あふれた文章に接することの出来るのは奇クの特徴でとても面白いのだけど、残念なことに、今迄書いた意味で、小説陣が弱いのがどうも物足りない。

今年になっても、黒淵嬰一氏の歴史小説シリーズ（毎月勉強させていただいています）があるから、少しは救われるようなものの、読物や紙芝居が奇クの文芸作品だと思われていては、奇クの誌面が泣こうというものだ。

現在の生活を主題にした、生活に立脚したSM現代小説を読みたいのですが。(ことわっておりますが『花と蛇』のことを云っているわけではありません。作者に失礼ですけど、『花と蛇』は読物であって、私が求めているところの小説ではありませんから。しかし、面白いから、それだけの価値は認めますが)パンチある作品を望みます。

書きたいことを書きましたけれど、まだまだエンリョしているつもりです。失言はお許し下さい。どなたに対しても決して悪意はありません。お気にサワツタらごめんなさい。

ささやかな不満を発表いたしました。

終りに、御丁寧な適確な批評を下さった保藤久人氏に感謝します。有難う御座居ました。批評らしい批評を久し振りに拝見しました。

B 四十年代上半期の

『奇クサロン』から

奇クサロンの、夫婦のSMプレイのフォトは、最も楽しみにしているひとつだが、一月号から六月号の半年間にも、数多くの御夫婦のフォトが発表されたことは、奇クの発展に絶対欠かせない喜ばしいことであり、その

積極的な行為に対しては賞讃すぎることはないのである。

(1) 長谷好志男氏

一月号に二葉、二月号と六月号に一葉づつ発表しておられる。

一月号の長谷夫人のフォトを見る度に軽いジェラシーを感じるのは、長谷夫人が美しすぎるからではないかと思う。型の良い若々しいはちきれそうな夫人の乳房を独占している長谷氏に、私はただただ嘆息をつくばかりである。うらやましい。

「私共は、未だ二十代の青臭い夫婦ですが、お互いが生れつきの同好者で、マニヤ同志が夫婦になった様な恵まれた夫婦と思っております」

と、一月号に書いておられる。うらやましい。

「夫婦ですから、どんな写真でも撮れますが

……」

そうでしょう。そうでしょう。あまり刺激しないで下さい。

「妻は他人様に撮られるのが好きですので、妻でなければ色々な姿体にして撮って頂いて結構です」

嗚呼―刺激が強すぎる。色々な……ネ。

二月号のフォトは、縛った夫人の口に、コトモアロウニ、長谷氏は足をくわえさせているではありませんか。うらやましい。私なら夫人の足を突込んでもらいたい(失礼)

「私達はこのSMプレイの趣味を他人に、隠す、とか、恥しい、とは思っておりません。出来るだけ多くの機会を見つけて、私達の愚作を発表させて戴くつもりです」

と、二月号に書いておられる。立派なことです。勇気のある発言であり、それを実行なさっていることは最高です。

「一月号を見ている妻に声をかけると、生れて初めて本に載った自分の姿を見乍ら、なんだか恥しいわ、云う。それでも、まんざらでもなさそうだ」

六月号のフォトはバックスタイルですが、「誌上に掲載された写真を見た妻は、それ以来俄然積極的になって、提唱者の私の方が今ではむしろタジタジとなるくらいで、毎日楽しい新婚生活を送っております」

とある。うらやましい。

幸福な夫婦生活ですこと。

「私個人としては、フォトはやはり人間の喜怒哀楽を如実に表現でき得る顔の写っているフォトを好みます」

と二月号にありますけど、顔を表面に全面的にあらわにするということは、勇気のいることなんでしょうね。だから、バックスタイルになっちゃったのも無理は無いのです。

しかし、同号に、

「案するより産むがやすし、で思い切って発表している内、案外気にならないものと思います」

という感想は、とても重要な発言だと思います。どうして、どうして。

さて、妻は他人様に撮られるのが好き、と書かれた長谷氏は、一月号で、

「二人三人と集って色々な作品を製作してみたいと思っています」

と発展段階をのべておられますが、モデルに夫人たちを交換したら、それこそショックで気絶しそうですから、実現したら、かならず奇クサロンに発表していただきたいものです。お願い。

それにしても、顔といい、その豊かな肢体といい、長谷夫人は美しすぎる。

うらやましい (クドイネ)

(2) 新田英雄氏

悠子夫人のフォトは、三月号と五月号の奇

クサロンに二葉づつ、六月号は一葉発表されています。

これまた「うらやましい」と連発しなければなりません。というのは、六月号に、

「悠子は身体全体にボリュームがあり、いわゆるグラマータイプですが、縄をかけた際は殊に臍を中心とした腹部と乳房を中心とした胸部の盛りあがりが見事なので」

と夫君新田氏が書いていられる通りだからです。悠子夫人の紹介は三月号に、

「本年二十四才、一六一センチ、五四キロと少々大柄で肥っています」

とありますが、同号の二葉のフォトは、青い果実のような乳房を突起した、健康な美しい悠子夫人を適格にとらえて、ただただ呻めくばかりです(畜生)こんなことを云ってはいけません。

乳首の突端の描写が好きだな(失礼)

五月号のフォトは、悠子夫人のヒップを強調したのですが、股間縛りも強烈だし、豊かなヒップも男の眼を楽しませてくれることでしょう。ことに、私は女性のお尻が大好きですから、こんなフォトには弱いのです。

悠子夫人の柔らかいお尻にオシツブされたらさぞ幸福だろうと、ほんとまあクダラネエ

ことを空想して、喜こんでいる次第です。ハイ。

「最近では肌に埋もれるように縄がきつく締っても、妻は一向平気でこういった縛り方はどうだろうかと積極的に意見を述べたりするようになりました」

と六月号にあります。うらやましい。

「私と結婚するまでは平凡なBGだった彼女も、夫唱婦随というのですか、私はだしの凝りようで毎日のように写真をとって楽しんでおります」

勝手にしゃがれ。

(3) 高松志朗氏

一月号に、二葉の作品を発表なさっています。一葉はバックで全裸の夫人の後手緊縛も悩ましく、一葉は乳房と腹部の強調で、これまた圧感です。

「私達は夫三十四才、妻二十六才の夫婦ですが、人知れずSMプレーを楽しみ、結婚以来数年、未だに倦怠期を知らず、変化と愛情に溢れる希望ある生活を送っています」

七年目の浮気、だなんてボヤいている人たちに聞かせたい言葉です。

「結婚以来六年間、写したフォト作品も今で

は大型アルバム三冊に、ぎっしりと埋まっております」

とすさまじく、

「このアルバムは私達のみが知る愛の作品だと自負しております」

オノロケ有難う御座居ます。

「本当に秘密を守り合える善意の方々なら、敢て、私達のプレーをテーマにした作品をお見せしてもかまわないとさえ存じております」

あまり、他人を信用しないほうがいいですよ。とくに、他人を利用しようとはかり考えている人が多いこの頃ですから。

信用しても、裏切られることの多いことはあまりにもミミッチイ奴が多すぎるということです。アブネエアブネエ。

ともあれ、高松夫人のフォトも、私にはショックでした。幸福っていいね。

(4) 小川 明氏

一月号に四葉、五月号に二葉（小川曉氏になつていますが、同じ方でしょうか？）発表されていきます。

一月号のは小川夫人の全裸のバックスタイルですが、それぞれ説明がついています。

「三十七年十月撮影—初めて腰ヒモで縛ったものですが、妻も初めてでもあり、馴れていず堅いポーズのものになりました」

とか、

「三十九年五月撮影—無理にメンスのパンネットを着用させたまま、写したものです」

なんてサディスティックな文章を平気で書けるんだから、ニクイネ。このフォト、見れば見るほど、夫人の秘められた香に酔わされてしまう。ホント。

「当方の希望いたすものは、革製のパンツ、バタフライ、サルグツワ、乳房を締めつけるもの」

あまり夫人をイジメないで下さいよ。ああうらやましい。

五月号の四十年一月の最近作は、

「自作した乳房カセを着用させたものです」とあり、

「不要になった皮製品の一部を利用して作ったものです。この乳カセを着用させ、乳首に各種の責を行いたいと思っております」

サルグツワも皮の製品じゃないのかしら。

このフォト、ちょっと刺激が強すぎやしませんか。夫人の眼の表情がなんともいえない。

「私の妻の様にごくありふれた、ノーマルな性格の女でも、すこし時間をかけて、リードすれば、これほどまで変化するものかなと、私のほうが女性の順能性に感心することがあります」

リードしても、かえって離婚される男だっていますよ。その方が多いんじゃないですかね。やさしく夫を愛してくれる夫人を得たことは幸福です。夫のいいなりに、なんでもしてくれる女性と結婚したら、その方の人生はバラ色だ。

その意味で、道徳的な女性は、ダイエットもつまらない。興奮もしない。

(5) 益原駿夫氏

三月号に、二葉の作品を発表していられます。

「妻の緊縛ポーズを写し期待で胸をわくわくさせ乍ら現像するだいた味は、同好の皆様方同様私も味っております」

とあり、

「夫婦の愛情に破たんを生じる事もなく二人の子供をもうけ、またプレイに打込めるのは幸福至極だと思っております」

これ以上幸福な夫婦生活はないでしょう。

まったくうらやましい。

「乳首は授乳の為拡大してしまったのは致し方ありません。けれども乳首を責める時はむしろ好都合の場合もありますので便利です」と、なにげなくエロチックなことを書き流すあたり、夫人に対する乳首責めって、いったいどんなことをするのだろうと、夢にまで見てしまうヨ。独身には眼の毒だ。

(6) その他

その外に、六角京之介氏が二月号で夫人の切腹プレイを、剣持逸人氏が三月号で夫人の生首フォトを、新宮明夫氏が四月号で夫人の生首フォトを発表していられる。

四月号には、また、なつかしく、悩ましい安原さゆり夫人の妊娠した腹部の写真が発表されている。五カ月のよし。

「夫は写真をとることにサド的な興味を持つらしく、いろいろなポーズをとらされているうちにプレイに移行することもあります」とさゆり夫人の手紙にはあり、

「私は夫にかしずく忠実な奴隷として楽しい日々を送ってまいりました」

イウコトナシ。ネ。

夫婦のSMプレイ万歳。

C 量感——五月十八日

ルノワールの豊麗な色感と、豊満な肉体に接することのできるのは幸福だ。赤や青や黄色の強烈な画面に、充実した肉体がアタックしてくる。あふれるような官能の喜びを肌を感じるだけでも、この印象派の巨頭に感謝しなければならぬ。

クールベの量的で重厚な装飾も好きだ。写実派の巨頭が描いた、精密な健康なたくましい女に見惚れ、充実した肉体の力強さに感激しないではいられない。

といって、近代美術館で、十九世紀の写実派や印象派の絵画に嘆息ばかりついてはいられない。

豊満な重厚な女体に憧れるついでに、絵の中にとどまらず、現実にくましい充実した肉体に触れてみようというわけだ。

(この重量感に憧れるのが、安原さゆり夫人たち妊婦フォトに感動するひとつの理由になっているのは否定できない)

五月十八日—

重量あふれた肉体を持つ女性の顔はやはりそれなりの顔をしているから面白い、といった失礼かな。丸顔で憎めない。

その女性は、肩も、足も、乳房も、そして腰のまわりも、豊かに実って、そのあふれるような量感に圧倒された。肌は白く、柔らかい。

「どうせ飲ませるなら、たっぷり飲ませてあげるわ」

最も重量感をほころぶ彼女の巨大な臀部が、仰向けに寝ていた顔の上に、のしかかってきた。鼻も、口も、柔肌にすっぽりと埋もれて息苦しい。かろうじて、眼は圧迫する肉塊から逃げたけれど、彼女の肉づきの良い背中しか見ることは出来なかった。

顔が彼女のまっ白な臀部におしつぶされて苦しさが増すうちに、彼女の芳香ばかりではなく、なまあたたい液体が、どっと口中にあふれ、激しくのどが鳴った。

「こぼしたら……」

と、顔の上に腰掛けた彼女が云った。

「……ひどいわよ」

液体が、また、滝のように、どっと口中に流れ込んだ。のどが痛い。

のどが鳴る。激しく鳴る。

窒息寸前……

顔から下りた彼女が、

「そのくらいで許してあげるわ」

と云った。

「そのかわり、この次は、もっとひどいことをするわよ」

「ひどいこと」

「そうよ、もっともっと、ひどいこと」

「たべさせるつもり」

「そうね、たべさせるかもしれないわ」
くすりと彼女が笑った。

「たべてみたいのでしょう」

「――」

「その時は、縛るわよ」

D 市川千鶴子夫人 のプレゼント

五月二日

市川高夫氏（五月号『奇クサロン』『パンティマニヤの方々に』参照）より小包が配達された。

いやあ、驚いた。

「刺繍もあり、フリルもついた少し小さ目の真紅のナイロンパンティなどは、妻の最も好んで着用する所です」

と市川氏は書いておられたが、その、

「世紀のナイロンパンティ」

が、そのものずばり、三枚——三枚もです

よ、小箱に丁寧に、たたまれてあったと思召せ。ホント。

孔雀の羽根や花の刺繍も美しく、レースの飾りも悩ましい。市川千鶴子夫人のパンティが、七月号の読者通信の千鶴子夫人のお手紙によれば、

「メンスと、分泌物と、お小用とでひどく汚れております」

市川高夫様、千鶴子夫人。

有難う御座居ました。貴重なプレゼント、たしかに受け取りました。

お手紙にも、

「新しい物ばかり選んで差上げました」

とありましたが、どれも新品であり、高価なものであり、プレゼントのお礼をしたいのですが、一方通行ではそれも出来ませんので誌上を借りて、返書に代えさせて頂きます。

七月号のお手紙を拝見して、より現実的にショックを受け、いただいたプレゼントの品を前にして、どうあつかったらいいのか、戸惑うばかりです。

（味は、触れさせていただきました。申し訳ない）

レースと刺繍とフリルの、千鶴子夫人の悩ましい香を秘めた美しい真紅のパンティを前

にしては、

「お気に召しまして？」

と夫人が私にささやきかけているような錯覚にとらわれたとしても、決して私の罪ではないでしょう。

「ある程度わざと汚すのでなければ、実際にはあれ程汚れるものではありませんが」

と、ありました。が、あまり不自然になっても興味は薄れます。やはり、二日三日、がまんして穿いていただいて、自然に汚したほうが、秘められた芳香も、感触も美味だと思いますが、どんなものでしょうか。これは、御主人におききになってみて下さい。私よりベテランだと思いますし、それに、美しい協力者がいらっしゃることですから。うらやましいことです。

「穿き古してデンセンしかかった物なら、他にも沢山御座居ます」

というお言葉に甘えて、また図う図うしいお願いですが、私の友人のM氏にも不要の品をプレゼントしていただけないでしょうか。

彼、喜びます。私あてにお送り下さい。

「こんなはしたない事」

だなんて、とんでもない。誤解する人にはさせておいて、気になさらずに、

「力になって」

奇クファンを救済して下さい。

M氏の彼女の品を、私はプレゼントしてもらったことがあるものですから、M氏を紹介して、そのお礼をさせてもらおうという寸法です。ハイ。とにかく、M氏はおパンティが

好きですからね。

それはともかく、市川高夫氏御夫妻が、御自分で書かれた通り、約束を守られたことに私は感激しました。

書くのはやさしいし、どんなことでも云えます。が、現実に約束を守ることや、人を信

毎月確実に入手されるために

本誌予約購読者を募る

予約申込者月毎増加中です

毎月確実に二十五日発売!

一月分	一冊	三〇〇円
三月分	三冊	九〇〇円
半年分	六冊	一八〇〇円
一年分	十二冊	三六〇〇円

○本誌は只今の情勢から場所によっては入手が困難な所もあると思われましますので、確実に毎月御入手されるためには、是非直接予約お申込み下さるようお願いいたします。

○直接御予約下されるのには、天星社宛に(阿倍野局私書箱第十四号) 予約購読料をお払込み下さればよいのです。

○本誌の送料、包装代などは総べて当社にて負担いたしますから、誌代のみ御送金下されば結構です。

○本誌の誌代は、一部三〇〇円ですから、従って、予約購読料は一カ月一冊三〇〇円、三カ月分三冊九〇〇円、半年分六冊一、八〇〇円、一年分一二冊三、六〇〇円です。今後誌

代の改訂は当分の間しない予定です。

○予約お申込みの方には、毎月二十日頃印刷完成と同時に、外部から見えないように厳重包装の上、お送りいたします。

○毎月一冊宛お申込み下さる方は、誌代三〇〇円を、なるべく十五日頃までに御送金頂ければ、印刷完成と同時に、予約者の分と一斉に発送できます。

○予約購読のお申込みの際は、必ず何月号から何カ月分とお書き願います。何月号からとお書きにならないときは、重複や欠号をきたしますので、お留意願います。

○予約金が切れましたときは、封筒の上に「本号にて前金切」の判を捺印いたしますから、継続お払込み願います。その際、継続でも何月号からとお書き添え下さい。

○局留にて雑誌をお受け取りになられる方は、毎月二十五日頃、局へおいで下さい。局留郵便物の受取り方は、先ず御注文の際お受取りに行きたい郵便局(特定郵便局でも結構です)と受取人のお名前とをお知らせ下さい。当方では御指定の局留としてお送りいたしますから、数日後その局で御受領願います。局での留置期間は十日間ですから、その間にお受取りにならないときは、発送人に返戻されます。

じることにはむづかしい。

小包を開けて、約束を守られた市川高夫氏に、だから、私は驚いたのです。

御理解ある奥様を得たことは幸福です。

いつまでも若く、美しく、健康で、明かると夫婦生活をお続け下さい。

千鶴子夫人に私信を要求しましたが、読者通信のお手紙で十分です。期待以上のお手紙でした。また、読者通信にお手紙を下さい。お待ちします。

「夫に毎日洗濯させては愛用していた」プレゼントの品、本当に、有難う御座居ました。

「大切にしなければいけませんよ」ワカリマシタ。

E 旗美也子夫人の懐石膳

七月号「いちぢくの実を持つ女」葉山啓氏を読んで、旗美也子夫人に恋をしました。

美也子夫人のお茶も、懐石膳も、お茶漬も喜こんでいたのだと思います。

六月号で、葉山氏は、美也子役を募集していられたましたが、現実に決定しましたら、有田由起夫役ぐらい、実験台でかまいませんか、こちらのほうにお回し下さるよう、お願いしておきます。(虫ガイイナ)

☆耽美主義者の手記より☆

「鞭」その華麗なるファンタジー

夜 乃 探 郎

△旅のつばくろ淋しいか、おれもさびしいサーカス暮らし……、懐しの古賀メロデイにつれて、破れ天幕の影、幻なる世界、ライトの下に展開される悲鳴と、妖しきデカダンスの数々——。▽

ジンタッタ、ジンタッタと、哀調をおびたジンの音が、やぐら掛けの黒ビロードに、「××娘曲馬団」のたれ幕がある演奏台より流れてくる。

「はあーいノ 只今、只今だよ、当地は初のお目見得だ。××娘曲馬団は、綱渡りからはじまり、はじまり。立てば芍薬、坐ればば

たん、娘十八は、さあサノ パンツ一つで、……そら、そらッノ」

呼び込みの木戸番が、声をからしている前に、私、自称耽美主義者たる夜乃探郎は立っていた。もしここに、物好きな人が居て「貴方はいったい、どこから来て、どこに行くのだ？」と、たずねられても、私には答えられない。ただ△私ハ、娘曲馬団ノ前ニ立ッテルコトダケハ、タシカナンデスが▽とだけ、言うだろうか。

紅白の布で包まれた丸太の柵には、白い羽根の付いたトンガリ帽子を頭にチョココンとしぱりつけられた毛並のよい馬などが五、六匹しきりに足を鳴らしていた。「アフリカ産ラ

イオン」など、大書された猛獣のオリからはウオッ、ウオッと吠え声があたりの空気をふるわせていた。

着かざった曲馬団の少女たちが、白くたくましい足に、肉色のパンツ、毒々しい口紅を付け、それぞれの馬の背にまたがり、何か取りとめもない話に打興じていた。

ともあれ、夜の華やかさには、二通りあるようだ。一つは、ジンタと狂言廻しの大時代的な口振りにつれて展開される公開曲芸。一つはその裏に秘められた鞭と悲鳴による、華麗なるファンタジーでもある。

——夜は更けて、バンドマンの一人、通称トン公が、天幕裏で、哀愁をふくんだ音色を



クラリネットにたくして、遙るか、故郷に残してきた可愛いあの娘をしのんでいるとき。毛むじらの腕をした、コールマンひげの団長をかこんで裏方の男達が、砂を敷きつめた馬場の中央に立っていた。

新参者の綱渡り朝子、鞭打ストリップの雪子と、花形スターアクロバットの重子、一輪車乗りの静子などが、その片隅に青ざめた顔付でうつむいていた。

——それは、公開演技が終り、いよいよ鞭

による華麗なる饗宴の幕が上ることを示していたのだ。

やがて、佐戸団長が長靴をききませ第一声を上げた。

「いいか、これから各自の採点を行う。わざわざ、こんな事までしなけりや、てめえたちは、いっこう上達しない。特にヒヨッ子たちはなおさらだ。まア、おれの調教も少しはありがたいと思うんだな。五十点以下は鞭によるゴ・ホ・ウ・ビーだ。」

大道具方のボン太が神妙？ 顔で、黒光りのするよくしなった鞭を団長の前に捧げた。それをむぞうさに、つかむなり団長は一振りした。蛇のようにくねって、ピューッと空気を斬る音がした。

女たちは、ぴくんと身体をふるわせた。「それから付け加えておくが、今晩は特別にお客さん？ を一人招待している。笑われな

いように、しっかり鞭踊りをするんだ」

団長は後手に縛られころがされている、夜乃探郎を靴の先でけって見せた。

私はいつもの「のぞき趣味」で、曲馬が終るなり裏に廻り、天幕のやぶけ目から、楽屋のシューミーズ一枚のしどけない少女たちの、むんむんする体臭と、半裸の姿を追っているうち遂に捕われ、斯くはぶざまな姿をさらけ出す結果とはなってしまったのだ。

「雪子、前に出る！」

団長は、ぴゅう／＼と鞭の紐を飛ばせた。八字髭がぶるぶると、ふるえた。

——それはくるくると雪子のからだに巻きついた。一瞬！ 団長は、ぐいと力いっばいに手もとに引っぱると、まるで彼女はコマのように廻りつつ……血走っている。

「おう」

吠えるような声を出しつつ、団長は片手でブラジャーと、パンツだけの雪子を抱きとめた。

「雪子、お前は演技中に二度程鞭をさけた。そのため裸になることがおくれ、お客さんの不興を買った。——三十八点だ。」

気転のきくヤー公が、スルスルと柱をよじ

上り、照明用具をあやつり、ライトをともした。

……すでに、白い肌に真赤な充血の跡をのぞかせて雪子は失心していた。

「次は、朝子だ！」

その白々しい光線の中で、佐戸団長の声はひととき高くこだました。チャア坊が、赤白のだんだら衣裳もおかしく、おどけた口調で口上をのべ立てる。

「さて、満場のみなさま方よ、ここ元ごらんに供しまするは、当×娘曲馬団は、番茶も出花のミス・綱渡りは朝子嬢の登場で御座あーい。対しまするは、またまた人間調教師の「ナンバーワン」サド・ダン・チョウー。まずは鞭によるウグイスは綱渡りから、さあさあ始まり、始まり——。」

団長は気取った手付で鞭をかるく空間にあてた。

ひゅっ！ 前奏曲を告げるかのように鳴った。

「お前は、演技はともかく、お色気が足りない。センパイの礼子を、チッタあ見習うんだな。」

ここで団長は、舌打した。

ハ礼子ノ奴、マタ男デモ喰ワエ込ンダノカ、

出テキヤガラネエ。ソウ言エバ美子ノメロウモソウダ。――

「小供じゃねえんだから、もっとアイキョウをお客さんに見せるんだ、四十八点。」

小人の道化師が、茶々を入れた。

「はあーい。ミス・朝子嬢は、おっぱいのふくらんだ所で、しっかり！」

綱は、朝子の背たけ位の、高さにかけられた。下は砂だから落ちてても、カスリきず程度だ。

遠く、トン公が吹くクラリネットは、泣くのではないよ……の「涙の渡り鳥」に変わり、それはまるで美少女の被虐絵巻を物語るかのようにきこえてくる――

赤や青の光りが、めまぐるしく点滅し朝子の半裸を染めた。まだ青さのぬけない未成熟な肩のあたりが、かすかにふるえているのも哀れだった。

×娘曲馬団とかいてある傘で中心を取りながら、少女は綱を渡りはじめた。ちょうどまん中あたりにさしかかったときだ。佐戸団長の鞭の紐が大きく円を描いて少女の体の上に飛んだ。ぴしっ！ 肌をつん裂くような無気味な音がし、同時にひいっ！ という金切声が彼女の、のどをついて出た。ぐらり、半

身がかたむく――が、少女は、かろうじて綱の上にとどまった。

「そうれ、ウグイスさんは黄金のなきごえ」

小人の道化師は、すっとんきような言葉を投げかける。つづけて、

「まだまだ、ホシイね、もう一声」

とつけ足した。またも団長の鞭がひゅっ！ とうなりを生じて……。

むうっとする少女たちの、汗まみれの体臭と、馬場からただよう動物のにおいと、油ぎった男達の吐く生ぐさい息がミックスして、異様な空気が、かもしだす残酷なる「美」へのファンタジイ……。

――私は、まるで夢の中でうなされた、そんな按配で、次々にくりひろげられる鞭によるショーを、われを忘れて見付めていた。可哀そうだ――はじめはそう思ったが、いつのまにか生来のサド癖が、むらむらと持上ってきて、もう夢中だったのだ。

ライトは、水色の光線になり、馬場の上を移動していた。

団長は鞭を腰掛けの上に置き、ふうーと一息ついた。そして汗のにじむシャツをかなぐり捨てた。盛上る筋肉がてらてらと光って

いた。

「さあて、お待たせいたしました。これから
いよいよ、当×娘曲馬団は花形スター・ア
クロバットの重子さんの御登場！」

またも、小人の道化師が口上をのべはじめ
た。

銀色のアイシャドウを眼につけた、さすが
花形スターでもある重子のおでやかな姿を、
ライトが円内にとらえた。新参者の少女たち
とは違った貫ろくを現わしていたが、どこか
近づく鞭の洗礼を恐れる翳があった。

ひうっ／　　びうっ／　　ぱしっ／

佐戸団長は、トレイニングよろしく鞭を
前後左右に振り、その音に眼をほそめた。

「いろは四十八手じゃないが、鞭はムチャサ
ムチャ六十六手の使いわけ、ハイ、まずは、
サクラは花吹雪とゴザイ！」

ボン太が相の手を入れた。

重子だけは、ピンクのガウンをまとい
た。黒光りした紐が、ハガネのような非情さ
をもって、びうん／　　びうん／　　とくり出さ
れる。薄いきれが、その度に一片一片はぎと
られ、キラキラ光りながら……ブラジャー
もむしり取られて……。——こん度は逆立
した人魚のような裸身に、客赦もない鞭が……

……。

佐戸団長の注文で、レコードが、かけられ
た。曲は、あの情熱的な、ラ・クンパルシー
タ。照明は「赤」一色となった。団長はニヤ
リとして、私の方を振りむくなり
「さあ、このへんで、いよいよサービス番組
を入れるか」といったが、すぐ
「責めによるダブル・プレイ！」
と声を張り上げた。

舞台化粧をほどとした富美子が花道から登
場した。「いようーまってきました！」「アネ
ゴ」「たまらねエ！」「曲馬団の女王！」
など、裏方の男はいっせいに拍手をもって迎
えた。彼女は三十近くの年増美人、佐戸団長
の情婦だが、マゾ的な女だった。
小さい時から、ままた母に虐待されたのが原
因らしいが――。

早くもそのこうふんした顔付には悦虐への
期待がろこつに現われ、眼はぎらぎらとかが
やいていた。私は小人の道化師の手で縄をほ
どかれ、細身の青竹を一本もたされた。

「まずは、本番に入る前に」

団長は皮肉な表情をうかべたが、――びゅ
っ／　と立上った私の足元に鞭紐を落した。

私はあおむけにひっくり返った。

男達は、どーっと笑声をあげた。

佐戸団長は、小人の道化師から受取ったロ
ープで、富美子を後手に括りつけた。

——富美子は、あざやかな身のこなしで、
そのままのまのこで小走りするなり、ひよ
いと玉の上にのっかった。

——曲は、急テンポとなり、玉もそれにつ
れてくるくる忙しく廻りはじめた。団長は小
手調べの一発を富美子の尻にむけた。

「きやあ！」

彼女は大袈裟に悲鳴を上げた。それは痛い
というよりは嬌声がまざったものようだっ
た。

「何をぐずぐずしている、お前もやれ」

佐戸団長は、私にむかってけしかけた。そ
の場の熱した空気に刺激されて、私はしっか
り青竹をにぎるなり、富美子の玉乗り姿を眼
で追った。

(終)

『探郎あとがき』

この一編は「曲馬団の幻想」奇ク六月号、
サロンでのサーカス・マニヤ、篠塚正氏のア
イデアを参考としたことを、ことわって置き
ます。篠塚氏よ、アリガトウ！

代理部分護品一覽

○妊婦女体資料の部○

臨月腹ヌード	大手札二枚一組 三〇〇円 安原さゆり 略号「りく」
臨月腹アップ	大手札二枚一組 三〇〇円 安原さゆり 略号「りと」
臨月妊婦の全身	大手札二枚一組 三〇〇円 安原さゆり 略号「りせ」
臨月腹の側面	大手札三枚一組 四〇〇円 安原さゆり 略号「りそ」
臨月腹の背面	大手札二枚一組 三〇〇円 安原さゆり 略号「りも」
臨月垂れ腹	大手札三枚一組 四〇〇円 安原さゆり 略号「りみ」
妊婦ヌード	大手札三枚一組 三〇〇円 安原さゆり 略号「やま」
妊婦しぼり	大手札三枚一組 三〇〇円 安原さゆり 略号「やむ」
臨月妊婦三態	大手札三枚一組 三〇〇円 安原さゆり 略号「よむ」
産み月のお腹	大手札三枚一組 三〇〇円 安原さゆり 略号「よま」
動物的な腹部	大手札三枚一組 三〇〇円

安原さゆり 略号「よみ」	妊婦の股間縛り
大手札三枚一組 四〇〇円	児玉 昌子 略号「には」
妊婦八カ月の緊縛	大手札三枚一組 四〇〇円
児玉 昌子 略号「にあ」	妊娠五カ月の緊縛
大手札三枚一組 三〇〇円	児玉 昌子 略号「にこ」
妊娠前裸縛り	大手札三枚一組 三〇〇円
児玉 昌子 略号「まさ」	妊娠初期の緊縛
大手札三枚一組 三〇〇円	児玉 昌子 略号「ぬろ」
妊婦の股間縛り (九カ月)	大手札三枚一組 四〇〇円
児玉 昌子 略号「にふ」	妊婦の股間縛り (六カ月)
大手札三枚一組 三〇〇円	児玉 昌子 略号「にと」
分娩後縛り	大手札三枚一組 三〇〇円
児玉 昌子 略号「につ」	分娩後股間縛り
大手札三枚一組 三〇〇円	児玉 昌子 略号「にて」

○女体緊縛資料の部○

全裸緊縛姿態	大手札四枚一組 四〇〇円
遠藤百合子 略号「ゆり」	鼻をいたぶる
大手札三枚一組 三〇〇円	遠藤百合子 略号「ゆは」

鼻の穴責め	大手札三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号「なく」	鼻なぶり
大手札三枚一組 三〇〇円	大塚 啓子 略号「ない」
鼻責めの陶酔	大手札三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号「なは」	苦悶の裸身
大手札四枚一組 四〇〇円	関谷富佐子 略号「くせ」
裸身の晒し	大手札三枚一組 三〇〇円
関谷富佐子 略号「わあ」	全裸股間縛り
大手札四枚一組 四〇〇円	関谷富佐子 略号「せら」
強烈エビ責	大塚 啓子 略号「えり」
蒲団に悶ゆ	大手札三枚一組 三〇〇円
関谷富佐子 略号「なき」	悦虐の果て
大手札三枚一組 三〇〇円	関谷富佐子 略号「なみ」
椅子エビ責	大手札三枚一組 三〇〇円
東浦ひかる 略号「おき」	六尺縛り
大手札三枚一組 三〇〇円	東浦ひかる 略号「ろは」
弓吊り責め	梨花悠紀子 略号「つき」

手足宙吊り	大手札三枚一組 三〇〇円
梨花悠紀子 略号「つた」	オムツの股間縛り
大手札四枚一組 四〇〇円	東浦ひかる 略号「むく」
強烈責、被虐の果	梨花悠紀子 略号「りお」
乳房いじめ	大手札二枚一組 二五〇円
大塚 啓子 略号「とお」	激痛ノ逆エビ責め
大手札四枚一組 四〇〇円	大塚 啓子 略号「きえ」
美貌の裸身に縄目	大手札三枚一組 三〇〇円
絹川 文代 略号「きん」	腰元吊り責め
大手札二枚一組 二五〇円	村井知可子 略号「こり」
腰元間諜の拷問	大手札四枚一組 四〇〇円
村井知可子 略号「こく」	強烈エビ縛り
大手札三枚一組 三〇〇円	関谷富佐子 略号「もい」
乳房責の苦悶	大手札二枚一組 二〇〇円
関谷富佐子 略号「もろ」	全裸ムチ打ち
大手札四枚一組 四〇〇円	関谷富佐子 略号「もた」
強打に泣く裸身	関谷富佐子 略号「むち」

狙われた和装の娘

大手札十二枚一組 略号「一〇〇〇円」
愛川悦子 略号「ねい」

強烈エビ責め
大手札三枚一組 略号「三〇〇円」
水本茂美 略号「えひ」

ゴム衣緊縛
大手札三枚一組 略号「三〇〇円」
水本茂美 略号「みす」

バンド開股
大手札三枚一組 略号「三〇〇円」
東浦ひかる 略号「はこ」

バンド責め
大手札五枚一組 略号「五〇〇円」
東浦ひかる 略号「はん」

夫人の表情
大手札三枚一組 略号「三〇〇円」
関谷富佐子 略号「せや」

後手吊り足挙縛り
大手札五枚一組 略号「五〇〇円」
東浦ひかる 略号「うら」

二つ折りエビ責め
大手札五枚一組 略号「五〇〇円」
東浦ひかる 略号「うり」

足挙げ椅子責め
大手札五枚一組 略号「五〇〇円」
東浦ひかる 略号「うる」

吊り打ち
大手札三枚一組 略号「三〇〇円」
関谷富佐子 略号「やり」

股間縛法悦境
大手札三枚一組 略号「三〇〇円」
絹川文代 略号「ぬこ」

踊り子緊縛
大手札三枚一組 略号「三〇〇円」
絹川文代 略号「りこ」

責め衣

大手札三枚一組 略号「三〇〇円」
大塚啓子 略号「せめ」

猪吊り
大手札三枚一組 略号「三〇〇円」
梨花悠紀子 略号「いの」

足挙開股責
大手札三枚一組 略号「三〇〇円」
梨花悠紀子 略号「あけ」

緊縛女体撮影風景
大手札四枚一組 略号「四〇〇円」
大塚啓子 略号「むら」

白晒六尺襪 (正面)
大手札四枚一組 略号「四〇〇円」
遠藤百合子 略号「しほ」

白晒六尺襪 (背面)
大手札四枚一組 略号「四〇〇円」
遠藤百合子 略号「しろ」

黒襪の女 (正面)
大手札三枚一組 略号「三〇〇円」
遠藤百合子 略号「くま」

黒襪の女 (背面)
大手札三枚一組 略号「三〇〇円」
遠藤百合子 略号「くう」

相撲襪を締め込む
大手札四枚一組 略号「四〇〇円」
遠藤百合子 略号「すい」

変形六尺襪
大手札三枚一組 略号「三〇〇円」
細川アヤ子 略号「ふい」

六尺襪開股
大手札三枚一組 略号「三〇〇円」
細川アヤ子 略号「ふは」

六尺フンドシ

大手札五枚一組 略号「四〇〇円」
東浦ひかる 略号「ろい」

六尺襪の女性像
大手札四枚一組 略号「四〇〇円」
関谷富佐子 略号「くろ」

レインコートの拘束
大手札四枚一組 略号「四〇〇円」
大塚啓子 略号「いろ」

ゴムフエチ
大手札四枚一組 略号「四〇〇円」
梨花悠紀子 略号「こま」

バンドを脱ぐ女
大手札三枚一組 略号「三〇〇円」
遠藤百合子 略号「ゆお」

月経帯縛り
大手札三枚一組 略号「三〇〇円」
遠藤百合子 略号「ゆす」

相撲襪着用
大手札十一枚一組 略号「一〇〇〇円」
大塚啓子 略号「すま」

股に喰い込む黒フンドシ
大手札三枚一組 略号「三〇〇円」
東浦ひかる 略号「とし」

股を開いた黒フンドシ
大手札三枚一組 略号「三〇〇円」
東浦ひかる 略号「とひ」

バンド晒し
大手札三枚一組 略号「三〇〇円」
東浦ひかる 略号「はと」

バンド足挙げ
大手札三枚一組 略号「三〇〇円」
東浦ひかる 略号「はそ」

バンド見せ
大手札三枚一組 略号「三〇〇円」
東浦ひかる 略号「はぬ」

白フンドシ

大手札四枚一組 略号「四〇〇円」
大塚啓子 略号「ふん」

黒フンドシ
大手札四枚一組 略号「四〇〇円」
大塚啓子 略号「くふ」

ゴムぐるみ人形
大手札四枚一組 略号「四〇〇円」
東浦ひかる 略号「こみ」

ゴム包みの束縛
大手札四枚一組 略号「四〇〇円」
東浦ひかる 略号「こは」

ゴムと女体アップ
大手札四枚一組 略号「四〇〇円」
東浦ひかる 略号「こあ」

パリスバンド前開き
大手札三枚一組 略号「三〇〇円」
東浦ひかる 略号「おい」

パリスバンド縛り
大手札三枚一組 略号「三〇〇円」
東浦ひかる 略号「おは」

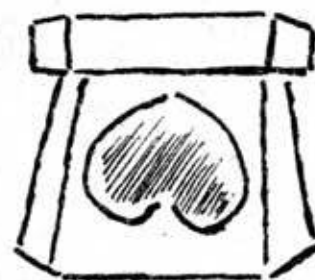
携帯用白バンド
大手札三枚一組 略号「三〇〇円」
東浦ひかる 略号「おか」

サカエ軽便型バンド
大手札三枚一組 略号「三〇〇円」
東浦ひかる 略号「おた」

パリスSSSバンド
大手札三枚一組 略号「三〇〇円」
東浦ひかる 略号「おこ」

パピアバンド 大型替ゴム
大手札三枚一組 略号「三〇〇円」
東浦ひかる 略号「おし」

サカエバンド 百合
大手札三枚一組 略号「三〇〇円」
東浦ひかる 略号「おえ」



切腹研究夜話

切腹の研究

中 康 弘 通

このほど書斎を整理していたら、旧稿の束が出て来た。見ると「切腹の研究」とある。

先年某誌に寄せたところ、その雑誌が廃刊となり、挿絵もろとも返送されたものであった。執筆の時期は、本誌28年3月号から4月号へ連載された「切腹史談」に先立っているが、説述の進め方が異なっているし、また今では、当時の読者でない方も多いと思われるので、ここに夜話の一端として加えさせて頂く。

1 切腹の起原

自殺の方法は世界史上多岐に亘るが、切腹だけは日本人独特のものである。その研究も古来しばしば行なわれたが、まだ定本とするものを見ない。本稿もまた、考察はもとより資料にも欠けるところあり、且つ枚数の制約もあって決定稿には程遠いが、及ぶ限り既存の資料を基礎に、その実相を探る意図を以って書かれたものである。

切腹の創始は、まだ確定的な年代、また人物を発見することが出来ない。従って、続古事談に見える藤原保輔の場合が、現存最古の記録と信ぜられる。保輔は、門閥の優劣ゆえ

に官吏登用にもれ、世を恨んで強盗殺人を働いた。後に僧形となって検非違使の追究を逃れようとしたが、果さなかった。すなわち、

保輔にぐる能はず、刀を抜き腹をさしきりて腸を引出しにけり、検非違使このよし申して禁状せられにけり、此責に忠延左馬医師になされけり、保輔次の日獄中にて死にけり

軍記文学の発生から、切腹の記述は増加する。まず保元物語に源為朝の最期を叙して、為朝二十八にて家の中柱に背をあてて腹かき切ったれども、猶死なれず、後

の骨をふッと切つてぞ死にたりける
もつとも、同書には義朝の幼弟天王の師伝
役、内記平太の殉死を

腰の刀を抜くままに腹かき切つて失せ
にける

と記述し、引続き、

合戦の場に出でて主君と共に討死し、
腹を切るは常の習いなれども

とあるのを見れば、保元以前すでに切腹は
武士の間に広く行なわれていたのであろう。

平家物語では、源三位入道頼政は、

大刀の先を腹に突立て、俯様に貫かれ
てぞ失られける

とある。下つて義経記に至り、佐藤忠信の

最期は、切腹の具体的記述の最初と云える。

義経と別れて京都に忍んだ忠信は、情婦に
訴人されて鎌倉勢の追捕を受けた。勇戦のの
ち「武士の腹切る邪魔をすな」と呼ばわり、
敵の軍兵肅然として見守る中で、

大の刀を抜きて引合をふッと切つて、
膝をつい立て居長高になり、刀を取り
直し、左の脇の下にがばと刺し貫きて
右の方の脇の下へするりと引き廻し、
心さきに貫きて、臍の下までかき落し
然るのちに更に

疵の口を攫みて引き上げ、拳を握りて
腹の中に入れて、腸を掴み出し、椽の
上に散々に打ち散らし
なお死なれず大刀の先を口に含んで倒れ伏
した。

是が武士の亀鑑として伝えられたことは、
義経が衣川の最期に当り、忠信の手ぶりが讃
えられていると告げられ、疵口の広いがよか
らうと、

左の乳の下より刀を立て、後へ透れと
かき切つて、疵の口を三方へ掻き破り
腸をくり出し、刀を衣の袖にて押拭ひ
衣ひきかけ脇息し

そのまま絶命を待った。

義経ほどの勇将が、切腹の方法に精通して
いなかった、とは首肯しがたいが、それだけ
当時は、切腹の定まった形式がなかったと云
えよう。

太平記に至つて、通巻二千余人の切腹が記
載されている。就中、吉野の山城に包囲され
た護良親王を落し参らすため、身代りとなつ
て切腹した村上彦四郎義光の最期は目覚まし
い。

唯今自害する有様見置きて、汝等が武
運忽ちに尽きて、切らんずる時の手本

にせよ、と云うままに、鎧を脱いで櫓
より下へ投落し、錦の鎧直垂の袴はか
りに練貫の二つ小袖を押膚脱いで、白
く清げなる膚に刀を突立て、左の脇よ
り右の側腹まで一文字に掻切つて、腸
掴んで櫓の板に投げつけ、大刀を口に
啣へて、俯伏になつてぞ伏したりける
この有様は、一文字切腹の例として、腹切
考にも引用されている。

興亡は兵家の常、北条方でも六破羅探題北
条仲時が、元弘三年五月八日、近江国番馬の
駅に切腹する。すなわち部下の将士に向い、

はやく仲時が首を取つて忠に備へ給へ
と、言ひ果てざる言の下に、鎧脱いで

押膚脱ぎ、腹掻切つて伏し

それと見て糟谷三郎宗秋は直ちに、仲時の
柄口まで腹に突立てておかれたる刀を
取つて、己が腹に突立て、仲時の膝に
抱き付き、俯伏

続いて同時に腹を切る者四百三十二人。

同じく二十二日には鎌倉東勝寺で、新田義
貞の軍勢侵入と知つて執権高時以下、門葉二
百八十三人、我先にと腹を切り猛火の中に果
てた。その魁は長崎次郎高重で

左の小脇に刀を突立て右の傍腹まで、

切目長く掻破って、中なる腸手ぐり出して伏

三転して足利高氏が北朝を立て、南朝劣勢となったとき、新田義顕二十才は、金ヶ崎の落城に当り、尊良親王に自害の法を問われ、

刀を抜いて逆手に取直し、左の脇に突立て、右の肋骨二三枚かけて掻破り、其の刀を抜いて、宮の御前に差置きてうつぶしになって

相果てた。後年、新田義興も、武蔵国矢口の渡で謀られ、沈み行く舟中で悲壮な立腹。

七生まで汝等が為に恨を報ずべきものと大いに忿りて、腰の刀を抜き、左の脇より右の肋骨まで掻廻し掻廻し、二刀まで切り給ふ

このころまで、切腹は自発的に行なわれる場合に限られていた。敗北、殉死などの動機によるそれは、まだ刑罰としての切腹ではなかった。腹切考に本多忠憲が註したところによれば、明徳三年、楠正元が囚人として切腹させられたのが、切腹刑の初まりで、明徳応永のころ、法制として備わり、天文ごろより作法を書き記すことが行なわれたという。

2 切腹の方法

一概に切腹と云うも、刀法は極めて多種多様であるが、大別して一文字、二文字、三文字、十文字とする。

まず一文字の法を腹切考に就て見ると、ただ腹を横に引わたしたるまで也

と。太平記にも見える如く、臍の上、肋骨との間を横に一とすじ掻き切ったものと云えよう。例えば甲乱記の小山田備中守は、一尺七八寸の長脇差を抜き、

草摺をたたみ上て、小腹に突き立て、弓手より妻手へきりきりと押廻し、其

身は俯伏に成

とある。小腹は上腹部を指す。

自刃録では、臍上一寸又は臍下も可、深さは三分乃至五分とある。江戸時代の、介錯も備わったころの著述であるから、見苦しからぬ最期を願う意味で腹膜を破らぬ深さを選んだものであろう。長さは五寸乃至七寸切り割く。もっとも一文字と云っても、刃を上がり気味、又は下がり気味に引廻す例は多い。

異形として仙道軍記の多川八郎は、

さらば切腹仕らんとて大刀を抜き、弓手の脇より妻手の脇へ突通し、南無と云いて向へ押しければ、腹は上下に別れ、腸前に出でにけり

とある。また石田軍記では、関白秀次切腹に殉じた不破万作十七才の先腹切るさまを

日本に類無き美少年、雪よりも白き肌をば押開き、初花の漸く綻ぶ風情なるを風の風に吹散らさるる気色にて、弓手の乳の上に突立て、目手の細腰迄曳下げたり

と記す。なお、縦に切下げる例では、甲乱記の小山田大学助がある。

脇指を取て胸より小腹まで押下し、北枕にぞ倒ける

二文字は僅かに一例、浅吉一乱記の大石主悦良金十五才のみである。主悦は押肌ぬいでもまず

左の肋骨より右の肋骨まで臍の下一文字に掻切る

次いで、

胸の下左の骨ぎはより右の骨ぎはまで引付けて、二文字に切目大きく手ぎはであったという。然し、四十七士は当時の法に従い実際に刃を腹を加えなかったから、真偽は保しがたい。ただ井原西鶴の武道伝来記にも、

妥女右京が最後、銘銘に腹二文字に引捨て

とあるから、二文字の法はあったものと思われる。

三文字も例が少い。土佐偉人録によれば、慶応元年五月十一日、武市半平太三十七才は顔色凜然、匕首を執て腹を割、左より右に及ぶ三回、三字状をなす、乃ち端座の俛徐かに両手をつき俯首すとある。

乃木希典の最期は、赤坂署長談によれば、シャツ丈けになって腋下左の横腹より軍刀を差込み、稍斜めに右横腹へと八寸切割き、グイと右に廻し上げてゐられた（和田克徳氏「切腹」による）

然し警視庁検死記録では、

襦袢に被われたる上腹部に大小三条の皮膚切創あり、而も襦袢には切痕なきを以て、一旦襦袢を捲りあげ割腹後再び襦袢を被ひ、袴の釦をも懸けられたるものならんと推測す。

また、静子夫人を描いた陶山密氏の小説「ある女の一生」では、

無言で上着を脱ぎ、下腹を寛げた。軍刀に仕込である備前兼光を右手に取ると、左手を添えて左腹に突立てた。じりじりと左から右へ八寸ばかり斜に引

廻し、次いで右から左へ五寸位廻し、

最後に左から右へ二寸位引廻した

とあるのは、小説ながら略々真相を描いたものと云えよう。

十文字は一文字と共に最も多く用いられただけに、異型も多い。

第一は腹切考によれば、

左の方へ突立て右の方へ引廻し、その刀を引抜きて取直し、胸の下鳩尾（此所心臓有所故突入也）の所へ刃を下の方へ向け突込て柄を逆手に握る時、仰向たる所を持直して押返し（此時手握拳下方へ向也）力に任せて柄頭を握て下へ押下ぐる也。是にて胸より臍まで豎に切裂かる事、袴の横紐の所迄押下げれば胸の所迄は慥に切る也、心の臓へ刀を突立てるは是にて氣は絶え別に咽喉笛を突に及ばず、自ら止めをさす仕方なり

と説く。例証として細川両家記の細川九郎澄之が切腹に当り、波々伯部伯耆の言葉

それ自害とは十方仏土と申せ共、先づ西へ向ひ十念し、御腰の物を抜き、左の脇に刺立、右手の脇へ引廻し、返す刀にて御心本を刺立て袴の着ぎはへ推

下し候

を引用している。

第二は慶応四年二月二十三日、堺事件で妙国寺に切腹した箕浦猪之吉二十五才の執った方法である。近世日本国爲史新政内外篇によれば、

徐ろに衣を開き、短刀逆手に取ると見えしが、忽ち左の横腹に力を籠めて、深く突立て、三寸ばかり切下げ、右手へキリりと引廻し、又三寸ばかり切上げ、見事十文字形の切方をなした。

この日、大石甚吉三十七才も同じ方法であった。即ち土佐偉人録によれば、

両手及び腹部を撫擦する数次の後、短刀押取り式の如く左の脇に右手もて突立て、左手にて刀の柄を押して之を切り下げ、再び刃を転じ、左手を添えて切り上げたるに、少しも渋滞なく実に目覚ましき割腹なりき

という。

第三は是も土佐偉人録所収の弘瀬年定の言である。

常に屠腹の法につき人に語りて曰く、先づ刀尖を浅く左腹の下部に突立て、キリりと右の腹へ一文字に引廻し、即

ち刀尖を斜に刎上げ、其手勢もて一思に左乳下急処を刺さば、腸を破らず血出ることも少く、直に絶息するものなりと

而も文久三年六月八日、彼が切腹を命ぜられるや、その言のままに二十八才を一期として、見ごと切腹した。

第四は瓜生寅の筐底録によれば、右の股を縦に切り、次で刀を左腹部に立て右腹部へ掻切る。水野十郎左衛門は賜死のとき、右の太股を縦に切ったが、そのまま刀を三宝に戻して介錯を受けたという。

3 切腹の様相

(イ) 敗戦

軍記合戦記に見える切腹は、そのほとんどが、戦敗れ逃れ得ず、あるいは逃れ又は降るを潔よしとせぬによる。

高遠記の仁科五郎信盛十九才は、天正十年二月二十九日高遠落城に当り切腹する。

今は是迄なりと城将信盛、二間の大床に上り柏葉の鎧を脱棄、短刀を抜て左の脇腹へ突立、右の肋骨二三枚かけて掻破り、自ら腸を握て後の壁へ投付る太平記の村上義隆二十才は、父義光の命で

護良親王の落ち給う間、敵を支えていたが、死ぬる迄も猶敵の手にかからじと思ひけん、小竹の一むらあける中へ走り入って、腹掻切

浅井物語の朝倉義景は、元龜四年八月二十日、織田勢に抗しがたく、

西の刻頃に刀を弓手の脇に突立、妻手へ引廻し、又胸本に突立、臍の下に切下ぐる

更に鮮血を滴らせつつ障子に火を付け、家臣に介錯させた。

関東合戦記の足利義久十才は、永享十一年二月二十八日、父持氏ら自害と聞いて、報国寺で、

少も騒ぎたる体なく、焼香し給ひて仏名を唱へて刀を腹に立て静に自害せらる。わづか十許の御身にて此如きの振舞、皆感涙をぞ流しける。

とあり、北条記には、この事を

御守刀を抜き、左脇に突立俯に伏給同じく北条記の上杉小五郎持成は同じ日、

念仏百返許り唱へて雪の肌をはだ抜き九寸五分の刀を抜、左の脇より右の乳の下まで引廻す所を、めのとの鈴木豊前守、後より主の首を打落、其大刀を

取直し、己が心もとへ鏢もとまで指貫きて失にける

(ロ) 降伏

戦国時代に降伏の条件として切腹した城主は、清水宗治に限らない。

安西軍策の吉川経家は、天正九年二月、鳥取城に織田方の検使を迎え、

押祖で一尺五寸有ける脇差中巻し、介錯に向信長の実検に入首なれば能打てと宣声の下より、脇差左手の脇へ突立妻手へ曳やと引廻し又心本に立、臍の下迄引下し、刀を持たながら首を差出し給へば、静間首を打落す。

備中兵乱記の三村実親二十才は、天正三年正月二十九日毛利勢に降った。すなわち

父の為に切る腹なれば、如来も済度し給ふべしと、大脇差に中巻して左の脇に撞立て、右の脇に引廻し、柄も拳も砕けよと、真直中に押込み十文字に切る

ところを老臣が介錯した。

実親の兄の元親は、六月二日居城を落ち延びてのち毛利方に検使を乞うて切腹した。

脇差を左の脇に突立右の脇に引廻し、胸の下程にて柄も拳も摧けよと押入れ

声をかくると頸打落す

大内記の平賀新四郎隆保は、天正二十年九月二日切腹した。

若輩にて有けれど腹の切りよう十文字にて、横ざまに切り

しかるのち心しずかに身の上話などし、辞世を認める紙を乞うた。しかるに

介錯の者ども時刻うつりて叶まじ、早と急ぎける。隆保力及ばずして脇差

を取直し、心もとより乳の下へ差下してぞ伏にける。

(イ) 刑罰

一は法令により与えられる場合である。神戸事件の滝善三郎三十二才は、外人殺害の責で慶応四年正月、兵庫永福寺に切腹した。ミットフォード著「旧日本の物語」による。

又もや一礼終つて善三郎は上衣を帯下まで脱ぎ下げ腰の辺りまで露はし、仰

☆四馬孝☆力作画

時代風俗 女体切腹図絵

大中判印画紙極鮮明焼付

五枚一組

一〇〇〇円 略号(ゆい)

一、座敷牢の美女切腹

無実の罪によつて、座敷牢に押し込められた武家の美しい娘。牢内に白布を敷きつめ、双肌ぬぎとなるや、自らの潔白をあらわすため恋人の見てゐる前で、雪をあざむく真白い下腹をあらわにして、短刀できりきりと切りさばき、左の乳房の下に止めの一刺し。天晴れ覚悟の美女切腹の姿。

二、介錯に果てる美女

ふくよかな胸、まろやかな肩口、可愛いく庭に端座した娘。ふっくらと脂づいた左脇腹から脇下にかけて、脇差で切ったかき切りの美せは、介錯の刃がきりりと一閃。麗わしの美

女の細首が、さつと飛び散る血しぶきと共に身首異にする凄絶のシーン。

三、駕籠の中の姫君切腹

氣にそまぬ縁談の相手の家へ駕籠で送られてゆく可憐な姫君。腰巻一つの裸身となつて覚悟の切腹を果す。守刀を抜き放つて豊かな臍下へずぶりと突き刺し、更に鳩尾へかけて十二分にはねあげて、凄惨にして美しい十字腹の見事な姫君切腹の有様。

四、男装の美女切腹す

小姓姿もあでやかに身を変えた男装の美少女が、豊かな乳房もむきだしに着物の前をくつろげて、白く輝く下腹にしたかに突き刺す懐刀の切先。深夜の奥御殿にくりひろげられた倒錯切腹絵巻。

五、美女裸身の切腹

もはや逃れられないと決心した美しい腰元は、死んで操を守りぬこうと、すべすべとした柔肌のすべてをさらけだして、守刀の短刀を抜き放つと、下腹のたっぷり肉づいた皮下脂肪を切った上、咽喉元に止めの一突き。

向に倒れる事なきよう、型の如く注意深く両袖を腰の下に敷入れた(中略)

彼は思入あつて前なる短刀を確と取

上げ、嬉しげにさも愛撫するばかりに

是を眺め、暫時最期の観念を集中する

よと見えたが、やがて左の腹深く刺し

徐かに右に引廻し又元に返して少しく

切上げた。この凄じくも痛ましき動作

の間、彼は顔の筋一つ動かなかつた。

彼は短刀を引抜き前に囲みて首を差し

伸べた。

右の例では、思う存分腹搔切つてのち介錯を受けるが、徳川時代はおおむね故実作法にこだわり、甚しきは木刀、白扇等で刀に代えることもあった。

一つには必ずしも誰もが快く服罪しないから、危険を恐れたのと、勇氣に乏しい者が醜態を残すのを危ぶんだからであろう。

切腹事の扱い方は、髪のかき方から死骸の片付けまで、武学拾粹、軍用書、凶礼式などに見えている。介錯は切腹人が腹を切るまでの方が打ち易いので、三宝を押し頂き、あるいは刀を腹に擬するの姿勢の内にけられた。

四十七士は後者に属する。しかし間新六郎だけは是に甘んぜず、

肌を脱がざる前に三宝を戴き、脇差をとり腹に突立、

六七寸も引廻す早業を見せた。もと介錯は補助行為であつたが、のちには切腹を形式化し、有名無実にするに役立った。

次には、仇敵に捕われて切腹させられる場合がある。明良洪範に見える氏家兄弟は、父内膳正が豊臣方として戦没のため、家康の命で京都妙覚寺に切腹した。左近二十四才、内記二十才、八丸八才であつた。

八丸の不覚を恐れて左近が、「八丸より先に腹を切れ」と声をかけると、八丸は健気にも、「切腹を見たことなければ、兄上の御切腹を見て、左様に切申す」と云つた。そこで

然らば我等と内記が切腹の様子能く見て好く其の如くにせよと云聞かせ、左近押肌脱ぎ一文字に引廻し首を打たしむ。其時八丸の面色少しも変らず身繕ひして肌を脱ぎけるに、見物の老若見るにたえずして、一同に声を立て泣出し、皆々同処逃れ出さんと也。八丸は静かに脇差を抜て弓手の脇に突立てしが、其俣首打落されけると也。

なお、新渡辺稲造著「武士道」によれば腹搔切りながら左近は

余りに深く搔くな、仰向に倒れるぞ、俯伏して膝を崩すな

内記は、

目を刮と開けや、さらずば死顔の女に紛ふべきぞ、切先怯むとも、又力撓むとも更に勇気を鼓して引廻せやと教える。そこで八丸は

と教える。そこで八丸は

静かに肌を脱ぎて、左右より教へられし如く物の見事に腹切り了へた。

(二) 殉死

保元物語に見えた以後、徳川幕府の禁令が出てからも、追腹は行なわれた。

先述の三村実親の小者藤若十四才は、実親切腹ののち、実親の死骸に寄り切腹した。また中村一氏記によれば、中村一学の死に際し小姓垂井勘解由十九才、服部若狭十八才は、米子感応寺に於て、慶長十四年五月十三日追腹を切つた。

若狭脇指をとり、その俣腹を切候はんと仕候へは、勘解由申候は同道を後先へ参候はば如何敷思召候はん間、声をかけ一度に切候はんとて、止め候て声を一度にかけ申候。若狭は其俣腹へ突込切候を介錯仕候、勘解由は腹を十文字に切申へく候とて介錯に断申候て、

横に脇差切立、切申とて鳩尾の辺りより臍の脇へ押下申、脇差深く立申候やらん下り兼申候を声をかけ両手にて押下申云々

下申云々

関白秀次切腹の時、先腹切つた寵童三人、一人は先述の不破万作である。乃木將軍の如きは、殉死と責任感の交錯によるものである。

(三) 偽死

身代り切腹は奥羽永慶軍記にも見えるが、村上義光の一例で充分であろう。

(四) 憤死

太平記の安東左衛門入道聖秀は、新田義貞から帰順を奨められ、

一度は恨み一度は怒って、彼使の見る前にて、その文を刀に握り加へて、腹搔切つてぞ失せ給ひける。

また甲子夜話によれば、増上寺の僧、新田大光院は、寺内の確執が官裁となつたのを憤り、弟子および塔中の人人を集め、この体を見よ、と切腹した。

刀を執り利剣即是弥陀号と唱へ腹を搔切り、その刀を以て一声称念罪皆除と唱へ、腕に突立たるに死せずかたわらの者に命じて咽喉を側から刺

させて絶息した。

また近藤甚左衛門の記事によれば、猿樂の舞の馬の口を取らされたのを恥ぢかつ憤おり

武士の冥加に尽き果たると存詰たり、

切腹仕らん

老父に申出たので

もっともの申分なり自害せよと申ければ、見事に切腹しけると也

(1) 諫死

源平盛衰記によれば、木曾義仲が範頼、義経の追討を受けたとき、都の貴女に別れを惜しむ余り出陣の遅れたのを、越後中太能景は

弓矢取る身の心移すまじきは女なり、

只今耻見給はん事の口惜しさよとて、

今年三十六になりけるが、椽より飛び

降り腹掻き切つて失せにけり。

青年時代の織田信長を諫めた平手政秀の死は有名である。

(2) 雪辱

辱かしめられたとき、武士は切腹すべきものとされていた。笹本寅氏の「会津士魂」では、郡長正十五才は小笠原藩校で学ぶ内、辱かしめられ、後日剣道試合に力戦、名誉を恢復した上で、会津の学友を集めて道場で切腹した。

素早く胸押上げ、隠し持った短刀の鞘

を払うと、ぶつりと腹に突立ながら：

……(中略)……キリキリと左から右へ

短刀を引き絞って、サッと鮮血が迸

った。

(3) 雪冤

嫌疑を蒙り潔白のために切腹するのは、却って有罪の告白と取られないでもないが、しばしば行なわれた。

太平記の赤橋相模守は、足利高氏が鎌倉に叛いたとき、縁者である関係から、

相模殿を始め奉り一家の人々、さこそ

心をも置き給ふらめ、是勇士の恥づる

所なり、

と敗戦ともまだ定まらぬ内に、

帷幕の中に物具脱ぎ棄てて腹十文字に

切

(4) 遵法

和田克徳氏の「切腹」によれば、嘉永六年神奈川沿岸工事中の松山藩士、新海八良左衛門は、一日同僚の悪戯で蒲団むしとなり、苦しみの余り抜刀した。乱心として隠便な結末を計らわれたにもかかわらず、切腹を申立ててやまず、遂に見事腹一文字に掻切つて果てた。其の結果、若侍多数連累して切腹仰せつ

かった。

(5) 責任

罪にならぬ過失として責任をとった例で、昭和十七年五月長崎丸触雷沈没の責を負った菅源三郎船長がある。是も和田氏による。

西洋剃刀を取出し、胸をはだけ、左の脇腹から真一文字に右脇腹迄グッと掻切り、更に右上に引上げた。直ぐ刃は頸動脈に向けられた。

菅船長伝によれば、下腹を半月形に十五廻ほど切っていたという。

(6) 情死

男女の情死では、箕輪心中の藤枝外記の如く、男だけが腹を切った例は多い。また珍しい女の腹切りでは、西石垣の遊女お花が情夫と心中するのに腹を切った。それが長町女腹切で伯母の役にふりかえられたという。

同性では「藻屑物語」の舟川采女と伊丹右京がある。愛情の縄れから右京は刃傷の末に切腹を仰せつかる。すると采女はすべて自分ゆえと、右京切腹の場に押並んで切腹する。

今は時刻も移れりと、雪の肌へを押寛ろげ左の脇へ突込めば、采女も共に押肌抜き、我こそ先に三途の川を瀬踏し侍らんと突立つる……(中略)……右

の方へ引廻しけるが、後は互に刺し違へ打重なりて臥にける

女でも昭和の初め、綱島温泉夢の宿で、うら若い娘二人、腹刺し違えて情死を計った。

(ウ) 義死

死を選ぶことが義理を全うするために必要な場合、それは芝居などで最も多く現われている。特に女性が切腹を選ぶ場合、この理由によるものが多い。案外落城などで腹を切っ

た女はないものである。

その一例に、藤井猪勢治氏「絶忠の武人」から、鷹林花代夫人四十七才を引用する。

夫宇一中佐に後顧の憂いなからしめようと昭和十四年一月十九日、夫人は広島の下宿先で切腹された。

白装束に黒紋付を重ねた花代夫人が、膝下には血止めの綿やガーゼを敷詰めた姿勢も崩さず端座したまま、両足は白

女性切腹（時代篇） 絵巻

四馬孝画

略号（えま2）

大中判印画紙焼付 六枚一組 一〇〇〇円

若き女性の切腹のイメージを時代風俗に求めて、その構想を縦横に發揮しようと試みたのが、この時代篇です。近代的なりアルなタッチを活かして、美しい過去の女性の姿を追求して貰いました。

- 一、落城の姫君、火中の自刃
- 二、武家の娘、覚悟の切腹
- 三、恋人に抱かれて切腹
- 四、介錯に落ちる女の首
- 五、死を賜った腰元の切腹
- 六、操を守る若妻の切腹

ここに掲載しました「えま2」「えま1」二組の切腹画は以前感光紙焼付にて分譲したものです。今回御希望の方にのみ特に印画紙に焼付けて頒布いたします。

女性切腹（現代篇） 絵巻

四馬孝画

略号（えま1）

大中判印画紙焼付 六枚一組 一〇〇〇円

その精細にしてリアルなタッチにて、数多くの口絵を発表して斯界に独特の新風を吹き込んだ四馬孝氏が、女性切腹をテーマに制作の意欲を燃やし、うら若き現代的な女性が絶対命の境地に追い込まれて、自らの手で自らの命を断たなければならぬ場面を設定して、その哀婉に満ちた現代女性切腹の姿態を彩管に托して、ここに華麗な絵巻が完成しました。

- 一、将校と女学生の切腹情死
- 二、女間諜ゆうべに切腹す
- 三、大和撫子、乙女の自刃
- 四、美女、雨中の腹立プレイ
- 五、夜会服貴婦人の切腹
- 六、女子大生の切腹自殺

布でしっかりと縛り、そして夫君から授けられた、有栖川宮熾仁親王殿下御佩用の由緒ある短刀で、腹真一文字に掻切り、返す刀で見事に頸動脈を切断、恰も御真影を拝するかの如く、俯伏して四十七才を一期として、従容としてこと切れていた。

夫人は事前に食を絶ち、屠腹時に見苦しいことのないようにと配慮された。まことに日本婦人の鑑と仰ぐべき心境である。

奥羽永慶軍記の矢島五郎満安は、居城を逃れて舅の小野寺茂道に頼ったが、最上一党の追究を受け、茂道に難の及ぶのを恐れ、永禄二年十二月二十八日、使者の面前で切腹。

茂道たとへ諸共に滅却し侍る共、如何てか満安に腹切らせん事有るべきという処に、満安左こそ仰らるへくと存じはや用意仕候と言へば、是は如何にと見る処に満安押肌脱ぎしに、一尺許りの刀を腹に押立、背に切先少し顕れたり、今は止るに力及ばず、満安頓て縁より庭に下り立て腹十文字に切て腹腸を掴み出し、家来を呼び首をぞ討せける。

以上で切腹の諸相を略々説き得たと思う。

○臨月腹妊婦資料の部

臨月腹妊婦緊縛	大手札三枚一組 四〇〇円 田中美佐子 略号 (にち)
診察を受ける妊婦	大手札四枚一組 五〇〇円 田中美佐子 略号 (にし)
臨月腹開陳	大手札四枚一組 五〇〇円 田中美佐子 略号 (にり)
臨月腹開陳	大手札三枚一組 四〇〇円 田中美佐子 略号 (にす)
柱縛りの妊婦	大手札二枚一組 三〇〇円 田中美佐子 略号 (にや)
臨月のヌード	大手札三枚一組 四〇〇円 田中美佐子 略号 (にわ)
妊婦の裸身像	大手札二枚一組 三〇〇円 田中美佐子 略号 (にた)
縛られた妊婦	大手札二枚一組 三〇〇円 田中美佐子 略号 (にる)
臨月の裸身像	大手札三枚一組 四〇〇円 田中美佐子 略号 (にお)
臨月の裸身像	大手札三枚一組 四〇〇円 田中美佐子 略号 (にぬ)
突き出た臨月腹	大手札三枚一組 四〇〇円 田中美佐子 略号 (にい)

○刺青女体資料の部

入墨の高手小手	大手札三枚一組 三〇〇円 山原 清子 略号 (いち)
縄に悶える入墨	大手札三枚一組 三〇〇円 山原 清子 略号 (いへ)
足吊り三態	大手札三枚一組 三〇〇円 山原 清子 略号 (いと)
剥れた腰巻	大手札三枚一組 三〇〇円 山原 清子 略号 (いは)
女一匹御意見無用	大手札三枚一組 三〇〇円 山原 清子 略号 (いお)
玉取姫が凄む	大手札三枚一組 三〇〇円 山原 清子 略号 (いほ)
全裸緊縛立像	大手札三枚一組 三〇〇円 山原 清子 略号 (いん)
入墨ヌード	大手札三枚一組 三〇〇円 山原 清子 略号 (いよ)
後手吊りの構図	大手札三枚一組 三〇〇円 山原 清子 略号 (いほ)
黒細帯の裸身	大手札三枚一組 三〇〇円 山原 清子 略号 (いわ)
黒禪を誇る	大手札三枚一組 三〇〇円 山原 清子 略号 (いか)

入墨自慢	大手札三枚一組 三〇〇円 山原 清子 略号 (いり)
黒ふんどし入墨姿	大手札三枚一組 三〇〇円 山原 清子 略号 (くの)
黒ふん媚態の魅力	大手札五枚一組 五〇〇円 山原 清子 略号 (くな)
黒禪背面模様	大手札三枚一組 三〇〇円 山原 清子 略号 (くこ)
黒ふん手吊り責め	大手札三枚一組 三〇〇円 山原 清子 略号 (くり)
全裸入墨姿態	大手札三枚一組 三〇〇円 山原 清子 略号 (いれ)
晒六尺ふんどし	大手札三枚一組 三〇〇円 山原 清子 略号 (ろと)
白六尺禪一本の姿	大手札三枚一組 三〇〇円 山原 清子 略号 (ろに)
白禪後手高手小手	大手札三枚一組 三〇〇円 山原 清子 略号 (ろし)
日本髪全裸強烈縛り	大手札三枚一組 四〇〇円 山原 清子 略号 (いら)
洋髪全裸強烈縛り	大手札三枚一組 四〇〇円 山原 清子 略号 (いこ)
日本髪全裸股間縛り	大手札三枚一組 四〇〇円 山原 清子 略号 (ほき)

可憐島田鬘全裸縛り	大手札三枚一組 四〇〇円 山原 清子 略号 (いみ)
黒フン高手小手縛り	大手札八枚一組 八〇〇円 山原 清子 略号 (ひろ)
入墨女体全裸像	大手札十枚一組 一〇〇〇円 山原 清子 略号 (ひへ)
黒禪刺青女体美	大手札十枚一組 一〇〇〇円 山原 清子 略号 (ひね)
六尺禪をするまで	連続二十ポーズ組写真 大手札二十枚一組 二〇〇〇円 山原 清子 略号 (ひは)
白ふんどし脇差切腹	大手札十枚一組 一〇〇〇円 山原 清子 略号 (ひに)
白ふんどし短刀切腹	大手札十枚一組 一〇〇〇円 山原 清子 略号 (ひぬ)
刺青姐御腹巻脇差	大手札十枚一組 一〇〇〇円 山原 清子 略号 (ひほ)
刺青姐御腹巻短刀	大手札十枚一組 一〇〇〇円 山原 清子 略号 (ひり)
入墨女体海老責姿態	大手札三枚一組 三〇〇円 山原 清子 略号 (ほか)
文身女体股間縛り	大手札三枚一組 三〇〇円 山原 清子 略号 (ほき)

「痴人の糧」

△或る出会い▽

山本一章



明美——二十才、小柄な方だが、くりくりと肉づきの良い身体をして、あどけなさの残っているような、まる顔と大きな瞳は、快活な少女の感じだった。美人というよりは、可愛さを持った娘で、日本人としては色も白く笑った時よりすましている時の方が、男の心を惑わすような雰囲気を持ただよわせていた。

無名の踊子だった明美と、倍ほども年令の違う大山との結びつきは、ファンと踊子という平凡な契機で始ったのだが、特に変わった過程を辿ったわけではなかった。ただ数回のデートの間に、大山の話題がありふれた世間話から特異な性向の話に移って行っただけだった。そして明美が彼に宛てて書いた唯一回

の手紙が二人の関係を決定し、明美が望み、空想していた運命の中に自分を投じることになったのだった。

(あのような雑誌を読む女なんて変に思われはしないかとびくびくしていました。手提袋の中に入れていたあの雑誌を、あなたが見つけた時、わたしは正直なところ諦めていました。きっと愛想をつかされるだろうと。でも今はあなたにお逢いできたことを仕合せに思っています。いつもあなたのお話を聞けばかりで、黙ったままでごめんなさい。

あたしもそんな目に逢ってみたい——こんなこと、とても口では云えないでしょう。十二の時、酒飲みの父がわたしを後手にして縛り、一晚中物置に放り込んだままにしたことがあったのですが、悲しくて泣き続けながらも妙な気持になっていたことを忘れられないのです。それから雑誌の中に出て来る可哀そうな女の人を見つけたら、自分をその人に置き替えて空想するのです。そして、滅茶苦茶にわたしもいじめられてみたいと……

その父は間もなく交通事故で頭を潰され

て惨じめな死に方をしました。母はその前に離婚していて消息が知れなかったの、で叔父の手で大きくして貰ったわたしです。

こんなわたしで良かったら一度試して下さい。いいえ試さずに、わたしを受取っていただいてもいいのです。

結婚していただけたらとも考えるのですが……。こんな変なことばかり書いて軽蔑なさるかしら？ でもアケミの気持ちをわかってくださると信じています。どんな苦痛にでも耐えることができそうに思えます。口ではとても云えそうにないので、手紙にしました。

大山の返事は簡単だった。

（僕も、それを望んでいました。歓迎します。しかし僕は悪魔のような男かもしれないよ。）

明美が郊外にある大山の家を訪れたのは、その返事があった一週間後の五月下旬、晴れた午後だった。

五年程前に妻を亡くした大山の家にしては割合掃除が行きとどき小綺麗だった。それは彼には愛人があって、ホステスをしているその百合子が二、三日に一回掃除を兼ねて、こ

の家を訪れるからだだった。しかし二十六になる百合子には他にも旦那があつて囲われていたので、大山の家に泊ることは滅多になかった。

この家には二十坪ばかりの裏庭があつて、三方が高い板塀で囲まれ、その向う側は雑木林になって北摂の山脈に続いていて、庭というよりは空地と云った方がよい程、荒れていて雑草だけが茂っていた。その庭の一隅に高さ二メートル程の真新しい柱が立てられ、根元の一メートル四方がセメントで固められてあつた。真新しいその柱は無気味で空々しい感じだった。

「君のために作ったんだよ。」

大山はそう云いながら、赤くなって俯向いている明美の手を握った。

「あの手紙の気持、今も変わらない？」

「……………」

ほんの僅か頷いた明美の表情は、いじらしく、赤くなった耳たぶを大山は美しいなあと感じていた。

大山は早速、明美に洋服を脱ぐよううながした。しかし白昼男の目の前で裸になるのはとても恥しくて明美にはできなかった。やっ

れでいいだろう——と云いながら、ダンボール箱の中から一束の藁縄を引きずり出した。

目を閉じたままの明美を柱の前に立たせると柱を担ぐように後手に縛った。コンクリートの上に立っているため素足の感触は冷く、そして手首を縛った藁縄はチクチクと柔らかい肌を刺して痛かった。大山はいきなり彼女の襟元へ手を入ると、ピリッという音をさせてナイロンのシュミーズを引き裂いた。

ブラジャーは外された。盛り上った乳房がブルンと弾力のあるふるえ方をしながら露出した。その皮膚は一きわ白く、頂上の薄紅の乳首は女のはじらいを示すかのように、ちんまりと固く縮んでいた。

大きな絆創膏をベッタリと両眼の上に貼りつけ、細手の縄を口に咬ませて強く引きしぼって後頭部で結んでから、大山は乳首にそつと口づけをした。ピリピリと女の瘻れんするものが唇に伝わった。膝を曲げ、腰を後ろへ引いた明美は妙に艶めかしかつた。しばらくその姿を眺めていた大山は、今度は憑かれたように、彼女の両足首、膝上、腹部、乳房の下、両肘と藁縄をかけて、柱に強く縛りつけた。最後に首にも縄を巻いて柱に結んだ。

藁縄での縛りは最初の試みとしては強烈過

ざることを大山は意識しないわけではなかった。しかし、これで参るのならもう帰してやろうと思っていた。彼に必要な女は生半可な空想に錯覚している女ではなかったからだ。た。

柱を背にして立った白い裸身は、厳しい処刑の情景を現出した。固く、肌に喰い込んだ縄、縄を咬まされてゆがんだ顔——それは合意のない私刑としか考えられない惨じめだった。その女体を五月のなま暖い風が軽く吹き抜けて行った。

大山は突き出ている乳房をぐいと両手で握った。体温が激しく脈打っているような感触だった。明美の体が縄の中でビリビリとけいれんし、筋肉が凝縮した。小さな乳首が彼女の心理を表現するかのようにつよく飛び出して大山の掌をくすぐった。手を放した大山は、その二つの小さな突起の根元を白い木綿糸で括った。再び、女の体が縄の下でけいれんした。

（処女らしいな——）

明美は喘いでいた。後へ回わされた腕が肘のところで痺れ始め、強く締められた腹部と胸の縄のため少し息苦しかった。

（ああ、とうとう縛られてしまった）

乳首を括った糸のため、呼吸するたびに、その部分がちぎれるような痛みを受けた。そして惨じめな姿で立っている自分を意識し、肌を突き刺すような縄の苦痛の中で、彼女は泣きながら陶醉していた。

（もっと、もっと駄目にして欲しい！）

しばらく、そのまま放置された明美は、身体に日光の当るのを感じていた。時々風が肌を撫でた。静かな午後だった。

大山は縁側に腰掛けてて自由を奪われた女を眺めていた。中国大陸での強烈な記憶が彼の頭の中に蘇っていた。

——三日三晩の拷問だった。すっ裸の若い女が、天井の吹き飛んでしまった廃屋の中で責め続けられ、数人の兵隊が黙ったままそれを凝視していた。逆さに柱に縛りつけられた女の下半身には足首の外には縄がかかっていた。なかった。

その身体が二つ折れになって腰から下が柱に直角に垂れていた。その上向きになった臀部を一人の伍長が木刀で叩いた。そのたびに下半身を持ち上げて身体を伸ばすが、しばらくすると力を抜いた身体が二つ折りに戻る姿は、尺取虫の運動のようだった。体が曲るとその臀部を木刀が打った。女の口には荒縄が

固く咬まされていたため、妙な呻き声を挙げるだけだったが、静まり返ったこの一隅では不気味に響いた。充血した顔からはポタポタと汗がしたたり落ちて、苦悶にゆがんだ顔をくしゃくしゃにしていた。何のためにその女が拷問を受けているのかは、補充兵の大山にはわからなかった。何事かを聞き出すためではなく、罵るために罵っているのではないかと思える仕打だった。

二つ折れになった女の身体は浅間しく露骨だった。力を抜いて体が折れ曲った時、足首だけを縛られた両脚は膝を割って菱型の空間を作り、女の部分があからさまだった。伍長は木刀の尖でつついては、にやりと笑を洩らして、後ろの突き出た双つの丘を打った。女は身体を伸ばす。

大山はその光景を、かたずをのんで見守っていた。喉が乾き切っていた。そしてその女の運動の中に人間が動物視された時の哀しさを感じていた。

失神した女は土の上に降ろされ、水を浴びせられた。すべすべとした肌の女体は艶めかしく白々としていた。

それからその女はさらに鞭打たれ、罵られ吊られ、晒された。飽くことのない責めは幾

度か女を失神させた。動物的な呻きが徐々に数少なくなった。夜になると、この廃屋は飢えた狼のはけ口となった。それは玩具というよりは性の道具に過ぎなかった。しかし、若い大山には、その仲間に加わる勇気がなかった。拷問の現場を見たのは、その一日だけだったが、大山はその悲惨な仕打ちの中で悶える女体から強い刺激を受けて、忘れることのできない記憶を作ってしまったのだった。

三日目の昼、その女はすっ裸のまま絞首刑の柱に逆さに吊られて死んでいた。片足だけで吊り下げられた女の身体には、誰が挿したのか赤い菊の一輪が鮮かな色で、薄命の女の裸身を飾っていた。――

今大山は一人の女を前にして、その時の奇妙な快感が彼の全身に滲じみ出てくるのを感じた。亡くなった妻や百合子を縛った時には感じなかった異様ともいえる感動だった。彼女等の場合、縛ることはセックスの前戯でしかなかった。またそれを十分に心得た彼女等の柔順さと猥雑な態度に彼は厳しさを感じたこともなかったし、感じようとしなかった。しかし、今明美を前にして、彼女の白い身体が犠牲者の哀しさと諦めを示しながらも妥協のない悶えの中で厳しく生命を委ねてい

るのを意識した。

一個の女体を一匹の牝を、悶絶するまで責めたいという意欲が泉のように流れ出た。平静に、そして冷酷に、この女体に苦痛を与えなければならぬ。そして最も屈辱的な仕方

で彼女を征服しよう。大山はそう決心すると中国大陸で味わった恍惚感が再び彼に立戻って、血を苦く沸き立たせるのを止めることができなかった。

大山は柱の前に立たされている明美の前に近づいた。後ろに回った腕を、軽く撫でてみた。縄のため盛り上った筋肉が固かった。

「後悔した？」

「……………」

「もうこりたかい？」

心とは反対の質問だった。しかし彼女は縄でゆがんだ顔をかすかに横に振った。

バチン、バチン、

大山の平手が彼女の頬を強く打った。二度三度、顔をそらしてその平手打ちを避けようとする明美の僅かな逃避も無駄だった。

咬まされた縄の上から打たれたため、少し唇が破れて血が滲んだ。

「どうだい、もうやめて欲しいか？」

明美はじっとしたままだった。意識が朦朧としていた。

（愛しています。もっと、もっと！）

縄を解かれた明美の身体を大山は抱き上げて家に入った。目かくしだけは、そのままだった。ぐったりと力を抜いた彼女の肌は、なま温く滑らかだった。

敷布団の上に仰向けに横たえられた明美に大山は口づけをした。

「もう僕のものだよ。」

「……………」

「なにもかも奪うよ。」

「……………」

しかし、彼女はただ頷くだけだった。もう貞操もなにも要らなかった。

（この人のために生命までも捧げよう）

大山は縄跡の残る明美を強く抱き締めた。

（滅茶苦茶にしてやる）

〔続稿予告〕

「痴人の糧」

△晒しもの▽

△屈辱の夜▽

△吊られて▽

九月号

十月号

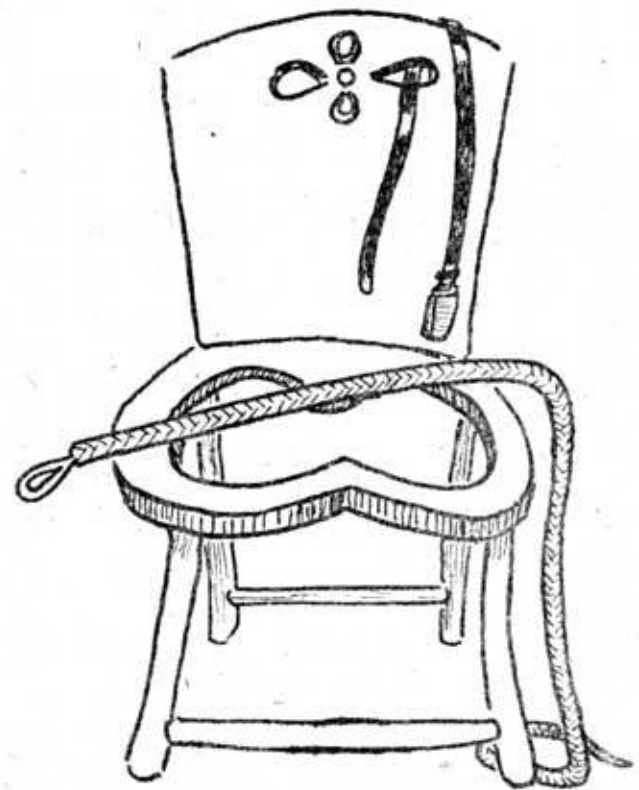
十一月号

連載サディズム小説

続婦人刑務官イヴェット・ヴラディ

心傷たむ遍歴 〔第十二章そのかみのこと(十二)〕

西条 操



第十二章 そのかみのこと(十二)

(続・婦人刑務官イヴェット

・ヴラディ)

イヴェットは看守長室のデスクの前に立ち着任の挨拶をした。看守長女史はお世辞にもスマートとは云えない軀で、角張った顔がきついが、笑うとそれでも人の子の親らしいやさしさを少しは見せる。くびれない腰に締めた革バンドには、手錠の代りに拳銃のホルダーを吊って居た。尤も、あとですぐ分ったことだが、其の拳銃には空包しか入って居な

い。

「御苦労だけども頼みますよ。定員は十六名なのに十二名しか居ないの。あんたが来ても、すぐ一人転任するから同じこと。舎内は一応見たのね。今、丁度六十名居るの。十一号と十二号監房は空房。あんたは、ジャンヌの班よ。一号監房から四号までが一応の担当。おひるに皆戻って来るから待ってなさい。受刑者の顔と番号は早く覚えること。それに生理日もね。担当以外もよ。融通して勤務しなくちやいけないからね。連中の名前なんかは覚

えなくていいんだよ」

看守長女史はネクタイをゆるめて続ける。「お前さん、気立てはやさしそうだね。だからここへ回わされたんだろうけど、うんと締めてかからないと駄目。受刑者の経歴や情状なんかを斟酌することないんだよ。そんなことは、裁判の時に考えられて居ることだものね。ここじゃ、代金を支払わせてやりやいいんだよ。びしびし取立ててやるのが私達の職務なの。甘やかせるのは社会正義に反するし不公平だよ。学校で教わった行刑論なんて、

忘れておしまい。矯正の見込みがある者は指示します。ま、少いわね」

看守長女史も刑務課長と同じイデオロギーだ。三年も勤めれば、重なる失望と怒りの末にそうなって仕舞うのだ。

「ナメられちゃ駄目だよ。刑務所は初めてでも、留置場や拘置所には何度も出入りしてるのが多いんだから。平手で撲るのは天下御免だよ。遠慮なく張り倒しておやり。革ロープがあるだろ、それを二つに折ると、少し長いけど手頃な鞭に使えるわ。服の上からなら傷は付かないから、背や尻を打ち据えてやりなさい。けど、金具の方で打ちやいけないよ。手錠も好きな様に使っているんだよ。ともかく、何でもいいから叱りつけて、ビンタ喰わせて手錠かませて、押えつけてしまうことだね。今云った位のことは、あとで口頭で報告して呉れりや、それでいいんだよ。記録には残らないわ。少々行き過ぎがあったって一向に構やしないんだよ。私や課長がついてるし、第一、法律と云う後ろ楯があるんだからね。知ってるだろうけど、受刑者には公民権はないのよ」

（だから余計可哀想じゃないの。よっぽどのがなけりや、撲るなんてとても出来ない

わ、私……）

イヴェットは看守長女史の胸のボリュームを眺めながら思った。

「ひどいこと云うと思ってるだろ？ まあ、今に分るよ。ただ、衛生には注意するのよ。行刑監察委員だなんて物好きな閑人がいらしてね、やれ視察だの、やれ仮釈放審査だのとうるさいんだから。病人が出たら、すぐ報告して処置してね。けど、仮病にだまされちゃ駄目だよ」

「はい」

それに就いては今まで充分に教わったことでもあるし、健康状態の判断には些か自信もあるイヴェットだった。

「えーと、番号は、刑期満了まで変わらないし、原則として一監は二百台と云うことになっては居るけど、例外も多いよ。整理番号は監舎や房を替わる度につけ替えるの。三十一、二、四と云えば、第三監舎の第十二監房の第四番囚と云う訳ね。受刑番号の下に別の小さな布で付けてるのがそれよ。呼ぶのは受刑番号を使うこと」

「はい」

「うちの監舎の最高は第二級殺人罪の二五年だね。それから強盗の二十年も居るよ、三一

九号だったかしら。ここには終身刑も三名居るわ。長期刑の女囚は、つい可哀想にもなっちゃうけど、感傷や同情は禁物だよ」

「はい」

「ここじや、刑務課長の方針でね、ハッキリした級別累進処遇はしないの。三代前の課長からの代々引継ぎ方針だよ。ややこしくなくていいわ。手加減はこっちですればいいんだからね」

聞きながらイヴェットは、ハッと思い当たった。

（そうだわ。ここは監舎毎に独立してるんだわ。おお神様、どうぞあのお方が此の第三監舎へ回わされる様にして下さいまし）

「ああ、それからね。家へ連れてって使役してもいいんだよ。無制限と云う訳には行かないけど、私に申し出れば割り当てて上げる。近くの官舎に住む者の役得よ。私なんか、ハシカチ以外洗ったことない、床磨きなんかしたことはないわ。其の代り事故起したらことだよ。でも、それはそれで逃げ道はいくらもあるからね。じゃこれがうちの受刑者リスト。よく見ておき」

看守長女史は時計を眺めて、又ぞろ出て行く。

「どこへ行かれますの？」

デスクに頑張るキャスリーヌが訊ねた。

「何だって!! 看守長の出入りは記録しないでいいんだよ。詰まらないこと云ってないで、退屈だったら、イヴェットに教えておやり。学校じゃ教えないヤキの入れ方があるだろう」

キャスリーヌは看守長女史の背に口をとがらせて、鉄格子戸を音高く閉じた。

「あの小母ちゃん、悪いひとじゃないんだけど、えらぶるのが玉に瑕よ。あーあ、毎日毎日女囚達を相手にしていると嫌になっちゃう。男の方へ勤めさせてくれないかしら。でも、お給料がわりかしいいんだものね。所でイヴェット、あんた彼氏ある？」

イヴェットは淋しくかぶりを振った。

「居たことは居ただけだよ」

「そう。ま、いいじゃないの。ここだって保安課には若い殿方が居てよ。尤も、全部女房持ちの石部金吉と云うことになってるわ」

キャスリーヌは、笑いながら手錠を抜き出し、又も引き出しにほうり込んだ。

「こんなの吊っていると、おヒップの線が崩れちゃう。え? この人達? そうね、皆しつかり者ばかりよ。殆んど、三十を越してる

わ。あんなが一番若いんじゃないかって? 当分嫌な仕事ばかり押しつけられるわよ」

そう云うキャスリーヌは、一つ年上の二五才。過失があつて資格を取り上げられてしまつたが、元は幼稚園の保母だった娘だ。イヴェットは渡されたリストを何度も眺めて頭を振った。三〇一号から三八三号まで、かなり欠番があるし、二百台のも二、三名居る。欠番は仮釈放中の者か転舎した者だろう。詰所の勤務割り黒板には、既にイヴェット・ヴラディの名札が掛けて居た。

正午のサイレンが鳴り、暫くすると通路に多勢の足音が近付いて来た。舎外労役から女囚達が戻って来たのだ。引き摺る革サンダルの音に混って鎖の音が聞え、顔引き締めたキャスリーヌが、かちつとした動作で鉄格子戸を開いた。両腕を後ろ手に握り合わせた女囚の群が二列に並び、前後左右を婦人看守に監視され、疲れた顔をうなだれたまま詰所の前を通る。腰をくびって二人宛繋ぐ腰連鎖が列の間で一組宛垂れ、チャラチャラ鳴って前後に揺れて居た。

(あの人達なのね。皆、辛そうにしてるわ) 今日からは自分も、あの女囚達に刑を執行する身なのだ。我知らず眉ひそめたイヴェツ

トは、先刻読んだリストに一人一人を対照しつつ、打ちしおれて歩む列を詰所の中から眺めやった。

「五十九名。担当者は、と…」

キャスリーヌが呟いて出入簿に記入した。女囚達は、電灯が明るく点いた広間に集められて整列した。六名の女囚がシャワー場の水道で顔と手を洗い、婦人看守に連れられて又出て行つた。炊事場へ食事を取りに行く当番囚だ。看守長女史が現われ、女囚の群を一わたり眺め渡す。女囚達は立ちうなだれて、絶えず誰かが鼻を吸って居た。

「よく働いた者は、鎖を取ってやりなさい」看守長の言葉に、担当看守達が鍵を取り出して、それぞれの女囚達に近寄る。女囚達は微かに顔を上げ、近づく婦人看守の手の鍵を盗み見た。どうせ、午後の労役に出て行く時には再びかけられる腰鎖なのだが、矢張り食事の時には解いて欲しいのだ。鎖の錠を外して貰えた組の女囚達は口々に嬉しげにお礼を云い、落ちない様に支え持った三米の鎖を両側から二人でジャラジャラと束ね、お互いの間の床の上に静かにキチンとおき、再び両手を背に組んだ。解いて貰えたのは十組とは居ない。期待が外れた女囚達は、フンと云った

表情で鼻を寄せ、或いは素直に悲しそうな色
を浮べ、黙って床を見詰める。

「担当様。私、二重にかけられてますの。お
慈悲ですから解いて下さいまし。」

哀しげに哀願したのは、三名連鎖の中央の
女囚だ。一人半端なので、其の女囚の腰には
鎖が二条締められて居る。

「駄目ね。お前の労役振りじや、脚鎖つけて
やりたい位よ。」

「だって担当様。まん中なんですもの。重い
だし、どうしても働き難いですわ。」

「あら、口答えする気?。」

忽ち、其の女囚の両頬に平手打ちが音を立
てて往復した。喰いしばった唇から悲鳴が洩
れ、女囚は僅かに上体をのけぞらせて身を悶
えたが、後ろ手の腕はそのまま解こうともし
ないで、両頬をビンタの雨に晒す。握り合っ
た両手を離そうものなら、今度は忽ち反抗と
見做されてしまうきびしさなのだ。

定められた順序に従い次々と自分の監房に
入り、監視付きの用便を済ませ、そろそろ出
て来てシャワー場で顔と手を洗い、そのまま
壁際の物入れに行つて、そこで取り出したタ
オルで初めて拭う。婦人看守の叱り声がする
だけで、女囚の群は一切無言だ。物入れには

番号が打ってあり、一名分宛の食器とタオル
と房内衣が納めてある。衛生をやかましく云
うだけはあって、石鹸は充分に使わせるし、
物入れは消毒装置付きだ。食事の席は勿論定
められており、長椅子を跨ぐことは禁じられ
て居る。食器を手に持った女囚達は、長テー
ブルと長椅子の間を窮屈そうに横に歩いて席
についた。食器は深皿と浅皿が一枚宛、それ
に茶碗匙が一本。何れもアルミ製でピカピカ
磨かれて居る。造りつけの固い長椅子に鎖が
垂れて鳴り、仕切り線の中に各々腰をおろし
た女囚達は、食器と両手をテーブルの鉄板の
上において、それでも嬉しげに食事を待つた
だった。

当番囚達がアルミ桶やパンかごや大薬缶等
を重そうに持って戻つて来て、テーブルの食
器に配って回わる。黒パンの塊りが一個、深
皿には年がら年中同じシチューの煮込み。そ
れに薄いコーヒ―。女囚達はパンの大きさを
較べ合い、シチューやコーヒ―の量に眼を光
らせ合う。無理もないが浅ましいものだ。無
論、不平をこぼすことは許されない。不平を
云えば取り上げられるだけだ。悪くすると、
禁食や減食の憂き目に逢わされる。だから其
の時には黙って居ても、配食の不平不満や恨

みを根に持って喧嘩沙汰の方が、セックスに
根ざす争いよりもむしろ多いのだ。

「食事はじめ」の号令の前に、食前の祈りが
形式的ではあるが行われる。やっと許される
頃にはシチューもコーヒ―も冷めて居るが、
貪ほり喰らう彼女達の食事は忽ち終つて、大
抵の女囚は皿の底まで舐め取る浅間しさだ。
定められた量以外はパン屑一つ口には出来な
い毎日が續くと、恥も体裁も吹き飛んでしま
う其の哀れさ。空のアルミ茶碗に水が配られ
やがて食器が当番囚の手で集められ、女囚達
には食後の休憩が与えられる。きびしい禁制
の女囚同士の交話も此の時には許されて、立
つことは出来ないが楽しい一刻だ。

「今月の炊事当番は一監だわね? わりかし
美味しく作るじやないの、材料のわりには」
「そりや元調理士が居るんだもの。けどこん
なものを締めたままでおマンマ喰つてさ、そ
してあれを見せられちや消化に悪いよ。」

呟いた女囚が喰い込む腰鎖を指でしごき、
正面の鉄扉に顎をしやくる。

「全くだわ。看守連中が睨んでやがるのは、
給仕と思やいいけどさ、横を見りや、革鞭に
足錠、脚鎖に「ベルト」、窄衣にくつわに棒
手錠に革手錠……忌々しい道具がずらりと並

んでるし……」

ヒソヒソ、ガヤガヤとしやべり初めた女囚達の顔に、忽ち恐怖の色が浮んだ。真正面に並んで嫌でも眼に入る懲罰房の鉄扉の一つが開かれたのだ。女囚達は眉をしかめ、懲罰房から顔をそむけた。周囲が鉄枠の溝にビッシリ喰い込む様に造られた、鉄扉が重々しく軋み、房内の被懲罰女囚の裸身が、射し込む光に仄白く浮んだ。壁に背をもたれ、尻を床にペッタリつけて喘いで居た其の女囚はビクリとし、眩しげに眼をつぶって頭を振り、それでも食事と知って身動きを初めた。

「意地悪いことしやがるわね。差し入れ孔があるのよ、そこから差入れてやりや諦めもつくと云うのにさ」

「ほんと。それに臭いじゃない？ もう、ここまで匂うわ。水位ケケケチせず流しやがれってんだ。あんた何回やられたの？」

「三回よ。真冬に三週喰った時には少し参ったわ。」

被懲罰女囚の両足首を繋ぐ三十センチの重々しい鉄鎖が、幅一米奥行二米のコンクリート床にガラガラ鳴り響いた。鉄扉のすぐ内側の床は二十センチ程が外部と同じ高さ、それから奥は丁度膝の厚さ位低くなって居る。床

の中央に埋め込まれた鉄環を潜る足錠の鎖は、膝頭を段落ちの所に接して丁度一杯の長さ、どうやって見ても両膝を伸ばして横になれない仕掛けになって居るのだ。

「さ、パンと水の差入れよ、気分はどう？」

当番女囚が婦人看守に監視されながら、鉄扉のすぐ内側の床に黒パンと深皿をそっとおいた。深皿には水だ。重扉禁囚にはシチューもコーヒーも与えられない。段の内側に膝頭をにじり寄せ、たまげる程の足錠を床に軋ませつつガックリと坐った女囚は、体つきや乳房の張り加減から見ると未だ若かった。汚れた全身に脂汗を光らせ、胸で苦しげに喘いで肩で呻き、眼をしばたたきながら革手錠の両腕を悶える。

「あ、あッ。閉めないでッ。お願い」

悲しく喚く女囚の鼻先で、鉄扉がガシャーンと閉じられた。真暗闇の中で手も使えず、床に転がるパンを鼻先で探ってかじり、深皿に半分の水を苦心惨胆して啜り込まねばならないのだ。

見せつけられて居る女囚達は眼をそむけながらも、大抵平気を装おうて、両隣りや其の向うの仲間と話し込む。声高に話すことは勿論のこと、笑い声すらも日曜以外は禁じられ

て居る。それでも、つい声が高くなり忍び笑いが洩れて、婦人看守の鋭い視線と叱り声が絶えず飛んだ。女囚達の話すことと云えば、男のことと看守達の悪口、そうでなければ愚痴と恨みごとが殆んどだ。

「何してるのッ。三二九号ッ」

靴音と共に革ロープの鞭が鳴った。話に身が入り過ぎて思わず尻を浮かせ、テーブルに体を乗り出して横向いて居た女囚が、背を打たれてヒーツと呻いた。

「ふーッ、ああ痛い。ちくしょう。ベルディヌの奴。二年経ったら、どうするか覚えてるがいいわ。」

顔を歪めた札つき女囚は、婦人看守の後ろ姿を口惜しげに睨んだ。

「いやになるじゃないか。ここんところ、ずっと、両隣りが同じ顔でさ、前に並んだ背中も左の端から三四六、二二五、三四三。判で押した様に決まってやがる。」

「あら、年中こんなツラしてて、悪かったわね。あたしだって、あんたとつるんでるの、いい加減飽き飽きしてんのよ。近頃出入りが少いわね、ごっそり入れ替らないかしら」

と、鎖仲間の女囚が鼻にしわを寄せる。「ほんとにクサクサしちゃうわ。私、あの子

と並びたいのよホラ、三房のアンヌ。可愛い子だわ。」

第四房の三二九号は、未だ未練氣に、数名隔てた向うへ眼をやった。

「仕方ないわね、全部指定席だもの。ねえ、ちよっとお、お向いさん……。二二五号さんてば。あんたもわりかし可愛い子ちゃんね、こっち、お向きよ。鎖取って貰えてよかったこと。」

と、今度は真向いの若い女囚の背に声をかける。

「あの子は駄目よ。来月あたり出して貰えるんだって。仮釈放が決まってるのよ。反則しない様にコチコチだよ、可哀相じゃないか。」

「へーえ、そうお。羨ましいねえ。好いた男が迎えに来てくれるのかい。頭に来ちゃう。」

三二九号は、そう云って胸を押えた。

「あの子はね、あんたみたいなの、いやらしいんじゃないかってよ。ほんの過まちで来てるんだから。」

「あ、そうか。恋人を射ちまったお嬢さんだったのね。勿体ないことしたもんだよ。へん、過まちだかどうだか分るもんかね、ふふーんだ。」

三二九号は聞えよがしに鼻を鳴らし、うら

若い二二五号女囚は、うなだれたまま長いまつげをふるわせて居た。

懲罰房の鉄扉が再び開かれ、苦しげにそれでも懸命にパンを鼻で追って身をものがく女囚の鼻先から、水皿とかじりかけのパンが無慈悲に奪い去られた。悲痛な哀願の声も忽ち鉄扉に遮ぎられて、錠がビシッと鳴り、頭を打ち当てる鈍い音が二、三度聞えた。一旦、一週間と決められたが最後、どんなに泣こうが喚こうが、絶対に赦しては貰えない非情の世界なのだ。六列の長テーブルの最前列は第一房と第十二房の分で空、その次の列の右の方に空席が一人分ある。懲罰房で呻吟して居る三五一号の席だ。

「起立ッ。整列」

女囚達は溜息をつき、それでも一斉に立ち上って、鎖を鳴らしつつテーブルを離れた。遅れた数名の頬にビンタが飛ぶ。整列した女囚の群の間を婦人看守がキビキビ歩いて、鎖のない組に手早く腰鎖をかけて回った。食事の間は御褒美として解いて貰えた鎖、それを床から拾い上げた女囚達は、哀しげな顔に諦めの色を浮べ、自分の腰を自らくびって締めつけ、その鎖を支え持って婦人看守の施錠を待つのだった。

看守長女史が呟鳴った。

「午後の労役の前に、新しい刑務官にお眼にかかっておきなさいッ。皆、鎖をきちんとして。跪まずくだよッ。云わなきゃ、そんなことも分らないのかい。」

或る者は神妙に、或る者はふてくされて、女囚達は自分の腰鎖の結び目を後ろ腰の中央にずらせ囚衣を引張り、そして、或いは素直に或いはノロノロと床に両膝をつき、両腕を再び背に組む。床に垂れ落ちる鎖の音が止み「此のひとよ。イヴェット・ヴラディさん。お前達が罪の償いをするこの出来る様に、これからここでも私達と一緒に勤務して下さい。人だよ。よく拝んでお顔を覚えておおき。分ったねッ」

イヴェットを傍に立たせて看守長女史が言い渡した。跪まずく五十九名の女囚達全員が上目使いにイヴェットに注がれる。すぐに伏せられる眼もあるし、いつまでも白い眼で睨む顔もあって、イヴェットはたじろいだ視線を伏せないで居るのがやっとなかった。しかし、ここで氣押されて威厳を落しては、刑務官は台なしだ。彼女は精一杯のきびしさをこめて頭を真直ぐに立て、支配者の態度で女囚達を見返してやったのだった。

「分ったのッ」

看守長女史の足がドンと床を踏み

「はい」

女囚の群は口々に答えて頭を垂れた。白い眼の最後の一つが忌々しげに伏せられて、イヴェットはホッとしたことだった。

女囚達を跪まずかせておいたまま、看守長女史は詰所の中でイヴェットを同僚達に紹介した。二名の非番者と看守長を除いて九名の同僚は、何れもお世辞にも美人とは云えない女性達だった。キャスリーヌとモレシエンヌの他は三十台も四十に近い。

「商売柄、眼つきは悪いけど、みんないいひとばかりだよ。ホホホ」

と、ジョアンヌ看守長は笑った。イヴェットの班の主任格のジャンヌは三十五、六才の女、そばかすのあるブルネットで背がすらりと高い。後ろ姿のスタイルだけが、まあ一級品だ。

「えーと、今日はこれで帰っていいわ。なんなら労役をちよっと見てみる？」

イヴェットの品定めを終えたジャンヌは、そう云い、取出したキーホルダーの鍵束を指で調べつつ、片手を伸ばして煙草を灰皿に揉んだ。広間に響いた号令の声と共に女囚達は

立って二列になり、革サンダルを引き摺り鎖を鳴らし、黙々と労役へ追われて行った。

「食事、未だでしょ？ 私達、昼食は交替で済ますのよ。食堂知ってる？ 一緒に行きましょう。」

女囚の群を見送ったジャンヌは食事を誘ってくれた。喫茶室の横の階段を昇った本館の二階に食堂がある。色彩豊かなテーブルやカーテン、滑らかな床には植木鉢もあって音楽さえ流れ、鉄格子とコンクリートに囲まれた監舎内からそこへ入ると、全身がホッとゆるむ心地だった。注文を訊きに来た若い給仕女は、小ざっぱりした服に白エプロン姿だが、よく見ると右袖に番号を縫いつけて居る。

「給仕はね、ここも、下の喫茶室も、全部受刑者なのよ。」

ジャンヌはネクタイをゆるめ、腰バンドを外して置きながら云った。

「満期なら直前一カ月位、仮釈放なら二週間位、本館やなんかで働かせるの。三階に個室があつて、そこへ移してね。お化粧もさせてやるのよ。」

「そうなんですか？ なら、私……」
云いかけてイヴェットは、あわてて口を押えた。そこを担当させて欲しかったが、新米

の彼女に回わって来る配置ではない。食堂のあちらこちらに立って盆を片手に気を配る数名の給仕女達は、先刻監舎内で見た女達と同じ受刑囚だとは思えぬほどに、明るく嬉しげな顔色だった。

「勿論、成績の悪いのは其の日まで監舎暮らしよ。ああ、あなたリスト見たわね？ 各人別カードの記載事項を全部覚えろとは云わなけれど、あのリストは頭へ入れといてよ。え？ マークのこと？ ああ、それはね、此のマークは仮釈放嘆願資格のある者よ。これは嘆願受理済の印し。委員会で却下されたのは此のマークの中に、却下年月日を書いてあるわ。」

ジャンヌはコップの水を指につけ、エープルの上に書いて教えた。こんなことは看守長が教えるべきことだ。

「知ってるでしょうけど、却下されると六カ月間は嘆願出来ないのよ。却下された直後は特に注意した方がよくってよ。がっかりしてヤケになるのが多いからね」

イヴェットは頷いた。刑の宣告の中に指示条項がない限り、十年までの刑ならば三分の一から二分の一を服役すると、先ず大抵は仮釈放を嘆願出来る。そして、審査を受ける訳

だが、二度続けて却下されると、先ず三年間は嘆願も出来なくなるのだ。

「審査をパスするのは、どの位ですの？」

「そうね、ここじや先ず半分強と云う所ね。

嘆願も出来なくなった者は扱い難いことよ。

【山原清子、鈴木晃子】SMコンビ・フォト……………

女性対女性の眞迫的緊縛演技写真

分譲

S役……………山原 清子
M役……………鈴木 晃子

鈴木晃子嬢は、山原清子のペットとして永らく飼育されていたのですが先般本誌のモデルとして紹介を受け、初めて「鼻責万華鏡」(略号「はた」)として八枚一組の鼻責めフォトを作成して好評を博しました。今回更に山原清子が実際にペットの鈴木晃子を責めている場面を写真部のアイデアを加味して撮影しました。実際に地味で熱演技は全く当初予期しなかった好結果で素晴らしい傑作が出来上りました。一見下さればお分りの通りSフォトとしてもMフォトとしてもその熱のこもったポーズは必ずや今までにない新鮮さで皆様の胸奥に迫るものと思います。

今はすでに絶版になっております十何年か以前に作成しました春日ルミ女史対伊吹真佐子嬢コンビのSMフォトが想起されますが、今回の山原清子、鈴木晃子コンビのフォトはそれ以上に迫力と若さに満ちております。純然たるプレイ写真ですが、ネガのまま放置しておくのも惜しいので、特に御希望の同好の方にお分けます。

どうせもう満期までは出られないんだと思っ

てふてくされるし、日曜毎に神妙な顔で通っ

てた礼拝にも行かなくなってメツキが剥ける

わね、ホホホ。なまじ、仮釈放なんて制度が

あるからいけないのよ、中途半端で徹底しな

猿轡をされるまで

大手札印画紙焼付 十枚一組 一五〇〇円
略号(さる)

強烈に縛りあげられた鈴木晃子の鼻をつまみ口を開けたところへ布片を押し込み、豆絞りの猿ぐつわを無理強いに噛ませてしまうまでの連続組写真である。

縛りあげられるまで

大手札印画紙焼付 十枚一組 一五〇〇円
略号(さあ)

抵抗する晃子の両手をうしろへ捻じあげて縄をからませ、きりきりと身動きできなくなるまで縛りあげる過程の動きのあるポーズを連続で組写真としました。

屈伏させられるまで

大手札印画紙焼付 二十枚一組 三〇〇〇円
略号(さや)

痛めつける清子のサジスチックな表情と姿態。晃子は清子の意のままになりながらも、その豊かで美しい肢体を惜しげもなく、さらけ出して見事な場面を展開する。

いんだわ。そう思わない？」

「そうでしょうかしらねえ、私にはよく分りませんわ。」

イヴェットは考え考えそう答え、ジャンヌは革ホルダーから取り出した手錠の環をクルクル回わしつつ首をかしげた。

「でも仮釈放も便利なことだってあるのよ。

満員になりや出せるものね。此の手錠、三年も使っていると軸がガタついて来たわ。」

キラリと光って回わる半環が、どうかすると錠に喰い込まずにカチンとはね返る。食事前だと云うのに其の無神経さ、イヴェットは眺めて眉を寄せたが、ジャンヌの様な古顔になると平気なものも当り前かも知れない。給仕女が料理を運んで来て並べた。落度のない様に懸命の態度がいじらしい程だ。

「もうすぐね。嬉しい？」

とジャンヌが手錠を斜めに鋭く振ってピシツと鳴らせる。

「はい。そりやもう嬉しいですわ」

「仮釈放になったらまじめに暮らすことね。又戻って来たりしないですよ。」

「はい。それはもう…。有難うございます」

仮釈放を間近に控えた女囚三二二号は、神妙に答え、ジャンヌ婦人看守の弄ぶ手錠か

ら眼をそむける。手許が狂って、イヴェットのフォークが床に落ちた。

「あッ。申し訳ございません。すぐお持ち致します。お赦し下さいまし」

若い女々は色を失って膝をつかんばかりに詫び、息せき切って代りを持って来た。

「あらいいのよ。そんなにあわてなくても」

イヴェットは同じ年頃の其の女囚の心根が可哀想になって、いたわりの言葉をつい洩らしてしまった。若い女囚の両手首には古い傷痕が消えずに未だ残って居た。残酷な手錠のかけ方をされて、ひどくもがいたことがあったのだろう。

伝票には、イヴェットを抑えてジャンヌがサインした。地下広間への鉄格子のあたりでは、四〇〇台の番号をつけた女囚達が二人宛腰をくびられて、製品の搬出や材料の搬入に汗を渗ませて居た。鉄格子の前を素通りして横手の出入口から外へ出ると、春の午后の陽が眩しい。

「こんなこと云って何ですけど、受刑者には美人が少いって本当ですわね。」

ジャンヌと肩を並べて、イヴェットは云った。

「ホホホ。そのようよ。化粧した所で碌なの

は居ないわね。そりや、中には綺麗なのも居るわ。五監にはミス・ニースだったのが居る筈よ。けど、大抵は、ね。ま、何よね、綺麗な女は殿方達に庇って貰えるから、罪を犯す破目にならないで済むと云うこともかね。」

「そう云うことらしいですわねえ。」

「でもさ、私達だって、そんなに大きなこと云えるのは居ないことよ。イヴェット、あんななんか私達の中じゃ飛び切りよ。それに若くてさ、羨ましいわ。あら、ほんとよ。保安課の男達ももう眼をつけてるようよフフ」

監舎外労役場は、六棟の監舎の向うにあった。高いコンクリート塀に三方を囲まれた広い農場でずっと向うの裏門の上には監視塔が聳えて居る。野菜の全部と小麦の大半とは此の農場で自給自足だ。畑のあちこちで、鋤を曳き鋤を振って、女囚達が切々と労役して居た。絶えず鳴る其の腰の連鎖と、遙か向うの塔の柵に立つ保安係の男の腰の大型拳銃とが、春の陽に光って時々きらめいた。きびしい監視を受ける女囚達は、労役の手足を一瞬たりとも休めることは出来ない乍らも、時々眼を掠め腰をそっと伸ばして、監視塔の男を切なげに見上げる。あちこちの要所要所に立つ婦人看守達が、脅かしの革ロープを鞭代り

に振って空に鳴らし、時には近寄って女囚の背や尻を打ち据える。悲鳴がつんざき糸を曳き、其の悲鳴の方を眺める女囚の頬に平手打ちがバシッと飛ぶ。交代で食事に去った婦人看守に代って立ったジャンヌが、ポケットから取り出した革ロープを捌いて二重に折り、金具の方を握ってヒュウと振った。近くの排水溝を浚って居た二組がビクッとわななく。(労役って哀れなものだこと。要するに奴隷の苦役なのね。けど、仕方ないわ)

眺め渡してイヴェットは、思ったことだった。

本館監視塔のあたりの空でチャイムが鳴りヴィブラフォンの調べが流れて来た。胸に泌みる其の曲は、ドヴォルザークの交響楽、「新世界」の第三楽章「家路」の旋律だ。腰を伸ばすことも許されない苦役に喘ぐ女囚群の顔のすべてに、悲哀と羨望と憧憬の色が走る。或る者は忽ちふてくされた表情に変わって自嘲の笑みを歪めた唇に浮べ、或る者はやがて後悔の涙を濡れた頬に流しつつ肩を震わせた。刑を受け終えた女囚が釈放されて、此のメロディに送られて、ここを去って行くのだ。

(あの所長のお爺さん、なかなか味なことを

考えるじやないの)

玉を転がす様なヴィブラフォーンの音に、イヴェットは耳を澄ませて聞き入った。所長は仮釈放の女囚をもそうして送り出してやりたかったのだが、マルチーヌ課長を先鋒とする連中が、それなら入獄して来る者には「禿山の一夜」をでも鳴らして迎えてやるわ、と反対したので、刑期満了の場合にだけ奏でられることになって居る。物悲しい雰囲気は役場に漂い、苦役を続ける女囚達の姿が少しお哀れになる心地だった。

最後の和音を響かせて、ヴィブラフォーンの柔かな音がコンピエーヌの森の梢に消えた頃、本館の方から二人の婦人看守が大股にやってくる。二人共、ガッチリした堂々たる体軀、腰のバンドには拳銃を、右手には本物の革鞭を輪に丸めて持ち、時々其の束を解いてピューッと打ち振りながら、世にもきびしい顔で労役場を見回わる。女囚達は恐怖の色もあらわに、更に労役に精を出した。

「保安課よ。『表』の連中はいいわねえ。気が向けばブラブラ見回わりになんか来てさ。」
ジャンヌは忌々しげに呟やき、それでも近付く二人を迎えて踵をそろえ、イヴェットに続いて拳手の敬礼をした。保安課所属の彼女

達の拳銃には、実包が装填されて居るのは勿論だ。

そして其の階級は看守長と同格で、刑務課の平看守なんかは叱り飛ばされてしまう。無論、女囚の前で叱ったりは先ず決してしないが。

云うまでもなく、女囚達にとっては恐怖の的そのもので、鬼の様な存在だ。些細な反則でも絶対に見逃さず苛酷な懲罰を言い渡す。担当監舎の処置が手緩いと見れば、本館地下の懲戒室へ連行し、直接に懲罰を加えて絞り上げるのだ。

保安課や総務課等の「表」に対して、刑務課は「裏」と称されて居るが、表と裏の仲が悪いのは通例のこと、あの冷酷なマルチーヌ課長でさえ、自分の承認なしに保安課が懲罰の手を加えると、女囚を庇って激しく抗議する。其のせいか、保安課の拷問室から呻きの洩れることは先ずあまりない。

「保安課は脱走とか、火事とか、集団反抗なんかの時にだけ出て来りやいいのよ。それに女なんか要らないわ。全部男にすりやいいのに。何よ、大きな顔で監督づらして。御覧よあのプロレス級の体。女持ちの腕時計じやバンドが足りないわよ、きつと。」

ジャンヌは忌々しげになおもブツくさ呟やき、保安課の二人は一回わり歩いてゆっくりと立ち去って行った。

陽は未だ高かったが、イヴェットはジャンヌに促がされて退出した。門の守衛に教わった寮は、歩いて十分足らずの所で、深い樹立ちに囲まれた瀟洒な建物だった。当座の荷物も届いて居て、着替えた彼女はソファに寛ろいだ。数十名の独身婦人職員が住む此の寮は全部個室、設備の行き届いた室数はたっぷり、未だかなり余って居る。

案内してくれて、何かとまめまめしく世話してくれる女も、気付いて見ると、腕に番号をつけた女囚だった。

「あら……。出して貰えるのね。よかったわねえ。もういいのよ、自分でするから」
「はい。すぐ、お飲物をお持ち致します。コーヒーになさいますか？ それとも……」
「ジュースがいいわ、冷たいのをね。」

再び現われた女囚にイヴェットは訊ねた。
「あなた、いや、お前は仮釈放なの？ それとも……」

「いえ、仮釈放はとうとう……お陰様で満期なのでございます。はい」

四十才を少しは越したかと思える其の女囚

は、サービスが板について居るのも道理で、ホテルのメイド頭をやって居た女だった。魔がさして客の物を盗み、二年の実刑を喰って来月初めに満期出獄の身だ。

女囚は掬窮如として去り、イヴェットは窓外を眺めつつ物思いに沈む。六カ月間の刑務官養成所では、刑法と監獄法を主とした法律法令をざっと一撫で、そして戒具の取扱いと逮捕術を身につけるので精一杯、心理学や衛生学は中途半端のままで、刑務所の実情を見たのはサンの女区とパリ拘置所を一回宛しかない。其の鉄格子と錠と鍵の世界の非情な冷たさの実際は、教材の映画やスライドから想像して居たより遥かにきびしかった。

(コンピエーヌすらこんなのだと、ツーロンやアンジェーはどんなのかしら。えらいお仕事を初めたものだわ、勤まるかしら。けど、お給料がいいんだし、弟が一人前になるまではね。それに……)

疲れた彼女は永いことソファに身を沈め小暗くなりかけた窓外を眺めつつ更に物思ふ。

(あんな所でミシユリーヌ奥様が御辛抱できるかしら。おいたわしいミシユリーヌ様、あのおやさしく御立派だった奥様が、あの様なことをなさったなんて、とても信じられない

わ。保釈にもならずパリ拘置所でお過ごしになってるなんてほんとにお気の毒。代って差し上げたい位。私にお金があったらねえ)

イヴェットは、嘗て自分が小間使いとして仕たえミシユリーヌのことを、思わぬ日とてなかったのだった。面会にも行き手紙も出して、慰さめて差し上げたかった。しかし、自分の勤務する刑務所へミシユリーヌが送られて来る場合のことを考えると、二人の間柄は誰にも知られたくなかったのだ。コンピエーヌ婦人刑務所に配属となった今は、益々其の可能性が強い。コモ湖畔の典雅な館の広間や庭を、柔らかな衣摺れの音と共に立居して、優雅にも美しかったミシユリーヌ奥様の姿や俤を想い浮べると、矢も楯も堪らなく逢いたいのだったが、イヴェットは自分を抑えて待ち、ひたすら神に祈るのだった。

夕食前の一刻、アンリエットが飛び込んで来た。袖のゆるやかに長い部屋着を着たアンリエットは、今日着任の六名の中で一番若くいヴェットより一つ年下だ。

「ああ、疲れた。私、五監よ。今まで何だかだと居残りさせられたの。あんなずいぶん早く帰ったのね。私、初めてだと云うのに、もう仕事させられたわ。損害なる莫大よ」

アンリエットは口をとがらせる。

「けど、ずい分ときびしく検身するものねえ。びっくりしちゃった。受ける方の身になると堪まらないだろうと思うわ。あんなことを毎日されていると、ひがんで来るのも無理ないわよ。とてもじゃないけど、みじめで恥かしい恰好させるんだもの」

アンリエットの話を聞きながら、イヴェットの想いは又しても、ミシユリーヌの身の上に馳せるのだった。

「ね、アンリエット。あなた、誰か知った人が居た? 女囚の中によ」

「いいえ。私の知り合いは皆立派な人達ばかりだわ」

「それはどうも失礼。けど、若し居たら、どうする?」

「そうねえ。公平無私に扱う、と云いたい所だけど、憎い人なら矢張り苛めちゃうかも知れないわね。あなた、誰か居たの? それで悩んでるの?」

「いいえ、そうじゃないわ。そう云うこともあるなあって考えただけ」

イヴェットは、昏れ行く窓の夕闇に、ミシユリーヌ奥様の若く美しい面影を思い浮べつつ溜息をつくのだった。

(未完)

限定版……………写真集

美 し き 縛 し め

第四集

頒価 一〇〇〇円 (送共)

略号 (美4)

△華々しき女体緊縛の組写真集△

最新撮影の新しいモデル、山原清子、木村洋子、玉田美佐子による美しい緊縛フォトに、加えるに、ベテラン大塚啓子の極最近撮影のフォトなど、ここ数ヶ月に亘って、フォト・アルバム「美しき縛しめ」用として撮影し保存した写真を、極めて鮮明なるグラビヤ印刷の特アートの紙によつて、皆様にのぞいてお楽しみいただけます。写真は、いづれも未発表のものとさせていただきます。

の傑作ばかりです。各モデルの個性をそれぞれに十二分に発揮した文藝的価値豊かな面から、十二分に春の暖気に匂う花の如く全紙す。緊縛による苦悶や苦痛も、微笑みかけています。というところ、この素晴しい一冊をお求め下さるよう心からお待ちいたします。

一般書店売りは一切いたしません。直接発行所へお申込み下さい。

◎縛られた美女ばかりの美しいフォトアルバムです。この一冊により、新しいモデルの新しい緊縛ポーズを十二分にお楽しみ下さい。

登場モデル——山原清子——木村洋子——玉田美佐子——大塚啓子

待望久しきアルバム「美しき縛しめ」(第四集)ここに完成、御注文下さいました皆様へいち早く発送いたしますところ、予想通り、素早い出来栄と、本誌に於けるグラビヤ写真の掲載が、自ずから、本誌に於けるグラビヤ写真の充実が叫ばれる所以であります。

本誌内容の充実と相俟って、限定版の写真集によって、部数は極めて少くはありますが、秀なフォトを盛沢山に収容しております。今後の御期待に、ゆきたいと考へております。今後は、次発売する本誌女体緊縛写真集を全部揃え、有意義なものとなることとして、極めよう。

◇写真集(アルバム)内容◇

刺青女体の逆エビ責め (山原清子)

鉄扉に緊縛晒し責め (玉田美佐子)

ブロック石抱き責め (木村洋子)

箆子と浣腸器の鼻責め (大塚啓子)

両足吊りにあう刺青女体 (山原清子)

古墳後手吊り組写真 (木村洋子)

両手吊りに悶える組写真 (山原清子)

逆さ吊り揺れる女体 (木村洋子)

猿ぐつわ百態組写真 (大塚啓子)

革拘束具による組写真 (大塚啓子)

柱縛りの庭園晒し (玉田美佐子)

セーラー服緊縛組写真 (大塚啓子)

野外に於ける晒責写真 (玉田、木村)

刺青女体の柱縛り責め (山原清子)

捕獲された女裸身の悶え (大塚啓子)

入墨に映える緊縛絵模様 (山原清子)

両足吊りの表と裏 (山原清子)

△以上緊縛写真八十葉△

以上の通り、本誌のグラビヤにして、何れ月分にも相当する豊富な女体緊縛写真を、特アートの紙に、鮮明なるグラビヤ印刷によって、写真集を完成いたしました。必ずや皆様の御満足を得ることと信じます。限定版につき、一般書店には、姿を現しません。数にお早くなりお申込み下さい。売切れにならない中、お

鬼六談義

映画「花と蛇」

団 鬼 六

いつかの鬼六談義でも書いた事だが、びつこの作家がびつこの人間を描写するほど、ゆうつな事はない。

職業柄、シナリオにSシーンを描かねばならなくなると、さらさら砂埃を含んだ風をいくぐるような気分で嫌悪の情を起しながら突っ走ったものだ。

ところが、今回の「花と蛇」映画化に当たっては、そう引っ込み思案の態度をとるわけにはいかない。Sシーンが主眼であり、いいかえれば、それが売物であるだけに、S作家としては不真面であってはならない。製作者と

監督任せで、あとは野となれ、山となれ式にすましてむような無責任であってはならないのである。

Sマニヤであるくせに、いざとなると、何故、積極的になれないかは、読者にも理解願えることと思うが、映倫、その他、色々と制約の多い商業映画の中で、私好みのSシーンを出す事は到底不可能であるからだ。中途半端なものを出して、マニヤの失笑を買うよりは、ほとんど限られた読者を相手にするKK誌（といっても制約は随分と多いが）の中でひそかに連載などしている方がましである。

それにも一つ、こういう商業映画に、鬼六流のSシーンを出し、それがどの程度、一般に受けるか、つまり、マニヤでないものの眼に、陳腐なものとしてうつるのではないかという心配である。

Sに徹底するのも気がとがめ、さりとて、通俗的なピンク映画にすれば、マニヤを失望させる。要するに妥協が必要となってくる。早い話が、この映画のスタッフ連は、この映画脚本のS場面を読み、こういう個所が何故、或種の人達に喜ばれるかわからぬといった。



製作者のY氏は、こういう個所は受けるに違いないと、私の意図に同意したものの、彼自身はこの種のマニヤではない。日本拷問史のヒットということが、念頭にあり、それに追従するこの種の映画は当るものとふんではなからうか。とにかく、スタッフ陣に本格的なマニヤは皆無で、作者としても、淋しい限りでもあり、不安なものでもあったがそれが、克蘭ク・インとなって、私の杞憂である事がわかった。

私は、小説「花の蛇」のごとく、この脚本

にも、何ら観客に訴えるもの、共鳴すべきもののない事を製作者、監督に説明したものである。つまり、何ものもないのだ。ただ、S場面の描写をリアルなものにしてくれるよう、それが作者としての要求であり、この娯楽映画のねらいなのである。私としては、こういう種の映画をあまり手がけた事はなく、いわば素人であるが、これまでいくつか見えてきて、はっきりいって楽しめたものは一つもない。一番がまんのないのは、この種の映画で、何か人生を物語るうとして下手くそ

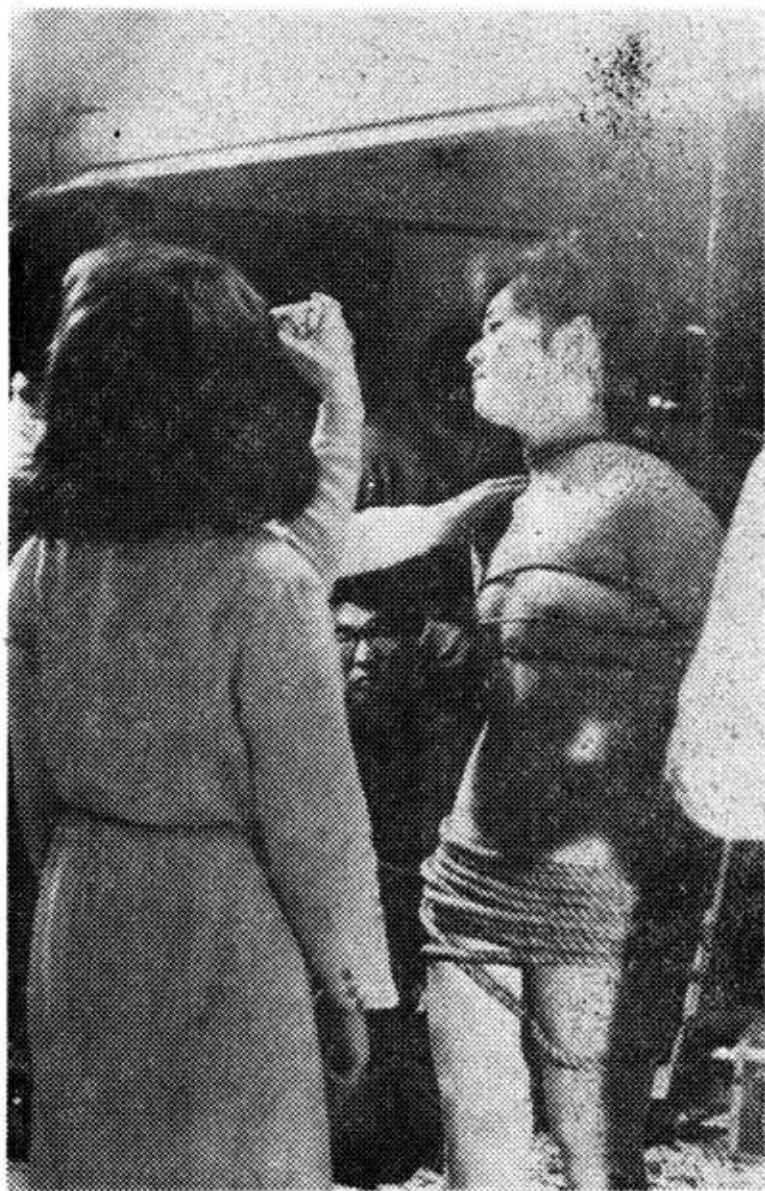
にあがいている代物である。見ていて、眉のあたりがムズムズかゆくなくてくる。ステールを見て入場する客の要求するものは官能の満足なのだ。

官能映画なら官能映画に徹すべきであり、五社の手がけえぬ娯楽作品官能作品の製作に

懸命になるべきだ。

女を側へ寄せつけず、品行方正で通ってきた生真面目な老監督がピンク映画をとるという事が不道德なれば、SとかMとか皆目、見当のつかぬ血気盛んな若手監督が、この種の映画を手がけるといふ事も不見識である。

私の知人の或る大衆小説家―毎月十冊近い大衆雑誌を発行している雑誌社からはかなり重宝がられている人であるが―また私も彼のそうした小説における才能をかねがねほめていたのであるが、その彼が近ごろ鼻につき出した。というのは、そろそろこの辺で純文学と取組んでみたいなどと彼がいい出したからである。三流雑誌の作家はあくまでも三流雑誌の作家なのである。少し当り出せば、純文学に取組もうと考える神経が私にはわからない。三流雑誌の中で一流の作家地位を持続することがどれほど至難なことか。三流雑誌ファンを大いに喜ばせる事に、なおも専念すべきであるのに、身のほどもかえりみず、つまり、何ら文学的基礎もないままに、得体の知れない純文学まがいのものを書き出し、読まれた私も閉口したが、結局、それは冷笑を受けただけで相手にされぬ作品となってしまう。彼は、そんなものを二、三かいていた



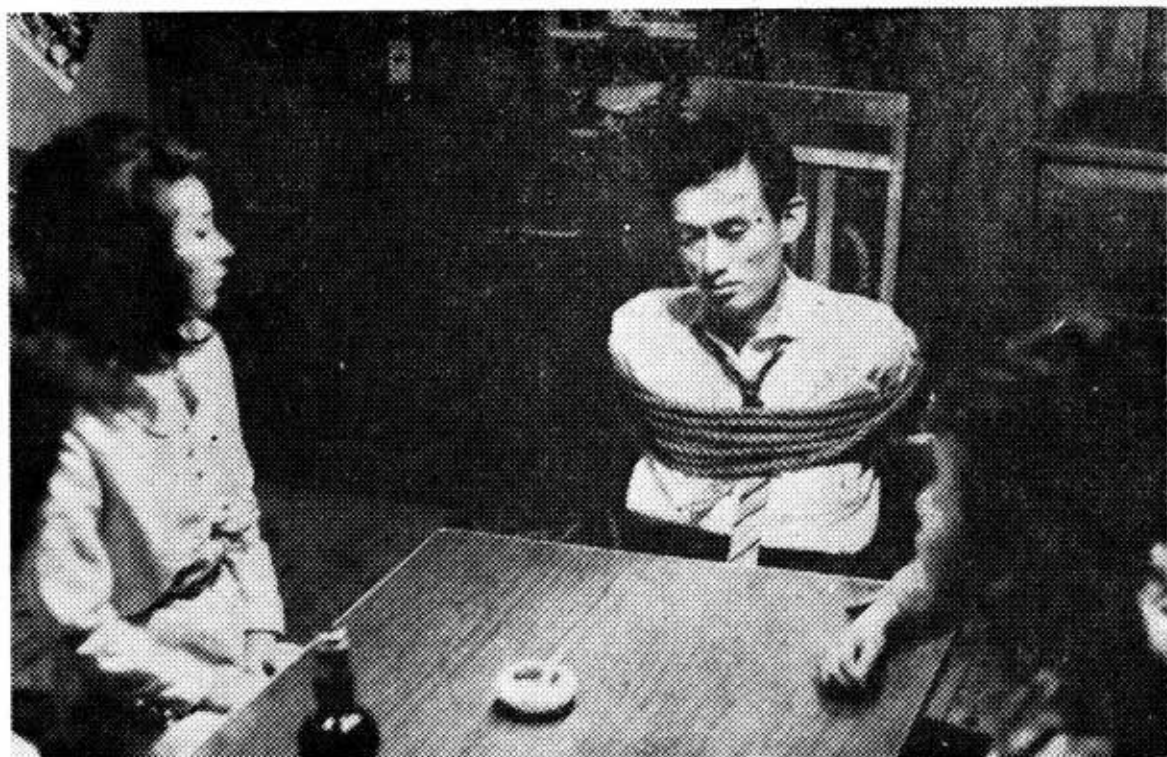
ようであるが、自分の才能のなさを悟って断念し、再び、大衆小説を始めたが、それはもう以前のようには歯切れのいいものではなく、わけの分からぬ不思議なものであった。中学校の英語教師は大学の英語教師にはなれないのと同じで、なまじ、大学へ出かけて講義して学生に馬鹿にされ、中学へにげかえったが今度は中学生達が教え方が無責任だと口をとがらし始めたのと同じである。

何だか話は脱線し、とりとめのない話になってしまったが、私がいわんとする事は、ピ

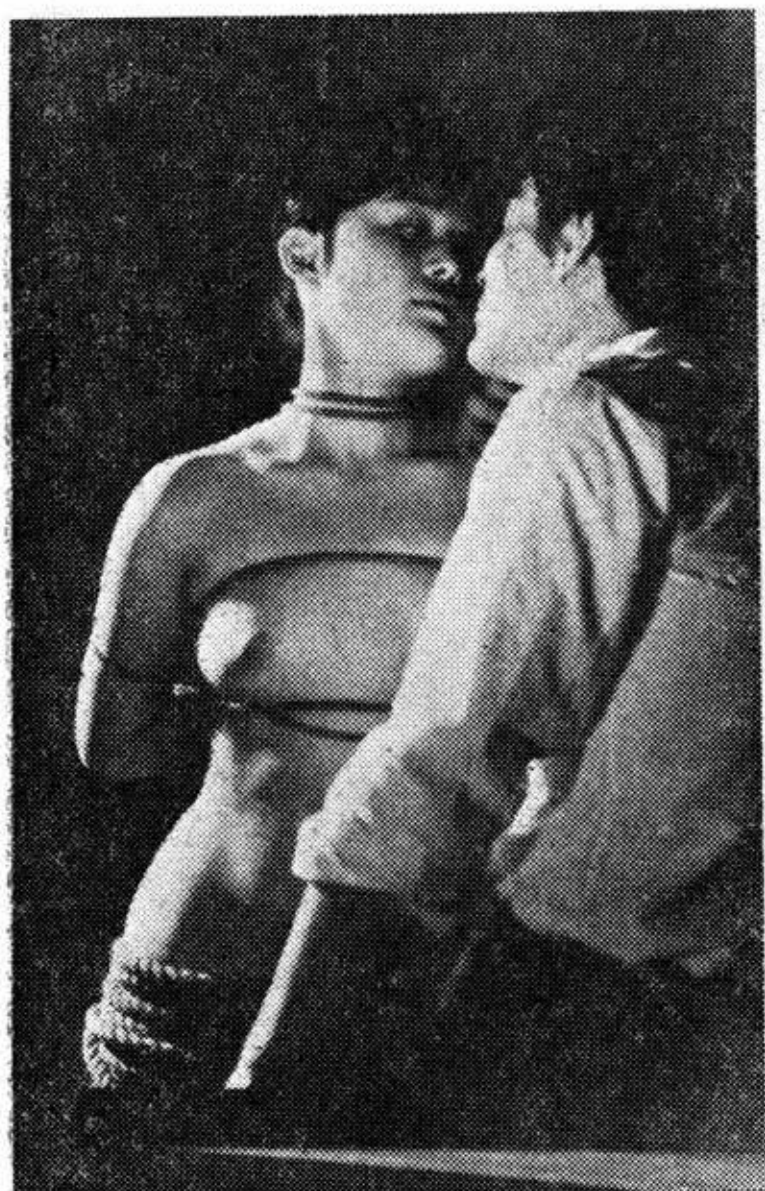
を期待するのも無理な話である。しかしこの限られた予算、限られた人材で、SならS、MならMを、せまい範囲において表現する事は可能である。私は、せまい範囲のSをねらった。つまり、鬼六好みのSであるだけに本格的なSマニヤから見れば迫力のないものかも知れない。少数のマニヤを満足させるだけで充分だと思った。

KK誌に連載された「花と蛇」が、そのまま、映画化出来るはずはなく、私としては、原作の匂いもないまでに脚本をつくったので

ンク映画なればピンク映画に徹すべきだという事であり、なまじ五社に對抗しようなどという、大それた考えがあつてはならないという事である。二百万か三百万で、満足すべき作品が出来ればは不足なく、また、この種の映画専門の監督に完全な映画



あるが、問題はSシーンの映画表現である。監督にこうしたものに対する理解がなければ結果、ねらいは外れる事になる。私の想定した場面が現出するか否か、最初は小心にも戦々兢兢としていたものだ。



ところが、撮影に二、三日立会ってみたが監督のK氏は作者の要求通り、その場面に力を入れ、満足すべき映画を作り上げてくれたのである。この映画を監督されたK氏は、監督歴十何年のベテランであり、映画づくりにソツがない、さて、そうした場面のムードを出しきれるかきれないか、彼がSMを理解する人か否かわからぬだけに不安であったのだが、それは私の杞憂であり、彼は、充分そのけのある人だったのである。などというところ彼は否定するかも知れないが、制約されたこ

の種の映画の中で、ここまで画面に出しえた事は成功である。映倫とは大モメにモメる事とはなったが！。

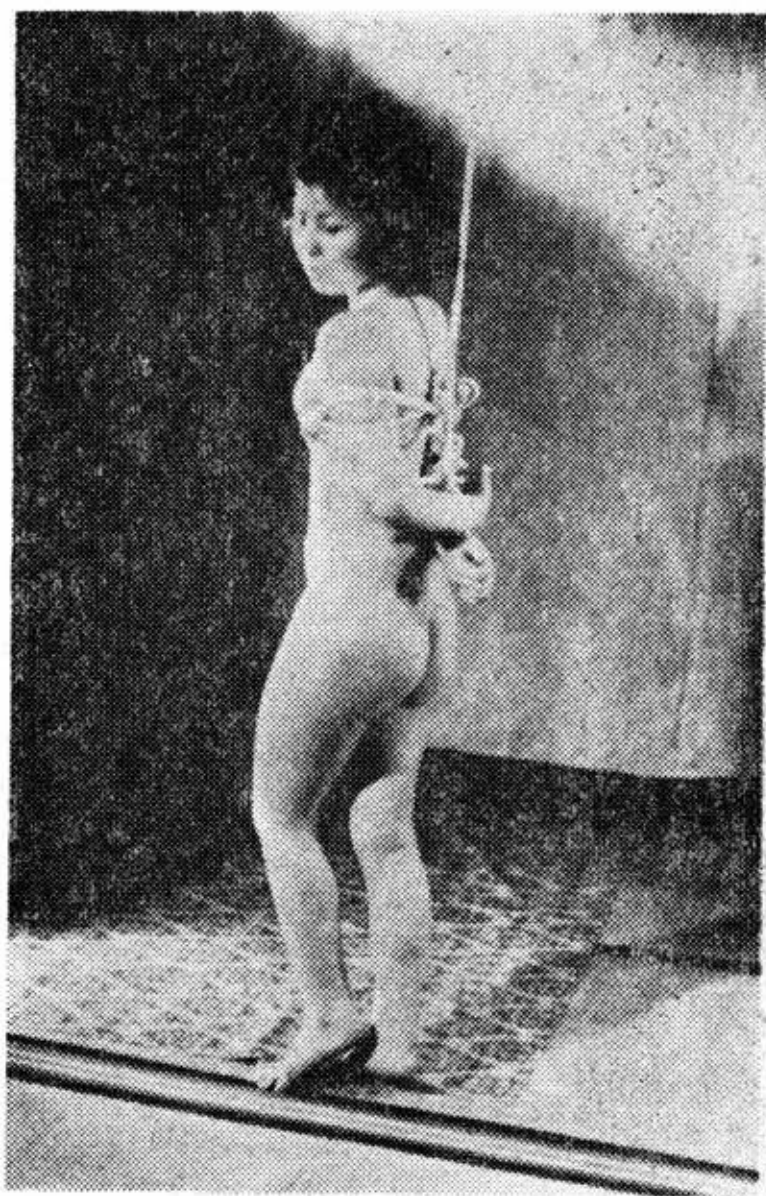
主役の静子は、火石プロに所属する紫千鶴（二十一才）で、製作者のY氏と私がかげずり廻って見つけ出した和服のよく似合うほりの深い顔立の美女であり静子役にはピッタリである。

静子の責めシーン、これは、私も手伝って彼女に縄をかけて、梁につり、そのまま、三時間あまり、彼女はつま先立ちのまま、遠山老人に、ムチでぶたれるという強行撮影をやったのけた。

見ている私の方がへどもどして、幾度も、縄をといて一服させてやるうとしたが、彼女は、縛り方がちがったりすると面倒ですから、と拒絶し、そのまま撮影を続行させたので

ある。カメラが配置され直す、嫌に長い時間の間も、彼女は、そんな姿のまま、きつと苦痛を噛みしめているようでもあり、また、時折、うっとりとして被虐の倒錯した悦びに浸っているようでもあり、私は、ふと彼女がM女性である事に気づいてはっとし、案外、この映画、成功するかも知れぬという気分になったものである。

それにしても、この映画のラストのクライマックス・シーンでは、彼女は鬼源の家の二階で、数人のやくざものに鬨りものにされるのであるが、そこでは主人公の静子は全裸にされ、股間しばりにされる事になっている。色々な女体の責め場は映画に出て来たが、全裸の女体を股間しばりにするというのは、大げさにいえば映画史上初めての事であろう。映倫では、恥部はもちろんだが、尻の割れ目も画面に出してくれては困るという。さすれば、股間縛りにする事によって、その両方を覆い隠す事になる。これは、苦肉の策ではなく、マニヤを大いに喜ばせる事になると、K監督と私は相談がまとまり、主演の紫嬢に話した。その縄のかけ方を聞くと、さすがに紫嬢は顔を赤からめたが、ここまで来たのだからと覚悟をきめてもらう。私は、彼女を別室



へ呼んで、苦心し、ようやく股間縛りにしたが、彼女が美人であるだけに、そんな事をしているうち、変な気分になってきて弱った。

監督のK氏がのぞきにきて、OKという事になり、カメラ、ライトマンが、ぎっしり立ちこめている六帖の部屋へ彼女を連行して行く。

さて、股間縛りにされた静子を立縛りにし、やくざ達が酒を飲むという、いうなれば白眉のシーンの撮影に入ったのだが、カメラマンがどうも具合、悪いというのである。さ

非常識すぎると、映倫にお目玉をくうにきまっている。

それでやむを得ず、監督と相談して、股前縛りといういささか苦しい縛り方に変更してしまった。変なところに縄を縦にかけられたり、横にかけられたりする紫嬢こそ災難であるが、ようやく半日がかりで、そのシーンは撮り終えた。

紫嬢は、口数の全く少ない、いいところのお嬢さんといった感じの女性であるが、よくこの激しい緊縛シーンに耐えたものだ、ス

タッフ一同、舌を巻いたものである。

五月一日にクランク・イン。五月十四日にクランク・アップ。十八日には、オールラッシュと映画製作は順調にいったが、さて、予期していたことではあるが、映倫側とのゴタゴタがおこった。随分といろいろな映画のベツド・シーンをカットしてきたが、これほど頭を悩まされた映画はないと、映倫の人達はいう。とにかく淫虐シーンを大幅にカットしてくれと映倫側は口をとがらし始めた。かなり抵抗はしてみたが、映倫がOKを下さねばどうにもならない。捨てるに似しい箇所を次から次にハサミを入れさせられた情なさ。KKに連載中のものを、二行三行カットされた腹立たしさなどは、比べものにはならない。

町子という酒場に勤める純情な女給が、川田や、やくざ達に鬼源の家で、着衣略奪の私刑に合うシーンのカットもおしかった。

パンティ一枚の姿にされた身を緊縛された町子。更に川田は乾分の高岡に命じて、その一枚さえも剥ぎとる事を命ずる。

狂乱する町子から、高岡が、それを剥ぎとり、足首からぬき取ってしまうシーン、これがカットである。

観客の官能を昂ぶらしすぎるといふわけであらう。考えれば映倫の人々も因果な商売で自分の体がカットなところをカットさせるのであるが、力を入れた場面ばかりをカットされるので、製作者の方は頭にカットくる事になる。

ラストシーンの責められる静子の尻の割れ目が見えたということから、製作者側と映倫との口論になった。プロジョーサのY氏と私とが、たまりかねて、股のあたりは縄でぐるぐる巻きにしてある故、見えるはずはないと居坐り、映倫側は、われわれも商売だから見

△お詫び▽と△お断り▽

連載小説「花と蛇」 今月休載

満天下のSFファンの方々から絶大の人氣を以って期待されておりました「花と蛇」続篇第九回は作者の都合により先月号に引き続き今月号も休載のやむなきに至りましたことを御詫び致します。

臨時増刊号「花と蛇」 特集号

売切になって以来、毎月誌上にて売切になったことをお断りしておりますが、未だにお申込みがあとを絶ちません。再版の予定はございません故、御諒承おき下さい。

のがすはずないと強硬になり、試写のすんだあとで、お互いに紙を出し合い、ヒップをかき合って、みぞをかいいたり、消したりして説明し合い、そこでヒップ討論、いや全く浅ましい限りであった。

結果、これも映倫側の勝ちとなり——ほんの少し縄の間から、はみ出していたのである——それもカット。あまりたくさん、チョン切られたので映画一本の時間に、大分足らぬ事になるのではないかと心配になった位である。

このようになったフィルムを、トキを入れて、二度目の試写を数日後に行ったが、またまた映倫から文句が出た。曰く、ベッド・シーンで女が声を出しすぎると。監督、プロジョーサ、シナリオライターの三人は、顔を見合わせた。次に苦情が出たのは、私刑のシーンで、ムチの音が大きすぎる、女が苦悶のうめきをあげすぎる、と。しまいに阿呆らしくなってきた。

というわけで、散々な目にあったが、どうにかこうにか映倫をパス、三度目の試写会には、この種の映画の配給会社の社長連も列席して、大に好評であった。とにかく、数多い流行の残酷映画の中では、マニヤ向きの映画

といえるかも知れない。ただし、鬼六好みのムードの中でのS映画であるが。それにしても、たくさんのカットのため、S的ムードが半減した事は事実である。

最初とは予定を変更して、友人達と、この種の映画のプロダクションを作り、まず一作目にこれを製作した故、随分と苦勞もしたが楽しくもあった。内容的に始めはどうかと危ぶんでいたものの、この映画の買手は、たくさんつき、大いに自信を持ったわけで、二作目、三作目も、やはり、Sを主眼にしたものをやる事になるだろう。

十人並の美人で、一応肉体美で、適度にMで、この種の映画に出演希望の女性があれば天星社の箕田氏に写真略歴書などお送り下されたく。

趣味にとどめておいたものを、本業の映画の中へひきこんで、人にはただ実験的ななどいいながら、かなり夢中になってしまったため、KK誌の「花と蛇」これで二回休載することとなってしまった。次回よりは、必ず連載をつづけさせて頂く。御愛読下さっている諸兄姉にこの誌上をかりて、おわび申し上げる次第である。

【編集部注】 掲載した五葉の写真は、映画「花と蛇」の撮影中のスナップ。筆者団鬼六氏撮影によるもの。

殉教の娘バジリカとバジリカ砲の威力

黒 淵 嬰 一

殉教の娘バジリカとバジリカ砲

キリスト紀元一四五三年四月六日金曜日。
スルタン・ムハメット二世は軍を率いてコン
スタンティノポリスに迫り、聖ロマヌス門の
正面に皇帝旗を据えた。

東ローマ帝国の首府に対する攻撃は翌四月
七日から開始された。周囲十六哩。不等辺三
角形を成す市街は、二方面に於て海の為に近
接不能だった。トルコ軍はテオドシウス二重
城壁に主攻撃を差し向けた。

都城を守る兵力は帝国正規軍約五千。西欧
の援兵二千。非実戦的な市民義勇軍千余で、
合計八千程度だった。小口径火器と火薬は充

分貯蔵されていた。併し巨砲は缺けていた。
金角湾の港口は巨大な鉄鎖を三重に張り渡し
て固められ、六百人乗の巨艦三隻を含む艦隊
に防衛された。それ等すべての上に、一千年
の不可侵を誇る大城壁があった。

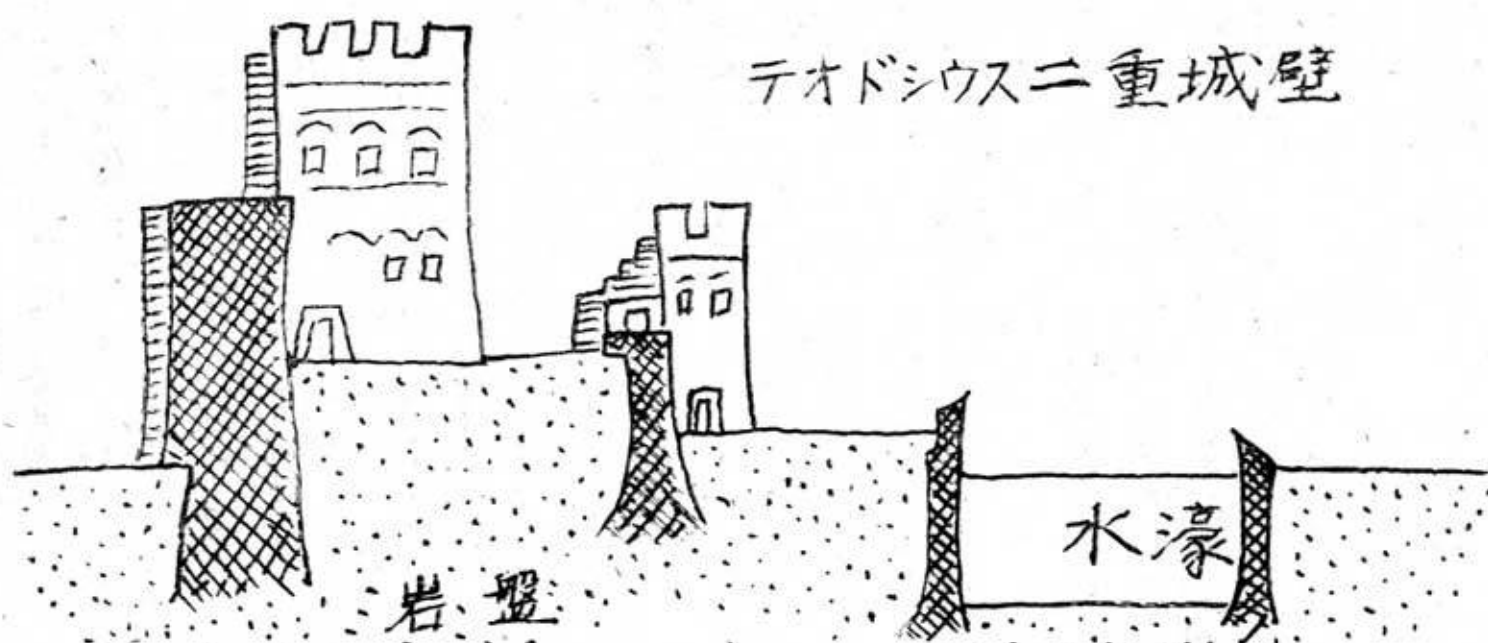
此の城壁有るが故に、初期のアラビヤ系回
教徒はヨーロッパ席捲の野望を挫かれた。七
百年前、サラセン帝国が、その聖戦（ジハー
ド）に於てアジアとアフリカを蹂躪した時、
コンスタンティノポリスが屈伏していたら当
時キリスト教に改宗したばかりの、又は未だ
異教徒であったアヴァール人、セルビヤ人、
ロシア人、サクソン人、ブルガリヤ人等は忽

ち回教に改宗され、近代ヨーロッパは未萌に
摘み取られてアラビヤの一边境となっていた
であろう。これは勿論アメリカ大陸の運命を
含めての意味である。

此の堅塁に対し、トルコ軍は近代兵器の前
駆たる攻城砲陣を指向した。オルバンの巨砲
は砲列の王座に据えられた。その左右にはこ
れに殆んど匹敵する重砲二門が並べられた。
他に中口径砲が十一門。小口径カノン、半蛇
砲、長砲身砲（スピロール）等が五十五門。
更に無数の銃があった。

但し此処で銃と訳した物は近代の小銃と同
じではない。胡桃程の鉛丸を発射し、力量あ

テオドシウス二重城壁



る兵士一人で運搬、装填が出来るが、これを抱えて突撃したり接戦したりするには重過ぎる兵器だった。銃一挺の重量は附属品共で多分二十斤を越えただろう。故に銃兵は小型の砲兵であり、歩兵ではなかった。此の種類の火器が手砲（ハンドガン）から齒輪銃に進化して行ったのは十五世紀末から十六世紀半ばにかけての事である。

トルコ軍は火砲の他に古代から中世にかけての凡ゆる攻城技術を動員した。攻城塔、破城槌、亀甲車、雲梯、飛樓車等の接戦用重兵器が建造され、弩砲（パリスタ）、擲射器（カタパルト）、振投器（トレピュシュレー）は槍や石弾や、更には液状焼夷剤を充填した陶器等を発射した。

騎兵は弓箭を持った。発射速度に於て銃砲は未だ問題にならなかったから、矢の方が有効な場面も少くなかった。

歩兵は剣楯の他に手榴弾を携行した。

アナトリアの金山から鉱夫が招致され、坑道兵に組織された。工兵は地雷を装備した。

司令部には信号用ロケットがあった。

海上には十八隻のガレー戦艦を含む三百二十隻の艦船があり、金角湾を封鎖した。

フランザはトルコ軍の総兵力を二十五万八

千と記している。此の内騎兵六万とジャンザリー歩兵二万が親統軍だった。他は諸藩主の陪臣や、宗教的情熱又は掠奪の希望で従軍した雑多な群衆だった。

攻防戦の初期に於てローマ軍は度々出撃を行い、その度に戦果を収めたが、彼我の兵力比が三十対一である事を知るに及んで専守防禦に転じた。オルバンの娘バジリカは銃砲の修理や整備に働いていたが、間もなく前線の射手に起用された。ローマ軍は火器よりも射手の数に不足を感じていたが、バジリカの射術が最も老練な傭兵に勝る事が明らかになったから、これは当然だった。

フェナル門の水濠間際に大砲を接近させて来たトルコ兵の不敵な一団に対し、ローマ正規兵が城壁上から乱射を浴びせたが何の戦果も収められずにいた。バジリカは運搬中の銃を胸壁に据えて狙撃し、火薬櫃を撃ち抜いて砲も人も掃蕩した。彼女に長砲身砲（スピロール）を操作させれば、一発の虚弾もなかった。幾人かのジャニザリー隊長が射程一杯の距離で倒された。砲列は銃の射程外に退いた。平凡な娘に過ぎなかったバジリカが、何故斯くも勇敢な戦士に変貌したかは説明困難である。併し彼女の射撃術に対する自信が勇

気の裏附けになった事は断言出来よう。

トルコ軍の砲兵隊は、後年女性合唱団と呼ばれるようになった四重唱を各部に亘って繰り展げた。聖ロマヌス門の陵堡が目標となり二方向から十字砲火が集中された。

斯う書くと、近代砲兵の疾風射や震撼的破壊力を連想する読者が居るかもしれないが、スルタン自身の督令下に於てすら超巨砲は一日七回しか発射出来なかった。砲身の金属は火熱し、一回の発砲毎に砲口から油を注入する必要があった。

それにも拘らず、四月十六日に至り、聖ロマヌス門の側塔は巨弾の為に撃ち崩され、深さ百呎の水壕中に倒れて攻撃軍に橋を提供した。翌四月十七日、スルタンは総突撃を命じ工兵隊は大樽や木材を打ち込んで前進路を平坦にした。

攻城塔（ヘレポリス）が接近して来た。これはローラーを附した九層の櫓で、石灰を塗り、生牛皮を三重に張って火攻を防ぎ、頂部からは不断に水を噴いた。最上階に水槽があり、水は人力ポンプと牛腸のホースで汲み上げられた。巨人（タイタン）は火弾を吐きつつ前進した。塔の各階には大小の火器が装備され、上部には撓橋が、基部には撞槌があり

三千の兵が運用に当った。

亀甲車は城壁下に迫り、破城槌が城壁の基部を揺り動かした。クレーン車が接近し、籠に乗せた丘士を城壁上に吊り上げた。

トルコ軍の銃砲がロマヌス門両側の城壁上を掃射した。攻城塔は撓橋を下した。数百人のトルコ兵が外城壁に突入した。

トル兵の先頭に、半月刀と丸楯を構えた指揮官が居た。黄色の頭布（ターバン）を巻き駝鳥の羽を飾り、革鎧の上に白色の大外套を着ている。撓橋の上を渡る軽捷な動作は飛行する白鳥の如くだった。これを阻止しようとしたローマ兵二人は一瞬で水壕の中に斬り落された。

バジリカは西側の陵堡上からこれを見た。

「スーピア」

間違いなかった。一年前の誘拐もあの女が指揮していた。俄然、敵愾心が燃え上った。

バジリカは長砲身砲を構えた。傍には発射の用意成った同種砲三門があった。

「まだ早い。指図するまで待て」

側に軍事技術家ヨーハン・グラントが立っていた。

「トルコ兵の重量が橋の尖端に掛かるのを待つのだ。回転軸の接合部を狙え。君の腕なら

必ず出来る」

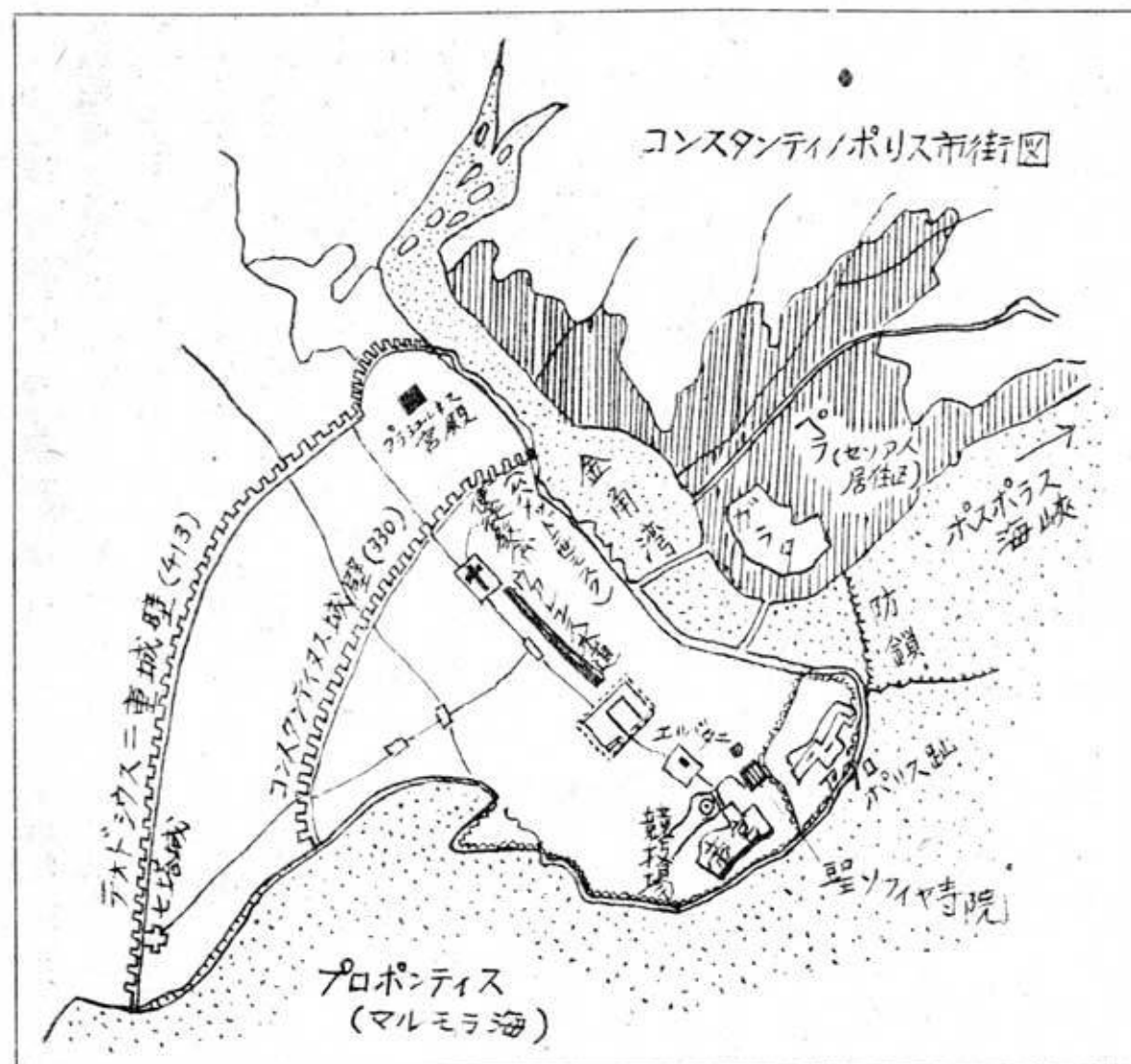
バジリカは言われた通りの標的に照準を定めた。

「今だ。撃て」

長砲身砲（スピロール）が火を吐いた。攻城塔（ヘレポリス）の撓橋は軸を砕かれて中央から折れ、百余人の兵と共に崩れ落ちた。「よくやった。攻城塔は機能を失ったぞ。次は頂上の水槽を撃ち抜く。最後に焼弾で塔の中央部から焼き立てるのだ」

ヨーハン・グラントは重兵器の致命部を正確に指摘した。バジリカの射撃は指示された箇所を直撃した。二番目の鉛丸が消火用の貯水槽を貫通した。鉄丸を真赤に焼いた第三弾は塔の正面に命中し、煙が噴き出した。ローマ軍の銃火が此の附近に集中され、消火に努めるトルコ兵を掃射した。

コンスタンティヌス十一世パレオロゴスは金兜に紫袍、金鷲を刺繍した半長靴、宝剣を帯び、聖母を描いた皇帝旗と双頭金鷲の帝国旗を左右に連ねて本営の位置を示し、その持場と大元帥の職分を守った。皇帝は眉目秀麗の青年であるが、自ら剣を振る豪勇の素質ではない。併しその勇氣は大ローマを建設した古代諸英雄に必敵した。皇帝親統の貴族達は



トルコ軍の侵入を阻止し続けた。
ジャステイニアニは騎士で編成された撰抜隊を以て逆襲した。彼等は西欧騎士道の名譽を宣揚した。全身装甲の騎士は軽装のトルコ兵を接戦で圧倒した。

攻城塔は一本の巨大な火柱と化して炎上した。後続隊の突入は遮断され、先鋒隊は退路を失った。トルコ軍数千は二重城壁の外壁を占拠していたが、その背後にある内城壁は未だ侵されず、外城壁を見下す高さから斉射を浴びせる事が出来た。

勇敢なる、スービアは、孤立しつつも奮戦した。半月刀を振って外壁上を荒し廻った。

守兵は銃と短刀を持つのみで、長剣や楯を装備していなかった。押し捲くられ、崩れ立った。内壁から撃ち下す狙撃は、スービアの軽快な運動に追いつけなかった。

スービアが更に踏み込んで聖ロマヌス門の側塔に迫ろうとした時、傭兵は左右に道を開いた。後からアルケビュース銃を抱えた銃兵が現れた。その顔に見覚

えがあった。

「バジリカ」

スービアの足が止った。銃の傍では火縄が燃え、照準は正確にスービアの胸を狙っていた。躍り込むには距離がありすぎる。併し鉛丸を以てすれば絶対に外れない距離だった。二人共、一言も発せず睨み合った。トルコ語もギリシャ語も必要としない。視線と感情を以てする闘争が交された。

併し、気力は遂に物理的必然性に屈した。スービアは無限の痛恨を以て半月刀を水濺に投げ込んだ。膝と両手について前に崩れた。

ローマ兵が躍り掛り、群り寄って両腕を振じ上げた。バジリカは騎士道の掟に依れば此の敵手を縛る権利を主張する事が出来た。兵士の一人がそれを指摘して縄を渡した。

バジリカはスービアを縛った。兵士がスービアの両手を背後で抑え、縛り易いように持ち上げた。併し射撃術と違って斯かる技術はバジリカの習熟する処ではなかった。且つ、歓喜と興奮の為に手が震えた。スービアの方が寧ろ泰然と縛られた。結局仕上げを行ったのは傭兵達だった。バジリカには、スービアを皇帝の御前に曳き立てる権利だけが残された。バジリカはそれで満足した。

トルコ軍の木造重兵器は概ね破壊されるか又は焼棄された。先陣は停滞し、後衛は押し掛り、混乱の上に夕闇が迫った。スルタンは戦線整理の為に一旦後退を命じた。城壁の一部は明らかに破壊されていたから、翌朝の日の出と共に攻撃は再開される筈だった。

然るに一夜明けると、ムハメット二世は味方の重兵器は悉く灰と化し、敵の城壁は再び堅塁に戻っている事を発見した。コンスタンティノポリスのギリシャ人共は勇氣こそ失っていたが未だ勤労の精神まではなくしていなかったから、自らの安全の為に終夜働いて水濠を清掃し、城壁を築き直した。東帝国の首府は側塔一つ失っただけで依然難攻不落を誇り、トルコ軍は死者数千と捕虜数百を遺棄した。且つスルタンは寵姫スービアを失った事を憤怒の裡に認めなければならなかった。

バジリカはスービアの縄尻を把って皇帝の謁見に供した。皇帝は彼女の技術と勇氣を激賞した。惜しむらくは、帝国も皇帝も貧窮して賞賜すべき何物も無かった。皇帝は少し躊躇しながら、スービアの頸から金鎖を外してバジリカに与えた。

スービアは厳しく縛られていながら矜度を失わず、顔色も変えなかった。寧ろ傲然と

異教徒の君主を見上げた。此の女傑がスルタンの寵姫であり、大臣の娘である事はバジリカだけが知っていた。面纱も無しに男の前で素面を曝す事は回教徒女性の最も恥辱とする処だが、スービアは自身の地位と身分を隠そうとはしなかった。皇帝は驚嘆した。そして此の重要な獲物の中に、講和の一因子を認め鄭重に扱うよう命じた。

コンスタンティヌス十一世は温和な、寧ろ気の弱い性格だったが、彼の脆弱な帝権は軍隊や人民の要求に常に譲歩させられた。戦意昂揚と戦勝誇示の目的を以てする捕虜の曳廻しは止むを得ず承認された。

トルコ軍の攻撃が、戦線整理の為に稍平靜となった四月十八日と十九日の二日間を利用し、将士の慰労を兼ねた行事が市民の縦覧に供せられた。数珠繋ぎにされた捕虜は黄金門から皇宮まで曳き廻され、更に大競技場に引返して一般監獄に繋がれた。

スービアは別格だった。一人離れて後ろ手に縛られ、鞍上に縛りつけられてアラビヤ的な美貌を衆目に曝した。バジリカは此の馬を曳く名誉を与えられた。然る後、スービアは皇宮の附属監獄に拘禁された。

コンスタンティノポリスが未だビザンティ

ウムの名で呼ばれたギリシャ植民市の時代、アクロポリスの神殿脇に最初の獄舎が作られた。以来二千年。此の監獄は、拡張され続けた。岩石山の中腹を削って地下に迷路の如く獄室を増設した。ファウスタ皇后の血や、プロコピア皇太后の涙を浸み込ませ、テオドラ皇后の暴虐を眺めた石壁は或る意味でローマ帝国そのものの哀史でもある。スービアは最も底深い石室に幽閉された。此の偉大な獄舎は蟻の巣の如き複雑な組織を有しながら、出入口は帝宮横の一箇所に限られていた。且つ丘陵の中腹を掘って地底深くに及びながら、細い通風孔を断崖に開いて衛生環境は比較的維持されていた。皇帝は忠実な聖ソフィヤ寺院の尼僧達に命じ、スービアの身繕いや食事と兼ねて監視を行わせた。

皇帝は東帝国の財力を尽くして食糧、武器を購入し、これをキオス島に集積しておいた。物資は六百人乗の巨船五隻に分載され、順風を待っていた。その一隻は双頭金鷲旗を掲げ、四隻はゼノア共和国旗を旋えしていた。これはコンスタンティノポリス攻囲中に西欧が試みた唯一の援助だった。

五隻の戦隊は四月二十日の金曜日、朝早くプロボンティス西方から現れた。トルコ艦隊

は金角湾口からアジャ岸まで半月形に展開した。三百二十隻対五隻。併し個艦の性能も乗員の訓練も一桁違っていた。トルコ艦船の大部分は陸兵によって操艦され、大砲は装備していなかった。

トルコ艦隊の包囲作戦は、大砲で寸断された。投擲武器の射程に接近せんとする企図は液状焼夷剤で挫折せしめられた。陸兵を移乗突入させる目的で突進し来った艦船は鉄装の舳で切断され、決定的な重量差で乗り沈められた。フランザの記す処では、トルコ海軍は一万二千人が溺死した事を自認した。救援艦隊は金角湾に入港し、歓呼を以て迎えられた。トルコの提督バルタ・オグリは敗戦の責任を問われ、スルタンの眼前で四人の奴隷に依って四肢を大地に引き伸ばされ、黄金の杖で百回叩かれた上追放に処された。

城壁の破壊は不充分だった。砲撃は再開され、坑道戦が着手された。工匠区の一主婦がトルコ軍の新企画を見破った。地下室に買い溜めてあった豌豆山の片側だけが崩れた。ローマ軍は直ちに先手を打った。

ヨーハン・グラントは、城壁上に水盤を並べ、水面の震動を観察して坑道の位置を推定した。ローマ軍は対坑道を掘り進め、トルコ

軍の坑頭を掘り当てると、或は地雷で爆破し又は、ヴァレンス水道の水を注入して掃蕩した。土地は岩石が多く、坑道戦には不適当だった。本来テオドシウス二重城壁は岩盤を利用して建てられていたから、これは当然だった。トルコ軍は比較的重要でない前堡の下に空洞を掘り、支柱を焼いて城塞を陥没させたが、本城壁には危害を加える事が出来なかった。コンスタンティノポリスは中世的攻城法の全技術を嘲弄する事が出来た。

砲撃の継続のみが決定的手段だった。それも、陸正面と同時に港側から同時攻撃を加えなければ見込がなかった。併し、金角湾口は鉄鎖で封鎖され、大軍艦八隻と多数の小艦艇で守られていた。トルコ艦隊は東帝国の艦隊を撃破する可能性よりも、その出撃に依る海上の決戦を考え且つ恐れなければならなかった。

カリルパシャは退却を進言した。併しスルタンは斯かる状況下にも拘らず、金角湾を制圧する奇策を発見した。

黒海からペラの傍を通って約十哩。山を伐り、簀を払って厚板の坦道が敷設された。末端は金角湾の奥深くに達していた。

五月五日未明。ガレー船を含む八十隻の軍

艦は人力や畜獣や機械で陸上に引き上げられた。板上には油が塗られ、ローラーを用い、満帆に風を受けてトルコ艦隊は陸上を航走した。諸艦はコンスタンティノポリスの港正面で進水したが、此の附近は水が浅く、吃水の深いローマ側の戦艦は行動出来なかった。市民と守備兵は失望落胆した。

ローマ側が虚脱状態に陥った同じ夜。皇宮附属監獄でもう一つの事件が発生した。

フランザの娘カタリナは、聖ソフィヤ寺院附尼僧中で最も皇帝の信任があったから、スービアの監視と世話をする責任者になっていた。スービアが投獄されてから未だ十五日しか経っていない。併しカタリナは敵の女傑に一種の畏敬を感じていた。

嘗て、ローマは幾多の女皇や、女性将軍や女性外交官等を世に送った。併し現在の帝国で、アトランタやプリユンヒルデに比すべき女戦士は、外国人のバジリカ只一人居るのみだ。スービアはその高貴な身分にも拘らず最も危険な戦線に挺身し、武勇の程を示した。敗れて捕虜になったが、それは彼女の責任ではない。

カタリナは可能な限り、スービアを優遇した。カタリナに他意はなかったが、ローマが

亡びずに講和が成立し、平和共存が可能になった時の布石とさえ思われるような態度だった。食事も衣裳も最高のものを供した。最初は頑固だったスービアも、漸く打ち解けた。宗教の相違は如何ともならなかったが、カタリナの好意を半分だけは受け容れるようになった。即ちギリシャ風の衣裳は斥けて、回教式の破衣を纏い続けたが、食事の方は素直に摂った。カタリナも、回教徒の嫌忌する種類の獣肉はよく知っていたから、調理に意を用いる事を忘れなかった。

五月五日土曜日の夜。カタリナは何時ものように二人の奴隷に飲食物を持たせて牢獄へ下りて行った。彼女は此の奴隷達が聖ソフィヤ寺院附の奴隷でない事に気附かなかった。二人の奴隷は、隠し持った短刀で牢番の老卒を刺殺した。驚愕するカタリナも、短刀で脅かされて後ろ手に縛られ、猿轡を噛まされた。それでも足りないかの如くに胃の上を拳で強打されて意識を失った。

気がついた時、カタリナは衣裳も面紗も奪われ、代りにスービアが着ていたアラビヤ風の粗衣を乱雑に巻きつけられていた。手と足は背中の一箇所で纏めて縛り合わされ、固く猿轡を噛まされていた。転がされている場所

は、今迄スービアが監禁されていた獄室だった。スービアの姿は見えなかった。

カタリナは二日間呻吟した。前線の危急で牢番の定員は縮減されていたし、地下の最深部まで巡回が行われる機会は三日に一度だった。且つスービアの失踪が疑われない事情も存在した。責任の所在は当面不明だったが、カタリナが一応審問されなければならなかった。皇帝はカタリナを疑っていなかったが、戦線危急の為査問を行う時間がなかった。結局カタリナは、父フランザの運動にも拘らず攻囲終了の日まで、スービアの居た獄に監禁された。

スービアの方は事情が理解出来ないままカタリナの衣裳と強制的に着替えさせられた。体格が相当異ったが、面紗をかぶると何とか変装し了せた。夜半でもあり、二人の奴隷が従っていたから、牢獄の門衛は疑わずに通した。二人の奴隷はトルコ側に内通したローマ人、又はその配下に違いないが、それから後の行動はローマ側には解らなかった。

スービアと二人の男は七塔城附近から繩梯子を用いて城壁を下り、トルコ軍の陣営に遁げ込んだ。

ムハメッド二世もカリルパシャも、スービ

アの帰還を喜び、且つ疑った。ローマ人の一人は密書を携行していた。宛名はカリルパシャになっていたが、大臣はすぐスルタンに呈した。ムハメッド二世は読了後直ちに侍衛(マメリユック)数人を呼び、二人のローマ人を斬り殺させた。スービアは驚いたがスルタンは平然としていた。

「妃よ。其方を遁したのは、ローマの大都督ルーカス・ノターラスだ。彼は其方を救出した他に、フェナル門を内から開く日時と手筈を申し出ている。これが本當ならコンスタンティノポリスは即時陥落するだろうし、回教徒の血は相当程度救われる。併し本當だとしても余は裏切者を必要としない。必ず我等自らの手で城門を開こう。それよりもスービアよ。其方を砲兵の隊長に任命しよう。余の為を思うなら今後は危険を冒さないようにして貰いたい」

トルコ軍は金角湾に面して対岸から長さ四十五米、幅二十二米半の浮棧橋を建造した。大樽や巨材を鉄釘で繋ぎ上に厚板を敷いた。尖端には最大巨砲の一門が据えられた。此の巨砲はムハメッド二世と呼ばれ、口径六十三糎半、砲弾重量二百七十珎あった。ローマ側は此の工事を妨害しようとして夜襲を試みた

がトルコ艦隊に阻止された。五月十二日、スルタンはキリスト教徒捕虜四十人を斬首させ、その首は擲射器（カタパルト）で城内に撃ち込まれた。ローマ側もトルコ人捕虜二百六十人を城壁から突き落して復讐した。

トルコ軍は港正面に於て、築堤と軍艦から砲撃を開始した。港正面の防禦は陸正面に較べて薄弱だった。只さえ少い防禦軍は二分され、且つ消耗した。五月十五日。ヨーハン・グラントが戦死した。聖ロマンズ門を挟む四箇所の塔は基部より倒壊した。砲撃開始より既に四十日。テオドシウス二重城壁は岩石の堆積と化した。

「あの巨砲を沈黙させなければならぬが」
皇帝は撫然と言った。併し手段があるか。
「怖れながら陛下。大勢で強襲すれば発見されますが、一人なら潜入出来ます」
バジリカだった。

「潜入出来たとしても、一人であの巨砲を何う出来ると言うのだ」

「大砲は微妙で精巧な機械です。場所をよく撰んで砲口に釘を一本打ち込んだら当分撃てなくなります。釘の打ち方は父から習いました」

「そのような冒険を試みたら二度と帰って来

れまい。余は其方を失いたくないのだ」

「わたしの父を殺したのは大砲です。わたしは大砲が憎いのです。回教徒の為に大砲を作った父の罪を償わなければなりません。行かせて下さい。そしてわたしが帰らなかつたら父と二人揃って天国に行かれるよう皆様で祈って下さい」バジリカは皇帝を説得した。

五月十六日夜、彼女は槌と犬釘だけを持って水濠を泳ぎ渡った。トルコ兵の捕虜から奪った制服を着て暫時敵を欺き、比較的警戒の薄い方の超巨砲を目標に撰んで迅速に釘砲した。金属の衝撃音は勿論トルコ兵を惹きつけた。併しバジリカは砲口から曳き落されるまでに水門釘を打ち終った。巨砲一門は機能を失った。バジリカは撲られ、蹴られながら、満足の微笑を浮べて縛られた。

巨砲を預けられていたスービアは切齒して口惜しがった。バジリカを杭に縛りつけ革鞭を以て打ちのめした。それでも気分は霽れなかった。裂傷と出血に喘ぎながらもバジリカの方が寧ろ捨生取義の境地に陶醉していた。ムハメッド二世が事態を知って制止した。

「大切な巨砲を失って申し訳ありません」
スービアは不注意を詫びたが、スルタンは寧ろ暢々として見えた。

「余は裏切や卑怯は嫌いだが、勇敢な行為は敵でも尊敬する。殊に勇敢な女は好きだ。オルバンの娘よ。汝の父は大砲を作り、娘はそれを壊した。併し父の功に免じて一つだけ願いを聞こう。何なりと申せ」

豪快なスルタンは明らかに赦免を与えようとしていた。併しバジリカは殉教を望んだ。後ろ手に縛られ、スービアに縄尻を把られながら、スルタンを見上げて言った。

「城から見える所で殉教させて下さい」

ムハメッド二世は此の娘に初期殉教者の面影を見た。赦免は寧ろ彼女の本意ではない。「それが望みとあれば致し方ない。キリスト教徒には尊敬されるように、但し苦しまずに死ぬるよう計って遣そう。スービアよ。ローマの女勇者を鄭重に遇せよ」
寵姫はスルタンの命令を遵守した。

二

スルタン・ムハメッド二世は、東ローマ帝国の首府に対する総攻撃を発令し、その部署を定めた。

「アラーの御名に於て、余は最後の突撃を命ず。一中略―卑怯なる脱走者は鳥の翼あるとも現世の刑刃を免れ得ず。地獄の業火は一層恐るべし。名誉の戦死者は楽園に於て永遠の

生を享け、清川緑林の中に黒眼の乙女を抱くを得べし。有功者は褒賞を得べし。コンスタンティノポリスの都城及び建築物は余の専有に関われども、金銀、婦女並に持運び得るすべては汝等戦士の取るに任せん。イスラムの子よ。聖戦（ジハード）に臨み、祈禱せよ。七回の洗身礼を行い、明日夕刻まで断食せよ。征け。而して異教徒の牙城を屠れ」

時に一四五三年五月二十七日。どうも気になる月日である。然も時刻すら午後一時半。ムハメッド二世の激励演説結びの言葉を翻訳すると、正しく

「オスマン帝国の興廃此の一戦にあり、各員一層奮励努力せよ」

となるのであるから詢に止むを得ない。スルタンは天球儀を按じながら寵姫スービアを呼んだ。

「妃よ。ローマの星の傾くは何時か」

スービアは測角しつつ答えた。

「火星（ミリーク）は五月二十九日午前二時に巨蟹宮二十八度を過ぎて下落に入り、ローマの星は力を失います。賢者の星水星（ウータレド）は処女宮十五度にあつて高揚し、好機かと思われます」

ムハメッド二世は決断を下した。

「総攻撃は五月二十九日の日の出。合図はバジリカ砲の発射とする」

そして更にスービアに何事かを命じた。

五月二十八日中にトルコ軍は全軍を水濠端まで推進した。夜に入ると砲列の全部も前進を命ぜられた。

オルバンの娘バジリカは、牢舎から出された。彼女は袖のない麻の単衣を与えられていた。スービアが指図し、バジリカは後ろ手に縛られた上、太い綱で幾重にも巻き締められた。身体を自由を奪う目的にしては使用された材料が太きに過ぎ、縄目は固きに過ぎた。胸から胴へ、更に足首も膝も縛られた。

彼女の名を冠せられた巨砲は発射準備を終って待機していた。砲の直前には鳥居型の木枠が大きく組んであった。バジリカは漸く緊縛の意味を悟った。瞬間、頬が蒼白に変わったが、かねての諦観に従い平静を取戻した。

バジリカは、鳥居型の横木に高く吊るされた。重心に当る後ろ手首の辺で吊られたので身体は二つ折に曲って丁度四十八インチの口径一杯位になり、砲口直前で静止した。既に黎明。勿論城中からも此の情景が見えた。

「バジリカが二つ揃いました。此方のはよく肥って口も大きく身体は固い。吊下っている

方は優しくて柔かくそれでいて強い。併しスルタンの為には何方を残すべきか。もう少ししたら、このスービアが装薬に点火してあげましょう」

最後の勝利者スービアは凄味のある微笑を浮べ、砲口に揺れているバジリカを眺めた。

晨陽一閃。ムハメッド二世は半月刀を高く揚げ、総攻撃の開始を宣した。

スービアは自ら砲手の位置に付き、バジリカの身体を城内に運び行く巨弾を発射すべく点火した。

途端に裏音を発して火柱が噴き上った。発砲ではない。暴発である。砲全体が爆煙に包まれた。砲身は縦方向真二つに割れて飛散した。

砲身の金属は耐用限度を越えると発射の火薬の圧力に耐えられなくなる。これを命数と言うが、初期の大砲では斯かる法則が確立されていなかった。命数超過に依る事故が頻発した。今の場合もその一例に過ぎないのだが、此の劇的な暴発が単に五十三日間に亘る連続使用の結果だとは思いたくない。脆化した砲身を遂に割ったものは砲と同じ名を持ちながら火神（ヴァルカナス）の犠牲として砲口に吊られた乙女の執念だったのではあるまい

か。

乙女バジリカは髪一筋も残さずに消え去った。九人の砲手も炭の棒の如くなって倒れた。美しいスービアも今は数塊の焦げた裂片と化して転っていた。その上に、バジリカの名で呼ばれていた銅の裂けた屑が散乱していた。

欺かる大事故にも拘らず、死刑の威嚇を以て後を振返る事を禁ぜられていた全線のトルコ兵は、爆音と共に一斉に駆け出した。

陸上の全戦線から湧き起った喚声が、既に廃墟と化しているテオドシウス二重城壁の残骸を揺り動かした。八十隻のトルコ軍艦は港に舳を押しつけ、梯子を投げ掛けた。トルコ兵が駆け登った。攀城戦術である。

壮快な喇叭の響。プラシエルネス宮から七塔城に到る戦線に亘る砲声。砲煙濤々。オスマン軍数万の戦士は、煙の下より駆け出し、崩れ落ちた城壁の堆積を駆け登る。

ローマ軍は二時間以上敵を支えた。此の時の一本の矢が、ジャステイニアニの手首を貫いた。重傷のゼノア隊長は忽ち勇気を失って逃走し、自国の軍艦に隠れた。イタリヤの傭兵は多くが主将の行動を見習った。

スルタンはジャニザリー歩兵隊を放った。

隊長ハッサンは、三十人を率いて先頭を駆けた。十八人は途中で戦死した。ハッサンと十人は城壁を登った。ハッサンは忽ち撃ち落されて死んだ。併し突入の可能性が全軍に知れ渡り、トルコ兵は先を争って城壁を越えた。

コンスタンティヌス十一世の周囲も忽ち乱闘の場と化した。聖母旗も双頭金鷲旗も倒れた。

「キリスト教徒は居ないか。余を介錯せよ」
皇帝は左右に呼び掛けたが誰も答えなかった。トルコ兵の半月刀が身邊に迫った。皇帝は紫の帝衣を脱ぎ棄てた。女と見紛うばかりのコンスタンティヌスが自ら剣を把った。乱軍の中に躍り込んだ。そして忽ち見えなくなった。

童貞の美青年コンスタンティヌス・パレオロゴスは、最後のローマ皇帝として六年間帝国の残存遺物を統治し、最後のローマ将軍として五十三日間帝国軍の指揮を執り、最後のローマ戦士として数分間死闘した後、漸くにして二十三年に亘った現世の苦患を免除された。

ローマ軍の城壁防禦軍は戦術上の単線配備（コルドン）に当る。聖ロマヌス門の破綻は

全戦線の崩壊を意味した。守備軍は城壁上の有利な地位を失うと同時に兵力差で圧倒された。帝国軍はその部署に於て倒れた。

市民は市街の最奥に位する聖ソフィヤ寺院に逃げ込み、扉を閉じた。それから先は海だ。トルコ兵は扉を打ち壊し、一時間以内に無抵抗のギリシヤ人六万人を縛りあげた。

金角湾に停泊していたゼノアの艦船は自国民だけを收容して逃走した。

午後二時。スルタン・ムハメッド二世は親衛隊を率いて聖ロマヌス門より入城した。

ローマは亡びた。建国以来二千二百六年間の歴史は閉ざされた。

世界帝国の首府コンスタンティノポリスは、その名もイスタンブールと改められてオスマン・トルコの都となった。

コンスタンティヌス大帝の後継者百人が住んだ宮殿はスルトンの所有となった。

ギリシヤ正教の大本山聖ソフィヤ寺院は回教モスクに変えられた。

そして今日に至るまで、此の状態が保たれている。

偉大なローマの名を最後に託された皇帝と戦士達は、衰耗の極にありながら帝国の武名を汚さなかった。五十三日間の戦闘記録は防

禦軍の勇戦奮闘を以て綴られている。

それにも拘らず、歴史は古典的豪傑の一騎討や智将の用兵策謀を何も伝えていない。百六十年後の大阪役の方が寧ろ詩的素材に富んでいるようだ。

ローマ帝国の滅亡は、近代戦争の序曲たる炸裂と衝撃と、叫喚の交響を以て大悲譜を奏し、鉄と火と硝煙の乱舞の裡に集団殺戮として描き出された。それは千年の威厳を保ち、古代と中世の集積、結晶たるテオドシウス二重城壁に対する、近代そのものの偉力とも言ふべき大砲の挑戦だった。聖ロマヌス門に突破孔を開いたものは、優雄な女性名を冠せられた巨砲（バジリカ）だった。

再建された門の新しい名は、近世を代表する機械の勝利を今日に至るまで伝えている。

曰く「大砲門（トプ・カピ）」と。

此の門の内側に同じ名を以て呼ばれる離宮が建てられ、後に博物館となった。博物館は一口の宝剣を所蔵する。歴代スルタンが王位継承の証として受け取る剣で、「コーランか貢か剣か」の剣である。五百余年の後、女怪盗エリザベート（本名稲荷山陽子（メリナ・メルクーリ））を主犯とする窃盗団が此の宝剣を狙って一九六四年の世界に話題を撒い

た。（？）

最後の卑怯な逃亡で騎士の名誉を汚したジョン・ジャステイニアニは、キオス島で破傷風を起して死んだ。

大都督ルーカス・ノターラスはカリルパシヤを頼って降伏し、妻及び二子と共に捕虜になった。彼の邸を搜索するとカリルパシヤと交した秘密通信が出て来た。この為、トルコの首席大臣も内通の罪で斬首された。ローマの大都督は妻子諸共、競技場で公開処刑を執行された。

フランザも家族全部と共に捕虜になった。彼は四箇月間奴隷として使役された後で幸運にも解放された。寧ろ老衰の為使用の価値なしと見做されて棄てられた。フランザは五十才で、まだ老衰とは言えなかったが、疲弊と苦悩の為極度の老年と見られた。

フランザは国外に若干の資産を移していたから、直ちにアドリヤノポリスに赴き、トルコ王室馬寮長官の奴隷になっていた三十三才で美貌の妻を買い戻した。次いで夫妻は、今はイスタンブールと改名された東帝国の首府を訪れ、二人の子供を取り戻そうとした。併しそれは果せなかった。十七才の娘カタリナと十五才の息子ヨハンネスは二人揃って類稀

な美貌を有したから、スルタン自身に献上されていた。

ムハメッド二世はこれを嘉納した。東洋の宮廷で常用される手段を行使して所有を確立しようとした。侍衛に命じて姉弟を厳しく縛り、数日間縄を解かせず、凡ゆる虐待と酷遇を与えた。然る後スルタン自身が現れて自ら縄を解き、閨房に引き入れるという寸法である。

ムハメッド二世は少年ヨハンネスの方に気があった。併しヨハンネスは縄も解かせず、不純な慾情を拒否した。怒ったスルタンは半月刀で美少年の首を斬った。

スルタンはカタリナには危害を加えなかった。寵愛もしなかったが、スービアが嘗て好過された事を陣中で聞き知っていたから、事故で死んだ寵姫の居室を与えて返礼した。だがカタリナは縄を解かれると、隙を窺って自ら縊死した。

フランザ夫妻は子供達の運命を知って悲嘆した。併し天に召された生命は現世的手段で買い戻す事は出来ないと悟らなければならなかった。且つ、今回ローマ帝国臣民全部を襲った大不幸から、夫妻だけでも生命と自由を全うした事を神に謝すべきであった。

ムハメッド二世は、動乱が一段落するとキリスト教徒にもインスタブル居住を認めた。併し、フランザ夫妻は留る意志がなかった。城壁の再建工事は始まり、アナトリアからは回教徒の五千家族が移住して来つた。一方ビザンチウム大図書館は戦乱の犠牲となり、十二万巻の写本が燃料として売られていた。一デユカットで十巻を買う事が出来た。

フランザ夫妻は子供達の代りとして、ヨハネネスが好んだ古代哲学書や、カタリナが愛読した古典文学書を買ひ求めた。「ローマ帝国も、パレオロゴス家も、私達の子供も、みんな此の都と一緒に亡びてしまった。残ったものはギリシャとローマの精神文化を宿した此の書物ばかりだ。併しこれは、不死鳥の卵だ。これを持ってイタリアに渡ろう。この中から新しい文化と芸術が生れ代つ

て立ち上るだろう。それを信じ、それを楽しみにして生き延びようではないか」フランザ夫妻は、子供達の形見であり、ローマ帝国の残映を留め、次の時代に文芸復興(ルネサンス)となって開花すべき種子でもある東帝国の古典だけを持って寂しくイスタンブルを去った。天も泣くか、アジャ岸のウスクダラは煙雨の中に霞んでいた。

—終—

本誌既刊号在庫一覧表

残部僅少！ お申込みはお早く

○本誌の既刊雑誌は最近発行の分を除いて殆ど残り少なくなつてしましました。
○左記一覧表の中、価格の記してあります分は、只今でしたら在庫しておりますから、御送金次第急送申し上げます。
○送料は当社にて負担いたしますが、定価一五〇円の雑誌のみは送料を含めてお申込み願います。

既刊号在庫案内

昭和35年6月号 (定価三〇〇円)
昭和35年7月号 (売切)
昭和35年8月号 (売切)
昭和35年9月号 (売切)
昭和35年10月号 (売切)

昭和35年11月号 (売切)
昭和35年12月号 (売切)
昭和36年1月号 (売切)
昭和36年2月号 (送共一七〇円)
昭和36年3月号 (売切)
昭和36年4月号 (送共一七〇円)
昭和36年5月号 (売切)
昭和36年6月号 (送共一七〇円)
昭和36年7月号 (売切)
昭和36年8月号 (売切)
昭和36年9月号 (売切)
昭和36年10月号 (定価二〇〇円)
昭和36年11月号 (売切)
昭和36年12月号 (売切)
昭和37年1月号 (売切)
昭和37年2月号 (定価二〇〇円)

昭和37年3月号 (定価二〇〇円)
昭和37年4月号 (売切)
昭和37年5月号 (売切)
昭和37年6月号 (売切)
昭和37年7月号 (定価二〇〇円)
昭和37年8月号 (売切)
昭和37年9月号 (売切)
昭和37年10月号 (定価二〇〇円)
昭和37年11月号 (売切)
昭和37年12月号 (売切)
昭和38年1月号 (売切)
昭和38年2月号 (売切)
昭和38年3月号 (売切)
昭和38年4月号 (売切)
昭和38年5月号 (売切)
昭和38年6月号 (売切)
昭和38年7月号 (売切)
昭和38年8月号 (売切)
昭和38年9月号 (売切)
昭和38年10月号 (売切)
昭和38年11月号 (定価二五〇円)
昭和38年12月号 (定価二五〇円)

昭和39年1月号 (定価二五〇円)
昭和39年2月号 (定価二五〇円)
昭和39年3月号 (定価二五〇円)
昭和39年4月号 (定価二五〇円)
昭和39年5月号 (定価二五〇円)
昭和39年6月号 (定価二五〇円)
昭和39年7月号 (定価二五〇円)
昭和39年8月号 (定価二五〇円)
昭和39年9月号 (定価二五〇円)
昭和39年10月号 (定価二五〇円)
昭和39年11月号 (定価二五〇円)
昭和39年12月号 (定価二五〇円)
昭和40年1月号 (定価二五〇円)
昭和40年2月号 (定価二五〇円)
昭和40年3月号 (定価二五〇円)
昭和40年4月号 (定価二五〇円)
昭和40年5月号 (定価二五〇円)
昭和40年6月号 (定価二五〇円)
昭和40年7月号 (定価二五〇円)
昭和40年8月号 (定価二五〇円)
昭和40年9月号 (定価二五〇円)
昭和40年10月号 (定価二五〇円)
昭和40年11月号 (定価二五〇円)
昭和40年12月号 (定価二五〇円)

○極めて在庫の僅少な分がございますので、第二希望品がございましたらお書き添え願います。

小説「梨花悠紀子」

夜乃探郎

はじがき

「…………一度お目にかかりたいわ。東京へ来られたら是非連絡してね。きつときつとよ。では奇クの益々御健斗をお祈りします。さようなら」——ここまで書いて、梨花悠紀子はちよっと小首をかしげた。ハナント、日本ノ「さようなら」トイウ語感ノ哀シイ響キ……ドノ作家ダツタカ、「グットバイ」「オオルポアル」「アジュウ」「アウフビダゼエヘン」「アロハ」。ソノ何レニモ（また逢う日まで）トカ（神が汝の為にあれ）トノ祈リヤ

願イヲ同時ニ意味シ、ソレニ比シテ「さようなら」トイウ投ゲ言葉ノ空シサヲ語ッテイタガ…………▽

悠紀子は、よっぽど「グットバイ」としようとしたが、何か気ざっぽく思われたし、よく考えてみるとやはり、「さようなら」という結びの方が、いまのホツとした気持と無性に被虐への世界のスリルが抜け切れない複雑な空虚さを物語っているようなので——。

悠紀子は「奇ク」編集長箕田京二宛の便りをポストに入れるため表に出た。

東京の夜は、赤や青のネオンが、おぼろに闇ににじんで、彼女の気持を深い郷愁に落込ませた。この空は、あの辻村隆さんと、はじめてすれ違った戎橋筋までも連っている。そして数々の緊縛フオートを写された懐しのあの場所、その場所にも…………。

悠紀子は、帰途、ときたま淋しくなると行くことにしている純喫茶「面影」に入った。「月影のナポリを掛けて頂だい」そう言うなり彼女はどさりと、ボックスに腰を埋めたのである。

A



Nデパートの化粧品売場。そこは歳末の商戦、今やたけなわ……。化粧品売場のマネキン嬢は声を嗄らし、妍を競って、自社の化粧品をなんとか宣伝、売らんかなと、必死であった。その包装場の中央に陣取った梨花悠紀子はマネーと伝票に一生懸命取組んでいた。

やがて、彼女はホッと一息ついて、うなじを伸すと、何気なく、辺りを見渡した。これは悠紀子にとって、いつものくせで、無意識

にこのような動作になる。いや、事務をする者のよくやる軽いちよっとした解放感でもあり、次の仕事に向う姿勢でもあった。だからその無防備な一瞬に、辻村隆のいらだたしいような顔が視線に飛込んだことに、彼女は、慌てて顔を伏せた。

「その後、随分御無沙汰しています。とっても忙がしいのよ。この通り……」

悠紀子は、辻村の前に近づくとう言いわけともつかない調子でささやいた。わざと、そっけない口調になったのは、生れて初めて異性の前でヌードになり縛られたことと、そうやってみて被虐のよろこびを多少なりとも自分の秘められた部分に発見したことへの……。

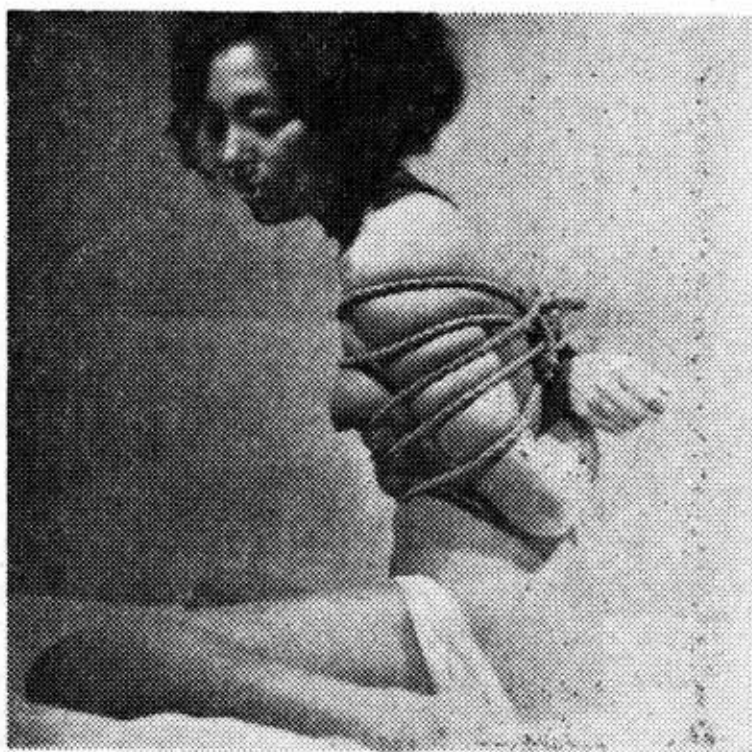
「夢よう一度——と思ってネ……」

どこか、まぶしいように、また、すがりつくように悠紀子を見付ける辻村の表情をいつまでも受けとめることは、処女の羞恥が、彼女を許さなかった。

「御返事しますわ。じゃあ、これでね」

悠紀子は、さっさと、辻村に背をむけ、レジスターに戻ったのである。

B



夢よう一度——と願った、辻村隆のその彼女との再会は、それから九日たったクリスマス・イブの当夜、あの喧噪と怒号が巷に渦まくのをよそに、静かなとあるホテルで実現した。一方、その日、悠紀子は、朝から落着かなかった。それは、平凡な日常に抵抗しようとする精一杯のB・Gとしての態度と、もしこのまま、ズルズルとアブノーマルな世界にはまり込んでしまわないかという、一度知らされたSMの妖しい魅力とが、からまったものではあった。だが、その行手に、



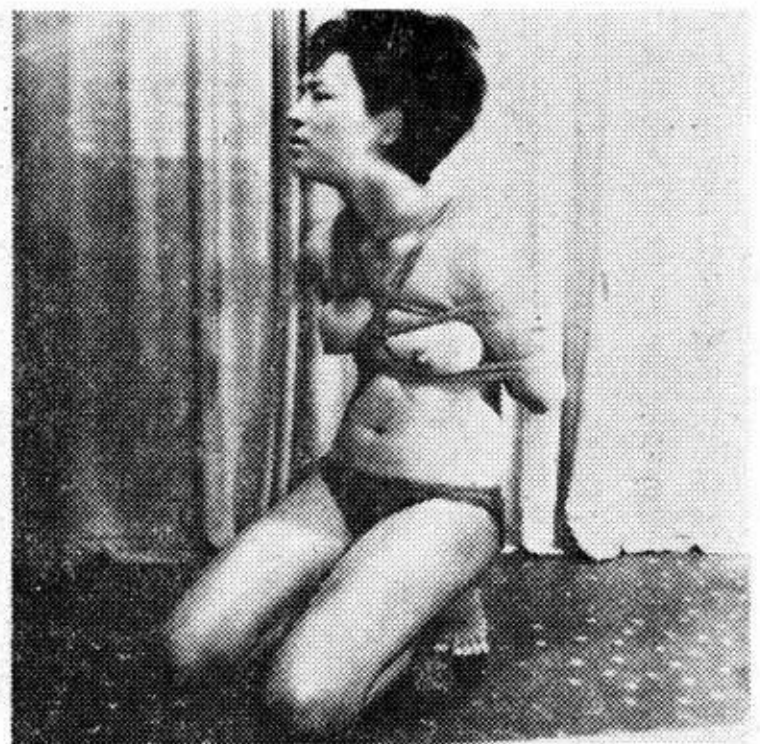
そのやわらかな新鮮な身体を戸外にさらしたのであった。その道は、第一回目を試作フォートとするならば、SMへの美の殉教者、辻村隆と、全盛期マゾヒスト梨花悠紀子として、その連続吊り責めフォートに大方の奇ク読者の絶讃を浴びることにもなったコンビが、ここにはっきりと誕生を意味する第一歩にも通ずる「道」でもあったのだ。

C

濡れた肩、むっちりと盛り上った、形のよい乳房——、しなやかに伸びた腕、四肢——それは、初めて、淀川河畔の銀橋ほとりのGホテルで見たときこの女こそ、男に責められるためにのみ生れてきた「鑑賞用女性」であると直感したVことを、再度裏付け、深める他に、何物もなかったのだ。

辻村隆は、浴室から現われた悠紀子の桃色の肌を固い唾をのみ込みながらみとれた。彼は忘我の極に、ふと、Aデパートの彼女と、ホテルでの彼女とは、同一人であり乍ら、瞬時の間にこうも変貌するものだろうか——Vと思った。

——同時に、悠紀子も、(辻村さんに会うところも、大胆になれる不思議さに) 内心お



どろきを感じていたのであった。それで、「じゃ、ボツボツ始めていいでしょうね」という辻村のかすれたような声に、

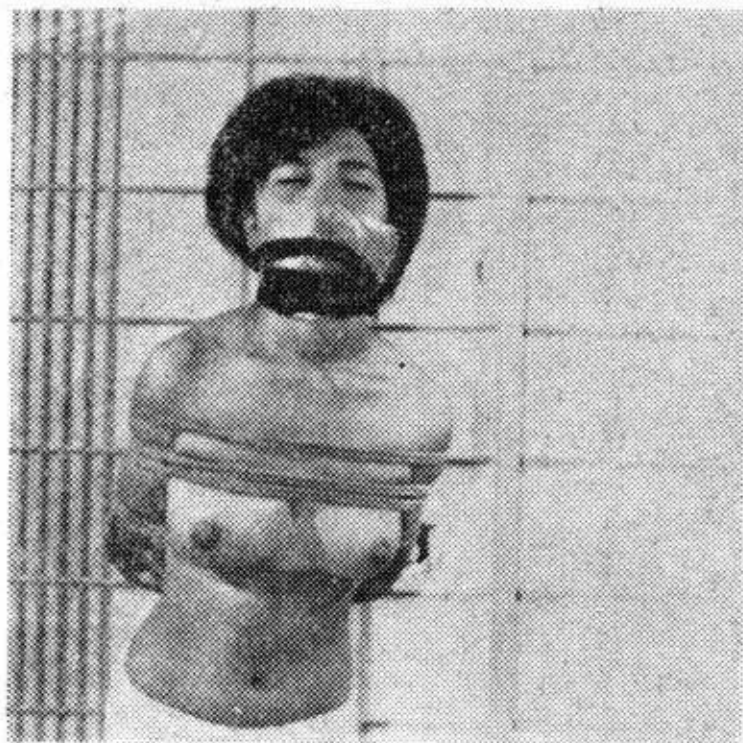
「ええ、御自由に……。」と、むしろ平然と答えることが出来たのであった。「マナ板の上のコイ」そんな言葉が、彼女の頭を横切り、悠紀子は、彼の求めに応じて、落着いた動作で、紫のシュミーズを裸につけ、床柱を背にして、静かに両手を後に廻した。

帰途。夕方迄降ったイヴの夜は、風は流石に冷たかったが、SMプレイをした後の、彼

「僕は、貴女のこの汚れない、乙女の肌に、犇々と縛しめの美しさを表現して見たい。悲壮美の芸術。僕は今迄、どれ程それに憧れたであろう。貴女ならそれにピッタリかも知れない。いや、貴女を置いて、緊縛美を表現出来得る女性は、恐らく誰もいないだろう」

——という、単なるサジストというよりは、美への殉教者ともいうべき辻村隆の熱っぽい言葉が、彼女の心情をゆさぶり……。

「私は、私の青春を辻村さんとSMプレイに賭けよう」と、悠紀子は黄昏近く、十九歳の



と彼女にとっては、むしろ心よい位のものであった。ミナミの出は相も変わらず一向に減る様子もない。三角帽子を横ちょに頭にのつけたよいどれ達がコメットをならし、辻村と悠紀子の二人を、ひやかしながら通り過ぎて行く。そんな一寸したことでも、中年男でもある辻村にとってはうれしく、また悠紀子にとっても、未だ縛られたことのこうふんがさめず、まるでどこかで見たフランス映画のシーンのヒーローにでもなったような気分が楽しかった。

「B」という洋酒喫茶。そこで、辻村と悠紀子は、シャンパンをあげ、メリー・クリスマスノと、Xマスを祝い、あわせて今宵のSMプレイの成功を祝った。

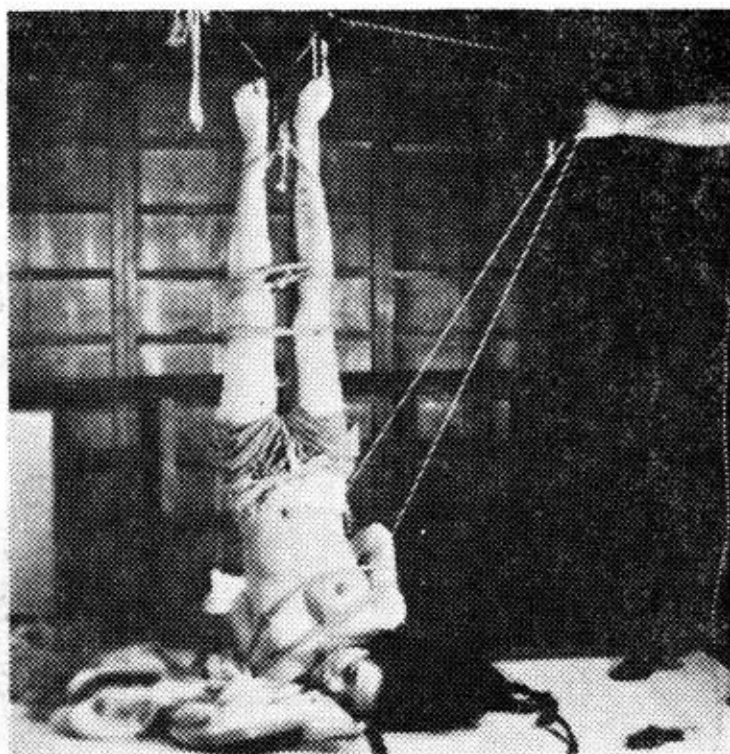
「いよう」息を弾ませて、奇ク編集長の箕田京二が、元気な姿を現わした。辻村は、彼女にナイショで箕田編集長に電話を掛けたことのうしろめたさと、よくまア、この混雑の中をやって来られたものだという二つの入りまじった気持で、瞬間、手に持つグラスを片むけ、あわや、シャンパンをこぼす所であったが、すぐ姿勢を持直し、

「紹介するよ。この方が例の悠紀子さん」といった。彼女はグラスをおいて軽く一礼しそして辻村に向かって茶目っぽくコラッと睨みつけた。

箕田編集長は、そんな悠紀子の姿を、ぶえんりよに眺め、

「いいじゃないか、なかなか。二、三日後にも、一度頼むとするかな。そうだ、この娘に囚衣が似合うかも知れないよ。首枷をはめてやったら、尚更いいかも知れないね」

ずけずけと彼女を前に意欲の一端を言っていた。それは、通刊百五十号も近い、緊縛



フォートを手とも足ともして、これまで奇譚クラブを発行しつづけてきた編集責任者としての自信もあり、初対面の彼女の気持を引立たせるための、手なれたゼスチャーでもあったのだ。

辻村隆は自宅のベッドに背広を着たままでどざりと、ひっくり返った。天井に輝やく電気を消し、スタンドの灯りをつけた。煙草の煙りをふう——と吐く。

ハ……併し、美の探求は止む事を知らない。



——「だが」と、彼はまるでだれかに投げつけるようにいってみた。

「芸術さ——」。『そうだ芸術なのだ——』と、辻村はさげんだ。

× × ×

梨花悠紀子、いまは梨花悠起子でもあり、チャーム・ガールの仕事を持つ彼女は、あの時と同じくヤワラカーキ・メロデーに、身体をまかせ、眼をつぶっている。

(有馬稲子と芦川いづみをたして・ザ・ピーナツで割ったような……)

「ふふ」と、悠起子は淋しく笑った。やがて叔父の家に帰るべく、彼女は立上ったのである。

おれが、正式に彼女を箕田氏に紹介した限り彼は、悠紀子さんを、第二の川端、或いは第三の絹川として売り出すかも知れない。読者の要求——、箕田氏は撮る——。そして評判がよければ、又撮る——。V

取りとめもない考えが、次から、次と彼の頭に浮んでくる。

「奇クの毎号が、悠紀子さんでグラビヤ頁を飾られる——とすれば、果して、おれは、悠紀子さんに対して、背徳を犯した事になるのだろうか」辻村は、言葉に出してみた。

△ここで作者、夜乃探郎は、スミマセンが、辻村さんに代って言わして頂く。チンチンチンのお月様、何卒、彼女に幸せを垂れ給え——と。V

(終)

△参考V

奇ク 昭和三十五年十二月特大号、

「鑑賞用女性」 辻村隆

// 昭和三十六年三月特大号



「鑑賞用緊縛女性」

辻村隆

昭和三十七年十二月号

「目次裏」連続吊り責フォートの決定版・未発表の秘蔵版。『梨花悠紀子吊責写真特集』分譲広告より

昭和四十年六月号

短信往来「近況によせて」

梨花悠起子

× × ×

× × ×

梨花悠紀子のことども

編集子

六月号の「奇クサロン」で梨花悠紀子さんからの通信を『近況に寄せて』と題して掲載したところ、彼女の住所や勤務先を知らせてほしいという依頼が数多くきた。しかし残念ながら、私には誰彼なしに彼女の本名や住所を公開する自由は与えられていなかった。「一度お目にかかりたいわ。東京へ来られた

ら是非連絡してね」という彼女からの便りの結びであったが、私自身、その後上京の機会もなく、ただ彼女の通信の掲載誌である六月号を贈呈して返事にかえておいた。

ところが、急に五月二十七日に上京する用件が出来たので、彼女にその旨連絡したら、「お待ちします」という簡単な返事だった。

当日、七時発の超特急ひかりに乘車するため前日米の豪雨について、新大阪駅へ駆けつけたのだが、京都以東が地盤軟弱のため午前中の列車は全部運休とのこと。特急券の払戻

しを受けて早速車を伊丹飛行場へ走らせたがこの方も十時以降は全部欠航。

そんなわけで遂に彼女と逢うチャンスを逸してしまったのだが、しかし今回はからずも夜乃探郎氏から『小説梨花悠紀子』なる一文を寄せられた。氏一流の鋭い観察力にもどついた夢幻的な筆致が、梨花悠紀子の全貌を抜抉して余すところがないのを読んで、まるで彼女を目のあたりにしているような気持ちになった。彼女もこの記事を読んだら、さぞ喜ぶことだろうと思う。

〔最新版〕

女体緊縛フォト五十選

B組五十集

大手札判印画紙(9×13㎝)焼付

各組一枚一組(送料共)

一組一枚	一〇〇〇円
五組五枚	四〇〇〇円
十組十枚	七五〇〇円
二十組二十枚	一四〇〇〇円
三十組三十枚	二〇〇〇〇円
四十組四十枚	二五〇〇〇円
五十組五十枚	三〇〇〇〇円

B 5	足の裏擦り責め	(竹野)
B 6	おへソいじめ大写	(関谷)
B 7	剃いだバタフライ	(関谷)
B 8	貴方に捧げた裸身	(大塚)
B 9	乳房責め絶叫苦悶	(大塚)
B 10	無防備双手吊り	(絹川)
B 11	豊満臀部エビ縛り	(水本)
B 12	一糸纏わぬ股間縛	(水本)
B 13	全裸亀甲股間縛	(関谷)
B 14	足踏付け二つ折り	(大塚)
B 15	尻突出しムチ打ち	(関谷)
B 16	手錠にもだえる	(竹野)

B 17	尻突立てエビ責め	(水本)
B 18	椅子開股鼻責触手	(梨花)
B 19	息もつがせぬ猿轡	(竹野)
B 20	投げ出した全裸	(関谷)
B 21	美しき尻部の露出	(絹川)
B 22	猿ぐつわ悦唐境	(竹野)
B 23	後手柱縛り脚線美	(竹野)
B 24	強制鼻挟水呑ませ	(梨花)
B 25	苦悶にねじれる裸身	(関谷)
B 26	責めに気を失って	(関谷)
B 27	さアどうでもして	(関谷)
B 28	豊麗乳房膨隆縛り	(竹野)
B 29	投げだされた女体	(竹野)
B 30	裸身をくびる麻縄	(梨花)
B 31	強烈縛りに悦ぶ	(梨花)
B 32	全裸逆エビ片脚拳	(東浦)
B 33	踏みつけマゾ境地	(東浦)

B 34	すべてをさらけて	(関谷)
B 35	ムチ打ち失神寸前	(関谷)
B 36	クリップ鼻挟み	(絹川)
B 37	台上的マゾポーズ	(大塚)
B 38	吊られゆく美体	(絹川)
B 39	拷問に無惨な美貌	(梨花)
B 40	マゾ女性の表情美	(東浦)
B 41	喰い込む股間縄	(絹川)
B 42	灸責めに悶える	(梨花)
B 43	犠牲台の人身御供	(大塚)
B 44	美肌無茶苦茶縛り	(絹川)
B 45	裸身に立つ蠟燭	(大塚)
B 46	手枷足枷大写し	(四方)
B 47	鎖に悶える足首美	(柳初)
B 48	蛇責めに柔肌栗然	(梨花)
B 49	鼻の玩弄恍惚境	(大塚)
B 50	女囚菱縄さらし	(絹川)

読者原稿

奴隷

どれい

(マゾ小説)

人伏平



太田かおる様を尊い女王様と、あがめ奉り
奴隷として御仕え申し上げるため、女王様の
下に置かれた誓約書に署名した私は、帰京後

直ちにその準備にかかりました。

幸い、いまだに独身が続けていた私は、知
り合いの不動産屋を通じて、都内のHマンシ
ョンの一室を買い入れました。今まで住んで

いた自宅は折りを見て、売却してもらう事に
して、手持ちの株券などを処分して買い入れ
たマンションは、想像以上に、かおる女王様
のお気に入りだった御様子でした。

都心とは思えぬ、緑の樹々に囲まれた美し
い木立ちの間にそびえる。六階建の白亜のビ
ルは、確にかおる様の御住いとしてふさわし
いものでした。なお幸な事に、室内は丁度、
建具を入れている最中でしたので、女王様と
奴隷の住居にふさわしく、幾らでも意のまま
に改装の出来る状態でした。

かおる様の御申出によって、とおおい女
王様のお好きな様に、室内を模様替えする事
にしました。室内の改装にいよいよかかる前
日、かおる様は、私に申し渡されたのです。

(充分に理性をお持ちのかおる様は、会社内
においては、従来通り、社長と秘書の関係を
くずすような事はありませんでした)

「社長、明日から一週間で室内の改装が出来
上るそうですから、その間私欠勤致します。

そして、二人の楽しいパライスを作ってさ
しあげます、それまで楽しみにしていて下さ
いね」

二
いよいよ、待ちに待ったその日がやってき

ました。身の廻りの品だけを前もって、Hマンションに送りとどけて置いた私は、会社を出ると、胸をおどらせながら、未知の樂園に向かったのです。

やがて、Hマンションの豪華なロビーに着いた私は、自動エレベータの六階のボタンを押しました。

「六〇七」と、ドアに書かれている部屋の前に立った私は、ふるえる指先で、呼出しのブザーを押したのです。

「あら、社長さん、早くお上りなさい」

予想に反して、やさしく迎えられた私は、やや、とまどいながら、玄関のフロアーに第一歩を印しました。

厚い絨たんの感触が、心地よく、クツを伝わってきます。思ったより、はるかに、デラックスな部屋の様子に、私は、思わず、うなりました。この種のマンションとしては、相当地に高級なものでしたが、今日の前の様子を見て、益々その驚きを深くしたのでした。一つ一つ皆様に部屋の様子を申し上げるのは、とても私のつたない筆を以てしては、不可能な事です。以下見取図を以て皆様に御説明申し上げたいと存じます。

ざっと、図の様な部屋です。奴隷の部屋を

除く、すべての部屋は、厚い絨たんを敷きつめて、如何にも、女王様の住居にふさわしい作りでございます。全体の坪数も、三十坪近い充分なゆとりがあります。

例えば、奴隷の部屋でさえ、五坪程はあるのでした。

三

「社長さん、ぼんやりして居ないで、こちらへいらっしゃいね」

かおる様にうながされる様にして、私は、応接ソファに腰を下しました。

「社長さん、色々と散財をかけて、ごめんなさい。今日から、いよいよ私たちの生活が始まるわけですけど、もう一度伺いますわ。社長さんは本当に私の奴隷になって宜しいんですの。もし、気が進まなければ、御遠慮なさらないで云って下さらない。」

かおる様は、真面目な態度で申されるのでした。すでに、決心をかためていた私は、何のためらいもなく、

「かおるさん、今更何を云うんです。僕の気持はもう決っているんですよ。どうぞ、僕を貴女の奴隷にして下さい。」

と申上げると、高まってくる激情を押える事が出来ず、かおる様の手を握りしめるので

した。

「そう後悔しないわね。じゃあ今から本当の奴隷にしてあげますわ」

かおる様は冷たくおっしゃると、私の手を振りほどいて、立ち上りました。いよいよ、名実共に賤しい奴隷としての生活が始まる。記念すべき時が来たのです。

「奴隷ノすぐ裸におなりノ」

かおる女王様の鋭い叱声が飛びます。私は急いで服をぬぐと、女王様の前に奴隷の姿勢を取るのでした。あわれな姿で四ツ這いになっている私の前に、ドサツと音がして、奴隷用革褌が投げられます。す早く、それを身に着けた私の首に、犬の首輪が程良い強さではめられました。首輪につけた鎖を、手にすると、かおる様は、

「さあ、今晩は私も疲れて居るから、お前は奴隷の部屋でおとなしくおやすみ」

とおっしゃって、奴隷部屋に私を引き連れて行くのでした。尊い女王様の後を、四つ這いになって、私は、奴隷部屋へ入るのでした。

こまごまとした明朝からの御命令を私に与えた後、かおる様は、自室へ戻って行かれたので、奴隷部屋の壁の鉄輪に首輪の鎖を固定

され、這いつくばった姿勢のまま、私は、奴隷として始めての夜を過したのです。

四

朝六時、私は奴隷部屋の、ワラゴザの上で目をさました。急いで四つ這いのまま、奴隷部屋の鉄格子を開けて外へ出ると、台所へ這って行くのです。

朝食のハムエッグを作り、トーストとミルクと共に、食卓を飾った私は、女王様のベッドに這って行きました。

「女王様、朝食の仕度がととのいました」

奴隷の声に、やっと目をさました、かおる様は、大きく、心持良さそうに、のびをされると、上半身をベッドの上に起して、

「バカヤロー、女王様のお目ざめの時は、洗面道具を持って来るのがわからないのかい」と、腹立たしように申されるのです。私はあわてて、立ち上って、洗面所へ行こうとしますと、

「バカ！ 這って行くんだよ」

すかさず、女王様の叱声が飛びます。

私は、あわてて、四つ這いになると、這って行くのでした。

ベッドの横で、ひざまずいている私に、かおる様は、

「口を大きく開けて」

と命令します。かしこまって、大きく開けた私の口の中へ、うがい水を、何回もはき出されるのです。歯磨のハッカと、尊い女王様の唾液のまじった水を、私は一滴もこぼすまいと、飲み込むのでした。

朝食の椅子についた女王様は、私をテーブルの横に四つ這いにさせ、口から、残飯をはき出して下さいます。犬の様に四つ這いのまま、私は、嬉しさにふるえながら、床に口をつけて、食べるのでした。

「平！ トイレへ行くよ」

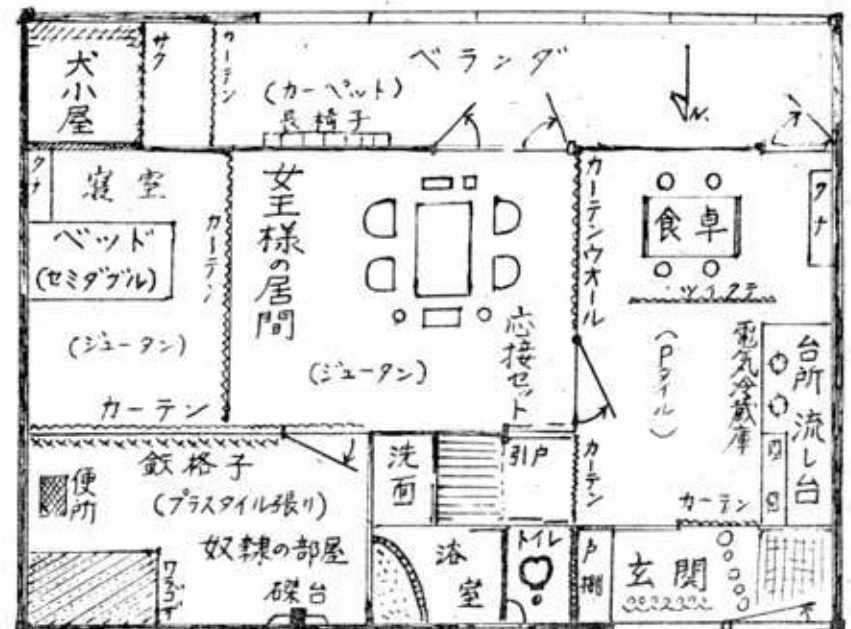
お食事をすまされたかおる様は、こうおっしゃるのです。私は四つ這いのまま、女王様を背にお乗せして、トイレ迄這って行きます。ドッカーリと私の背に乗ったかおる様のボリュウムあるお尻が、薄いネグリジェを通して、裸の背中中心よい重量感を与えてくれるのでした。

五

トイレのドアを開けたままで、平然と排泄をすまされた女王様は、ドアの処で四つ這いのままお待ち申上げている私に、

「奴隷、お前は後仕末をさして上げるよ」

と申され、私の首輪についた鎖を引っばっ



て、便器の中に頭を押し着けるのです。

「その中に、直接飲ませてやるからね、楽しみにしておいで。今は、チリ紙代りになってごらん」

かおる様のお声を背にしながら、私は、便器の中へ顔を突っ込むのでした。

「バカ！ そのチリ紙を食べておしまい」顔中、ビショビショになった私に再び命令が下されます。

六

浴室で全身を淨めた私は、素早くパンツ一枚のままで、四つ這いになってベランダに出ると、長椅子のソファに深々と身体を沈めて朝刊を読んでおられる、かおる様の足もとへいざり寄りました。

ふっくらと丸味を帯びたかおる様の白いおみ足が、私の目の前にあります。

「さあ、ストッキングをお穿かし」

かおる様の叱声が飛びます。私は美しい素足をいついまでも眺めていたく、又直接手にとって押し戴き、舐めさせて欲しいものだ

「と思いましたか、かおる様は許して下さい。そうにもありません。両手で恭々しくストッキングを捧げ持つと、大切な宝物でも扱うように慎重にお穿かせするのでした。」

かおる様がお化粧をされる間中、私は傍に四つ這いになって自分の背中を台代りに奉仕する光榮を賜わるのでした。

朝の日課が終って、かおる様を送り出した私は、背広に着替えると、迎えるの車に乗り、社長としての一日を過すべく、Hマンションを後にするのでした。

会社では、何もなかった様に、かおる様は秘書として、私を迎えて呉れます。二人共、完全な二重人格なのでしょう。何のわだかまりもなく、公私の区別をつけられる二人は或は此の上ない良識の持主かもしれません。

此の様に、楽しい日々が続いた私達の上に、大きな変化が起きました。そして、それを境にして、二人の生活も又、大きく変る事となるのです。

(未完)

〔今月の新版Mフォト〕

読者M氏受難の巻

女性対象のMMモデルに応募してきた愛読者のM氏が、自分が女性から、こうして貰いたいという希望をもととして実施したプレイを側面から撮影したものです。S役女性最近頓に生長を遂げた大塚啓子嬢。豪華なホテルの一室に繰りひろげられたMプレイの写真化、特にその一部を御希望の同好者の方々に焼増いたします。

◎M組二十五態◎

MMMMMMMMMM
10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

一組一枚 三〇〇円
十組十枚 二〇〇〇円
二五組二五枚 四〇〇〇円

両股責め押え込み鼻弄り
足の踵で鼻の頭をつぶす
皮ムチを顔に浴びせられる
犬男になめさせる太股
足の指をすっぽりなめる
顔面騎乗の女御主人さま
臀臭を嗅ぎまわらせる犬
足の裏なめを強制する女
女御主人の唾液をのます
玄関でチンチンをする男

MMMMMMMMMM
25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11

玄関で足指をなめさされる
私の放屁でも糞くらえ！
足の踵を必死になめる犬男
両股の下に埋れた犬の顔
頭を蹴られた尻尾を振る犬
両股の首絞めに喘ぐ犬男
臀部を革ムチで打ちまくる
ツバの御馳走を飲ませる
足の指先で鼻を摘みあげる
鼻も口も足の裏で蓋される
足のお味はどんな具合？
この犬奴踏み潰してやろう
股に挟まれて幸福な男の顔
さあ口を開けてごらん！
両股の下にある悦楽境

連続組写真Mフォト

二人の女性の餌食

大手札印画紙焼付
三十六枚一組 六〇〇〇円
略号(ほや)

S女性……山原清子他一名
M男性……Mモデル志願者
二人の女性が一人の男性を、こ
てんこてんに虐め羞かしめ尽す有
様を順を追って刻明に写真化した
しました。縄、ローソク、浣腸器
などを小道具に用い、マゾファン
ならおもわず、ぞくぞくする場面
ばかりを編集しました。

〔代理部新版分譲品一覽〕

腸露出無念腹切腹

大手札十枚一組 八〇〇円
大塚啓子 略号(せ10)

全裸の切腹悦楽

大手札四枚一組 四〇〇円
大塚啓子 略号(ひた)

全裸の切腹悦楽

大手札四枚一組 四〇〇円
大塚啓子 略号(ひと)

マニヤの切腹

大手札三枚一組 三〇〇円
甘木春子 略号(まに)

女子斗争場面写真

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚、玉田 略号(のわ)

二女格闘場面写真

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚、玉田 略号(のか)

全裸正面切腹姿態

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚啓子 略号(のみ)

切腹に悶える裸身

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚啓子 略号(のそ)

浣腸と便意の苦悶

大手札三枚一組 三〇〇円
遠藤百合子 略号(のけ)

強烈エビ責め

大手札三枚一組 三〇〇円

玉田美佐子 略号(ねむ)

後手首の高縛り

大手札三枚一組 三〇〇円
玉田美佐子 略号(ねへ)

椅子またぎの責め

大手札三枚一組 三〇〇円
玉田美佐子 略号(ねと)

血紅切腹決定版

大手札十枚一組 一〇〇〇円
大塚啓子 略号(れは)

血紅切腹凄惨姿態

大手札十枚一組 一〇〇〇円
大塚啓子 略号(れみ)

黒いフンドンを誇る

大手札三枚一組 三〇〇円
遠藤百合子 略号(くわ)

高圧空気浣腸

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚啓子 略号(むい)

浣腸場面大写真

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚啓子 略号(むは)

施される浣腸

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚啓子 略号(むろ)

全裸脚拳姿態

大手札三枚一組 三〇〇円
長野良子 略号(てい)

全裸アゲラ縛り

大手札三枚一組 三〇〇円
長野良子 略号(てへ)

全裸屈伸縛り

大手札三枚一組 三〇〇円
長野良子 略号(てほ)

六尺褌の変形姿態

大手札三枚一組 三〇〇円
長野良子 略号(てに)

蹲踞と拍手

大手札二枚一組 二〇〇円
長野良子 略号(てり)

鬼面と接吻する

大手札二枚一組 二〇〇円
長野良子 略号(てち)

強烈エビ責め

大手札三枚一組 三〇〇円
松本アサ子 略号(まと)

裸身に羞らう

大手札三枚一組 三〇〇円
松本アサ子 略号(まつ)

女賊捕縛

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚啓子 略号(へい)

女賊処刑

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚啓子 略号(へは)

全裸緊縛姿態開陳

大手札四枚一組 四〇〇円
遠藤百合子 略号(ゆり)

鼻をいたぶる

大手札三枚一組 三〇〇円
遠藤百合子 略号(ゆは)

浣腸をする女

大手札三枚一組 三〇〇円
遠藤百合子 略号(ゆか)

バンドを脱ぐ女

大手札三枚一組 三〇〇円
遠藤百合子 略号(ゆお)

絞首刑

大手札二枚一組 三〇〇円
新宮夫人 略号(るく)

引回しと晒

大手札二枚一組 三〇〇円
新宮夫人 略号(るに)

磔(はりつけ)

大手札三枚一組 三〇〇円
新宮夫人 略号(はみ)

晒(さらし)

大手札三枚一組 三〇〇円
新宮夫人 略号(さら)

絞首刑

大手札三枚一組 三〇〇円
新宮夫人 略号(こけ)

晒台の生首

大手札三枚一組 三〇〇円
新宮夫人 略号(のく)

斬首の瞬間

大手札三枚一組 三〇〇円
新宮夫人 略号(のき)

斬首処刑場面

大手札三枚一組 三〇〇円
新宮夫人 略号(くし)

月経帯のまま縛り

大手札三枚一組 三〇〇円

遠藤百合子 略号(ゆす)

豊満を切り裂く刃

大手札三枚一組 三〇〇円

長野良子 略号(ほふ)

鎌腹を切られる女

大手札二枚一組 三〇〇円

愛川悦子、田中芳代 略号(らく)

咽喉笛を刺される女

大手札二枚一組 三〇〇円

愛川悦子、田中芳代 略号(らみ)

血紅使用 斬られる女

大手札七枚一組 七〇〇円

絹川文代 略号(らふ)

雲斎の相撲フンドシ姿

大手札三枚一組 三〇〇円

東浦ひかる 略号(ろみ)

凄んだ女賊スタイル

大手札三枚一組 三〇〇円

大塚啓子 略号(へに)

バンド、ゴム見せ

大手札五枚一組 五〇〇円

東浦ひかる 略号(へみ)

浣腸を施される女

大手札三枚一組 三〇〇円

大塚啓子 略号(ちら)

煙草責めの裸身

大手札三枚一組 三〇〇円

大塚啓子 略号(たく)

淫らな長髪の乱れ

大手札三枚一組 三〇〇円

長野良子 略号(ろも)

ふり乱す長髪の悶え

大手札三枚一組 三〇〇円

長野良子 略号(ろめ)

縄目に悶える夫人

大手札三枚一組 三〇〇円

関谷富佐子 略号(ほく)

髪を引き回される夫人

大手札三枚一組 三〇〇円

関谷富佐子 略号(ほむ)

自ら施す浣腸

大手札三枚一組 三〇〇円

大塚啓子 略号(ちぬ)

浣腸器を弄ぶ女

大手札三枚一組 三〇〇円

大塚啓子 略号(ちり)

写真の中に悶える

大手札四枚一組 四〇〇円

大塚啓子 略号(けよ)

写真に埋れた裸女

大手札四枚一組 四〇〇円

大塚啓子 略号(けお)

フンドシ姿の魅力

大手札三枚一組 三〇〇円

細川アヤ子 略号(ふの)

フンドシ姿の羞らい

大手札三枚一組 三〇〇円

栗本ミチ 略号(ふへ)

フンドシの前後左右

大手札四枚一組 四〇〇円

栗本ミチ 略号(ふな)

フンドシの変わった姿

大手札三枚一組 三〇〇円

栗本ミチ 略号(ふに)

前開き、ゴムオシメカバー

大手札十二枚一組 一〇〇〇円

大塚啓子 略号(しま)

前開き布製防水オシメカバー

大手札十二枚一組 一〇〇〇円

大塚啓子 略号(しな)

全裸の切腹悦楽(1)

大手札四枚一組 四〇〇円

大塚啓子 略号(ひた)

全裸切腹悦楽(2)

大手札四枚一組 四〇〇円

大塚啓子 略号(ひと)

乳房しばり

大手札三枚一組 三〇〇円

長野良子 略号(うは)

鼻責めと緊縛

大手札五枚一組 五〇〇円

大塚啓子 略号(うい)

木馬責三態

大手札三枚一組 三〇〇円

大塚啓子 略号(もく)

椅子責めの果て

大手札三枚一組 三〇〇円

大塚啓子 略号(いす)

哀婉血紅切腹

大手札五枚一組 五〇〇円

大塚啓子 略号(るな)

双胸の強調縛り

大手札三枚一組 三〇〇円

長野良子 略号(そう)

動感海老責地獄

大手札三枚一組 三〇〇円

大塚啓子 略号(とう)

色禪の開股縛り

大手札三枚一組 三〇〇円

長野良子 略号(いふ)

鼻責めのアップ

大手札三枚一組 三〇〇円

大塚啓子 略号(はす)

膨満正面縛り

大手札三枚一組 三〇〇円

長野良子 略号(へな)

血紅切腹絶命態

大手札三枚一組 三〇〇円

絹川文代 略号(ちの)

血紅美女の切腹

大手札三枚一組 三〇〇円

絹川文代 略号(ちた)

オムツ着用フォト

大手札七枚一組 七〇〇円

大塚啓子 略号(むね)

バンド着用開股ポーズ

大手札三枚一組 三〇〇円

東浦ひかる 略号(つん)

マニヤ全裸緊縛フォト

大手札三枚一組 三〇〇円

栗本ミチ 略号(いな)

読者通信



初夏のすがすがしいよい季節になりました。K誌をだいたい以前から愛読させていただいています。おなかのはって浣腸されたのがきっかけて浣腸のS 50 M 50の近況です。K誌に案外浣腸ファンがいるのでされる私も女性の自分がナイチンゲールの看護婦さんみたいな気持ちになってしまってお便り出してしまいました。浣腸の記事出来るだけ毎月たくさんお便りください、おねがいします。便秘で困って薬局へイチジク浣腸を買って行く途中本屋へ立寄りK誌を始めて見たときの驚きと感銘は今でも忘れられません。時々独りで浣

腸して便秘でお困りの方や、浣腸ファンの通信欄をみて私はこんな同性異性の方にナイチンゲールのような気持ちで浣腸してあげたら、どうかしらと思いついています。別にS的な気持ちなどなく同好的と看護的な気持ちのあらわれとおっしゃいますから誤解なさらないようお願いいたします。でもまだよその方に浣腸などしたことないので、一ぺんで挿入出来る自信ありませんが乳房型、唇型があるように尿管が一ぺんで入れるような肛門の見究め方法があると思いますが、実際にプレイする前に色々先輩兄弟さまからK誌を通じお教えいただきいたいと思います。私って内気で知らない人と二人でプレイなどすぐにはとても出来ません。(ほんとにはプレイしたいのですけど、いきなり未知の人とは無理ですわ) K誌が会館つくる計画去年発表してましたけど、もう出来たのでしょうか。K誌の会館でしたら信用出来ますし、浣腸のサービスも喜んでさせてもらいます。私も浣腸されてもいいと思っています。(名古屋八木大西まさ子)

前略御免下さい。色々経験してみ、人間の心の奥底には多少

ともS又Mの分子がひそんでいるのかもしれないことが、この頃になってようやく解ってまいりました。突然僕がこんな事を書く為にペンをとったのも、予想外のショックの中で、そのひとが苦痛を訴えるどころか極度の歓喜に身をうち震わせている光景を見てしまったからです。昨今の登山ブームにのり遅れまいという気持ちがあつたのでしようか、僕達の仲間で構成した素人のパーティが奥秩父の雲取連山に無謀にも出掛けたのが春浅い三月の中旬でした。楽しい登山も山の天候を無視した僕達の無理から雨に遭い、岩場でザイルを身体にしぱったまま、しばし立往生してしまいました。このときです。最後尾についていた女友達の一人が、雨でぬれた岩に安物の登山靴をすべらせた為、あつという間もなく二十米あまりも落下して生命綱のザイルに胴と足をからませたままで逆づりになってしまったのです。やっとの思いで僕が現場まで降りて苦しさにあえぐ、その女性をたぐろうとしたとき、苦痛にうめいているとばかり思っていた当人の口から「もう少し、このままにしておいて」というかすれた言葉が洩れた時には意外に感

じましたが、そのあえぎ、うめきザイルにからまっていた下腹部の圧迫を強いる様子から、ハッとしてある事を悟りました。こんなことから、この女性が強烈なMであることがわかりましたが、生れてはじめての遭遇にびっくりしたもの、この事が妙に頭にこびりついて離れません。たまたま目についたK誌から如何に多くの人々がSMに不満を抱いているかを知り僕自身あの事から、またSを強いられた為、その女性と別れた後、Sを発散する機会に恵まれないままに、ももんとして味気ない日を送っている三十男です。この手でザイルを使われないと望む女性の方、年令は問いませんから、文通又は交際して頂けないでしょうか。人間の不可思議な快感や苦痛に対する反応について話し合いたいと思います。(埼玉県熊谷市八佐藤和彦)

サーカス・マニヤの篠塚正氏へ。私のつたない「見世物放浪記」について、すばらしいとお言葉をいただき本当にありがとうございます。ごさいました。なお篠塚氏の鞭によるアイデアを利用させていただき、早速一篇を仕上げ奇ク編集部

の方に投稿させていただきましたが、すでに『耽美主義者の手記』としては、六月号現在、未発表のもの二篇ほど投稿済のあとなので、幸いにして発表ということになっても、篠塚氏のお眼にとまるのは、大分おそくなるのではないかと考えます。ともあれ、二、三カ月の本誌をお心に入れて下されば幸いです。(夜乃探郎)

○ 原由貴子様、突然お便り申上げます。貴女がお書きになって四月号の『第二のよそおい』を拝見して、大変感激しました。もしお許し願うのなら私を由見夫ちゃんと同じにプレイしていただけたらと思つてペンをとりました。まず私を自己紹介致します。東京の一流電気会社に勤める二四才の青年です。私はまだ一度もプレイされたことはありませんが、中学校を卒業したところから女性の洋下着に興味をもち、自分で買って来ては愛好していました。でもここ一年くらい家の都合で自分一人なる時間なく興味をもつていても愛好出来ず、なやんでいました。毎月愛読して当誌で貴女様の記事を読んでも、お手紙書こうか、かくまいかとまよいましたが、おもいきって

書きました。どうか心から私をかわいがって下さいませ。(東京都渋谷区八嶺岸伸三)

○ 始めて投書致します。私はやって成年を迎えたばかりの一青年です。まだ奇クを愛読し始めて日も浅いし経験すらありません。ただ夜になると女性に責められる事を夢に見る私です。できるなら夢でなく本当に女性から責められたいと切願っています。こういう私ですが、平常は明朗活発な私です。責めではムチ打ちや全身ツネリ等を望んでいます。この投書を書いている内私自身顔が少し赤くなってきたような錯覚を覚えまして。この投書は奇クの編集部の方だけしか私の名前を知らないと思ひ思ひ切つて投書した訳です。文通のみでしたら男性の方でも差しかえありません。未熟者ですが弟と思ひ指導して下さい。申し遅れましたが私は、身長一七一センチ、ウェイト五十六キロ総合的には十人並です。真面目で秘密厳守できる方からの御手紙御待ちしています。(北九州市小倉区八松下紳)

○ 編集室の皆様方いつも御苦勞さ

んです。色々御苦心の程御察し致します。当誌を読み始めて二、三年毎月楽しく過ごさせて戴き厚く御礼申し上げます。さて新潟県の春もたけなわを過ぎ初夏の候に成りました。始めて読者通信を書いて御仲間入りさせて戴きます。新潟県、秋田、山形、仙台、福島の皆様当誌を御読みの方、東京や関西の方々の様に秘密ばかり守らずに友達一同集まるうではありませんか。当誌は三条市だけでも五冊位いつつ店にある模様で一冊づつ出して居る店、又重ねて出して居る店、少し遅く行くと売切れです。タイミング悪く二、三年間の内一冊だけ買いそびれてしまいました。が多くの方アンが一時を争つて買うのです。FK誌を入れたら人数はわかりませんが多くの人が楽ししく又、淋しく(友あり、友無し)で暮して居るのです。本屋さんも秘密にして誰が買って行くか教えては呉れません。又当地は買う事すら未だに人目をさけたりする時が有る位で電話で来ましたがと問合せ、其の本一冊目あてです。からすぐ帰って来ます。又、此の読者通信だとして連絡をとろうと思つても本誌にのれば良し、のらなければそれも連絡は何カ月も取れません。唯新潟の誰としか書いてないのですから。短い人生を大いに、楽しく暮そうでは有りませんか。同好の男性、女性諸君、そうして集まったならそれぞれ性向もわかりプレイも会合日、会合場所もわかるのではないのでしょうか。秘密は持ち前の性向なればあから様にうちあけられぬこのなやみを取りのぞこうでは有りませんか。遠い方の筆友も良いけれど顔を合せられる友も又、格別かと思われまます。どうぞ若い人、年を召された人、一同に集まるうでは有りませんか。よろしく御願ひ致します(新潟県三条市八岩崎寿雄)

○ 貴誌六月号拝見、予て青木順子ショーの上演劇場を予め貴誌にて知らして頂く様お願い致しておきました。六月号の辻村さんのサロン楽我記で順子さんが病気になるたこと、のっていました。が、一日も早く快復されることを祈ります。重ねてお願いしたいのは貴誌各号に映画特に演劇ストーリー等で美女の縛られシーンのあるものを、貴誌を見てから見にいて間に合うよう載せて下されば有難いです。映画の方は三番館その他で上映するので後でも見られ

四馬孝画 秘蔵版 責め画集 分譲

△責められる美女波津子の痴態▽

大判判五枚紙焼付 五枚一組 一〇〇〇円 略号(しお)

白く輝く肌にとす黒い縄。

- 一、恐怖の浣腸責め展開す
- 二、柱抱きアグラ縛りの責め
- 三、庭に於けるハダカ責めシーン
- 四、裸の美女荒縄の股間縛り
- 五、チェン・ブロックの吊り

△可憐な美少女加奈子の羞恥責め▽

大判判五枚紙焼付 五枚一組 一〇〇〇円 略号(しる)

捕われの美女加奈子の運命

- 一、ローソクの火責めにあう
- 二、ヨチヨチ歩き的美少女
- 三、逆エビ縛りの柱宙吊り
- 四、股間縛りで被虐の絶叫
- 五、鑑賞に供される緊縛美体

『花と蛇』画集

大判判五枚一組 一〇〇〇円 略号(えに)

- 一、京子に芸を仕込む鬼源
- 二、静子令夫人への汚辱
- 三、擦り責めにあう美津子
- 四、片足挙げ縛りの桂子
- 五、粗相を強要される京子

浣腸と排泄画集

大判判五枚一組 一〇〇〇円 略号(えい)

- 一、恐怖の浣腸台の美女
- 二、浣腸のあとの楽しみ
- 三、百CCのプリセリン浣腸
- 四、塩水をヤカンで飲ます
- 五、排便を耐えぬく美女

女体吊責め特集

大判判五枚一組 一〇〇〇円 略号(えほ)

- 一、弓吊りローソク責め
- 二、エビ縛りの宙吊り
- 三、股間縛りの責め
- 四、美女の舌の先縛り
- 五、股間縛り鼻孔吊り

美貌汚辱と鼻責

大判判五枚一組 一〇〇〇円 略号(えは)

- 一、美しい女の鼻をなぶる
- 二、一本一本女の鼻毛をぬく
- 三、美女の口中をほじくる
- 四、泥絵具にまみれた顔
- 五、ラーメンを食べさせる

ますから、映画の題名、簡単なストーリーの内容など貴誌で御紹介下さい。(在東京の愛読者AT・S生)

○
六月号、予定より一日早く、今日二十四日入手し早速夜を徹して読了しました。これでまた来月二十五日まで待ち遠しい一日一日が読めのかと思うと『週刊奇ク本日発売』こんな広告がテレビのコマーシャルに出るような御時勢にならないものかと、つい妄想を逞ましゅうする次第。相変らずグラビヤなしで物足らぬ思い、わずかに『花と蛇』『革の盛装』の挿絵に、かつての黄金時代を偲ぶのみ。そこでひとつ提案、というより希望ですが、例の花と蛇特集号にならって、続々〇〇特集号、××特集号を出して四馬氏の傑作責め絵図をタンノウさせてはいただけませんか。美歌夫人特集号、革の盛装特集号、続花と蛇特集号、エトセテラ、エトセテラ。雑誌形式よりはむしろ秘蔵豪華単行本として上質紙使用、極彩色挿絵多数、定価五千円乃至一万円の限定通信販売版。とてもかなわぬ夢かないな。いやいや期待してますよ。さて現実にもどって、美歌夫人も

よいが、御神酒の趣味はあまりなし、革の盛装も面白いが、美女の生命ともいうべき緑の黒髪パッサリ切つてのツルツル責めは、こりやいたただけぬ。責めは責めでも羞恥責め、美をそこなうのは、よくないですな。そこで本命の花と蛇だが、最近ちよつと肝心カナメのところの迫力に欠けるうらみがあるが、やはり真先に読むのは、この一篇。今月号では、いよいよ我等が愛すべきヒロイン小夜子嬢の大活躍で血湧き肉躍る場面。静子夫人と桂子、京子と美津子の組合……ぞくぞくするね。そこでこんどは小夜子に文男のカップルとくれば近頃はやりの近親相姦!グツトいかすね。シゲキだね。どうも最近の花と蛇は悪書指定をおそれるのあまり、ヤマ場にくるとどうも描写が生ぬるく、というよりたぐみにヤマ場をカットする傾向があつて、そのところなんともはがゆく、豊富な想像力を駆って行間に省略された目もくらむばかりケンランたる場面を補って読まねばならぬことを余儀なくされている状態ですが、そこで性こりもなく注文を二つ三つ。宣誓書の署名押印、添毛(新造語ですか)済むと休む間もなく、早速いたく執

心の田代社長のたつての要請により美女放水のアンコール上演とはなつて、よく冷えたビールは、こじあけられた美女の唇から、どくどく胃の腑へ。やがてけがれを知らぬ処女のおながが臨月（ちよつとオーバーかな）の女のようにふくれあがつて青い静脈が可愛いオヘソのあたりに浮き上ってくる哀れ小夜子は再びオウマの背なに……といったぐあいである。（花と蛇ファン）

○
今迄に多くの分譲写真をお送りいただき楽しんでおりましたがその中で素晴らしい刺青とあどけない顔で小生をとらえたのは山原清子嬢です。今回六月号にて彼女の後援会を結成するという記事を見し、小生の大好きな山原清子嬢のことですから、まさきに入会そのお仲間に入れて頂くよう、ここに申込みを致しますから、よろしくお願い致します。（福井県八

大野正）
○
東浦さま。貴女の御便りを6月号で拝見いたしました。私は、2年程前に友達から見せてもらったのが初めて、それ以来病みつきになつてしまい、今では本箱の中で

古本屋が買ったのも入れて約30冊がならべてあります。特に私は、「浣腸責め」と「乳房責め」に興味があり奇巧で分譲されている浣腸に関するフオトは殆んど持っておりませんが、中でも貴女のフオト（特に「かみ」「かむ」）は本当に最高です。いつも貴女のような人とプレイができたらと夢見つてパートナーのいないまま一人で慰めて参りました。そして、今度の御便りを拝見し勇気をふるいおこして貴女に御便りをさし上げたような次第です。では、ここで私の事について少し紹介しましょう。私は19年3月生れで現在21才の英国系外人商社に務るサラリーマンです。私の方が貴女より年下（だと思ひます）なので、貴女が私をきらわれるかも知れませんが、決してそのことのないようお願いいたします。もし、私のお願いを叶えて下さったら、きっと素晴らしいプレイをして上げられることでしょう。では、乱文乱筆にて失礼します。（西宮市八河野生）

○
羽村京子様、貴女は最近、羽村京子という懐かしいお名前から、羽鳥水江という新しいお名前に、お変えになられたとのことですが

大変残念なことと思います。羽村様、貴女は私達浣腸マニアの大先輩です。本誌が浣腸ものを扱われるようになったのも、貴女の御努力の御成果だと聞いております。貴女が従来のイメージから脱却されるために、新しいお名前を名のられるのは、いたしかたないとしても、懐かしいお名前が、本誌上から消え去るのは、本当に寂しいことと思います。そこで貴女にお願いがあります。新しい羽鳥水江と従来の羽村京子との二刀流で行って欲しいのです。私が本誌を知った時は既に天星社時代で、貴女が花々しい御活躍をなされた曙書房時代の本は一冊しか読んでいませんが、それだけで私は貴女に終生忘れることの出来ない深い感激を覚えたのです。是非、本誌上から羽村京子というお名前を消さないようお願い致します。以上が羽村様へのお願いです。そして以下は、同好の女性へのお願いです。浣腸という行為は下半身に対してなされるもので、未婚男女間のプレイは、どうかと思われまふ。結婚前は、やはり文通が限度ではないでしょうか。そして実際の浣腸プレイは、夫婦間でなされるのが妥当だと思われまふ。そ

○
ここで結婚の御意思ある同好の女性と巡り合うことが現在の私の最大の願いです。（東京都千代田区八吉田和雄）

○
辻村隆先生へ、一筆啓上失礼の段、平に御容赦を願う。六月号S Mカメラハント、志村善子の巻、大変面白く、いや驚異津々、興味津々一気に拝読、いつもながらの美文名文——しなやかな女獣、われ等同好者の求めるものは、このような女獣ではなからうか、写真A腰部、腿部の美しさ、たまらなく興をそそる。写真Bこれは女体の緊縛だけで女体の美しさは、何処にも表われていないように小生は感じる。隆先生の意見如何。写真C D全裸にて緊縛彼女の柔軟性を見る。豊満な女体、そして柔軟不思議な女体でたまらなく興をそそる。両乳房も十分なもので、山原清子嬢にもおとらない立派なものです。先生の文書の中に（期待に背かぬ豊かな、豊満そのものの白い女体がそこに現出した。ヒップの肉付きはさることながら、その裸に、私は彼女の腹部のたるみが些か気になった）とあるが、写真Cではそれなりの美しさが出てくる。妊婦の美もあるごとく、美

しいものであると思います。プレイには健康がつきものである。健康でなければ、如何なるプレイも出来ない。志村善子嬢の健康美を祝うとともに、辻村隆先生にお願いしたい、それは小生と志村さんのSMプレイです。前文驚異津々と書いたのは、神戸市内に志村さんが在住の意味が多分に含まれているのです。読者通信によると、尼崎の松岡氏も同好のよし、先生の善所を願います。プレイは所詮プレイ、後悔のないように、との言葉にそって、何か二人ならば良いように思います。さて、先生にもう一つお願いがあります。カメラハント、志村善子嬢のアクロバット肢態の分譲です。出来れば面談忙がしい先生のことです。何等かの方法で分譲願います。二伸。初めて便りいたします。奇クは十年来愛読しています。尼崎の松岡君西宮の小野君、森本君、同好の諸君に呼びかけたい。一堂に会して会談をしようではないか。兵庫県には、志村、杉田、刑部、の女傑がおられる。大阪には、ベテラン東浦女傑あり。(兵庫県三木市八SY生V)

私は数年来の愛読者ですが、今

迄、住所の関係で意志発表が出来なかったのですが、今度、思い切って浣腸マニアの方々の仲間入りさせて頂きます。三三才の男性です。どうぞよろしく。奇クの御発展、心よりお慶び申し上げますが、尚浣腸記事中でもアヌスプレイの記事が少ないのは誠に残念です。私も最初奇クを手にした時は、全く驚きました。こんなに自分の仲間が大勢居るのかと思うと、何だか今迄の苦悩が、喜びに変わる思いでした。それにつけても、是非同好の方々と語り合い、出来ればプレイしたいと思います。それから浣腸マニアの人達は、一体何人中何パーセントくらい居るのでしょうか。私は女性の中には相当アヌスの好きな方が居るのではないかと、思っているのですが、是非奇クで、全読者の無記名アンケートでもとって、統計を作って頂きたいと思っています。それによって、もっと自信を持てるようになるのではないかと思います。終りに東京の吉田和雄様、同好の方と結婚を御希望のこと、大変よいことだと思えます。夫婦の間でも、こればかりは中々うまくいかないことは今迄の奇クを見ればわかること、是非良縁が得られるようお祈りし

ます。では全国の同好の女性の方思い切ってお便りして下さい。川崎の中村優子様も是非文通して下さい。(東京都中央区八中川明治V)

○ 京都市の藤島万寿子様、貴女にお呼びかけ致します。五月号の貴女のお便り嬉しく拝見致しました。が、残念ながら購入したのは十日の日で二日遅くお逢いする機会がありませんでした。私は現在二十五才で二年前結婚した二十三才の妻と二人暮らしです。私達は愛し合っています。妻はSMプレイだけは仲々ゆるしてくれませんが、前々から貴女のような方を求めています。私はついこの間までもう二度とこの読者通信欄に投稿するのを止めようと思っていました。それは岐阜市の青木恵子様の呼びかけに、九日と十一日の二日寒い中を朝早くから岐阜まで出かけましたが二度ともお逢い出来ず青木様の誠意を疑ったからです。でも藤島様のお便りを拝見していると貴女ならきっと誠意ある方とお見受け致します。貴女が私の責めに対してどれだけ耐えられるでしょうか楽しみにしています。なお岐阜市の青木様、もし

誠意ある方でしたら、この誌上にてお目にかかりたいと思います。(京都八真V)

○ 貴社の奇クは以前よりずっと愛読させて戴いております。投稿は始めてですが、私も女性下着ファンからメンスバンドやゴムオムツカバーのマニヤになり、現在では、どうしても生活の一部から切りはなせなくなりました。私は私なりにいろいろ悩みましたが、奇ク誌上に多くのファンのあることを知り、本当に心強く思っています。神戸の大西さん。貴女の御意見には全く同感です。ゴムの感触と臭いにわれわれファンには全くこたえられませんからね。大西さんの通信によれば、神戸そごうでは、カバーは品切れの由残念です。ね。私も現在使用中のはボロボロになって新しく欲しいのですが、入手困難にて、マニヤの方々が余分の分けてもよい品がありましたら、ゴムの製品に限り、カバー、バンド等を送って下さい。普通便で。(洗濯済みならば、使用したもので可)荷造は厳重に願います。御住所が分りますれば、お互いに秘密は守り文通致したいと考えますので、ゴムファン及びバン

ドマニヤの皆様、よろしくお願い申し上げます。(高知八カバー・バンド生▽)

○
貴社の御発展を心からよろこび多くの試練の中を毎月奇クを発行されますこと、われわれマニヤにとって感激の至りです。先日Mフ

☆浣腸関連資料の部☆

只今浣腸実施中

大手札三枚一組 三〇〇円
東浦ひかる 略号(かみ)

強制 空気浣腸

大手札三枚一組 三〇〇円
東浦ひかる 略号(かく)

百CCのポンプ浣腸

大手札三枚一組 三〇〇円
東浦ひかる 略号(かな)

浣腸 責の極致

大手札三枚一組 三〇〇円
東浦ひかる 略号(かむ)

女体浣腸シリーズ

大手札十二枚一組 一〇〇〇円
梨花悠紀子 略号(れち)

強制女体浣腸三態

大手札三枚一組 三〇〇円
絹川 文代 略号(きか)

イルリガートル浣腸

大手札十二枚一組 一〇〇〇円
梨花悠紀子 略号(いるり)

太い浣腸器で浣腸

大手札三枚一組 三〇〇円
東浦ひかる 略号(かふ)

自分で浣腸をする女

大手札三枚一組 三〇〇円
遠藤百合子 略号(ゆか)

浣腸 器と女

大手札三枚一組 三〇〇円
絹川 文代 略号(ほの)

エネマ・シリーズ

大手札四枚一組 四〇〇円
大塚 啓子 略号(るい)

イルリの嘴管挿入

大手札五枚一組 五〇〇円
大塚 啓子 略号(るは)

女体浣腸ブレイ

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号(ほは)

進ばしる浣腸液

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号(ほい)

浣腸後の排便

大手札五枚一組 五〇〇円
大塚 啓子 略号(へき)

便意に苦悶する女体

大手札五枚一組 五〇〇円
大塚 啓子 略号(へか)

オト「ふお」を注文し、七日お問合わせを出したのと入れちがいに本日(十一日)到着致しました。どうもありがとうございました。一枚一枚、何度もながめています。が、その中の四枚が特にすばらしいと思います。顔の上にとっしりとお尻をのせられた男は、目も鼻

も口も完全にお尻の下にしかれて重みをかけられどんなに苦しいでしょう。今にも息がつまりそうです。窒息寸前という時に特別のあわれみをもってお尻が少し浮かされます。たくましい重圧からやっとな解放された男はぐっと一息入れます。ああその時いやでも嗅がされる強烈な女性のお尻の臭い。パンティ一枚を通して嗅がされる男はどんなにくさい思いをするでしょう。一枚一枚が実感をもって迫ってきます。これらのフォトにさらに欲をいわせて頂けるなら、女性のまたがり方が逆になっていること、そしてモデル女性がもう少し肥満したお尻だったら、もっともっとすごいものがあると思えます。それについて思い出されるのは大部以前ですが、ナオミ画伯の手になるM画の中、椅子の上に仰向けにのせた男の顔の上に若く美しい女性が巨大なお尻をどっしり目と重みを加え思いきりくさい目にあわせているのがありました。が、何度とり出してみても実にすばらしい出来と思います。女性の巨大なるお尻の下に顔をしかれ、たくましい重みのために鼻もつぶされるような苦痛を受け気も遠くなるほどくさい臭いがかがされる

ことこそ小生にとって快楽の極致であります。女性の偉大なるお尻の下敷にされペシャンコにおしへしゃがれ、存分にその臭気をかがされている座ぶとんや椅子を本当にうらやましく思います。少々脱線致しましたが、編集部の御努力に対し、改めて敬意を表すると共に、今後ともすばらしいMフォトM記事をおねがい致します。(東京八S・T生▽)

○
大田恵子さんへ。六月号でのお呼びかけ拝見。貴女のネクタール処理器になることが運命づけられていたように、貴女に魅いられてひきづり込まれるようにペンを取りました。四十才には未だ手が届きませんが、某音大声学科および楽理科を卒業し、現在都内某大学関西某大学の講師を勤め、六人の内弟子をビシビシ仕込んでおります。なおブレイのお礼に友人の皮膚科医と著名美容師より教えられた美容術をして差し上げたい。また、川崎の中村優子さんへ、資料器具等がありますから、差し上げたいと存じます。(川崎市八清田真▽)

○
話題となっている小森プロの、

「日本拷問刑罰史」なるものを遅ればせながら先日見た。原著は一読していたが、劇的構成をなし映像化するのにはいささか無謀といえよう。映画として評するならば、くだらぬものである。オムニバス式になって戦国から幕末までの、拷問、刑罰を見せているが、今日の若い人にはピンとこないのか、凄惨、眼をそむけるような、苦悶、絶叫の迫真力もゲラゲラ笑って見ているのである。また、出演俳優なるものも、カメラフェースの悪いデク人形然としたものばかりで、およそおそまつそのものである。反乱の将の串差しのカットでも、その将になる俳優の顔たるや、だれしも笑ってしまう。女またしかりで、吊り下げられる娘は、アクロバットの芸人らしいが、すべてが画になっていない。完全なものとは思っていなかったが、これほどひどい映画とは、あされる次第である。作者も、出演者も、SM的趣味のある、つまり道楽に作ったものなら、また別であるが。呵々。(東京都八映画狂人V)

○ 神戸の刑部典子さんへ、一筆啓上。碧王裸身緊縛を購入、興味を

もって、拝見しました。三葉の内最も良いと思われるのは、猿轡の緊縛のものです。次は正面緊縛、そして側面緊縛、という順序になる。先ず最良の出来と思われる、一葉について、一筆啓上というところになると、身体全体からうけるポリウム、ヒップの肥大。豊麗な乳房。柔らかな腕の太さ。(緊縛の美しさは、これも一つの要素)何等非のうち所はない。(小生も一度SMプレイを試してみたい。どうぞよろしく)一番悪いことは全裸でないことだ。(神戸志村善子さんは進んで、全裸緊縛をした)身体は少しかたいような感じがする。全裸ということは、羞恥心だけでなく、美しさ、ということが多分に含まれている。ある有名な外人舞踊家は、踊る時には絶えず全裸になり、美の極致を出していたという。写真になる以上は、美という要素も多分に含まれて、そして緊縛美、(美しき縛しめの刺青女体の柱縛り責め、山原清子)が必要となって来る。又エクスタシー(法悦、忘我)もあらわしたい、正面緊縛がエビ責であれば、このエクスタシーはもっとよくなる。(一度エビ責にしたい、典子さんも)長々と前へ足を出すのも

「今月の新版分譲品」

浣腸される清子

大手札印画紙焼付

三枚一組 五〇〇円
山原清子 略号(かろ)

蒲団の上に足を投げだして長々と寝そべった清子さんの可愛いアヌスに浣腸器の嘴管は迫ってゆく。初めて試みられた清子浣腸実施の有様をごらん下さい。

浣腸に興ずる女

大手札印画紙焼付

八枚一組 一〇〇〇円
山原清子 略号(かへ)

イルリガートル、エネマシリンジ、五十ccガラス製浣腸器というものをに使用して自らの手で浣腸を施している清子嬢の艶なる姿はまことに刺激的である。

浣腸に悶える

大手札印画紙焼付

七枚一組 一〇〇〇円
山原清子 略号(かに)

SMに対して大きな理解をもって没入している山原清子は、こと浣腸に関しても異常なまでの関心を抱いていることがわかった。もろもろの浣腸器に困れて、その陶酔の中にある表情をみて下さい。

乳房責め五態

大手札印画紙焼付

五枚一組 六〇〇円

山原清子 略号(てら)

刺青にはかり気がとられていたが、彼女のもう一つの大きな特徴はオッパイ小僧ばりの巨大な乳房である。内容の充実した重量感のある乳房が、縄によってどのよう

禪美に羞じらう

大手札印画紙焼付

六枚一組 八〇〇円
玉田美佐子 略号(こん)

人一倍羞かしがり屋の玉田美佐子が全裸にされて、白晒の六尺フンドシをさせられたときは大変だった。大騒ぎをして恥らいながらポーズをとったが、さて、この魅力的な写真をマニヤへどうぞ。

啓子をいじめる清子

大手札印画紙焼付

八枚一組 一〇〇〇円
山原清子と大塚啓子 略号(うの)

大塚啓子が殊の外は気に入った山原清子が自分のSMプレイの相手に選んで縛り上げ、情容赦なく転がし蹴上げ、さんざんに弄ぶ様子は、二人とも若々しい美女だけに言うに言われぬエロチシズムがムンムンするSMの臭気を混えて画面いっぱいに展開します。

啓子を縛しめる清子

大手札印画紙焼付

八枚一組 一〇〇〇円

あまり良形ではない、もう少し工夫をしたい。緊縛にいたっては、顔の表情は零、ないほうがよい。長々とつまらぬことを書いてしまった。失礼の段、平に御容赦を願う。(兵庫県A・S・Y生V)

立川市、大田恵子様。六月号で貴女様のお便りを拝見致しました。私は三年ほど前から奇クを愛読している二十四才の男子です。貴方様は若い男の奴隷には興味がないとありましたが、立川にお住いとのことですので地理的に非常に近いのでペンを取りました。貴方様のドレイにしていただきたいと思ひます。プレイの経験がありませんが、貴方様の思ひのままに飼育していただきたく、お呼びかけください。またSMに興味をお持ちの女性、男性の方手紙ください。写真同封でおねがいします。(調布市八竹内計雄V)

立川市の太田恵子女王様。KK誌六月号の女王様のお便りを拝見して、私が奴隷として忠節を尽すべき理想の君主たる女王様の存在を知り、喜びに胸を高鳴らせつつこの御返事を差し上げます。私は四十三才、身長一六二釐、体重六

五匁の奴隷志願者でございます。御返事を差し上げる場合は連絡の場所等とともに、身分を明らかにせよとの御命令でございましたが身分書を誌上発表の勇気がなく、幸いにして御召し出しを受けました場合は、その節に身分証明書を持参致しますので、誠に勝手ながら何卒お許し下さい。最初から御命令に逆くようでは、私の忠誠心にお疑いを受けるやとも存じますが、決して忠誠心を欠くものではないことをお誓い致します。もとより最初の御命令に逆いておりますので、御召し出しをいただきました場合はいかようなお仕置きにも甘んずる覚悟でございます。恵子女王様の格別の御慈悲によりまして、この熱烈な奴隷志願者を御引見の上、尊い女王様の奴隷としての資格があるかないかを御検査下さいませよう、伏して懇願致します。私は未だ一度も奴隷として奉仕の経験がありませんが、誠心誠意をもってお仕えすれば恵子女王様のお氣に召しますことを確信致しております。恵子女王様のおん腰掛けとなり、あるいは和洋お好みの型の便器となり、時には女王様のお退屈を慰める玩具としての各種の責苦に堪え、また女王様

山原清子と大塚啓子……

略号(うな)

同性愛的な親密な境地に達した二人が火花の出るような緊迫した熱烈な緊縛プレイを演じます。これは清子が啓子を縛り上げて身動きできない彼女を熱く抱擁するに至るまでの縛り過程と両女の交歓風景を連続キャッチしました。

山原を責める大塚

大手札印画紙焼付

八枚一組 一〇〇〇円

大塚啓子と山原清子……

厳しく縛りあげた山原清子に対して、乳房責、擦り責め、逆エビ責め、首絞め、といろいろの女体責めを敢行するベテランの大塚啓子。女から責められた清子が歓喜の叫声を挙げて身をくねらせば益々かきかかって責めたてる啓子の巧妙な手さばき……

逆さ吊り正面背面

大手札印画紙焼付

二枚一組 五〇〇円

増田みゆき 略号(つる)

両足をはききれんばかりに大字に開いて逆さ吊りにされた新妻増田みゆきのあからさまなポーズを前と後から写しました。

夫婦連縛鼻責

大手札印画紙焼付

十枚一組 一二〇〇円

増田みゆき夫妻 略号(らか)

辻村隆氏が増田みゆき夫妻を連縛して責めるという珍しいフットです。これは七月号のカメラ・ハントで詳しく述べてありますのでごらん下さい。

夫を責める新妻

大手札印画紙焼付

十枚一組 一二〇〇円

増田喜代司 略号(はや)

これはMの夫を責める新妻の生態です。みゆきがS役を努め、夫婦のいたわりを心に秘めながら、反面夫相手のこと故遠慮気兼ねなく存分に腕を揮っています。喜代司の鼻孔にはめられた牛の鼻輪など奇妙な文献といえるでしょう。

牛男をのりこなす

大手札印画紙焼付

十枚一組 一二〇〇円

増田喜代司 略号(はま)

鼻輪をつけた牛男、夫の喜乗りになり、足で顔を蹴られ、足を舐めさせられ、顔にまたがられ、などして、さんざんに弄ばれ、夫婦のSMプレイの生々しい鮮鋭なイメージが、カメラ・ハントと描写されています。カメラ・ハント御参照の上、この幸福な夫婦の間に召したら、どうか一度ごらんになって下さい。

の御寝みの折には首輪をつけて鎖に繋れた忠実な番犬となり、あるいは、女王様の忠実な雑役夫として奉仕を御許し願えればと思ひます。私は女王様の如何なる御命令にも忠実に心から服従できると確信しておりますが、忠実な奴隷として、女王様の御信任を得ますことは望んで直ちに叶えられるとは考えておりません。先ず資格検査を受けて、これに合格して初めて奉仕を許されるものと存じます。しかも奉仕の最初には先ず命令違反の罪をつぐなわねばならず、次ぎの腰掛、便器等の奉仕も御信頼を得ますまでは奴隷の手足を縛り、自由を奪い、あるいは目隠し等をしてお仕え致すことになるかと存じております。御奉仕にあたり、もし些細なことでも、女王様の御気に召さぬ場合は、縛り、吊り、鞭、針、ローソク、浣腸等あらゆる御仕置きを覚悟致しております、また幸いにして私の奉仕が女王様の御気に召した場合に女王様の尊い御神酒を賜るとか、あるいは女王様のおみ足先等で、食物等をお恵み下されば奴隷の忠誠心は益々強くなるものと存じます。奴隷の分際で女王様に希望を申し上げるなど、もってのほかとお怒

りかも知れませんが、女王様に御注文申し上げる等の気持は毛頭なく、唯々女王様の御意のままでございます。奴隷奉仕の資格検査のため何卒御引見下されますよう鶴首致しております。(東京都新宿区八吉本満)

○ 山西一郎さんへ。拙稿「パンテイマニヤの方々に」をお読み下さって有難う。私には、貴君の今の切ないお気持が充分に理解できます。ただこの道ばかりは「生れつき気が弱く」「理解ある女性に巡り合うとは限りません」「私の様な男性では相手が嫌がると思います」などと、そんな呑気な情ないことでは駄目なのです。男は飽く迄も男らしくなければいけません。求める者には与えられるのです。(タナボタとは違いますよ、念のため)誰でも充分な装備さえあれば何時かは山頂にたどり着ける道理で、万事積極的に行くべきです。それには先ず生活力をつける事です。とに角経済力を養わなければ、こちらのいっていることも地に着きません。何よりも女房一匹この身で養うのだ、最高の文化生活をさせてやるのだ位の心意気がなければいけません。頼もし

くない男性なんて、絶対女性にモテる筈がないのですからね。空虚な夢みたいなことばかり云っている、何時まで経ってもラチはあきません。そう云っては失礼だが女性なんて順応性の強いもので、一旦そう仕付けてしまえば八分通りわが物です。ある程度の時間をかけてゆっくり導くことです。私だって、初めから妻がS的であると看破した訳では決してありません。だから今も引続き教育中なのです。奇巧を最良のテキストとして。ただ今の場合変なお説教をするよりも先ず、現実に妻の汚れたパンティを何枚かお送り致します。少しくでもお役に立てば幸いです。貴君の御多幸を心から祈り上げます。(東京都巣鴨八市川高夫)

○ 愛読者および編集部の皆様今日は。私は身長一七〇、体重六〇キロ、二年前九州の炭坑町より西宮へ参りました三十三才のおせじにも紳士とは言えないS男性です。現在芦屋市六甲山奥池で働いています。私は一度だけでも良いから自分の手で女性を責めて見たいと思っています。私の夢は後手高手小手、海老貴、ムチ打、六甲山の

立木を利用しての吊り責、全裸股間縛り等緊縛されうめき声も出せず柔肌に喰い込む目、歪んだ乳房。真白な柔肌にむらがる色々な虫、登山者に見られはせぬかと苦痛と羞恥に歪んだ顔、朝起きて夜寝るまで女性の緊縛を空想し毎日気の狂うような日を送っています。芦屋の志村さん、名古屋の橘あき子さんのようなM女性で私の相手になって下さる女性はいませんか。私は何分六甲山の山男ですので礼儀はしりません。プレイをして下さらなくともせめて話相手になりとなって頂きたいと思っています。M女性からのお便り首を長くして待っています。(西宮市八小野清)

○ 毛利園子さん。貴女がどこに住んでいる方が知りませんが、私の切々な願いをかなえてください。モデルを志願した貴女。私のモデルになっていただけないでしょうか。分譲品が望みなら編集部にはネガを送ればよいと思います。私はカメラを手にとることがなによりも好きなのです。今まで全日本写真連盟会員ゼンザブロニカ友の会会員キャノンクラブ会員として女性ポートのみで雑誌の月例、キ

春川ナミオ画 女体下敷力作M画決定版
分譲用秘蔵版

大判判印画紙鮮明焼付 七枚一組 三〇〇〇円 略号(ぬけ)

益々凄くなってきた春川ナミオの傑作M画

M派マニヤなら、先ずこの一組を！

- 一、女の股間で圧死する
- 二、行水の美女の尻敷き
- 三、見事な美女の臀部
- 四、人間ハンモックの男
- 五、人間椅子尻に喘ぐ
- 六、逆エビの背に蠟燭責
- 七、臀部に埋れた法悦境

深め、フェアプレーイに行いました。唯私は、型だけのおさなり

ん。(大阪市八井田通)

な縛りはいささかも興味はありません。完全な縛りを行います。また、ムチの類や女性の身体を少しでも傷つけるような、肉体的苦痛を伴う行為はあまり好みません。操りや、羞恥責等によりこらえ切れぬというような精神的プレイを行います。その他具体的なことは御逢いできた時に致しましょう。貴女は、はるばる名古屋から大阪へ出て来ても良いという、本当に感激の一話です。おたがい秘密厳守しましょう。そして充実した一日を過したいと思えます。では貴女との対面を期待し、奇巧の今後の発展を心より願ってやみませ

東雪枝様。大変御無沙汰致しました。お忘れでしょうか、一月に池袋にてお会い頂きました高木です。ブリッジ改装により連絡が出来なくなりましたので、本欄を借りてお便り致します。一別以来、貴女からの連絡をお待ちしておりました。音沙汰なくうたた断腸の思いでした。しかしどうしても貴女のことをあきらめられず、日ごと夜ごと思わぬ日とてありませ

めきに酔いしれたい気持ちで一杯です。小生に対して不信の念をいだかれておられるのかも知れませんが、天地神明に誓って、貴女の忠実なる下僕として、如何なる要求にも誠心誠意お仕え致します。機会をお与え下さいますようお願い申し上げます。(東京都中央区八高木)

和歌山の紀村浣良生様、K誌読者通信での御言葉ありがとうございます。私は当年三十八才で一米六〇〇で僅か五〇〇の男です。もちろん妻子もあり家庭も平和で一般的な生活を致しています。唯子供の時代からの愛好趣味たる浣腸と言うこと

りすることができたら、金銭で買えない尊い秘密になり一生の想い出になることでしょう。長い間迷い続けましたが決心して山原清子さんの座談会へ出席させて頂くよう申込みを致しました。モデルさんのお話を聞いたらこれまた自分にとっても最高に感激することになると思います。貴男様は如何ですか、今の自分はその日の来るのを胸に秘め誰にも言えない心の慰さめを待ちこがれています。この通信がK誌に出た日はその会も済んでますから、貴男が参加されていたら笑われることでしょうね。(兵庫県八高砂浣好生)

いよいよ梅雨も近付き、うっとうしい天気が続いています。皆様お元気に御活躍のことお喜び申し上げます。私はかねがね貴誌を愛読しているファンの一人です。困難な状況にもかかわらず貴重な文献としての編集に努力して居られる皆様に心から感謝致している次第です。ここで一つ私の希望を書き述べてみたいと思います。一口に云って和装派と云いましょうか女性の着物姿に特に美しさを感じる者の一人で、美しい着物姿の若い女性を後手、高手小手に縛り

上げることに最も興味を感じます。女性としてはいわゆる若くて美しいことはもちろん必要ですが、さらにやさしくて女らしいところが特に必要条件です。少くともMがかった女性には、全く興味がありません。この分に関する限り私の女性趣味は全く正常といわねばなりません。ところが一方、これを裏返してみた場合、このような美しくて、やさしく純情な娘をその美しい振袖姿のまま荒縄で後手に高手小手に荒々しく縛り上げた上、猿轡をはめ、一切の自由をうばい去ってしまう光景に最高の美しさを感じるのです。従って奇くでは、例えば「振袖と後手への偏執」とか「雪姫物語」とかについては本当に嬉しく胸とどろかせてむさぼり読みました。また、今までに集めた奇クグラビヤおよび貴社資料で着物姿の縛り絵や、写真は全部蒐集し残しています。時代物ではやはり高貴なお姫様の縛りが最高、次いで良家の令嬢、武家娘、小町娘や城内の奥御殿御女中、等いずれも振袖で後手高手小手、がんにがらめに縛り上げてほしいものです。拷問はあまり好みませんが吊り責め、逆えび責め程度のことはいよいと思えます。但し、い

ずれも着物を着たまま、しかも後手に縛り上げられていることが必要ですが、あまりすが乱れたり胸がはだけているものは頂けません。一方現代物ではやはり訪問着の振り袖姿の高貴な姫君や令嬢を縛り上げることが第一ですが、その外にセーラー服姿の女学生、赤又は白の着物羽織を着たお嬢さん、赤又は白の着物（それが訪問着ならなおよい）の上からカッポ―を着着たお嬢さん、ワンピース、ジャンパースカートを着た美しいピチピチとしたお嬢さん等着衣の上から荒縄で思い切り強く縛り上げてほしいものです。特にセーラー服の女学生はその純情可憐さを縛り上げることにもまた一段の美しさ、楽しさがあります。以上述べて来ましたことを例えば写真、絵画及び物語をつけて和装特集号や女学生特集号等として発行して頂ければ、これに増した喜びはありません。このような特集号がありましたらどうかお知らせ下さい。心からお待ちしています。なお、実は私も数年前私の恋人（結婚はしなかったが）を麻縄で後手高手小手に縛り上げた経験を持っています。今となっては、これは又とてもすばらしい思い出で

す。いつかこの体験談を貴誌上に発表したいとも思い応募作品として出そうと思いついたが、何せ毎日仕事に追われて又家族の手前もあり（現在は結婚している）書くひまもなく今日に至っていません。いつか、機会がありましたら、又書いてみたいと思います。

（大阪市八伊田明夫）

三十度を越す日があるかと思えば冷雨降り続くなど異常天候のこのおき奇クの方々は皆さんはお変わりありませんか。存続問題もどうやら解決し、今度も確実な固定層によって守っていきましよう。私の町では三軒の書店が推定十冊の本誌を並べておりますが、本年度の統計では発売当日に半数が売れ、三日目には一、二冊をあますのみとな

現在在庫本誌既刊特集号 限定版案内

○臨時増刊号「写真と絵画」文献特集号 定価 五〇〇円 略号「文献」

○昭和37年10月号「読者（告白手記体験）」 定価 二〇〇円

○昭和35年6月号「哀憫美形特集号」 定価 三〇〇円

○限定版写真集「美しき縛しめ」第三集 定価 一〇〇〇円 略号「美3」

○限定版写真集「豊満と清楚」女体緊縛グラフ 定価 一〇〇〇円 略号「限二」

○限定版写真集「美しき縛しめ」第四集 定価 一〇〇〇円 略号「美4」

ここに発表しました以外の特集号、限定版は、旧号に広告してありまして、すでに在庫はございません。お申込み下さらないようお願い致します。悦虐特集号は全部売切れました。

っています。しかし書店の方もこのへんが限度とみているようですが、ほかの土地では如何ですか。七月号では水野夫人の生首におめにかかることができました。印刷がはつきりしないのは残念ですが分譲写真の方へはだしていただけないか。例によって自分だけのことになりますが、処刑される女”の挿絵に室井亜砂路氏の作品がのっていたのは感謝のかぎり。今後もしどし処刑される美女の絵を投稿して下さるようお願いいたします。室井氏はたしか「十三人の女死刑囚」がお気に召していた筈です。当時私はその挿絵を前川氏に書いてもらったかと思っていました。室井氏自身が絵をなさるとは知りませんでした。今からでも、おそすぎることはありません。如何でしょうか。私の方は四月・五月がちよつと暇だったので殺人小説をいろいろ書いてみました。採用になるかどうかは疑問です。短篇や奇クサロン向きのものも考えています。編集部の方々にとっては、とんでもない作品を読まされてさぞ御迷惑でしょうが、お許しください。今月はこの辺で失礼します。(福島県八黒田寿)

山村幸子様。40年4月号古本屋にて求め通信欄にて貴女のお便り拝見しました。もうどなたかよきお友達が出来ましたか。私は10数年来K Kを読んで居ります。読者通信も度々出してあります。あるいは貴女も読んでおられるかもしれない。年上のお友達をとの呼びかけ、私のような者でよかったらと思いいこのお便りを書いて居ります。私は30過ぎの男子(印刷関係勤務)大阪に居住、K・Kを読み出したのは「責め小説」に興味を持ったためです。現在連載中の「心傷たむ遍歴」「花と蛇」「宇宙のどこかで」等々。幸子さんはもうすぐ愛読一年を迎えますね。K・Kのどこに興味があるのか、わからないと云っておられますが、なにか心ひかれる読物があると私は思います。K・Kのほかになん本を読んでもおられるのでしょうか。映画も見に行かれるでしょうか。いろいろな事を一度お目にかかりゆっくり話し合い度いと思ひますので、この通信を読まれて会って見ようと思われたら、貴方の方から連絡場所時間そのほかお知らせ下さい。なんとか都合をつけて伺います。ぜひ一度お目にかかり度く思います。よき返事を

異色責写真分譲品

鼻責め万華鏡

大手札印画紙焼付

八枚一組 一〇〇〇円

モデル MS役

山原 清子
鈴木 晃子
略号(はた)

山原清子のペットである新しいモデルの鈴木晃子は、彫の深い可愛い顔立ちの従順な娘である。この可愛い晃子の鼻を清子がいじめ抜いたところをアップで三枚の連続撮影をした中から選んだ八枚の組写真である。晃子の背後に回った清子が晃子の鼻や鼻孔に対して、どのような責め方をするかお楽しみ下さい。

黒禪奔放姿態

大手札印画紙焼付

十枚一組 一〇〇〇円

刑部 典子
略号(ろち)

女体フンドシ・マニヤの中でも特に黒禪がきりりと双丘に割り込んで白い肌と黒い布との鮮烈なコントラストに強い興味を抱かれる方が多いのですが、カモシカのようにはすべりやうに伸びた若々しい刑部典子の肢体に黒ふんどしを締めつけて奔放なポーズを開陳しました。どのような裸身に禪が映えるか見て

のお楽しみにして下さい。

白禪奔放姿態

大手札印画紙焼付

十枚一組 一〇〇〇円

刑部 典子
略号(ろて)

清潔な晒の白ふんどしを野性的な若々しい女体にきりきりと締めつけた姿は、フンドシ・マニヤならずとも、その魅力にひかれるのである。が、禪一本の瑞々しい女体をあらさまに晒して、布の喰い込んだ双丘を誇示し四股を踏み、禪着の全身をあますところなく、皆様の目前にお目にかけます。

碧玉裸身緊縛

大手札印画紙焼付

三枚一組 三〇〇円

刑部 典子
略号(のん)

辻村隆のカメラ・ハントで始めて、その姿をあらわした刑部典子の裸身の高手小手縛りである。お茶目のノンコが厳しい縄目に対してどのような反応を示したか、とくにとごらん下さい。

入墨を踏みにじる

大手札印画紙焼付

八枚一組 八〇〇円

山原 清子
略号(いつ)

年少からSとMとに鍛えられて

通信欄にお知らせ下さる日を心待ちにお待ちします。(大阪市住吉△重造▽)

○
五月二日(日曜日)に単身者住宅のテニスコートの金網のところから手を振って合図して下さったかたへ。当日は大変失礼いたしました。はつきり、私に合図されていと解っておりまして、テニスを中断してでも、すぐにお声をかけに行きましたのに、あの時は後の芝生のところに私の友人が居りましたし、ベンチにも二人座っていましたので、その中の誰かのお知りあいのかただろうと思っておりましたため、テニスを続けておりました。それでも、どうも私の方を御覧になっておられる御様子でしたし、練習が終ってから、テニスコートに居た人達の総てに、貴女のことを聞いてみましたところ、誰も心当りが無いとのことでしたし、又、皆私の知りあいのかただとはかり思っていたと言っていましたので、もしかしたら、「SMレター」をお読みになってそのとおりに合図したら私に通じるだろうとお考えになられたのかも知れないと思ひ、もし、そうであったのなら、本当に失礼してしま

ったと心からすまなく思っております。五月五日に試合があるため森の宮のテニスコートにショートパンツやセーターなどテニス用具の一切を置いてきていますため、あの日は、ダブダブのズボン(普通のズボンでは細過ぎて股のところから破れますので)をはき、それを紐でしばり、そのうえシャツを腕まくりしたりして練習しております、見苦しく、無作法なかつこうをお目にかけ恐縮しております。単身者住宅の正面玄関から入りますと、廊下に郵便受けが並んでおります。その中の33が私のものです。そこには別な名前が標示されてはいますが、佐仲というの私の本名ではなく、そこに標示されているのが本名です。御都合のいい日時と場所それに私に対する目じるしをお書きになり、その郵便受けに入れていただきましたら、御指定の日時にその場所まで参ります。出来るだけ毎日郵便受けは開いて見ることにしています。出張あるいは宿直等のため二、三日帰宅出来ないこともありますので、出来るだけ三日位の余裕をみて、日時をお定めいただくか、或いは、万一私が見遅れた時のため御迷惑にならない方法での連絡方

その何れにも極めて深い趣向と経験を持つている山原清子嬢が、自らその全裸身を投げだして、力のかぎりの強烈な麻縄しばりを望み背中いちめんに彫った玉取姫を男の足で、めちやくちやに踏みにじられ、顔を足で踏みにじられて歓喜の声を挙げる場面をスナップした中の八枚です。

全裸麻縄強烈縛

大手札印画紙焼付

十枚一組 一〇〇〇円

モデル 山原 清子

略号(いね)

乳房が変型してしまふまで力の限り麻縄で縛り上げて、刺青を彫っている痛さに比べたら平気だという清子嬢、縄のすり傷や縛り跡なんか一向気にしないという山原清子嬢を、それこそトゲトゲの麻縄でガンジガラメに縛り上げて背中一面の刺青をこれ見よがしにさらけだす全裸身を、ごろごろところがして、あらゆる角度から狙

法をお示しいただくかして下さるなら幸いです。貴女さえお差支えなければ、単身者住宅の玄関に入ってすぐ横手にロッジといって応接と娯楽を兼ねた部屋がありますので、そこを待ち合せの場所に御指定下さっても結構です。いずれにしても、貴女の御都合のよい場

い撮りした十葉の組写真。

裸女レスリング

大手札印画紙焼付

四十枚一組 三五〇〇円

モデル 山原清子、大塚啓子

略号(れす)

二人ともパンツ一枚の外は何にも身につけないという素裸で、あられもなく格闘を続けるところを早いシャッターで次々とシャッターを切っていた動きのある女性レスリングの場面の中、迫真力があつて且つ鮮明なものばかり四十ポーズを選びました。若々しい二つの女体が組んずはぐれつ、美しく躍動してエロチシズムの中に女だけの醸し出す明るいサドとマゾが画面に満ちています。プロレスのファンであるという肉体派の二人が真剣に力のありたけを出し合つて、実演したレスリング・Mフットです。の方もSの方も御一見をおすすめいたします。

所を御指定下されば、そこまで参ります。時間は、私の勤務の都合上出来るだけ午後六時以降を御選定いただけますよう、ただし、日曜日であれば何時でも差支えありません。(佐仲晴哉)

東浦ひかる様、どうか私の願い

をかなえさせて下さい。それは一度でも結構ですから、私とプレイをして下さいませんか。今まで何度もお呼びかけしようと思ったかわかりません。しかし、そのたびに貴女と私とは月とスッポンだとあきらめておりました。そこへちようど六月号の読者通信を拝見しておりましたら貴女の御名前が目に入ったので、さっそく読んでみました。そして、貴女の前稿の中で次の部分が目にとり、迷うことなく私もペンをとりました。その部分とは「それに縛りだけではなしに擦り責めや浣腸責め……」という所です。私は責めの中で擦り責めが一番好きです。擦り責めが好きになった動機の様なもの、私が人一倍擦ったがりやだからです。こんなに擦ったがるのは自分だけではなく、おそらく他の人も同様だろう、だったら、手足の自由を奪い腋の下の擦りに興味があります。腋毛があるときと、無いときとは、貴女の感度がどう違うか等と勝手に想像したりしております。擦り責めの次に好きなのは浣腸責め。乳房責め、メンス・バンド等、その他、精神的な羞恥も与えるつもりです。又、これは無理にはお願い致しませんが

私が貴女を責める前に貴女が私を情容赦なく責めて下さい。「花と蛇」の中に出てくる様な、みだらな質問等して、私がそれに答えませんでしたら、大の字に縛り、擦って下さい。私が、「助けてくれー」と、言っても擦り続けて下さい。そして、こんどは私が貴女を責める場合、五月号に載っていた「革の盛装」の第二部に出てくるマミとメリの立場と同じになっておもしろいのではないですか。最初マミは、メリに浣腸責めなどしますが、それがあつた事情で逆さになり、今までマミがメリにしていたことをこんどは、マミがメリにされる番になってしまふのです。つまり、今まで私は貴女にとってもつらい擦りにあつていましたが、こんどは、私が貴女に、そのうらみを返す番です。しかも三倍位にして。貴女が私に擦られている時「助けてー」といっても私は、こつと言つて下さい。「僕も、さつき助けてくれと言つた。でも貴女は擦りを止めようとしなかった。だから僕もやめないぞ。そーら、楽しいだろう。だって、そんなに笑っているんだもん。そーら、そーら、もっと笑え、気絶するまでこの手は腋の下からはさないぞ」

木村洋子

完全逆さ吊りフォト

分譲

大判判印画紙焼付三枚一組 一〇〇〇円 略号(さつり)

と。どうか、東浦ひかる様、私に手紙下さい。どうか私の願いをきいてやって下さい。又東京都内及びその近郊の方々(女性)にもお呼びかけ致します。Sの方、Mの方、SM両方の方、いずれの方々も責めの対象は擦り、浣腸、メンスバンド、乳房、その他、いろいろな羞恥を与える責めのお好きな方、プレイなり、文通なり致しますよう。(東京都港区麻布八秋田隆V)

○

写真お受取りいたしました。本当に嬉しく拝見させていただきました。まず。先日の写真は半分以上、モデル玉田様のフォトでお願いいたしました。今度新しく登場されたモデルの方々様の内でも、玉田美佐子様、大好きな肉体を持っていられるモデルさんです。玉田様の責の中でも好きなのは六尺褌ー白六尺ふんどしです。しかし、拝見させていただく自分らは少しの痛みも感じませんが、褌を強く締められたモデルの皆様方はさぞか

し痛いことでしょうね。それからモデル様の臀部を強調させる時に強く締められるのか臀部の割れ目に喰い込んでしまいモデルさんの臀部が上に向いています。褌着用はケッコウデスが、適当の強さで締め上げて下さい。お願い致します。モデル様によって臀部の割れ目のやや広い方がおられます。先生方にお願ひします。玉田様のお尻を可愛がって上げて下さい。それでもモデルとして玉田様の臀部を責め、豊満なお尻を縄、ムチ、クサリ等でバラバラになさいますか。先生の責めは無残そのものです。そのような責めにあう玉田美佐様が私には可愛いそうでありません。先生方をお願い致します。美佐子様のような素晴らしい臀部を持たれた女性はこの世で玉田様一人です。どうか、玉田様の臀部を痛めつけないで下さい。最後の一言モデル玉田美佐子を大切にしながら上げて下さい。お願い致します。それから玉田美佐子様の次ぎのことをお聞かせ下さい。①身長

②体重③バスト④ウエスト⑤ヒップ等です。これは私一人の空想ですが、玉田様のヘアースタイルから拝見すれば洋装よりも着物が好きなように思います。モシモ、まちがえばお許し下さい。これから先も(玉田様モデル)なるかぎり私も奇クを愛読いたします。(京都府舞鶴市八北海生)

皆様お変わり御座居ませんか、又何時もの様にとりとめないお便りを致します。奇クの皆様、編集部の方に是非その後御計画をお尋ね致し度いのですが、過日希望者の数によっては取扱いを代理部で行うかも知れないとの御計画の一つに生ゴム製月経帯販売代行のお話し如何でしょうか。市販バンド

に生ゴム製品がまったく影をひそめまして私はずい分の枚数を毎月買っていましたので、はきつぶしても当分はありますが此際是非特注品を販売して頂けません? 奇クを通じての此の様な話合いこそ無上のよろこびですもの市販品の無くなった今日こそその意義を大いに感じます。長い空間があればみんなからゴムのバンドの事は忘却されて終りそうで心配です。特注品はメンスバンド、大人用おしめカバーや病院で使用される産後ゴムカバー、そして外科用ゴムパソテイ型湿布帯等総てのゴム下着を兼ねたゆつたりと大きな型で外面の布は極薄いストッキングの様なナイロン製、内側のヒミツは、グンニヤリと厚手最高級の黄色い

生ゴムでゴツテリ、ハリつめて替ゴムも大型が着いて居る様なもの(ご存じの方も多いと思います)が外科用湿布帯は総生ゴムパンティでやはりガーゼ押えに替ゴムが内側にゴム糊付けしてあります)ジョーゼットの様なナイロン布から内側の黄色いゴムの状態が見える様なもの、ふんだんにゴムを使つて足の周辺もゴムひだ付き等ほしいです。センチメンタルな気持ちになつて来ます、考えるだけでも。少々高価でも一度に幾枚も買えなかつたって毎月毎月買つて思ひきりゴムの感覚を楽しみますわ。きつときつと通動におむつカバーは気が引けるでしょ、これからの時節は特にね。そうかといつてメンスバンドはゴムの部分が少ないから

つままないですもの。是非是非お願いです。ネバッコイ程の生ゴム製バンドを販売して下さいませ。お待ちしています。強烈な印象の黒布と黄色いゴムのコントラストで、マニヤの皆様方も是非奇ク製バンドを愛用の下着にするようお願いの便りを、御希望を出して下さいませ。今日の夕方お部屋の掃除機を使い乍ら考えた私のアイデアをお知らせします。掃除機の吹込口の反対側にある排気穴の方へホースを継ぎますとホースの先から勢いよく空気が出るでしょ、此のホースの先にゴム氷のうをゴムバンドでくくり付けて見たら、見る見るうちに氷のうが大きくなるんで直径が一メートルもある大型風船が出来上りました。今に

四馬孝 妖美画集

女体切腹図絵

△時代物女性切腹▽

大中判印画紙極鮮明焼付

五枚一組 略号(しせ) 一〇〇〇円

一、若き姫君の切腹美態

二、介錯を受ける美しき娘

三、切腹する娘落城の哀史

四、夫の眼前で切腹する若妻

浣腸美媚態

△女体浣腸の極美▽

大中判印画紙極鮮明焼付

三枚一組 略号(のゆ) 六〇〇円

一、美しい令嬢に對する浣腸

二、女事務員の浣腸の場面

三、女学生に行う浣腸の私刑

浣腸責め図譜

△強制浣腸場面五態▽

大中判印画紙極鮮明焼付

五枚一組 略号(しき) 一〇〇〇円

一、片足吊りで美女に浣腸

二、いちぢく浣腸の恐怖

三、高圧浣腸に喘ぐ美女

四、硝子シリンダーの乱舞

五、イルリガートルの浣腸

浣腸責め図譜

大中判印画紙極鮮明焼付

五枚一組 略号(しえ) 一〇〇〇円

一、踊子へのイルリ浣腸責

羞恥責め絵巻

大中判印画紙極鮮明焼付

五枚一組 略号(しい) 一〇〇〇円

一、灌水による人工妊婦製造

二、浴槽の女神を責める

三、三角木馬の美女責め

四、全裸の美女柱抱き責め

五、女体洗滌のあられもなさ

もやぶれそうになってゴムがガラスの様に透明になってしまいました。そこでこわいからスイッチを切ってゴムの口をかたく、くくりました。先日第何回目に買って来た三ダースの氷のうを次から次へとふくらませて、十個を作った。もうお部屋一ぱいの超大型ゴム風船で一ぱいです。今日はゴム風船の中でゴム風船の間に入って休んで見ようかなと思っっています。此の便りを書いてる今、私は中型の氷のう風船をお座布団にして座っています。ゴムカバーをはいて氷のうのくつ下をつけています。ゴムとゴムがすれてキュッキュッピンと、金属的な音を発します。ゴムの臭気がムンムンします。(大西良子)

美伽輪生さん。私の呼びかけに応じて早速の御返事有難うございました。貴方の言われる如く私は北国のみちのく、貴方は西国の浪花(違っていたら御免下さい)と離れているのでは致し方ありません。今後は奇巧の編集の御好意に縋ってこの読者通信欄を拝借して親交を深めさせて頂きたいと思っます。私の想像していた通り貴方と私の傾向にはやはり共通点があ

ったようです。今でも私は時折りタイミングを見計っては、現在犬の首輪、麻縄、鎖などの小道具(鏡も使います)などを利用して一人でMプレイを行っています。これは単なる空想ですが白昼それも日曜の正午近く、最も人出の雑踏する駅前前の冷たいアスファルトの路上を全裸となり犬の首輪をはめ長い鎖をジャラつかせ、手と足首に鉄の枷をはめ四つ這いになって歩く時に軽蔑をこめた眼差の人間どもに唾を吐きつけられ泥だらけの靴やハイヒールで蹴られる。それでも疼くような体内の快感に四肢を微かに慄かせながら這い歩く自分の姿……如何でしょうか美伽輪生さん。こんな楽しい空想は？実現出来なくてもそれを想像するだけで戦慄にも似た衝動を止めることが出来ません。フォト多数保存されている由羨ましい限りです。大変厚かましい御願ひですが美伽輪生さんの御差支えのない限りの枚数お送り下さいませんでしようか御願ひ致します。それから失礼ですが郵送料は後日現品到着後美伽輪生さん御指定の場所にお送り致したいと思っます。(宮城県八ミスター奴隷生V)

傑作迫力Mフォト

二人の女性からの責

山原清子嬢と他に一名の新人女性との組合せにより、ここに初めて二人の女性から責められるMフォトを作成しました。サド役としてその迫真の熱のこもった演技でM評論のある山原清子嬢が友を得てFアン待望の傑作写真をもつてしました。二人に責められた男性モデルは、今までの経験でこんな素晴しい思い出はなかった。こんな二人の責められるという大きな精神的にも肉体的にも、大きな負担だったと語っています。

男が屈伏するまで

ズベ公タイプ二人の若い女に縛られ、猿轡をかまされ、ムチ打たれ、踏みつけられ完全に屈伏するに至るまでの連続場面を組写真にしたシリーズです。

臀の下に呻吟

二人の女性の暴虐の嵐はとどまるところを知らず、手足を押さえつけられて仰向けに男の顔の上には、大きなお尻をデーンと据えられて、窒息寸前の連続写真。

二人になぶられる

刺青を見事に散らした逞ましい尻で咽喉を潰されて苦しむ男を冷やかに眺める女。足を舐めと強制される男を眺める女。股間を嗅がれ、二人の女におもちゃにされる場面ばかりの点景フォト

二女の股責地獄

山原清子嬢一人の股責めでも、その迫力に圧倒されたファンからの絶讃を浴びましたが、これは二人の女性による股責め、これは二人の素晴しさは筆舌につくし難いものがあります。

逆エビとムチ打

二人の乱暴な女に狙われた男は後手に厳しく縛られ、あげられた男は逆エビに締めつけられ、むきだしの臀部に激しいムチ打ちを加えられ悶えつけられる。

奇ク愛読者の皆様初めてお便り致します。私は数年前より奇クを愛読する一エネマファンです。時折り独りプレイを楽しむ事もあります。小生恥かしがり屋で今迄された経験もましてした経験もありませんでしたが先日風邪の為医者に行つた処医者に便通はと聞かれタマタマ二日程通じがなかった為その旨云々とそれでは浣腸しましたと云われた時は本当にドキンとしました。実際は医者の手でアツと云う間にされた誠にあつけないものでしたが後で家に帰り床に就いて色々想像し夜半過ぎ迄眠られませんでした。この様にこの方面では未だ経験も浅い私ですが今後色々御指導頂ける方がありましたらお便り下さい。尚私は三十五才になる会社員です。(東京八吉野 隆一V)

○
ゴムマニアの皆様、御元気ですか。青葉の目に泌みる頃と成りましたね。毎月通信を読むのが楽しみです。特に最近はおおむつカバーのマニアが、多数御意見を述べて居られるので嬉しいかぎりです。七月号の大西さんの文を拝見致しましたが代理部で通信販売の件誠に同感です。KK誌では希望

が多ければと言う事でしたが、此れでも、少ないと言うのでしようか。私の通信を読んだ所では相当数の希望者が有り、又価額も多少高くなつてもと切実な声の有る現在一日も早く私達の願いの叶えられる日を待つて居ります。私も十数枚持つて居りますが次から次と欲しくなり、変つた型はないものかとはるばる岐阜迄行つて見ました。所が私の町にはビニール張りならどの薬局でも必ず有ります。岐阜ではとうとう見つかりません。直した。大西さんの記事を読んで直ぐ三ノ宮に行つて見ようかとも思いました。私には今日寝る時には下に総ゴムカバー「ニシキゴム製」をはき上にビニール張りをはいて寝ます。もちろんオムツもサラシで約二十枚位有りますので一回に七、八枚重ねて使用します。用心の為、下にゴム布を敷いて居ります。と言うのは最近利尿剤を飲む事を覚えたからです。名も知らない薬なのですが一粒五〇円の奴を薬局で買って来て寝る時二錠を一度に飲みますが大変良きく薬で朝までにはオムツがグッシヨリ濡れてしまします。但し相当強い薬なので毎日と言う訳には参りませ

ムチで仕込む

大手札印画紙焼付
十枚一組 二五〇〇円
略号(ふよ)

ムチで脅かされた挙句、馬乗りに跨つて尻を叩かれた足の指に挟んだ布片を口に押し込まれ、頭を踏みつけられ、二人でさんざんになぶられムチで仕込まれる。

口中に水吐き

大手札印画紙焼付
九枚一組 二三〇〇円
略号(ふり)

二人の女にがっちりつかまされ、口を上むけて開けさせられ、男は、うがいをした水をかわるがわる吐かれて汚水処理器にさせられて吐ける。

顔面を玩弄

大手札印画紙焼付
八枚一組 二〇〇〇円
略号(ふわ)

二人の女に押さえ込まれた男の顔は浣腸器やいろんな小道具でほしめまに玩具にされる。

二人の馬になる

大手札印画紙焼付
七枚一組 一八〇〇円
略号(ふる)

豊満な女体二つを背中の中にのせてムチで追われながら、這いずりまわるM男のあわれな姿。

臀臭をかがさる

大手札印画紙焼付
六枚一組 一六〇〇円
略号(ふお)

ぐったりと仰向けにのびた男の顔の上に、芳香をかげとばかり据えられた巨大な女の尻が、でんと息もつがせぬ圧迫を続ける。

口中に汚片を

大手札印画紙焼付
六枚一組 一六〇〇円
略号(ふね)

女の口の中に無理矢理押し込まれる、あさましい場面さまざま。

縛り人形を踏む

大手札印画紙焼付
五枚一組 一四〇〇円
略号(ふつ)

ぐるぐると全身縛りつけられた男の顔をはじめ、顔から胸、腹部と二人の女の真白い足でさんざんに踏みつけられる。

顔面踏みつけ

大手札印画紙焼付
三枚一組 一〇〇〇円
略号(ふな)

二人の女の足で顔を踏みつけられ、足の指や足の裏を舐めさせられ、男のあさましい生態。

んが。浣腸も好きですが後始末の点で仲々思う様に出来ません。私は子宮帯も持って居りますが、浣腸の後で子宮帯を装着致しますと痔バンド等を使用するより良い結果を得られます。しかし私は何んと言ってもゴムの魅力が第一です。唯ゴムカバーを着ける方が一番好きです。私の場合は多少硬い感じの方が好きです。大西さんの言われる通り汗ばんで来るとヌメヌメして何んとも言われない感じます。街に出る時も時々着けて行きます。歩く度にコポコポと可愛い音を立てますが誰も気付く人はいません。しかし、もし事故又は急病にでもなったらと思うと一寸心配ですね。六月号で名古屋のG生様から誌上に、カバーお譲り下さると言う文面が御座いました。が、ついお便りを出せなかったのが残念です。もし今でもお譲り下さるなら住友ゴム製又は開放型なら、いくら高価でもかまいません。御一報戴ければ幸いです。枇杷島なら目と鼻の近さですから。大西さん又八月号で貴女の文面にお目に掛れる様今から楽しみにして居ります。私も色々変った体験も有りますが文にまとめるとなると苦手で貴女の麗筆を羨やましく存

じます。神戸市の中川さん、大阪の徳増さん。高知のゴムマニアの方此れからも大いに楽しみを語り合いましよう(愛知△T O生▽)

七月号のカット、挿画の充実はまことに、欣快です。特に一二、一四、一六、二八、四〇、一七九の各頁は秀作でした。グラビヤ等の写真がなくなつたのは、雑誌の品を良くしており結構です。私はグラビヤの全廃には双手を挙げて大賛成です。今後は七月号のように目立たない大きさのカット、挿画を充実されるように期待します。実際こういうカットは他の雑誌では見ることが出来ません。一層の充実を望みます。絵に反してSMカメラハント等の写真は、今回の醜怪の感があり、写真に代えて絵の形で挿入できないものでしょうか。特に、お願いしたいのは、一、サーカスのアクロバットの写真、アクロ的絵(例えば一四頁のもの)の挿入、一、表紙を尋常に週刊誌のグラマー写真の表紙のようなものにする(今の絵は表紙裏に)今月号では「革の盛装」が終り「花と蛇」が休んだことは残念でした。(東京△浜谷生▽)

私は貴誌を永年に亘り愛読しております。七月号には映画の紹介二つありましたが、今後もう少し沢山やつて戴き度く、又、劇特にストリップ等で貴誌好みのものあれば読者が貴誌を読んでから見られる様早い目に報道して下さい。グラビヤのなくなつた今日、劇やストリップや映画の美女の縛られた写真を載せて下さい。これなら差支えないでしょう。(東京△八重垣▽)

(編集部より) 劇場やストリップでは演し物の予定が早くから決っておりますため、とても予報できない実情です。縛り場面の映画のスクリーンは相当枚数保有しておりますが全部成人映画のものですので、これを掲載すると条例に指定される恐れがありますため発表を見合わせております。本文中に少し宛挿入するといった方法で将来若干発表したいと考えておりますが、グラビヤ印刷にするとか、本文中でも多数を一度に発表するとかは時節柄自制する必要があるでしょう。

突然お便り致します。僕は貴誌を愛読させて頂くようになってか

ら三年程になります。実はいつも近所の本屋をさけて少し離れた所で購入していましたが、最近になって、その本屋が店を閉めましたので、直接お申込みしたいと思ひます。僕は、今までSM系の雑誌、本、映画でも色々SMに關してのことは見たり聞いたりしてきましたが、読者通信の一番充実している奇クを最も楽しく読ませて頂いております。以前は絵や写真や文章等を読んで楽しんでいましたが、この頃ではどうしても通信欄に投稿しているどなたか、(僕の好みはSM女装愛好)話し相手になつてくれる人、一緒にプレーをして下さる人にめぐりあえる事を夢みています。僕は家では皆に好かれて林与一に似ているなんて言われて人気者で明るくやっています。本、今の僕は誰にも言えずに一人で貴誌を読んでいる僕なのです。誰も本場の一人ぼっちでさびしい僕を理解してくれるような人は周囲にいません。だから余計に毎日毎日が僕にとって、どんなに辛いか愛読者の皆さま方が最もよく知っていられる事と思ひます。どうぞ僕を充分にいじめて下さる方、又いじめられる人、強制女装を強いる方、どうか僕をよ

ろしく教育して下さる真面目な女性又は男性の方、どなた様でもお手紙下さい。お返事は必ず出させて頂きます僕の住所氏名は編集部にお知らせしておきます。(群馬県八高崎生▽)

が毎月沢山参っておりますが、現在編集部では原則としては手紙の回送や転送の斡旋はいたしておりませんから何卒御了承下さい。

拝見して何を考える間もなくペンをとってしまいました。実は貴女の書いてらっしゃる事が、日頃から私の空想に描いていたのと全く同じ寸分違わぬものだったからです。乳房責めの好みといい、方法から心理状態まで。それで失礼を考えずペンをとってしまいました。貴女が辻村氏にお願いされた文章で一般の私も読者には、その意志で投書なさったのではないだろうことも承知しておりますし、残念ながら辻村氏とも一面識もございません。しかし、どうしても貴女に私のような愛好者もいる事を知っていただきたく、お手紙する気になりました。申し遅れましたが私は満23才の独身の男性です。実際のプレーの経験は余り豊富ではありません。SMに関してはかなり深い思考を重ねてきたつもりです。決して興味本位ではありません。私の好みのパートナーは多少肥満体の女性で、腋毛の豊かな人であれば申し分ないのですが、これはプレーの上ではあくまで第二義の問題です。要はお互いの性向を理解しあった上で、お互いの領分を侵さず、楽しむだけのゆとりが必要だと思えます。ですから仮

☆女体切腹資料の部☆

血紅女体切腹腸露出

大手札十二枚一組 一〇〇〇円
大塚 啓子 略号 (せい12)

血紅切腹絶命ポーズ

大手札四枚一組 四〇〇円
梨花悠紀子 略号 (せん)

血紅切腹祭壇の女体

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号 (せぬ)

禪裸女血紅切腹 (大塚)

大手札五枚一組 五〇〇円
大塚 啓子 略号 (おお)

血紅使用苦悶悦楽表情

大手札五枚一組 五〇〇円
大塚 啓子 略号 (くえ)

肉体美全裸女体切腹

大手札五枚一組 五〇〇円
長野 良子 略号 (なせ)

瘦身女体切腹姿態

大手札二枚一組 三〇〇円
細川アヤ子 略号 (ねは)

瘦身女体自刃姿態

大手札三枚一組 三〇〇円
細川アヤ子 略号 (ねに)

血紅切腹血塗れ下腹

大手札五枚一組 五〇〇円
大塚 啓子 略号 (わい)

殿中の女性切腹

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号 (わこ)

切腹美態から絶命へ

大手札五枚一組 五〇〇円
大塚 啓子 略号 (わは)

豊満の下腹を切る

大手札五枚一組 四〇〇円
東浦ひかる 略号 (えん)

女体介添切腹

大手札四枚一組 四〇〇円
甘木 春子 略号 (あか)

下腹を切り裂く

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号 (やい)

下腹に刺す氷の刃

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号 (やお)

柔肌を切り裂く女

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号 (やえ)

に貴女が私をプレーの相手として選んで下さったなら、私は貴女が書いていた通りの事をして差し上げます。それは同時に私自身の喜びでもあるのですから。その上で許されるなら、私の考えた方法で貴女の乳房と乳首をいじめたい。参考までに、現在持っている小道具をお知らせします。これをどのように使って、どんな責め方をするか、試みに考えて下されれば幸いです。一、バネ測り、二、分銅(重量の違うもの各種)三、洗濯挟み(先にガーゼをまく)四、スリコギ、五、豆はじき(パチンコ)その他トイレの掃除に使う吸盤のようなゴム製用具などETCこれらの小道具を使って貴女の乳房と乳首を思いきり楽しみたい。貴女が懸念されている信用の於ける紳士を望むとの事、まことに当然のことと思えます。その点で全く資格はない(現在の時点で信用度を証明する手だては持たないという意味)しかし私は真面目な一愛読者に過ぎません。貴女の希望は、もっとも存じますが、出来る事ならカラを破っていただきたい……と望むのは無理なお願いでしょう。(宝塚市八松尾和正▽)

七月号で最大の感激は葉山啓さんの「シナリオ」いちぢくの実を持つ女」でした。これがもし映画になったとしたら、どんな作品になるかちよつと予想もつきかねますが、このシナリオを読んだ限りでは、私は非常な刺激を文章の中から受けました。従来の観念からいへば年令的にも又既婚者という点からいっても私の好みに合わない対象であるにも拘らず主人公の旗美也子という二十八才の女性はこのシナリオの中では、ダイヤのように輝やいておりましたね。茶室での幻想的な場面は一幅の絵のように美しい。読んでいて私には何か文章の魔術にかかっているような気がしました。美しい、たしかに美しいが現実には果してこのような幻想的な世とも思えぬ美しさが発揮できるでしょうか。一つ一つの語句をとってみると、どこにも刺戟的なものがないのに一貫したシナリオを読んでもみると、これは正にSM文学の金字塔であります。本誌にこのような秀れた作家があらわれたことに、私は驚異に感じました。今後の展開を大いに期待します。(大阪市八曾我部要)

○

新緑の候久しく御無沙汰いたしました。愛読者の皆様、如何お暮しですか。昨年末から殊の外多忙のため、毎月購入した奇くもやつと目を通す程度で、心を癒やす暇もありませんでした。奇くのグラビヤがなくなり誠に淋しい気がしますが、これも時勢の赴くところ止むを得ません。奇くが連綿二百号を続刊し、編集子諸兄の御尽力で今後休みなく、引続いて刊行されるだけでも有り難い事と思ひます。今後共折角の御努力を祈念いたします。読者通信の藤島万寿子さん(五月八日)同じ京都市でありながら残念ながら機会を逸しました。又とないお相手だったかと思ひますのに。今度の呼びかけがあれば、どんな都合をつけても、と思ひますが、誠に残念至極でした。(京都市八丸山草一郎)

○

本誌の読者になってから始めて読者通信への通信文を書かせてもらいます。私の性癖はMの要素が強く、支配よりも服従をこのみます。女性の色のパンティなどを着用、男女を問わずS的傾向の方からの責めを受けてみたいと気持ちの奥底に願望があります。できた写真のモデルもしてみたいと思

「八月号の新版分譲品」
血紅使用

屠腹される女体

大手札印画紙焼付
十二枚一組 二〇〇〇円
大塚啓子 略号(のる)

下腹から脇腹、更に臍の傍から鳩尾へかけて、脇差にて切りさばる。元止めの一刃を刺されて、あわて絶命。豊富な血を流して、あまのりな女体が命を失ってゆく。美しさを追って、刻明に描写し、有様を最高の屍体となつた女の美しさを血紅使用

美しき女の屍体

大手札印画紙焼付
十二枚一組 二〇〇〇円
大塚啓子 略号(のり)

下腹部を朱に染めて斃れた美しい女体。氷の刃を肌の上に残して、喉の刺傷から死血が溢れ出て、眼をむいて息絶えている。美が全面に漂っている。

血紅切腹連 写真

大手札印画紙焼付
十二枚一組 二〇〇〇円
大塚啓子 略号(のせ)

なく晒して、大勢の人達の前で腹を切りさばりて命を自ら手断つ順序を連続で写真化した。そして下腹から手まで血だらけにした。苦痛にのたうちまわつた女の哀れさと美しさが、胸に迫ってくることでしょ。渾

切腹した女の死体

大手札印画紙焼付
十二枚一組 二〇〇〇円
大塚啓子 略号(のい)

自らの手で短刀によって下腹を切りさばり、激甚な苦痛に悶えつた腹は、今や全身を血に染めて屍を横たえて、血を吸って白い肌を割る。鮮烈なコントラストを作つて見る人の目を楽しませるだろう。

血紅使用

立腹に悶える女体

大手札印画紙焼付
十枚一組 一八〇〇円
大塚啓子 略号(のさ)

一本の木の前で散る花の如く、麗らかな女身。下腹を血まみれに、うたたまに行う女体切腹。溢れる血の目の前に展開したいという切腹性の昂揚するマゾヒズム

昨年の夏、友達の持っている奇
 クを拝借して読んでいるうち、す
 っかりひかれてしまい、それから
 毎月愛読するようになりました。
 なかなか、どこの書店で容易に買
 い求めることができなくなり、か
 えってそれが今の私には貴重なも

激しい気候の変化の昨今、皆々様には御健勝のことと思います。二十二日に六月号拝受。早速拝見させてもらっています。何時ものこと乍ら特にこの頃は、その日を待ちわびる様になりました。受取るとその日（夜）の中に読みたいものは読んでしまします。（以前は先ずグラビヤ、フォトなど挿絵を含めて一通り見たものです）二夜位で殆ど読んでしまふ。それから暫くの間あれこれと書きたいことや呼びかけたいことが有り余り感情の始末に困ります。しかし

全裸の肥り肉を麻縄でぎりぎり
と嚴重に縛り上げられ、浴槽の中
へ無理矢理に浸される。只でさえ
力いっばいに締め上げられた麻縄
は湯を吸って、肌に喰い込む。一
方は熱い湯に蒸された背中の刺青は

大手札印画紙焼付
二枚一組 三〇〇円
山原清子 略号(もの)

代理部分譲品用女性写真モデル募集

○本誌では代理部分譲品用の写真撮影するため、女性モデルの方を募集しております。

○本誌愛読者の方でしたら、年齢遠近は問いません。分譲品用ですから誌上に発表いたしません、もし誌上発表可能でしたら尚結構です。又、助手介添或はブレイのみ出演御希望の方でも差支えありません。

○出演又は参加御希望の方は年齢略歴記載の上編集部宛お申込み下さい。報酬その他詳細につきお返

事いたします。

○応募された方々の個人的な秘密は固く厳守いたしますから御安心下さい。尚、お好みの傾向を附記下されば好都合です。

○本誌内容充実のため、並に皆様のレジャーのために奮って御応募のレジャーのために奮って御応募の御参加下さるよう、お待ち致します。余暇を利用しての御参加も大いに歓迎いたします。特に妊婦フォト撮影可能の方は、遠近に拘らず御連絡下さい。

奇ク編集部

暇もなく才能もなく想うことのみで日が過ぎてゆきます。そして又日をおいて改めて読み直す。今度は丁寧隅から隅まで。すると又何となく新しい感じで、結構楽しく過すことが出来ます。此処一年近くの私の読書のクセですが、案外こういう様な読み方をされる方も多いのじやないかと考えてみて苦笑することもあります。幸い多少暇らしいものが出来てきて、少し勉強のつもりで先日短文を書きました、今度も又、六月号を読んでる中、どうしても書いてみたくなり拙文を綴る結果とな

りました。文章を書いていると、又、次々と気持が発展していつて困ります。モデルに応募もしたくなるし、勿論読者通信を利用しての呼び掛けも行いたくなる。こういう心理の経過は誰でも共通のものだと思えます。別に写されて困る点は何一つないのだから、応募しても良い様なものの何かしら抵抗を感じる。そういう抵抗があるので、社会人として通用してゆく様にも思えるのですが。本当にいうと、写されるというだけで微かな興奮を覚えます。SMとはこういうものなのでしょう。(京都

市八保藤久人)

同好の士の唯一の楽しみにして

います、貴誌は私にとっても日常欠かせないものの一つになっていて、創刊当時から本がギッシリと押入れに積み重ねられていました。これらは二冊、三冊とあちこちで買いあさり揃えたものですが一部の欠刊を除いて全部揃っていることに自己満足しております。ひまな時には引き出しては読みかえしてありますが、移り変わる世の遷や流れの中に編集者の涙ぐましい努力のあとが偲ばれ、本当に御苦勞さんですと感謝申し上げます。共に、今後共いかなることに屈せず、一層同好者の唯一の愛誌として御進展下さるよう切望してやみません。さて六月号では、山原清子さんの後援会をつくるということが出ていましたが、かねて希望をもっていましただけに是非入会させていたきたいと考えます。しかし、私は現在社会的に重要な仕事をしていましたために当分表面に名前を出すことは遠慮させてほしいのですが、よろしいでしょうか。もちろん名前が出なければ結構ですから、座談会などのご案内があれば仕事の都合が付き次

第つとめて参加させていただくつもりであります。(広島市八藤原正)

貴誌益々御隆盛の事お慶び申し上げます。小生グラビヤよりも本文主体の方を喜んでおります。これこそ営業政策の面ではともかく本当の固定読者層を把握出来るのではないのでしょうか。小生の感じですが、貴誌を購読する層はインテリが多く公開誌のグラビヤはかえって中途半端、本当に望むなら分譲品もある事です、その位の経済力は充分持ち合せている層だと思ふのですが如何でしょうか。小生なんか、グラビヤ、口絵、挿画のなくなった貴誌にこそ愛着を感じます。カットぐらいはあってもいいですが、内容本文は如何にも大人の雑誌らしい体裁のものが好ましいです。定価もうんと高くして、用紙も良くし、文章ばかりとすれば社会の風当たりもなくなるでしょうし、それこそ高級な読者が集まるでしょう。自分一人になった時の夜は本当に貴誌は安らぎを与えてくれます。こういった雑誌を企画発刊される当局に感謝いたしております。同じ市内なら小生ずぶの素人ですが、編集のアルバ

います。パンティのコレクションにも興味があり、女性のポリシーあるヒップに崇拜とあこがれを強く感じます。文字通り尻に敷かれることは私の本能的欲求かもしれません。私は独身でなく妻帯者であり結婚後五年になります。女房との生活も女上位をとっており、身体の上を女性にまたがれることによって真の満足を感じています。女房も勝負な性格で女上位をとっております。女性の体毛なども私の興味を強くそそります。フェティッシュの傾向があるので本義そのものよりも、前戯とか裸体鑑賞に、心をうごかされます。汚れた女房のパンティを彼女によって鼻にあてがわれて嗅がされることはしばしばです。夫婦プレーの同好者のかたと、この欄を通じて知りあえたら、嬉しいと思います。(埼玉県鳩ヶ谷町八荒波勝巳)

○
 昨年の夏、友達の手持っている奇クを拝借して読んでいたうち、すっかりひかれてしまい、それから毎月愛読するようになりました。なかなか、どこの書店で容易に買えない求めることができなくなり、かえってそれが今の私には貴重なもの

のに思えてなりません。私に奇クを貸してくれた友達も今年の節分に結婚して寮を出てしまいました。のですが、四月に入ってきた人達と新しくお友達となり奇クを見せあったりしています。私達とはとても実行など出来ませんが読むだけでとても新鮮な刺激を受けることができます。今度はじめて、おそろのおそろのお便りを書きました。どうぞ、よろしくお導き下さいませ。私も現在いろいろなことを考えておりますが、そのうち改めてお便りをさせていただきます。思っております。(泉佐野市八中田容子)

○
 激しい気候の変化の昨今、皆様には御健勝のことと思います。二十二日に六月号拝受。早速拝見させてもらっています。何時ものこと乍ら特にこの頃は、その日を待ちわびる様になりました。受取るとその日(夜)の中に読みたいものは読んでしまいます。(以前は先ずグラビヤ、フォトなど挿絵を含めて一通り見たものですが)二夜位で殆ど読んでしまおう。それから暫くの間あれこれと書きたいことや呼びかけたいことが有り余り感情の始末に困ります。しかし

血紅使用

切腹に苦悶す女性

大手札印画紙焼付 十枚一組 略号(のむ) 一八〇〇円
 大塚啓子
 正面に坐して、静かに切腹する汚れた白磁の女体が、やがて迫りくる激痛に身悶えして、あられもなく狂感を演ずる、さまたまな場面を真迫的に印象しました。感極まった法悦の境地が、写真一杯に、むんむんする妖気と共に満ち溢れています。

血紅使用

絞首された女体

大手札印画紙焼付 六枚一組 略号(のひ) 二〇〇円
 大塚啓子
 桜の樹の枝に首を吊られて溢死させられた女体。口からは血反吐をはいて目をむき、だらりと絶命している。絞首屍体となった裸の女体は、果して如何なるエキセントリックな美しさがあるだろうか。

浴室の全裸刺青

大手札印画紙焼付 五枚一組 略号(よな) 六〇〇円
 山原清子
 全裸の肥り肉を麻縄でぎりぎり厳重に縛り上げられ、浴槽の中へ無理矢理に浸される。只でさえ力いっばいに締め上げられた麻縄は湯を吸って、蒸された背中の刺青は方熱い湯に蒸された背中の刺青は

益々鮮明な色彩を露呈してくる。刺青と素晴らしい緊縛全裸美が十分に楽しめるフォトです。

海老縛りの表情

大手札印画紙焼付 三枚一組 略号(えふ) 四〇〇円
 大塚啓子
 エビ縛りで放置しておく、次第に苦痛が増してくる。高く持ち上げた首、足首、釣りは、あがった後、手の首、足首、胸、腹部、腕、顔面は勿論のこと、全身に亘り足爪先まで漲っている。

乳枷貞操帯着用

大手札印画紙焼付 三枚一組 略号(もや) 四〇〇円
 山原清子
 お碗を伏せたような大きな乳房が、製の枷で根元を締められて、むっくりと盛り上がり、前には黒光りする貞操帯がびっぴりと切込んで、あたりに装束が、正面を向いて晒され、後ろの柵には繋がれていない。逃げだすわけにはいかない。

檻に入れられた女

大手札印画紙焼付 二枚一組 略号(もの) 三〇〇円
 山原清子
 身体がやっとな入るか入らないかの木製の檻に閉じ込められた女は、まるで白い肌の動物がうごめいて、いるのと変りなかった。

代理部分譲品用女性写真モデル募集

○本誌では代理部分譲品用の写真撮影するため、女性モデルの方を募集しております。

○本誌愛読者の方でしたら、年齢遠近は問いません。分譲品用ですから誌上に発表いたしません、もし誌上発表可能でしたら尚結構です。又、助手介添或はブレイのみ出演御希望の方でも差支えありません。

○出演又は参加御希望の方は年齢略歴記載の上編集部宛お申込み下さい。報酬その他詳細につきお返

事いたします。

○応募された方々の個人的な秘密は固く厳守いたしますから御安心下さい。尚、お好みの傾向を附記下されば好都合です。

○本誌内容充実のため、並に皆様のレジャーのために奮って御応募す。余暇を利用しての御参加も大いに歓迎いたします。特に妊婦フオート撮影可能の方は、遠近に拘らず御連絡下さい。

奇ク編集部

暇もなく才能もなく想うことのみで日が過ぎてゆきます。そして又日をおいて改めて読み直す。今度は丁寧隅から隅まで。すると又何となく新しい感じで、結構楽しく過すことが出来ます。此処一年近くの私の読書のクセですが、案外こういう様な読み方をされる方も多いのじやないかと考えてみて苦笑することもあります。幸い多少暇らしいものが出来てきて、少し勉強のつもりで先日短文を書きました、今度も又、六月号を読んでる中、どうしても書いてみたくなり拙文を綴る結果とな

りました。文章を書いていると、又、次々と気持が発展していつて困ります。モデルに応募もしたくなるし、勿論読者通信を利用しての呼び掛けも行いたくなる。こういう心理の経過は誰でも共通のものだと思えます。別に写されて困る点は何一つないのだから、応募しても良い様なものの何かしら抵抗を感じる。そういう抵抗があるので、社会人として通用してゆく様にも思えるのですが。本当にいうと、写されるというだけで微かな興奮を覚えます。SMとはこういうものなのでしょう。(京都

市八保藤久人)

○

同好の士の唯一の楽しみにして、貴誌は私にとっても日常欠かせないものの一つになっていて、創刊当時から本がギッシリと押入れに積み重ねられていました。これらは二冊、三冊とあちこちで買いあさり揃えたものですが一部の欠刊を除いて全部揃っていることに自己満足しております。ひまな時には引き出しては読みかえしてありますが、移り変わる世の遷や流れの中に編集者の涙ぐましい努力のあとが思われ、本当に御苦勞さんですと感謝申し上げます。共に、今後共いかなることに屈せず、一層同好者の唯一の愛誌として御進展下さるよう切望してやみません。さて六月号では、山原清子さんの後援会をつくるということが出ていましたが、かねて希望をもっていましただけに是非入会させていたきたいと考えます。しかし、私は現在社会的に重要な仕事をしていましたために当分表面に名前を出すことは遠慮させてほしいのですが、よろしいでしょうか。もちろん名前が出なければ結構ですから、座談会などのご案内があれば仕事の都合が付き次

第つとめて参加させていただくつもりであります。(広島市八藤原正)

○

貴誌益々御隆盛の事お慶び申し上げます。小生グラビヤよりも本文主体の方を喜んでおります。これこそ営業政策の面ではともかく本当の固定読者層を把握出来るのではないのでしょうか。小生の感じですが、貴誌を購読する層はインテリが多く公開誌のグラビヤはかえって中途半端、本当に望むなら分譲品もある事です、その位の経済力は充分持ち合せている層だと思ふのですが如何でしょうか。小生なんか、グラビヤ、口絵、挿画のなくなった貴誌にこそ愛着を感じます。カットぐらいはあってもいいですが、内容本文は如何にも大人の雑誌らしい体裁のものが好ましいです。定価もうんと高くして、用紙も良くし、文章ばかりとすれば社会の風当たりもなくなるでしょうし、それこそ高級な読者が集まるでしょう。自分一人になった時の夜は本当に貴誌は安らぎを与えてくれます。こういった雑誌を企画発刊される当局に感謝いたしております。同じ市内なら小生ずぶの素人ですが、編集のアルバ

イトの仕事でも参加させて頂きたい位です。(岡山県八瀬戸生)

自主規制の下毎号々々の編集に苦心の跡がみられますが嵐の去った暁に昔日の壮観に戻るのを期待しています。グラビア、口絵のなはいの如何にも淋しいですがこれも止むを得ません。六月号は女斗菊様の嬉しい通信に接し、同好の士が又、一人増えたことを喜んでいきます。山原女史の出現は全く吾々マニアにとって干天の慈雨に比すべきことです。彼女の後援会も発足の由小生も機をみて加入したく思っております。大阪に在住しておれば早速参加したのですが九州においては一寸無理とされています。女斗菊氏も讃仰しておられる如く彼女のふんどし姿、それも日本髪姿のそれは全く何時とり出してみても素晴らしいものです。特に「くな」は今までのどのフォトよりも素晴らしい、私の最高の愛玩物です。今後に希望しますのは彼女と大塚嬢との女斗美フォトも出来ていること故、同じモデルを使ってふん

どし一丁の女の殺陣のフォトの出現です。山原女史は姐御のように櫛巻髪に黒ふんどし。大塚女史はこれ又いろいろと髪形をえる一即ち、島田鬻の娘又は高島田、銀杏返しの芸妓、御守殿、立兵庫の女魁姿と云うように変ったムードのふんどし裸女を演じて殺陣をふりつければよいでしょう。斬られる方、止めを刺される方は、交替で演れば変ったムードとなりましよう。刺青姐御を仕止める高島田に赤ふんどしの娘、これをしてやったりと笑みをうかべる黒ふんどし一丁の刺青姐御、或はその反対と云うように変ったふんどし裸女の殺陣のフォトを是非企画してみて下さい。これには中屋氏、森田氏も賛成されるのではないかと思います。同好各位の通信を待っています。(女斗彦)

七月号拝見しました。今回は海野美津雄、円山景三両氏の女相撲小説が二つも、掲載され感謝します。海野氏の九州の漁村の娘達の瑞々しい肉体をぶっつけ合う相撲の情景の描写、年老いたとよさん

の回想を九州の方言で現わしたのもよく、それに刺激されて孫の若い娘達が段々話に引き入れられて行く心理も巧みです。前回も述べた如く、海野氏は相撲通と思われ、取口の描写や取組む娘達の心の動きの描写などうまいものだと思います。またM・Uとある挿絵、海野氏の筆だと思いますが之又非常によく、特に円山氏の作危険女角力の中の挿絵の上手投と下手投を打合っている図は傑作です。円山景三氏のお作も久しぶりに拝見、危険角力という設定も面白く、三十過ぎた豊富な女性同志の激しい取組みの有様、海野氏の若い乙女の相撲と対照して、これも又魅力的です。結婚している三十過ぎの女盛りのあふれるばかりの色っぽい美人達が、豊かな裸体美、惜しい気もなく渾一本で角力を取る有様が濃艶に描写されています。楽しく拝見しました。海野、円山両氏共に御健筆を祈ります。次回も引き続き小説、挿絵見せて頂き度く編集部の方にも御願ひ致します。尚女相撲の分譲写真新版を拝見したく重ねて希望します。又、縛りの特集号の如く、女相撲の写真、絵、記事などの特集号を企画して頂けたらと思います。縛りなど他

の分野に比してマニヤが少ないでしょう。何か御配慮願えたらと思います。土俵四股平氏以来女斗美、女相撲をこれだけ取上げた出版物は我が国にはなかったのではないのでしょうか。女相撲マニヤは案外世の中に居る様で、私の知人友人などにも何人か居ます。私達は御誌に非常に感謝致して居ります。これは余談ですが、例の「白日夢」などで悪名高い武智氏が先年能狂言を取入れたストリップ、唐角力を公演した時、私はあいにく見ることが出来ませんでした。ストリップの美女達が、女力士になって舞台で角力を取った様でした。唐角力は男なのですが王様を女王にし男の力士を女力士にした筋の様です。これで見ると武智氏も女力士に興味を持って居られる様で、いつの日か武智氏演出の女角力を主題にした演劇か映画など見られる日があるかと心ひそかに期待して居ります。(東京八雪崎京人)

〔編集部より〕○今月は読者通信が予想外に多く集まりましたので増頁したのにも拘らず東浦ひかる様をはじめ多くの方々の投稿文が翌月回となりました。御了承おき願います。

次号(九月号)は七月二十五日に発売いたします

愛読者原稿募集

△体験、告白、手記▽

どなたにも一つや二つの思い出とか、体験とかいったものが必ずあるものです。物言わざるは腹ふくるるのたええどうか皆様の真実の叫びをどしどし文字にしてお寄せ下さい。採用篇には本誌三月分乃至一年分贈呈します。

△創作、小説、物語▽

御自分の描く夢をまとめて下さい。採用篇には本誌五月

分以上贈呈します。

△(映画、雑誌)通信▽

映画や既刊雑誌の中で、特に興味をお持ちになった事項を通信下さるようお待ちします。掲載の分には本誌三月分贈呈いたします。

△レポートマニヤ通信▽

新聞記事等に関心をお持ちの事項或はマニヤ各傾向の本誌に対する通信をお寄せ下さい。本誌二月分贈呈します。◎尚、以上の五項目の採用原稿には御希望により編集部作

成の各種フォトを贈呈する用意がございます。

△読者通信▽

編集者、執筆者、投稿者への通信、呼びかけ、前号の批評、本誌に対する希望や御意見、感想、思い出話、或いは読者相互の交歓文通、応答などをお寄せ下さい。

△奇クサロン▽

奇クサロン向きの短文、マニヤ通信、写真絵画などを募ります。文章は原稿用紙三枚まで。採用篇には薄謝進呈します。

☆編集後記☆

○本誌二〇〇号突破記念エッセイとして久我庄一氏から「人間、梅原北明伝」を寄せられた。筆者は謙遜して試作メモと附記されたが精緻な文献渉猟を経た重厚な作品である。地下の梅原北明もさぞかし快心の笑を洩していることだろう。次に先般物故された『責』の開拓者伊藤晴雨の伝記も是非マニヤの方々のため物としてほしいものだ。

○先月号の「読者通信」欄のはじめに△読者通信文について△と断り書きをしたところ投稿文が急に増えてきた。今月号では通信欄を若干増頁して出来るだけ収容につとめた。予想では減少するのではないかと思っていたが結果は、まさに逆になってしまった。黒淵嬰一氏の八月号掲載予定作品として、「アリアドネ」を発表していたが、これは編集部の手違いで「殉教の娘バジリカ」の続篇を前もって入手していたので、今月号では、その方を先に掲載した。

○団鬼六氏から連載小説「花と蛇」休載のかわりとして「鬼六談議」を送ってきた。連載の方が休むのは淋しいが、映画「花と蛇」撮影の裏面がふんだんに読めて、談義の方もなかなか面白かった。これから、SM映画をどしどし製作される方針のようなので、ファンの方々と共に大いに期待し且つ鬼六氏の健筆を祈りたい。今月号では、夜乃探郎氏に大活躍をしてもらった。芳野眉美氏と共に氏の健筆に期待しよう。(四〇・六・九)

☆本誌御購読の榮☆

一月分(1冊)三〇〇円△送共▽
三月分(3冊)九〇〇円△送共▽
半年分(6冊)一八〇〇円△送共▽

本誌は毎月二十五日に全国各地の有名書店にて一斉に発売いたしますが、入手困難の方は直接代金御送付の上、御予約下されば、毎月二十日前後、印刷完成と同時に厳重包装して確実に発送申し上げます。局留の方々は二十五日頃受領して下さい。

奇譚クラブ 定価 三〇〇円

八月号 【第十九巻第八号】
【通刊第二〇五号】

昭和四十年七月二十日 印刷
昭和四十年八月一日 発行

編集人 箕田 京二
発行人 吉田 稔
印刷人 北村 俊夫
大阪阿倍野郵便局私書函第十四号
発行所 天 星 社

☆書店の皆様方へお願い☆

○本誌は口絵、グラビヤ写真の廃止、挿絵の削減、内容の改訂等につとめ、青少年の健全なる育成に関する各条例に指定されないうよう充分に注意して編集いたしておりますが、本来成人向として発行を企図しております関係上、未成年の方には絶対販売下りさないよう、特にくれぐれも、お願い申し上げます。